

榎尾山「蔵岩」殺人事件顛末記

蜉蝣（かげろう） 21

▲実に荒唐無稽な駄文物語！誤字・脱字・当て字などなどいい加減な言い回し・・・お許しください。

「登場人物」

- 高石 守 ……X市地方公務員：裏稼業探偵
- 白鷺 哲男 ……ミニコミ紙発行人
- 久米田 巖次郎：Y署地域課所属 現役警察官
- 浅香 小百合 ……「スナック愛」のママ
- 日根野 三郎 ……元Y市職員（民間捜査機関所属）
- 日根野 夫人 ……日根野三郎の妻
- 青島青年 ……X市地方公務員
- ミサキ嬢 ……X市地方公務員
- お種さん ……白鷺事務所の電話番兼受付担当
- 裕次郎君 ……白鷺事務所職員 ジャーナリスト志望
- 湖論暮啓司 ……堺署刑事（コロンボケイジ）
- 美章園文子 ……早池峰山の女
- 武内権道 ……闇組織の頂点にたつボス
- 市長 ……X市の市長
- 滝谷千早 ……竜門山で病死した民間捜査機関の捜査員
- 滝谷千代子 ……滝谷夫人 夫の意思を継いで民間捜査機関に所属
- 若草山 善次郎元巡查長 ……奈良県警退職OB 「記録魔の警官」
- 貴鑑矢秀男（きやりや ひでお） ……大阪府警最高指揮官のキャリア
- 伊達直人（だて なおと） ……爆弾処理の隊員
- 呉瑠護重三（ごるご じゅうぞう）…優秀な狙撃手

陽が落ちてネオンだけの灯りになった駅前、交差点を横切った高石は、真つ暗な空を仰ぎ見た。梅雨空に、僅かな月明かりで投影されるかのように浮かぶ灰色の雲が見えた。昨夜、西日本太平洋側に強い雨を降らせた梅雨前線は、引き続き停滞するようだ。

今夜は、高校生時代の定例同窓会だ。四〇年前の仲間が、どういわけか月一の第三金曜日に会い、酒を飲んでカラオケに興じる。シャッターが閉まったままの店が目立つ鄙びた駅前商店街を通り過ぎて、場末にあるスナックのドアを開く。「スナック愛」という月並みな名前の店だ。ママもこれまた昔の仲間。高校生時代は、「ミスH高校」と言われるほどの容色の持ち主であった。過去形で書くのは、今はよる年波に勝てないというか、抵抗できないほど古褪せてきた。もつとも人のことは言えないけれど。かく言う吾輩自身も頭髪は薄くなり、顔はしみだらけの面貌である。

ドアを開けるといきなり大音声で吉幾三の「酒よ」が鼓膜をつんだ。友人、白鷺哲男の十八番の歌だ。すこし音程がずれた歌いぶりだ。目をつむり、頭をふりながら仁王立ちで歌っている。本人は、自己陶醉するような気分でマイクを握りしめている。傍迷惑とは、このようなことを言うのだろうか。

「こまったものだ・・・」と高石守は苦笑した。

六人ほどしか座れない小さな店だが、小奇麗にしている。「ミスH高校」と呼ばれたママ浅香小百合嬢が笑顔で迎えてくれる。

「おかえり・・・これで揃ったわね。そうそう今日は「本日は貸し切り」という看板をあげないと・・・忘れていたわ・・・」

と、セロハンテープと一枚の紙切れを持って店の外に出た。ちらっと見えたA4のコピー用紙には、達筆にして独特な筆さばきで書いた毛筆の字があった。

「うう・・・ん。これが遊書というものか・・・さすが・・・」と高石は感動した。

歌い終わった白鷺が椅子に座りなおして高石に声をかけた。

「よう・・・元気かい。仕事はどう・・・」

白鷺は言い終わらないうちにモニターの方を気もそぞろに見た。モニター画面が激しく展開し、今まさに先ほどの歌の歌唱力が点数表示されようとしている。「86点か・・・。なかなか90点は超えないな・・・」と、無念な面持ちで白鷺はぼやく。

「仕事は何にも変化はないよ。趣味の方もイマイチだね。」と高石は答えた。

「俺なんか、この間は死体の轢殺事件を担当したね。」と常日頃、無口な久米田

巖次郎が話の中に入ってきた。

「轢殺!!」と異口同音に他の三人の声が狭い部屋の中でこだました。

「そんな情報は聞いてないぞ、この狭い町では、そんな大事件は話題沸騰なのに……」とミニコミ紙を発行している白鷺が不思議そうに言った。

「轢殺は轢殺でも、猫の死体処理だ。」と久米田は自嘲ぎみに答えた。

「驚かさないで……」と少々恐怖で歪みかけた顔の筋肉を修復させながらママの浅香小百合嬢が言った。

「相も変わらず大した仕事を与えてもらってないよな……久米田は。」
憐憫の情を浮かべるような顔つきで白鷺は言った。

国立大学を優秀な成績で卒業したと言われる久米田が、何を間違ったのか警察官になった。卒業後、どこも「就職」することなくぶらぶらしていた久米田巖次郎を伯父貴が無理やり警察官になるように勧め、当時現職警官であった伯父貴のコネというか影響力で見事に警察機構に「就職」できたのだった。しかしながら、高校生時代から時代の変革の匂いを嗅ぎ、革新的な運動に身を投じてきた……。が、何があったのか大学時代に運動に疲れたのかネパールに行くと言ったまま帰国せずにそのまま現地放浪したと言う。一年後、日本に帰ってくるとすっかりと変身を遂げ名状しがたい人格になっていた。そのような久米田巖次郎が軍隊のような階級社会の組織になじめる訳がない。と、周囲は思ったが予想に反して体と心を痛めつける新人「拷問的」教育にも耐えて見せ、途中で退職することもなく今にいたっている。ただ、階級は「就職」した時のままだった。Y署地域課所属、交番勤務三〇余年。地域の西部劇的保安官。組織のはみ出し者。ただ、常にこの仲間と言っている言葉がある。

「事件は現場で起こっている」……

「お冗談の上手いこと。久米田さんも最近は、ユニークなことも言えるようになったのね。」とママの小百合嬢は幼子を慈しむような眼で言った。

「次は、同じくヨ……シイク……ゾウの「ス・イカ（酔歌）」を歌います!」
と白鷺は、小百合嬢に意味ありげな眼差しを送りながら、またもや仁王立ちでマイクを握った。

ここで白鷺哲男なる人物のプロフィールも紹介しておこう。ひよっとしてこの駄文的物語もシリーズものになるかもしれない。白鷺哲男は、地域のミニコミ新聞の発行者である。自称「論説主幹」と称しているが、地元の役場の動きや議会の動向を適当に報道している新聞もどきのミニコミ紙発行人。名刺広告収入で発行を維持。そして、地元役場の管理職に購読を半ば強制し購読料一ヶ月千円を口座振り込みさせている。わら半紙一枚の両面印刷、印刷のインクも

悪ければ紙質も悪い・・・ピラのような「新聞」。配布にもコストがかからない。役場のメールポストに放り込めば所属課の読者に配達される。記者クラブに加盟していることもあって誰も何も言わない。購読を拒否すれば、徹底的にマークされ餌食にされる。自称作家・・・尊敬する作家は川上宗薫。

「ところでさあ、高石君。相談というか依頼が一件来ているんだけど、話だけでも聞いてくれるかな・・・」

と、ママの小百合嬢が言った。

「ああ・・・いいよ。また犬猫のペット捜索かな？」

「うう・・・ん。どちらかと言うと素行調査かな。たまに、この店に来る同級生のお友達の話。」

「ふう・・・ん」

「何だ・・・何だ？」と久米田が乗り出してきた。

マイクを握りしめて渾身のパワーで歌っている(?)白鷺もちらちらと小百合嬢を見ている。はみ子にされているという嫉妬のせいか・・・もともとなのか、はたまた何かの事情で動揺したのか・・・はずれた音程で大声を張り上げている。

小百合嬢が聞き取った話によると、

旦那の最近の行動がおかしい。退職して暇なはずなのに毎日どこかへ出かける。夕方には、帰宅するがどうも落ち着かない様子だ。夜中にうなされて何か不明な言葉を発する。何かに脅えている感じもする。夜になると自室のパソコンに向かい合っただけで、深夜まで何か作業をしている。

ということ、素行を調査してくれとのこと。

「そいつは、女でもできたのと違うか？」

と歌い終わった白鷺が椅子に座りながら言った。まだ、歌い足りないのかマイクを握りしめたままだった。

「あんたは、だまらしゃい!!」

と小百合嬢は冷たく白鷺に言い放つ。悄然とした白鷺は、子どもが拗ねるように分厚い電話帳のような歌詞カードをめくりにかかった。まだ、歌うのか・・・。ほお・・・つ・・・今度は89点だ。

「ところで、そいつの名前と住所は？」

と高石は黒霧島のお湯割りを飲みながら、小百合嬢に聞いた。またもや、白鷺のカラオケが始まったこともあり小百合嬢の声は聞き取れなかった。

小百合嬢は、高石の耳元に熱い息をかけながら囁いた。その瞬間、高石の胸の中で何か忘れていたもの・・・懐かしい感情・・・心のときめき・・・懐かしい母親の乳房の匂いを感じた。

高石は、それを押し隠すようにしながら小百合嬢の声に耳を傾ける。

「名前は、日根野三郎。住んでいるところは、Y市▽町一〇〇番地・・・」とまるで必殺仕事人の「おとわ」さん風に言った。

「どこかで、聞いた名前だ。聞き覚えのある名前だね。」

と、高石は小百合嬢の声に少々ビビりながら聞いた。そして、訝しげな眼差しを向けた。

小百合嬢は、細面の顔にかかった長い黒髪を右手で払いながら頷いた。その振る舞いは・・・やはり綺麗なものは奇麗だ・・・と高石は思った。さすが、「ミスH高校」みんなのあこがれの的、今でも頭在だ。EDと自覚している高石の下半身が何故か蠢動する・・・。

「その男の配偶者・・・旦那の妻が私の同級生なの・・・」

数年前にY市を揺るがす大スキャンダルが発生した。この事件の渦中で、少なくない役場の職員が年度途中で退職を余儀なくされた。その中に、疑惑をかけられた複数の職員の中に日根野三郎の名前もあった。

そこまで記憶を手繰り寄せた高石は、一抹の不安を感じた。なぜか湧出した不安は、白鷺のへたな歌でかき消された。横に座っている久米田もその名を聞いたようだ。今度は、「無錫旅情」で90点の表示が出ていた。得意満面な顔をした白鷺がガッツポーズしながら笑っていた。

高石の記憶は、ここまで・・・。

もう朝なのだろう・・・薄いピンクのカーテンを透過して朝の光が差し込んでいた。浅い意識の中で高石守は母親の乳房の匂いを感じていた。気持ちの良いまどろみは人を幸せにするようだ。枕を抱きしめる高石・・・恍惚状態とは、このような状況をいうのだろうと高石守は眠りの中で思った。

海老のように体を丸めて寝ている自身の背中に、温かい人肌のぬくもりが伝わってくる。昨夜の状況を思いだそうとするが、二日酔いのためか鈍痛のようなものが支配している思考がまとまらない。

—人肌のような感触・・・—

期待を込めて薄眼をあけた。

いつもとは違う寝床だった。柔らかいダブルベッドにふんわりと頭を包みこむような柔らかい羽毛枕。

どうやら小百合嬢のダブルベッドで眠りこけていたようだ。先ほどの期待感が現実化している・・・。と高石守は思った。高石守は、小百合嬢の黒く澄明な眸を想像した。

しかし・・・何か得体のしれない違和感が伝わってくる。意識が徐々に覚醒

してくると自身の酒臭い息もさることながら隣人の呼吸の仕方が気になってきた。息遣いに柔らかな感じが伝わってこない。高石守の腰にまわされた腕もごつごつとして違和感があった。

いやな予感がした高石守は、あわててベッドから起き上った。全裸の高石守に寄り添って寝っていたのは、同じく全裸の白鷺哲男だった。

「ゲゲゲゲッ！」と意味不明な言葉を発するや否や高石守は白鷺哲男のお尻をありったけの力で蹴りあげた。

「ギャッ！」と悲鳴をあげて起き上る全裸の白鷺哲男。何が起こったのかと不思議な顔をしていた。おそらく白鷺哲男も高石と同じような夢心地だったのであろう。

その時であった。

「あんた達！さっさと着替えて、私のベッドから離れてくれる！」とまさに怒髪、天を衝くような小百合嬢の怒りの言葉が全裸の二人に浴びせかけられた。

小百合嬢は、すでに赤色のトレーナー・パーカー姿に着替えていた。そして、鬼のような形相で二人を睨みつけていた。

「これだから・・・あんた達は困るのよ。私のベッドを黴菌だらけにして・・・クリーニング代ぐらいは出さないよ！」

小百合嬢の凄まじい怒りが眉のあたりを這っていた。それは、いつもの柔和な小百合嬢ではなく、あたかも赤鬼のごとくであった。

小百合嬢は、赤鬼のような形相で眉根をびくびくさせながら詰問してきた。身も心も縮みあがった高石と白鷺は、あたふたと周囲を見渡して自分達の衣服を探した。

二人の衣服は、ベッド脇のテーブルにきちんと整頓されていた。

腕組みをしながら

「あんた達！昨夜の出来事というか・・・自分達のご乱行について憶えていますか？」と小百合嬢は言った。

そして、二人を凝視した。その眼光には、非難と軽蔑が感じられた。

戦慄の恐怖とは、このようなことを言うのだろうと高石は思った。衣服を身に付けた二人は、両手を膝に置きながら頭を下げた状態で床に正座していた。

「あんた達ね！本当に反省していますか？」

高石の記憶は途中で切断している。最近、呑んでいる途中で記憶を失うことが多い。悔恨の瞬間だ。

「また・・・やってしまった！」

小百合嬢は、二人の前に立ちながら昨夜の出来事を説明しだした。

「ああ・・・っ！聞きたくない！！！」

「久米田くんは、すっかりしているよね。職業柄ということもあるけど・・・呑んでも崩れないのよね。あの子は・・・。先ほど、仕事があるからといって出勤したわよ！それに比べたら、本当にあんた達は情けないわね・・・。」

小百合嬢による状況説明は、次のとおりだ。

酔った高石が、途中で息継ぎが出来ない歌い方になる「桃色吐息」を歌い終わると、突然と久米田が立ち上がって直立不動となり軍歌を歌い出した・・・。

久米田が歌い終わるやいなや今度は三人が肩を組んで「国際学連の歌」を合唱しだした。

♪

学生の歌声に 若き友よ 手をのべよ

輝く太陽青空を 再び戦火で乱すな

われらの友情は 原爆あるもたたれず

闘志は 火と燃え 平和のために戦わん

団結かたく 我が行くてを守れ ♪

古き良き時代への郷愁だろうか・・・。

この後、事件は起こった。何と小百合嬢と久米田の二人の制止も聞かず白鷺と高石が突然と衣服を脱ぎすてて裸踊りを始めたとのことだ。あの若い時代の高邁な理想はどこに行つたのだろうか・・・。六〇歳前のメタボの肉体をさらけ出して恥という概念はないのだろうか？どう見ても鑑賞にたえられる肉体ではない。

さらに事件は起こった。

白鷺が突然と「突撃！！」と奇声を発しながら二階へ続く階段を駆け上つたとのことだ。それに続いたのが高石だったとのこと。

―記憶がない・・・―

小百合嬢のダブルベッドに潜りこむ二人・・・。久米田は、その屈強な体を駆使して止めに入ったが、どうやら二人の奇行に圧倒されたようで・・・なすべがなかったとのことだ。

久米田は、事務的に小百合嬢に言つたらしい・・・。

「住居侵入罪で現行犯逮捕しますか？」と。

二

高石は、灼熱の現場から帰ってきて職場の自席についた。

効きの悪いエアコンのためか執務スペース内はムツとしていた。先ほどまで車

を走らせていたアスファルトの路上では、猛暑のため人や車が揺ら揺らと動く下位蜃気楼の一種と言われる「逃げ水」現象があった。夏の風物詩の一つと言われているが、自席に座っていても手元の書類が揺ら揺らするようでは、この夏をやり過ごせるかどうか不安になってきた。七月下旬の平均気温は、記録的暑さだと気象庁が発表していた。各地では、熱中症によって多くの人々が倒れている。

—くそ暑いな・・・—

と、高石はぶつくさとぼやきながら額の汗をぬぐい、団扇で扇いだ。その時、

「高石係長！お電話です。そちらに転送します！」と息子ほどの年恰好の若い係員が意味ありげな笑みを浮かべながら受話器をすばやく押下する。

すぐに自席の電話が鳴り響き、高石は受話器を取った。

「もしもし高石ですが・・・。」と言いつつ終わらないうちに・・・。

「ああ・・・ツ！高石く〜くん。ワタシ・・・わたしよ・・・。」

—小百合嬢だ！—

この間の同窓会での醜態を糾弾してきたと想った高石は、このくそ暑さを一気に慰めるような冷気を自身の背中に感じた。

「はい・・・。何でしょうか？」

「何でしょうかはないでしょう！高石く〜くん。ところで、今日の夕刊を見た？」

—夕刊？午後五時半過ぎまでは仕事ですよ！夕刊など読む機会はないがな・・・。

と想った高石であるが、小百合嬢に逆らうと面倒なことになるので、

「夕刊が、どないかしたんですか？」とボケた。

「先日にご依頼した調査案件のことだけども・・・憶えています？」

「はい・・・。確かに記憶しておりますが・・・。」高石は従順に答えた。

「依頼人の旦那の記事が掲載されているんだけど、蔵岩の崖下で死体となって発見されたんだって・・・。新聞によれば、登山中に滑落したと書いてあるわ！」—ナンデまた・・・—

と高石は訝しそうな目つきで周囲の同僚を見まわした。部下の係員である青島某が何かを嗅ぎつけるような感じでちらちらと高石の挙動をチェックしていた。

小百合嬢のことは、高石の属する役場でも有名な存在であった。夏と冬のボーナスが支給されると、その時々最高のファッションで役場内を闊歩する。背が高く・・・足が長い小百合嬢が大またで堂々と歩いても非難するものはい

ない。さすが、マドンナ！「ミスH高校」

この時期になると役場内の各課を巡回し、市長室までもフリーパス。秘書課長は、入り口で小百合嬢の顔を確認するやいなや椅子を立て、彼女をすばやく応接室に案内する。

―あの色ボケ市長・・・いつあの店に行くんだらうか？―

と高石も不思議に思っているが・・・

―ああ・・・よくわからん！まあ・・・どうでもいいわ！―

「と言うことで、この間の依頼案件はなかったことになるね。死んでしまえば、どうしようもないことだしね。それはそれだけど、あんた達が汚した私の寝具だけどクリーニングに出したんだけど、一万円ほどかかったわ！。次の冬のボーナスの時に・・・呑み代のつげに加算しておくからね！馬鹿っ・・・！」

―馬鹿はないだらう馬鹿は・・・―
と想っている間に小百合嬢からの電話は一方的に切れた。

回線が切れた受話器を耳にあてたまま高石はしばし思索した。出てくるのはため息だけだった。無然としてため息をついている高石を凝視している青島がいた。親子ほどの年齢差がある二人だが、高石は青島の将来を期待している一人であった。当年とって二六歳、某私立大学文学部卒業で新聞学を専攻したという。毎朝、ラジオで流れてくるパーソナリティーのHは、先輩にあたるのか。

「青島くん！悪いがどこかで今日の夕刊を探してきてくれるかな！」
と高石は言った。

「了解！青島！只今より夕刊を獲得します！」と答える青島。

高石に対しては、何故か仕事以外でも従順な青島青年は、どこかのお山に植物採集に行くような足取りで嬉々として自席を離れた。

しばらくすると青島青年は、全国紙の夕刊数種類を小脇にはさんで帰ってきた。青島青年は、高石のデスクの前に立つと恭しく新聞の束を高石に差し出した。

「はい！係長！どうぞ！」と答える青島。

「ウエ・・・ツ！こんなにも沢山持ってきてくれたの・・・ありがとう。どこで確保してきたの？」

「秘書室に同期がいますので、仕事で必要だ！ということと借用してきました。」
と元気一発！澆刺！というCMイメージを感じさせる口調で青島青年は言った。

「係長！お願いがあるんですが・・・。」

「なあ・・・に。残念ながらお金は無いよ。」

「いえいえ。係長！先ほどの電話から推測すると、またもや事件ですよ。今度の件については、どんな事件かも知らないですが、この僕にも協力させてください。お願いします。」

「あのね。まだ事件と決まったわけではないですし、ちょっとちょっと何の話？」と高石が言い終わらぬうちに青島青年は、高石の顔面前方三〇cmの距離に接近してきて小声で囁いた。

「あのう・・・僕、知っているんです。係長が探偵業をしているのを・・・。僕もすごく興味があつて、探偵学校にも通っていました。」

「ギクっ・・・何で知られたのか？ヤバイぞ！公務員は兼業禁止だ。——と高石は考えた。しかし、そんな考えはすぐに吹き飛んだ。

「兼業禁止ではあるが、この探偵業は、業としては成り立っていない。むしろ出費の多い趣味道楽の類だ。——

「あのね・・・。何で知っているの・・・。」と高石もさらに顔を一〇cmほど精悍な顔つきをした青島に接近した。

そして、二人の接近距離は二〇cm。

ひそひそと会話している二人の様子を羨望の眼で観察している当課のお局様のミサキ嬢がいた。地元の高校を卒業し、当課に配属されて一〇年以上のベテラン中堅職員である。月並みな表現で言えば才色兼備な黒木メイサ風か。

ミサキ嬢にとっては、青島青年に変な虫がつかないように常時監視モードなので、二人の様子が気に食わない。天地が引っくり返っても恋人同士の会話には見えないが、ミサキ嬢の胸中に嫉妬心を充満させる。とにかく二〇cmの距離である。

「私も青島君と二〇cmの距離で会話したいわ！私なら本当の桃色吐息を伝えることが可能だわ・・・。それなのに、係長は・・・。——

「ぜひ・・・。お願いしますよ。係長！」と青島青年は、真剣な眼で哀願するのであった。さらに接近すること五cm。

——と、言われてもなあ・・・。——

その時であった。

あたかも順風満帆の青島丸という船が警戒水域を越えて危険水域に入り、これ以上進むと座礁して沈没するような印象を感じたミサキ嬢が叫ぶ。

「私の青島くんが沈没してはダメ・・・。——

「ハイ・・・そこまで！何を仲良く睨めっこしているんですか？お二人の仲は、そんな関係なんですか？」

高石と青島は怪訝な顔をミサキ嬢に向けた。

「仕事の相談ですよ！先輩！」と青島青年は笑窪をつくってミサキ嬢に答えた。
—可愛い笑窪……—

気も落ち着いたのかミサキ嬢の追及する声は、それ以上なかった。

青島も自席に戻り書類の整理を始めた。その隣でうっとりとしたミサキ嬢が青島青年を見つめていた。

「なんたることや。サンタ・ルチア……サンマルク……」

と周囲に察知されないように小さな声でぼやいた。

高石は、おもむろにデスクにある夕刊紙の一紙を手にとった。そして、九面を開いた。

問題の新聞記事は、小さな記事だがすぐに高石の目に飛び込んできた。

★槇尾山で遭難の男性、遺体で発見

和泉市の槇尾山（六〇〇メートル）に八月三日に入山してから行方不明になっていた大阪府Y市▽町一〇〇番地の日根野三郎さん（五八）とみられる遺体が四日朝、山頂近くの蔵岩約四〇メートル下のがけで見つかった。和泉署は、同日に遺体を収容した。大阪府警和泉署や市消防署などは、蔵岩から滑落した可能性が高いとみている。日根野三郎さんは、三日早朝に自宅を出たあとに「槇尾山に登る」と家族に連絡。帰宅予定は同日の夕方だったが、夜になっても戻らないため、家族が大阪府警に通報した。登山口の「青少年の家」付近の駐車場で、日根野三郎さんの乗用車が見つかった。

新聞記事によれば、事件性はないようだ。単なる滑落事故として処理されるだろう。しかし高石は、なんとなく納得できないものを感じていた。

—俺のCANは当たる……。何かあるような気がする……。—

高石は、作業着ズボンの尻ポケットから携帯電話を引き出して、久米田に電話を入れた。

「もしもし……俺……高石だけど」

「もしもし久米田です。何かご用ですか？勤務中なので、手短かに用件をお伝えください。」と携帯電話の向こうから極めて事務的な声が聞こえてきた。

「蔵岩の滑落事件のことは知っているよな……。実際は、どうなんだ？」と高石は聞いた。

「本件については、只今捜査中でもあり外部の方に情報を漏らすことはできま

せん。あしからず・・・」

「あのなあ・・・」

「今日の七時に、いつもの立ち飲み屋でお待ちしています。もちろん支払は本官ではなく貴殿であることが前提条件となりますが・・・」

「ハイ、分かりました。じゃ・・・いつものところまで。」

「了解！」

久米田との通話が終わった瞬間に高石の携帯電話にメールが着信した。高石がメールを「確認」すると白鷺からだった。

メールを開くと全文がひらがなで書かれていた。

―何が自称論説主幹？何が自称・・・作家？―

「しんぶんみたかこのことでできたいことがあるのでれんらくください」

読みづらいメールに遭遇すると眩暈がしてくる高石であった。高石は返信した。

「イツモノノタチノミヤテナジニシユウゴウセヨ！」

高石も嫌味半分で全文をカタカナで返信した。直ぐに白鷺からメールが返ってきた。

「ひじょうにわかりやすいめーるありがとうございますすこしばかりおくれますがまっつておいてください」

―ああ・・・っ。こいつとはほんまに腐れ縁だ。同衾仲間だもんな・・・―

*同衾（男女が）一つの布団の中で一緒に寝ること。

何とも淋しい感情が揺ら揺らとこみあげてくる。あの出来事さえなければ、小百合嬢に蔑視されることもなかった。マドンナ！「ミスH高校」は高石の傍から遠のきつつあるようだ。

これもあの白鷺の奇行による影響だ！自分のことは棚上げてはいるが、諸悪の根源は「白鷺」だと思つたと殺意に近い憎悪がこみ上げてきた。この事態が「逃げ水」のように蜃気楼であつて欲しいと願うばかりだ。

仕事の終了を知らせるチャイムが庁舎内に鳴り響く。高石は、椅子から立ち上がつて、周囲の職員に挨拶をすませると更衣室に向かった。汗臭い作業着を脱ぎ棄てて平服に着替える。

青島青年が近づいてきて高石の顔を拝むように見た。

「係長！例のことお願ひしますね！」

―しつこいな・・・。―

高石は素知らぬ顔で、青島青年の視線を外した。

役場の正面玄関付近で、ミサキ嬢が立っていた。誰かを待っているようだ。

青島の顔を見ると、ミサキ嬢はうっとりとした表情になった。どうやら青島とデートらしい。美男美女のいい組み合わせだと高石は思った。

今日はマイカーを置き捨てて、近くの駅から電車に乗り込んだ。そして、待ち合わせの堺東に向かった。青島とミサキ嬢達は、難波へ遊びに行くと言う。彼ら彼女と堺東駅で別れると高石は、プラットホームをゆっくりとした足取りで歩いた。特に降りの階段では、手すりを持ちながら一歩一歩確実に歩を進める。最近、左ひざの調子が悪い。突然とガクツと折れるようになりバランスを失って肉体が宙を舞う。

—こんな体では、現場検証は無理だね。青島青年の協力をこちらからお願いますることになるかも・・・—

商店街の中をしばらく歩いて、路地に入った。パチンコ屋の喧騒が何とも言えないほど活気を与えてくれる。

ところで、おそらくこの物語では主人公と思われる高石守のことを書いておく必要がある。X市職員・建築関係担当課庶務係長が表向き肩書であるが、趣味か道楽か不明であるが「探偵業」もしている。大昔、職場近くの本屋さんで「図解 マル秘 探偵・調査マニュアル（著者 渡邊直美）」なる書物を購入してから「探偵業」こそ天職だと思い込んでしまった。エルキュール・ポワロかシャーロックホームズか……。それとも浅見光彦か……。

本人にすれば、真剣である……。が、依頼される案件は「ペット捜索」から「浮気調査」まで。おかげで「犬・猫」の行動パターンや生態に詳しくなった。「浮気調査」では、調査対象者の男に追いかけてまわされ交番に飛び込んだこともあった。

—こんな仕事のどこが面白いのかな・・・青島の奴・・・—
と高石はひとりごちた。

油と煙草のヤニで薄汚れた立ち呑み屋の暖簾をくぐった高石は、すでに誰かが到着しているかどうか確認の視線を店内に流した。高石の知らない先客が二人ほどテレビのニュース番組を見ていた。

「おかえり！高石さくらさん！」
と、立ち呑み屋の女将がニコニコと笑みを浮かべながら挨拶をしてくれた。ふっくらとした体型から発せられた言葉には、優しさが感じられた。
—この店に通い始めて二五年以上か・・・四半世紀だよね・・・—
と、高石は思った。

天敵（？）白鷺の経営するミニコミ紙の本局が、ここ堺東にあった。もとも

と大阪は摂河泉と言われるが、白鷺の領域は河内と和泉である。本局は、堺市堺区。河内方面は、河内長野市。さらに泉州の岸和田市に支局が置かれていた。摂津方面の情報については関心外ではあるが、河内・泉州方面については結構太いというか深い情報源を持っていた。

そのようなこともあって高石は、白鷺と会うためと言うか情報を摂取するために、この堺東に週一回ぐらいは訪れるだろうか。その度に、この立ち呑み屋に立ちよることになっていた。白鷺にすればこの立ち呑み屋は、ほぼ毎日だそう。一つには、栄養補給。二つ目には、様々な情報の獲得というか採取のためだそう。独りで来て、狙いをつけたグループの傍らで酔った振りをしながら聞き耳を立てるとのこと。(その間、白鷺の胸ポケットの高感度録音機が作動している。もっとも再生してみれば、何を言っているのか分からない状態で、「テープ起こし」のバイトさんが泣いているような代物らしい……)

企業関係は、口が堅く……酔っても仕事の話はしないそう。主に趣味の範囲の会話だそう。しかし、官庁関係者は口が軽い。上司の悪口は、まあ良いとして酔いが進めば、意思形成途上の内部情報をペラペラと得意げに喋りまくる。主に管理職と言われている連中が、この傾向が強い。傍に白鷺がいても。もっとも白鷺のミニコミ紙は、白鷺自身は前衛には出ない。表向きの社主というのが別に存在する。黒幕は、表に出ないから黒幕とのことだ……。

この路地には、数件の立ち呑み屋が並んで営業していた。立ち呑み屋といってもそれぞれ個性があって面白いものだ。また、そこに呑みくる人間群像も興味ある対象だ。立ち呑み屋だけで壮大なテーマの小説が書けるのではないかと高石は考えた。高石や白鷺などの人間を含めて有相無相の世界が、この小さな空間で展開されていた。

「ご注文は？お薦めは甘エビかな……。」と女将。

「じゃ……それと生ビール……おでんを適当に三つください。」

「あいよ！」

高石も先客と同じようにテレビのニュースを見ながら冷たいビールを喉に流し込んだ。

「ウメエ!!!」

と思わず口に出すほど刺激的な感覚が喉を震わした。この夏の暑さもこの冷たいビールがあれば、なんとかやり過ごすことができそう。

「生きていと言いか……生かされているような……」

様々な想念がビールの泡のように現れては消える中で、古臭いブラウン管テレビの中の女子アナが「東京都が、所在不明となっている一〇一歳女性に遺族

年金を五〇年間払っていた」などと報じていた。

「一〇一歳ね・・・俺は・・・後、何年生きられるかな?」などと考えていた時に、登山服姿の久米田が店に入ってきた。

「よう!!!」

高石は左手にビールジョッキーを持ちながら、空いている右手をあげて久米田に

「こっち!こっち!」という意味の合図を送った。

「どないしたんや?その格好は?」

「今日は非番なので、蔵岩に行ってきた。本官なりに現場を確認しておきたかった。」

「さすが久米田だ!現職は違うなあ・・・」と高石は素直に想った。

「携帯電話の際には、勤務中だと言っていたけど、こいつには非番時の現地調査も仕事の範疇か・・・。」

新聞報道では、滑落事故だと書いてあるけど・・・どうやった?」と高石は畳み掛けるように質問した。

「現場とY署とは、管轄が異なるのでなかなか情報は手に入らないのだけど、現場を探索して感じたことは、結論的に言って滑落するような場所ではないです。」

「地元のクライマーの練習場所と聞いたけど?」

「確かに子連れのハイカーが行くところではないですね。行き慣れた趣味人が好んで行くようなところでしょうね。まア:高石も白鷺も酔ってなければ大丈夫なところですね。」

と、久米田は注文したビールをうまさうに喉に流し込みながら高石の顔をまじまじと眺めた。

「こいつの顔には、俺と白鷺に手錠をかけられなかった無念さが表出されているぞ・・・」と高石は想った。その考えを振り払うように高石は語気を強めて聞いた。

「それで、久米田の考えは?」

「滑落事故ではないですね。何かありますね・・・これは・・・。」と断定するように言った。

「所轄も消防も単なる滑落事故とみる考えと事件として見る考えもあるようですね。ただね・・・。日根野さんが発見された時でも相当に酒臭かったという話もあるようなんですよ。」

「酒臭い?それなら正味の事故じゃないか!酒呑んで判断能力も運動能力も減

退して滑落・・・転落・・・死亡じゃないか。――

「ナンデだ？久米田！根拠は？」

「僕のカンです！」と久米田は自信満々な顔で言った。

――そうか・・・――と高石は頷いた。

高石も久米田も自分の本能で判断し動く。それはそうと高石は先ほどから久米田の背負っているリュックが気になっていた。確かに低山でも山登りをするとなると平服では行けない。山中の登山路を平服で歩いていけば、まさに不審者だ。

三

山登りをするわけだから、久米田が山スタイルであることは理解できる。ましてや、リュックを背負うのは当然だ。

――しかし、何だ！このリュックは？――

久米田の背中のリュックが波をうつようにうごめいていた。何か不可思議な光景だった。久米田が特別に変な動きをしているわけではない。

――現場のこともっと聞きたいけれど・・・。これは何だ？――

と高石が久米田を問いた。ただそうとした時に、久米田の背中のリュックから何か毛玉の塊のようなものが飛び出した。なんと！なんと！

――お犬様の頭ではないか！――

「なんじゃこら？」と高石はびっくり仰天。そのはずみで、箸でしつかりと確保していたはずのジャガイモがお皿に落下し、おでんのおつゆがはねとんだ。

「車にはねられたんだらうな・・・。こいつの左前足が骨折しているようなんだね。可哀そうだから、拾ってきた。応急処置はしているけどね。これから鳩山動物病院に入院させることになるかな・・・。」

と久米田はいかにも可哀そうではないかと、高石の眼を見つめて

「高石よ！こいつの治療費を少しばかりカンパしてくれへんか！」と言った。

「なんでだよ！」と高石。

「今日の現地調査代は、呑み代プラス治療費ということで手をうとう！」

「現職の警察官が、俺にたかるわけ？」

「これは、本官からのお願いであります！」と久米田は愛嬌のある笑顔で言った。

「いいよ！いいよ！こいつは健康保険が効かないから治療費は結構高いぞ！これも縁あれも縁ということで治療費をカンパするよ。」

――ご機嫌をとっておかないと、今度はマジで手錠をはめられるかも・・・――

この高石と久米田のやり取りを観察していた女将が近寄ってきて言った。

「久米田さんは偉い！前から私は久米田さんのファンなのだけど、今日の話聞いて一層好きになってしまった。惚れてしまいそうだわ……。」

「いや・・・そんな」と照れる久米田。

「ワンちゃんもお腹が空いていると思うから。」と言って「とりきも」などが満載されたタッパを久米田に渡した。

「何でこんな無骨な久米田がもてるのかな・・・。この無骨さか。――」

「ところでよ！高石！自分自身で現地調査をする方がいいよ。現地を見ないことには想像力も貧困になるしね。低山だから高石でも大丈夫だよ。」

と言って胸ポケットから手書きの地図を取り出した。

「このとおりに行けば、死体発見場所に到達できる。ただし呑むなよ。」と言いながら地図を高石に渡した。

A4サイズの再生紙に実直な性格を感じさせるラインが描かれていた。

「それからね。小百合嬢から伝達事項があります。」とおもむろに久米田が言った。ギクツとした高石が久米田を見た。

「なんだなんだ・・・――」

「今日の現地調査の感想を小百合嬢にメールで報告したのだけど、小百合嬢の方も何か掴んでいる情報があるようなんです。この件については、事件ということで調査せよ！とのことです。」

「何だって・・・メール？俺は、小百合嬢のメアドなんて知らないぞ。なんでなんで久米田が知っているんかいな？――」

と高石は地獄の底に落としこまれたような憂鬱と天地を焦がすほどの嫉妬心を感じた。

久米田は、腰にぶら下がっている携帯ホルダーから携帯電話を取り出して画面を開き小百合嬢からのメールを、これ見よがしに高石に見せた。

高石の心模様は、失意と驚愕でうちふるえ今にもぶっ倒れそうだった。

そんな時に、白鷺が店に入ってきた。高石の視野は、急速に狭くなり生ビールによる酔いが全身に回った状態になった。

「おい！高石！大丈夫か？顔が青いぞ！」と珍しく白鷺は高石を気遣った。

「いや！なんでもない。少し眩暈がしたただけだ・・・。いつからそこにおるんだ？」と答えるのが精いっぱいの高石であった。

「たった今、到着です。」

「ところで、白鷺！聞きたいことって？」

やっと自分を取り戻した高石は聞いた。

「歳岩のことは、どこまで掴んでいる？」

「まあ・・・これからやね。今日、久米田が現地調査に行ってきたので、その概要を聞いていたところ。小百合嬢も何か情報を持っているようだ。単なる滑落事故ではないというのが、俺と久米田の意見だ。」

「俺なりに日根野三郎の周辺情報を収集した限りでは、胡散臭いところが多々あるね。ひよっとすると例のY市のスキャンダル事件が絡んでいるような気がする。日根野三郎の退職理由も色々調べるとこれは何かあるような気がする。」と白鷺は言った。白鷺の情報源は、あっちこっちと密偵のような協力者が存在していて、それがミニコミ紙のニュースソースとなっていた。最近では、紙ベースの媒体だけでなくネットを駆使した報道も模索していた。匿名の情報が、真偽は別として様々なところからネットを介して瞬時に白鷺の手に集中する。

「よしこれで決まりだね。捜査プロジェクトチーム始動だ！ボスは、小百合嬢。事務所は、白鷺の事務所。」と高石は言った。

「異議なし！」と異口同音に久米田と白鷺は言った。

「よし！そうと決まれば次の店に行こうか！」と高石は言った。

「俺は、これからこのワン公を鳩山動物病院に連れて行かねばならないからパス。高石！くれぐれも現地調査では呑むなよ！二日酔い状態でもダメだぞ！」と久米田は捨て台詞のような言葉を高石に投げつけて店を先に出た。当然のことながら女将がくれたタッパを大事そうに両手で持っていたことは言うまでもない。

「お大事に！」とうっとりした眼で女将が久米田の背中に向かって言った。

「あ・・・いう優しいところが良いのね。久米田さんって・・・」と呟くような女将の声が聞こえた。

—こんちくしょう！—と高石は心の中で叫んだ。

その夜。

高石と白鷺は夜遅くまで堺東のスナックで呑んだ。相も変わらず白鷺の演歌カラオケと付き合うのは大変だった。これに久米田が参加していれば、「同期の桜」を始めとして軍歌のオンパレードとなり、学生運動歌に労働歌・・・まさに玉石混交状態となったであろう。ただ最後に白鷺とともに歌った「原爆を許すまじ」には、四〇年前・・・高校生時代の出来事が回想されて高石は涙した。中高年の涙ではなく青春の涙だった。傍らの白鷺の臉にもうっすらと甘くて切ない青春色の涙がたまっているようだ。

我らは、今でこそ立場も人生観も異なるが・・・今でも同志だ！と高石は思った。白鷺哲男・・・久米田巖次郎・・・そして永遠のマドンナ！浅香小百合。

時計の針が十二時を回り、五臓六腑にあますところなくアルコールが行きわたると、睡魔が情け容赦なく襲いかかってきた。さすがに記憶も途切れ途切れになってきたので、高石は前回の二の舞だけは回避する必要があると思った。

「シラさくさくぎぎ！ここまでだ！轟沈！轟沈！」と高石は万歳スタイルを取りながら絞り出すような声で言った。

結局のところその夜は、白鷺の事務所で宿泊。安物ソファの上で眠ることになった。

エアコンは十分に調整されて快適だったが、泥のような眠りの中で高石は長い夢を見た。

夢か幻か分からない様々なシーンが断片的に登場する……。

「夢その一」

高石が通う高校の正門へと繋がる道は、迷路のようになっていた。小路をくねくねと曲がって行かねばならない。昨夜の雨のせいで路上に散乱した桜の花びらを踏みつけながら黙々と歩いていた。高石は、尾行されている気配を感じた。

—この道を知っているのは俺だけなのに……—と想った。

次の角の路地を右に曲がり、しばらく行つたところで高石は背後を振り返つた。白鷺哲男が、ニヤニヤと笑みを浮かべていた。そして角刈り頭の久米田巖次郎。この二人の後ろに浅香小百合がいた。

「おい！こらっ！高石！！」と白鷺が高い声で呼んだ。それに続けて浅香小百合のソプラノが高石の鼓膜を優しく震わす。

「足が速いのね……高石くん！追いかけるのは大変だわ……。」

—浅香小百合に追いかけられるのなら本望だ！—と高石は想った。

「夢その二」

学内で対立する別のグループに高石が拘束された時に、久米田巖次郎が単身、柔道着姿で救出に来てくれた時のシーン。いや白鷺も久米田の大きな背中の後ろにいたか……。突きかけてくる相手の竹槍を、その厚い胸で受けて掴み取り、鬼のような形相で相手を睨みつけると鼻血で顔下半分真っ赤になった高石を抱きかかえる久米田。久米田の筋骨隆々で仁王像のように怒りを顕わにした態度を見て、逆に縮みあがったのは彼奴等だった……。その後、高石は浅香小百合嬢の腕の中で治療をしてもらった（そのはず）。

「夢その三」

何かのデモだった。白鷺、久米田、浅香、高石が学生服姿で初めて参加したデモだった。御堂筋でフランスデモ（デモ隊の横列が手をつなぎ、道路一杯に

広がるデモの方式)になった時に、高石の左手はしっかりと浅香小百合の右手を握っていた。一番の幸福を感じた瞬間だった。浅香小百合の左手を握っていたのは白鷺だった。こいつも幸福そうな顔をしていた。久米田は、両手をフリーにしていた。何かあれば浅香小百合を守護する態勢だった。

今から思えば六九年く七〇年という時代に多感な青春時代を通過したことが幸福だったのか・・・そうでないのか高石には分からない。今は、すっかりとノンポリ化して「探偵」という生きがいしかない中高年だ。だが、この仲間は久米田がよく歌う「同期の桜」だ。わが青春に悔なし！

四

「蔵岩滑落事件」についてのマスコミの対応は、単なる事故という扱いであった。しかし、白鷺のブログニュースは連日取り扱っていた。

「謎の蔵岩滑落事件 事故か他殺か？」というタイトルで記事は書かれているが、内容的には貧困すぎた。数年前に起ったY市のスキャンダルに関係しているようなニュアンスで記事は構成されてはいるが決め手のないものだった。

ところでY市のスキャンダルとは何だったのかを説明しておかないと、この駄文物語の読者には何が何だか分からないであろう。

数年前のY市は、「不祥事の連鎖」に遭遇していた。当時の市幹部の一人Aは企業誘致を巡り業者から一千万円を超える金を受け取ったとして、大阪府警に収賄容疑で逮捕されていた。また、別の幹部Bも業務委託を巡り業者から八百万円を超える金受け取った収賄容疑で逮捕されていた。

通常はこの程度の報道で終わるはずだが、更に不祥事が続くので驚くしかない。この後、助役Cも別の業務委託を巡る競売入札妨害容疑で逮捕された。不祥事は更に続いた。この時の市長が部下を水道事業管理者に任命した際に、なんとこの部下から数百万円を受け取っていた事も判明したのである。

大阪地検特捜部は、特定の業者に入札予定価格を漏らし落札させたとして競売入札妨害容疑で市長、助役Cなどを逮捕している。市政トップの逮捕とY市の不祥事は全国に知れ渡り、市政に対する市民の信頼は地に落ちた。

この不祥事の連鎖の中で、日根野三郎は退職した。日根野三郎自身もこの渦中に巻き込まれ、連日参考人として事情聴取を受けた。在職当時は契約担当課に所属し係長をしていた。定年間際でまだ係長。おどろくほど出世欲のない性

格で、ほとんど上昇志向といったものがなかった。だが、市長の逮捕を受けてから土日もないような状態で事情聴取を受けると周囲も日根野三郎自身への根拠のない疑惑が発生する。

マスコミは、連日のように日根野三郎の自宅周辺を嗅ぎまわり、家族は外出できない状態だった。たとえ犯罪に関与していなかったとしても世間はいい加減で冷たいのである。特捜部は、日根野三郎からは何も聞き出すことが出来なかった。結局、日根野三郎は精神を病んで自主退職した。日根野三郎以外にも数人の職員がうつ状態に陥り年度途中で退職している。彼らは、市政のトップでもなければ管理職でもない普通の善良な職員だった。

売官・猟官だけに止まらず汚職の伏魔殿となっている市政に嫌気を感じた日根野三郎は、この魔窟から抜け出した。その後順調に快癒し「畑仕事」や登山に熱中するようになった。

この当時、白鷺のミニコミ紙も当然のようにキャンペーンを展開していた。

月日は流れて、その後の市長選挙で市政刷新をスローガンにした新しい市長も当選し、Y市は落ち着きを取り戻した。今は、そんな事があったのか・・・という感じで人々は生活を送っていた。犯罪だと意識して悪に手を染めた輩どもは、それ相当の罰は受けよう。しかし、日根野三郎のような元来、小心者で律義な木端役人は何もしていなくても一旦疑惑のラベルを張られると後の人生は窮屈なものとなる。そして、今回のような変死であった。

そんな事を考えながら高石は窓外の景色を見た。雲が早い速度で流れていくのが見えた。ディアンムーと名付けられた台風四号は、対馬海峡を通りぬけて日本海を北東に進んでいた。夜には東北地方に上陸する恐れがあるとテレビニュースが伝えていた。

高石は公務員ということもあって台風情報には敏感だ。何かあれば、深夜でも出動し地域住民の安全を確保しなければならない。

—まあ・・・今回は大丈夫だろうね。—

と、高石は事務所の窓から外を眺めながら思った。その時に事務所の電話が鳴り響き、青島青年が受話器を取った。

「係長！電話でくすす！」と青島。

白鷺からの電話だった。今日の午後七時から白鷺の事務所で私設捜査会議を開催することだ。

「プロジェクトチームのメンバーは、全員集合すること。」と言う小百合嬢からの伝言だった。

白鷺の声は、何故か焦っているような話しぶりだった。蔵岩で、日根野三郎が死体となって発見されて一〇日近くになるうとしていた。調査の進捗状況は進展がなかった。久米田に指示されている蔵岩の現地調査は、高石の膝の調子が悪いこともあって延び延びとなっていた。

「怠慢ですね！」と言う小百合嬢の叱責の声が聞こえるぞ！—と思うと高石の背中に戦慄が走った。

仕事の終わりを知らせるチャイムが鳴ると高石は愛車のノアに乗って、〇〇線経由で中央環状線を走った。堺東近辺は、さすが政令指定都市ということもあって車の通行量は多かった。高石は、いつもののお気に入りのお気入りの駐車場所である翁橋の一〇〇円パーキングに車を止めた。そこから、一〇分ほど歩くと白鷺の事務所があった。

白鷺の親が残した雑居ビル内に事務所がある。白鷺は、この家賃収入で生計を維持していた。赤字経営のミニコミ紙が発行でき、社員に給料を払えるのも、この家賃収入のおかげであった。

定刻の午後七時に白鷺の事務所入り口に着いた。高石は、ドアを開けて一階の事務所の隅々を眺めた。

—白鷺のボンは・・・どこや？—

と周囲に視線を泳がしていると、何かを探し求めている挙措を認めたスタッフの一人が和やかな顔をして近づいて来た。高石は会釈すると

「論説主幹は、二階です。もう！みなさん専用執務室でお待ちですよ！」と言った。

—何が論説主幹だ！何が執務室だ！あのボンボンが・・・！—

と高石は思った。そして笑みを浮かべてスタッフに

「そうですか・・・早いな！おひざ元での会合やから、早々に全員集合か！遅刻の常習犯は、白鷺だからな！」

と皮肉をこめて言った。

高石は二階の専用執務室につながる階段をのぼった。急な勾配の階段なのに手すりがない。膝がいつ折れるかも分からない高石にとって、日本中でここ以上の危険な場所はないだろう・・・。スロープとは言わないが、せめて手すりの設置を！と思った。

—映画「蒲田行進曲」で見た階段よりエゲツないなあ・・・何が「地球にやさしく」だ！あのボン！常日頃に言っている言葉と反するぞ！白鷺！—

高石は、腰を屈めてゆっくりと一段一段のぼった。いつ膝が折れても三点確

保できるように・・・。

「俺は、ここで滑落死するかもしれない。これでは、岩登りの方がいいのではないか！誰か！確保してくださいさっすい！！」——
と高石は、今にも泣きそうな顔で呟いた。

執務室のドアを開けると、安物の応接セットが見えた。すでに三人はそれぞれの定位置に座っていた。左手のビニールレザー張りの二人掛けソファに久米田、入り口のドア付近からは、久米田の大きな体のお陰で見えないが、奥に小百合嬢がいた。

高石は、これまた定位置のアームチェアのビニールレザー張りの椅子に座った。久米田の真つ前である。右手には、当然のことながら白鷺が座っている。執務室と言っても狭いのか高石と白鷺の間には隙間といったものがない。肩と肩が触れ合うような感覚だ。

「ボンの肩と擦れ合っても色気もないなあ・・・」
と高石は想った。

高石は、斜め前の小百合嬢を見た。今日は、着物姿であった。

「美しいものは美しいなあ・・・」と高石は常々想う。先日の夢を想起した。高校生時代の小百合嬢は眩しいほどであった。真正面で対話すると何故か落ち着きをなくし胸が高鳴る。鼓動の振幅は激しくなり思考が止まるような感じだ。今もそのパワーは落ちてない。

その小百合嬢が言った。

「高石くん。膝の調子はどう？無理してはだめよ・・・」と。

突然と小百合嬢の優しい言葉を聞いて、高石は感動した。

「なんと！有りがたいお言葉・・・」

そこへ久米田が割り込むように言った。

「無理すんなよ！高石。この間は現地調査に早く行け！と言ったけど、お前は膝が弱いもんな。許せ！俺は俺で、あの方面の聞き込みも始めているから情報は提供するよ。お前の推理力が必要だからな。それとな、お前がカンパしてくれたこともあって、あのワン公の治療も順調だよ。感謝するよ！」
と日頃、無口な久米田が饒舌な慰めの言葉をかけてきた。

「持つべきは友だ。やはり「同期の桜」だ！」と高石は感涙する想いだった。
傍らの白鷺は、ニコニコと笑っていた。

そんな時であった。

階下で騒がしい音がした。物が壊れる音とともに複数の人間達の怒声とスタッフ達の泣き叫ぶ声が聞こえてきた。

―何事か？―

と高石は思った。立ちあがって見に行こうと腰を浮かせたが、それよりも早く階段を駆けのぼる複数の足音が聞こえた。ほぼ同時に、入り口のドアが金属バットで打ちたたかれドアにはめ込んだあるガラスが粉々に飛び散った。

三人の男が、それぞれ金属バットを振り回して乱入してきた。そのうちの一人が白鷺を認めるなり

「コリヤッ！！お前が白鷺か？！」と叫ぶなり金属バットを真っ向から打ち下ろした。

その瞬間！久米田は、咄嗟に自身の大きな背中その後ろに小百合嬢を隠し、いままさに暴漢の金属バットが白鷺の脳天に振り落とされるかと思われた瞬間。

高石は、久米田の胸ポケットから黒光りする拳銃を見た。久米田の右手は、すばやく胸ポケットから回転リボルバーを引き抜いた。そして暴漢の眉間に向けて久米田の回転リボルバーの引き金が引かれた。サイレンサー付きの銃なのだろうか？発砲の音はしない……。

高石は、一瞬。飛び散る脳漿……吹き出る紅い血をイメージした。一発目は、見事に暴漢の眉間に命中し、続けさまの二発目は耳たぶに命中した。

振りかざした暴漢の金属バットは方向性を失い高石の頭をかすめて、白鷺とのわずかな椅子と椅子との隙間に食い込んだ。

カーペットの床上でのたうち回る暴漢。他の二人の暴漢が怯んでいる時に、久米田はソファアートを踏み台にしてジャンプをした。そして着地する頃には暴漢の二人目は泡を吹いて気絶し、床に転がっていた。

高石は見た。そこに立っているのは久米田ではなく「北斗神拳」のケンシロウだと思った。

三人目の暴漢は、恐怖のために顔を歪めて後ずさりしながら逃走した。その際に、あの階段で足を踏み外して転げ落ちた。まさに「蒲田行進曲」の「階段落ち」のようだった。

時間にすれば数秒の出来事だろうか。瞬時の出来事だが、当事者の映像感覚で言えばスローモーションの世界であった。流れゆく時間の振幅が異なっている世界であった。

白鷺と高石の顔は、恐怖でひきつっていた。二人の椅子の間に深く食い込んだ金属バットが、まだ揺れていた。

「大丈夫か！浅香！」と手短に言う久米田。

小百合嬢は、うっとりとした眼で久米田を見た。

「ええ、大丈夫……。ありがとう久米田くん。」と小百合嬢は場馴れしているのか静かに言った。

「俺は、四〇年前から君のボディガードだ！君との約束は貫徹するよ！」と久米田はポーカーフェイスで言った。

白鷺と高石の二人は、まだ呆然自失の状態であった。当然のことながら小百合嬢と久米田の短い会話も彼らの耳には届いていない。そんな余裕があるはずがない状態であった。

――何が起こったのか分からない。何が何だか分からない。――
と高石は想った。

ここで、この駄文物語の作者から読者に補足説明すべきことがあります。今から二〇年ほど前のことです。ひとつのエピソードです。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

久米田が非番の時だった。これから夕飯時の生ビールを賞味しようとした時に、白鷺と高石から続いて電話連絡があった。今すぐテレビニュースを見ろとのことだ。NHKのチャンネルに合わすとアナウンサーが冷静な言葉で記事を読んでいた。

ニュースは、新地のクラブに商談のもつれから、男が猟銃の散弾銃を持ちこんで、客とホステスを人質にして立てこもっているとのことだ。

店名を聞いた時に、久米田は瞬時に制服姿に着替え、机の引き出しから愛用の回転リボルバーを取りだし、これまた愛用のスーパークラブにまたがりY市から大阪の新地まで走り飛ばしたとのことだ。警官姿の久米田が料金を次々と無視して高速道路を猛スピード(?)で疾走する姿は、黄色いマフラー姿をしていけば鬼気迫る「少年ジェット」のようだったと、高齢のタクシー運転手は、懐かしい顔をして目撃証言をしたとのことだ。

久米田が目指すのは、新地の浅香小百合嬢の店である。ビルの周りはすでにパトカーや防弾服で身を固めた警官達でいっぱいだったとか。そして、事件現場周辺には、野次馬が取り巻いていた。また、周辺のビル窓からは歴史的瞬間を目撃しようとする人々が、突入は今か今かと待っていた。

そんなときに、一台のスーパークラブが停止線を突き破って浅香小百合嬢が入居しているビルの入り口前に到着した。周囲の警官達はあっけにとられた。眼前の光景が信じられなかったようだ。誰もが前方に出たがらない入り口に久米

田は愛用のスーパークラブを横づけにした。すでにエンジンは熱く限界点に達していたかのようだ。

遅れて白鷺が知り合いの土建業者から借用したトラックが停止線ぎりぎりまで進行してきた。荷台には、かつてのH高校の同窓生が一〇数人乗っていた。白鷺や高石の呼びかけで参集した昔の仲間たちであった。彼らは機動隊の制止もあってそれ以上は進行できなかったが、かつての仲間である浅香小百合嬢の危機存亡の知らせを受けて、何はともあれ駆けつけてきたのだった。

「どこの警官だ!？」と防弾服で身を固めた警官達も野次馬の群衆達も驚愕のあまり言葉も出なかった。

久米田は、スーパークラブから身も軽く降りると周囲を見渡した。遠くにいる白鷺や高石達に視線を投げるとトラック上の同窓生の中の誰かがH高校の校歌を歌い出した。そして、それは大きな合唱となっていた。それが合図だったかどうかは分からないが、久米田はおもむろに隣のビル入り口の方向に歩を進めた。警護する警官達に会釈して中に入っていた。会釈された警護の警官達は畏怖のあまり思わず直立不動で敬礼したとか。

久米田の背中では、同窓生一〇数人が発する「無事!救出せよ!」という無言の声を感じた。また、白鷺や高石達は、久米田がこれから実行する内容の困難さを感じていた。

そして三〇秒も経過しない間に、ビルの屋上に独りの警官の姿があった。

浅香小百合嬢の入居するビルとの間隔は八mほどあっただろうか。群衆の中からどよめきが起こった。彼らも久米田が何をしようとしているのか理解したようだ。普通の人間ならビルからビルへと跳んで移ることなどまず考えない。カール・ルイスは、公式記録にならなかったが九m跳んだとのことだが、アドレナリン全開!闘争本能全開!の久米田ならやるかもしれないとかつての同窓生全員が想ったという。

—久米田ならやり遂げる!—

—俺は、浅香を救うためなら何でもする。—

久米田には、浅香と高校生時代に交わした約束があった。

久米田は、軽い助走をつけて跳んだ!

—ああああっ!足りない!—

空を見上げる警官達と群衆……。誰もが空しく墜落すると想った。

しかし、非常時のくそ力というのであろうか。久米田はかろうじてビルの突起

物に手をかけることに成功した。

「オオオオッ!!!」と

どよめきが起こった。後いくつかで四〇歳に手が届く決して若くない警官が飛翔したのだ。

久米田は、ビル壁をよじ登った。そして、ビルの屋上に立った。

そして五分ほど経過しただろうか・・・。

ビルの入り口からこの世のものとは思われない形相をした四〇代の男が蹴りだされた。両まぶたは腫れあがり、口には散弾銃の実包が詰め込まれていた。目が見えないためか・・・よろけ歩く犯人は両手を前に突きだして防弾服の警官達に近づいた。怖気づいた警官達は後ずさりしながら犯人の顔を見た。まさにボコボコの状態であった。

犯人は、道路のわずかな段差に足を取られて前屈みに転倒した。そして、膝を突きながら両手を合わせて合掌するかのように小さな声で言った。

「助けて・・・」と。

しばらくして、久米田が出てきた。右手にはボコボコになったフライパンが握り締められていた。そして、浅香小百合嬢が先導する形で、他のホステスとお客達がビルから出てきた。彼ら彼女達は、生きて夜のネオンを見ることができたことに猛烈な感動を覚えたと言う。

なおこの事件の記録は存在しない。現場にいたマスコミ関係者もカメラマンも瞬時に解決したため誰もシャッターを押す余裕はなかったとのことだ。テレビカメラマンも手に汗を握る現実を前にしてレンズを向けることが出来なかったと言う。

久米田自身も浅香小百合に

「怪我はないな？」と一言かけただけで、愛用のスーパーカブに乗って白鷺や高石達と共に立ち去ったとのことだ。

我に返った現場指揮官にしても、事態の推移を確認するのにはしばらくの時間が必要だった。現場指揮官の前に、恐怖で打ち震えて鼻水を垂らしながら命乞いをしている犯人がいた。

—どこの所属の警官なんだ！あいつは？—

★☆☆

以上のお話がこの駄文物語の作者が仄聞した内容です。次回から本題に続きますので、よろしくお付き合いください。

久米田は、白鷺に怒り付けるように言った。

「白鷺！一一〇番通報を五分後にしろ！一階のスタッフにも伝えろ！」

久米田の呼びかけで自分を取り戻した白鷺は、デスクの上にある電話機をやや震えながら持ち上げて内線電話をかけた。

「五分もあれば、充分だ！」

と言って、久米田は床上でのたうちまわっている暴漢の胸倉を掴んで詰問した。

「誰に頼まれた？」

「ウウっ・・・」と声にならない暴漢。

久米田は、おもむろに先ほどの回転リボルバーを胸ポケットから抜き出し、暴漢のこめかみに押し付けた。

「命だけは助けて・・・」と哀願する暴漢。

「何を言っているんだ。襲ってきたのはお前達だろう！」

久米田は、さらに力をこめて黒光りする回転リボルバーの銃口を押しつけた。押し付けられる痛みだけで、気絶しそうな暴漢。

「安心しな。これは小学生用のエアガンだ。BB弾を発射するおもちゃだし、しかし、使う人間にとっては、強力な武器となるぞ！」と、久米田は不敵な笑いを浮かべながら言った。さらに久米田は言う。

「もう一発撃ち込んでやろうか？どこがいい？先ほどの眉間か！耳たぶか！この至近距離では、死ぬかもしれないな・・・。」

暴漢にすれば、「おもちゃだ！」と言われても俄かに信じられなかった。「おもちゃ」とは想えない心理状況に陥っていた暴漢は、すでに恐慌を来し目は死んでいた。

久米田は、さらに暴漢の首根っこを掴み、顔面を床下に押し付けた。すでに暴漢は、戦意を喪失し失禁の一步手前の状態だった。

「まだ白状しないのか？」と、言って久米田は暴漢を掴みなおし、頸動脈を押さえて本当に失神させた。落としては、すぐに息を吹き返させる久米田。恐怖でひきつった暴漢の顔。とうとう小便を漏らし始めた・・・。

喋りたくても恐怖で自分自身を忘失した人間は、人間ではなくなる。――と高石は想った。

そして暴漢は、あたかも死後の世界に逃げ込むように悶絶した。

久米田の情け容赦のない行為で、白鷺と高石は、先ほどの恐怖とは異なる新たな恐怖を感じ始めていた。

—小百合嬢が怪我でもしていたら、こいつらの命はないな・・・恐るべし！久米田！ネパールで何があったのだ！？—
と、高石は想った。

高石は、自分のことにかまけて小百合嬢の安否確認をしていなかった事に気がついた。同じく白鷺も気がついたようだ。

—ここが俺達と久米田との決定的な違いだな！俺達は、小百合嬢の守護神には成れないのか。俺達は、映画に出てくるケビン・コスナーのような「守護神」タイプでもない・・・ましてや北斗神拳のケンシロウでもない。久米田は、小百合嬢の永遠のボディガードになると四〇年前に宣言した。気持ちだけで言えば、俺達も久米田には負けないが・・・。それに、俺は昔・・・久米田に救出されている。久米田は、小百合嬢だけでなく俺達の永遠のボディガードなのか・・・。今日、久米田が欠席していたら俺達だけで小百合嬢を物理的に守護することは出来なかった。—

白鷺と高石の視線は、ほぼ同時に小百合嬢を探した。襲撃の恐怖で打ち震えているべき小百合嬢がいる筈だと想った。

—慰撫しなければ・・・—
と、二人は想った。

小百合嬢は背筋をぴんと伸ばしながらソファアに座っていた。それも落ち着いていた様子で久米田の所作を見守っていた。

—母親が子どもを見るように・・・否！断じて違う！・・・これはどこかで見た映画のシーンだ！「緋牡丹のお竜」さんだ！藤純子（富司純子）だ！—
と高石は想った。

今まで多くの修羅場を経験してきた小百合嬢にとって、この程度の事件はとうやら小さなことらしい・・・。終始、混乱し動揺していたのは、白鷺と高石の二人だけだったようだ。

「申し訳ない・・・。気絶してしまった。これじゃ何も聞き出せないなあ。」
と、まるで子どもが親に買ってもらったカブトムシをいじくり回して壊してしまったように久米田は小百合嬢に向かって言った。

「いいですよ！久米田くん。」と小百合嬢は柔和な声で言った。そして、視線を白鷺に向けてと命令するように言った。それは、まるで緋牡丹のお竜さんが言っているのではないか・・・と錯覚しそうだった。

「白鷺くん！！—一〇番！！—」
恐怖も癒えたのか・・・。白鷺は、まるで女親分に指示された子分のようにき

びきびと行動した。

「高石くんは、怪我人がいないか、一階のスタッフの様子を確認してきて!!」
恐怖のためみぞおちのところがドキンドキンとしていた高石は、小百合嬢の力強い声を聞いて元気が出てきた。

「俺達は、小百合嬢の存在があつてこそ俺達だ!ケンシロウになることはできないが、自分の持ち場で少しでも貢献しようではないか!」
と、高石は考え直した。

高石は、執務室を出て階段の踊り場に立った。階段の下を覗くと三人目の暴漢が頭から落ちていったのが分かった。

高石は、手すりもない階段を後ろ向きで両手両足を使つて慎重に降りつて行った。暴漢の体に右足を引つ掛けて転げそうになつた。かろうじて両手で左右の壁に突つ張つたお陰で落ちることはなかつたが、真下にある苦痛に歪んだ暴漢の顔を見て想つた。

「我々は、ヤバイ事件に首をつつこんだのか?今回の襲撃は、滑落事件との関連性があるのだろうか?」

怪我人は、襲つて来た暴漢以外は誰もいなかった。受付兼電話番号のおばちゃん、親戚筋の若いスタッフの胸の中で泣いていた。

若いスタッフの男の子は、高石の顔を見て悪夢から覚めたようなほっとした表情をした。

しばらくしてサイレンを鳴らしながら堺署のパトカーが到着した。事務所のドアを開けて入ってきた若い警察官は驚愕した。入り口近くの階段の下には、「逆」海老状態の人間が悶絶していた。若い警官は、一瞬!被害者かもしれないと想つたが、悶絶している胡散臭い感じの三〇代ぐらいの男の右手には金属バットが握り締められていた。顔を隠すためのマフラーは外れて、その無残な表情は今まで見たことがないものだった。

「何が・・・あつたのか?」

一階の事務室では、中年の女と若い男が抱き合っていた。事情を聞こうにも若い男は、泣き叫ぶことによつて自らの心の沈静化をしようとしている中年の女の慰めのために・・・それどころではない状態だった。

若い男は、右手で二階を指差した。

若い警官は、ぶっ倒れている男を踏まないように注意深く階段を駆け上がった。

た。踊り場に出て緊張感は最大になった。狭い通路の奥に見える床上に、散乱したガラスの破片が飛び散っていた。そして、入り口のドアが見事に壊されている部屋に用心深く入った。

この二階の部屋に入ると、床上には口から泡を吹きあげて気絶している男がいた。男の傍らには、金属バットとハーフトタイプのヘルメットがころがっていた。ヘルメットの前頭部には、誰が見ても明らかに分かる大きな男の足の踵サイズの凹みがあった。そして、こいつの顔は、この世のものとは思えないほどの恐怖で歪んでいた。

―何を見たらこんな顔になるのか！―
と、若い警官は訝った。

部屋には、中高年の男が三人と女一人がいた。

着物姿の女性には、畏敬を感じた。傍らに座っている如何にも古武士然とした男に畏怖を感じた。他の二人の中高年の男は、まさに被害者そのもの風体だった。

「この責任者は、どなたですか？」と若い警官は誰かれとなく質問した。

「あああつ・・・僕です！」と白鷺。

「何があったのですか？」と聞く若い警官。白鷺は、一通りの経過を説明した。

堺署の若い警官が白鷺に事情聴取している時に、足元で倒れていた暴漢の眼が覚めた。暴漢は、意識を取り戻したのか・・・三途の川から生還したのか・・・定かではないが、回復した時点での表情は朝の眠りから覚めたような爽やかさが感じられるような表情をしていた。

が・・・しかし、暴漢は、見上げた方向に久米田の顔を見るや否や慄きながら警官の足に纏わりついた。

「助けて・・・。」と蚊が泣くような小さい声で言った。

事情のまだ不明な若い警官は、自分に危害を加えてきたかと想い、その暴漢の手を蹴り飛ばした。国家権力の庇護を受けられないと悟った暴漢は、自衛本能のまま事務室の隅にあるロッカーの後ろまで、はいずり回りながら逃げ込んだ。そして、両膝を両手で包みこみながら背中を丸くして

「おかあ・・・ちゃん!!」
と、泣き叫んだ。

久米田は、堺署の若い警官に近寄り自分自身の警察手帳を見せた。

「本官は、Y署地域課所属の久米田です。」と重厚な声で言った。

「どうして、Y署の現職警官がここに？」

「今日は、高校生時代の同窓会の打ち合わせなんです。」

「あああ・・・そうですか。Y署に確認の連絡を入れますので待って下さい。」

連絡を取り終った若い警官が親しみと尊敬のこもった笑みを浮かべながら言った。

「Y署に確認が取れました。とにかくこの二人と階下の男を署に連行いたします。何か分ければ、久米田さんにもご連絡いたします。今後のことでもありますので、携帯電話の番号を教えてくださいませんか？」

と言いながら、部屋の隅のロッカー裏で泣き叫んでいる男を引っ張り出して手錠をはめた。ぶっ倒れている男にもすばやく手錠をはめ、頬を平手打ちにして意識を回復させた。

そして、あの階段を用心深く歩かせた。それでも一人の暴漢は足をからませて仲間を道連れに三段下の床上に転げ落ちた。階段下の床上には、三人の暴漢が団子状態で固まっていた。

高石も用心深く一階下の事務室に降りた。

「今日は、何回・・・この恐怖階段を往復するのだろうか？——と想った。

帰り際に若い警官は、久米田に近寄り小さい声で囁いた。

「本官は、伝説の警官と言われている久米田さんとお会いできて光栄です。あなたの活躍ぶりは有名です。私は、あなたの活躍を警察官である父親から子ども時代に聞かされました。二〇年前の新天地での現場に父親も居ったとのことです。この話を聞いて、本官も父親と同じ警察官に成りたいと子ども心に決心した次第です。本来なら出世コースに乗っているのに、あなたは地域住民の守護神となるのが使命であると言って、駐在勤務三〇年。そして、難事件でも謎を解いて解決して犯人逮捕。手柄は、すべて上司に進呈し自分自身は決して表に出ない。あっちこっちの署からも相談があるそうですね。これを縁に本官ともお付き合いをお願いしたいところです。では、失礼！」

と、若い警官は興奮を隠しきれない表情で一気に喋くりまくると久米田に向かって背筋をピンと立てながら直立不動し、最上級の敬礼をした。

久米田は、にっこりと頷きこの若い警官と襲撃者三人を見送った。まだ体を震わせている襲撃者どもは、パトカーの後部座席に押し込まれた。

この時に、高石は夜のネオンの反射でキラリと光る手錠を見た。

襲撃者達は、何故か逮捕されたことで安堵したような気配が感じられた。あの恐ろしい久米田から離れることの喜びを全身で表わしているかのようだ。

高石は、思った。

―恐るべし！伝説の警官 久米田！！ネパールで何があったんだ！―

五

「とんだ邪魔が入ったものだわ。」

と小百合嬢は、まるで緋牡丹のお竜こと藤純子（矢野竜子）風に周囲を見渡しながら言った。

飛び散ったガラスの破片。壊れたドア……。床上に転がっている金属バット。凹んだヘルメット……。これらは先ほどの騒動を物語っていた。

―小百合嬢に、緋牡丹のお竜さんの気質があるとは気がつかなかった。それと伝説の警官！久米田。―

高石は思った。キミマロの毒舌漫談ではないが、「あれから！四〇年！」たつて、成長していないのは自分と白鷺だけだった。

そんなことを考えながら高石はあらためて小百合嬢の着物姿を眺めた。

―緋牡丹のお竜さんが、小百合嬢に乗り移った……。―
と想わずにはいられなかった。

ここで浅香小百合嬢の人生を記述する必要があるだろう。この駄文物語が、今後展開していくことを考えれば必要だ。

浅香小百合……。H高校を卒業して大阪府外のとある教育大学入学。卒業後は、Y市の中学校で教鞭をとる。その後、同僚の教師と結婚するも一男一女の子どもを残して夫は他界。何があったのか教師を辞し新地のママに転身。子どもがそれぞれ独立したのち、両親の介護のこともあつて新地から撤退。親元の地域でこじんまりとしたスナックを営業。

人脈・話題は豊富である。新地時代の店は、当然のことながら会員制であるが、ヘーゲルとかフォイエルバッハ、マルクス、はたまた、日蓮や親鸞などなどの宗教についても造詣が深くないと、ママとの会話についていけないので、お客は自然淘汰されていくらしい。嘘か誠か不明だが、偉い坊さんが小百合嬢との法論で木っ端微塵に負けて、泣きながら帰ったとか。

今でも新地時代のお客がベンツを走らせて小百合嬢のスナックに通うほどである。

補足するならば、久米田は週一ペースで小百合嬢の店に呼ばれたとのこと。もちろん虫よけダニアースの任務を遂行するためである。あの北斗神拳のケンシロウのような久米田が、店の片隅でミルクを飲んでる様を想像すれば御理解できよう。もちろんのことながら、久米田の胸ポケットには、黒光りする回転リボルバーが収められていた。永遠のボディガードは、信義にあつい。

浅香小百合嬢が帰ってきたことよって、男三人組は活気づいた。もともと喜んだ一番は白鷺であり、高石であった。正確に言えば、活気づいたのは白鷺と高石だけである。

白鷺一族のボンボンでも新地に遊びに行くには、時間が不足していた。ましてや地方公務員の分際の高石が行ける訳がない。まあ・・・これは、金銭的な問題なのだが・・・それ以前に風格というか品性というか・・・貧乏人そのものというか・・・とにかく、背広は、地元のスーパードキの店の既製服で、一〇〇円ライター・・・穴の開いた靴下では行けるわけではない。二度三度、小百合嬢から召喚状（無料招待券）なるものが舞い込み、勇んで行って見たが、場違いであることを自ら悟ってからは行く勇気が起こらなかった。

永遠の守護者の誓いを立てた久米田は、浅香小百合嬢の保護のために粉骨砕身・・・滅私奉公の状態と言えるが、この男は約束というか信義に命をかけるタイプなので、好きなアルコールを我慢して、店の片隅でミルクを飲んでいても自分を納得させることができる。胸元からチラチラ見えて黒光りする回転リボルバーは、絶好の虫よけダニアースの役目をしたとか・・・？

もつともこの姿が、他のホステス嬢に感動を与え、ママの小百合嬢の許可を経た上で久米田を巡る激しい争奪戦が始まったという話があった。

もつとも久米田にすれば、自分の周囲に何が起こっているのか関心外であった。久米田が、小百合嬢のボディガードを懈怠していた期間と言えば、ネパールに逃亡(?)していた一年間と、警察学校の新人研修期間ぐらいであるらしい。

「何だか落ち着かない会議になったけど、みんなに寄っていたいたのは、それぞれが持っている情報を共有する必要があると想ったわけね。白鷺くんは白鷺くん・・・ニュースブログでキャンペーンをしているけどイマイチだし、久米田くんの現地調査の内容もみんなの共通の認識になっていないよね。情報を総合して何があったのかを考察する必要があると想うわけね。これらをまな板の上のせてどう料理するかということになると想うのだけど、ここでの出

番は高石くんの出番ということになると思います。

あなたは、少し変わった推理をすると言うか常人では考え付かない角度で物事を見ているわよね。みんなが見落としている何かを発見できるのは、このメンバーでは、あなたしかない……。」

と小百合嬢は自分の想いを語った。

高石にすれば、

—これほど期待されているとは想像だにできなかった。—
と高石は胸の中で反芻した。

「先ほどの襲撃事件は、今回のことと関連性があるのかな？」
と白鷺が不安げに言った。

「今のところ表の活動をしているのは、白鷺だよね。今一番目立つ行動をしているのは白鷺だよ。しかしながら、この件の調査と今日の襲撃事件を直接結びつける材料は今のところないね。むしろ、白鷺の二ユースブログにしても他の紙媒体にしても報道の中味は、敵をつくる内容が多いよね。案外……その筋かも知れない。」
と久米田は言った。

「確かに、今日の襲撃のターゲットは白鷺であることは……間違いはないと思う。警察の取り調べの結果を聞かないと何とも言えないけど、俺たちも身辺については用心した方がいいみたいだね。」
と高石は言った。

高石は、小百合嬢を見た。まさに全身で……これ緋牡丹のお竜さんの雰囲気
気で何かを考えていた。

考えをまとめ上げたかのように想えた小百合嬢は、日根野夫人からの聴き取り内容を語り出した。

「警察から遺体を引き取った日の夜に、日根野夫人の家に行ったのだけど、伴侶を亡くした衝撃ですっかり取り乱していたのよね。その日は、話など出来なかったわ。翌日、お通夜ということだけ聞いて帰ってきたのだけど……。」
と、小百合嬢は自分自身の伴侶を亡くした時の状況と重ね合わせていたのだからか……少しばかり涙声だった。

高石の脳裏にかつての通夜が回想された。

あの時は泣いた。高石も白鷺も……。そして突然の訃報を聞いて集まったかつての同窓生の仲間達も泣いた。遠い九州の地に単身赴任していた仲間も飛ん

で帰ってきた。そして、泣いた。

滅多に涙など見せない久米田が、鼻水を垂らしながら号泣した。僧侶の読経が終わっても誰ひとり立ち去るものはいなかった。

浅香小百合嬢の心を射止めて、我々から日高校のマドンナを奪い取っていった男の通夜であったが、浅香小百合嬢の不幸は、我らの不幸だった。

祭壇の前で、父親を失ったことをまだ理解できない幼き子ども達がじゃれあって遊んでいた。永遠の守護者である久米田は、自分の力の及ばないことであるけれども、突然と病魔におそわれて倒れた浅香小百合嬢の最愛の夫を守護できなかつた悔恨の情で心臓がはちきれそうだった。

久米田は、幼き子ども達を手元に呼び寄せ、その大きな左右の膝に兄妹をのせて何かを語っていた。久米田は、この兄妹と一緒に遊ぶことによって何かを忘れようとしていた。

皆が皆・・・悄然たる姿で、棺を見つめる浅香小百合嬢の喪服姿を見ながらこの世の不条理を憎んだ。

高石達は、夜通し浅香小百合嬢に付き添った。

お別れの儀式が終わり出棺となった時に、高石・白鷺・久米田たちは親族とともに棺に手を添えて葬儀会場から出ようとした。

それまで大人たちに混じって気丈なふるまいをしているかのように想えた子どもたちは、なぜここに父親がいないのか訝った。

「パパはどこ・・・？」と兄妹が、母親の手を引きながら駄々をこねるように聞いた。

先ほど、母親とともに棺の中の父親にお花を添えた兄妹であるが、ここにいたって父親の不存在という状況が重たく幼い心にのしかかってきた。

「パパは眠っているの？・・・いつおきるの？」と今にも泣き出しそうな声で母親に聞いた。

母親にすれば、幼い子どもたちにどのように説明すればいいのか分からなかった。つい二日前まで、病床のベッドの周りで父と子どもたちは、和やかにふざけ合って談笑していた。突然の状態変化のため、あっ・・・と言う間もなく去って行った夫。

久米田は、目がしらが熱くなって真っ赤な涙を流している高石に、目線で合

函を送った。棺から静かに手を離し、すばやく浅香小百合嬢の傍に近寄った。そして、幼い兄妹を両手で掬い上げるようにして抱き上げた。兄妹は、久米田に抱きしめられることによって安心したようだ。

「たか〜い！たか〜い！」と兄妹は、小さな笑い声を出した。

余談だが以後、久米田は我が子と遊ぶ時には、出来るだけこの兄妹と一緒に遊んだ。永遠のボディガードは、保育士も兼務することになった。

成長の度合いに応じて、夏は山、冬はスキー・スケートと様々なアウトドアスポーツを我が子とこの兄妹に、わけ隔てなく久米田は教えた。

子どもたちが、それぞれ筋肉が付いてくる年齢になると、久米田流の格闘技を伝授した。

我が子とこの兄妹たちに対し、真摯に人生の意味について語った。人生の師とも言える久米田は、この幼い兄妹に人間とは何か！志とは何か！を教えた。その子たちもすでに三十路の年齢となった。この精神的な父性は、今でも継続している。

―永遠のボディガード 久米田！ 永遠の父性 久米田！―

話が大きく脱線したようだ。

人の死を前にして浅香小百合嬢の忌まわしい記憶が呼び覚まされた。過去の記憶を封印することで、浅香小百合嬢は幼子二人と我武者羅に生きてきたのだ。

しかし、近親者の不条理な死という出来事に遭遇した日根野夫人の悔しさと共振するかのよう、浅香小百合嬢の心の壁を打ち震わして甦った記憶……。

浅香小百合嬢は、冷静さを取り戻すべく高石、白鷺、久米田たちの顔を見た。

―私がしっかりしなければ・・・パニクっている場合じゃない！―

と想いなおした浅香小百合嬢は居ずまいを正した。そして、ハンカチで目頭を押さえて、凜とした落ち着いた声で再び語りだした。

「翌日になると日根野夫人も何かを覚悟したのか落ち着いていたわ。色々と質問したのだけどこれといった内容はなかった。そこで、日根野さんの二階の書斎を調べる許可をもらってパソコン関係調べただけ……。」

高石は、階下から僧侶の誂経が聞こえるなかでパソコンに向かって作業をしている喪服姿の小百合嬢を想像した。

「パソコン自体もパスワードを入力しないと開かないのだけど、これは簡単だ

った。中高年のパスワードって記憶力減退のためかほとんどのところ生年月日だもんね。ただね……。暗号化されたワードのファイルがあるのよね。ただね……。これが生年月日じゃないパスワードなのよね……。とりあえず、暗号化されたファイルも含めて、このUSBにパソコン内の全てファイルはコピーしてきました。」

と、少々不機嫌な顔つきでハンドバックからUSBを取りだしながら言った。

「確かにそうだ……。俺のキャッシュカードの暗証番号は、まさに自分自身の生年月日だ！まあ……。忘れることはない！！——と高石は想った。

「高石くんは、パソコン関係も得意だったよね。暗号化するほどだから、よほど大事な文書だと想うのよね。是非とも解読してくれるかな！」と言いながら高石にUSBを渡した。

「ここで手柄を立てないと……。——と高石は想った。

「他に変わった情報はなかったかな？」

と久米田が聞いた。

「そうなのよね。その人間を知るには、所有しているパソコンを見れば分かると言ったのは、久米田くんだよ。」

「そうだよ。ところで、そのPCはノートかな？ノートなら借用して調べたいことがある。」

と久米田は言った。

「ノートだけ……。どうして？」

「いや……。っ。ノートなら持ち運び便利だし……。確認したいことがあるのよね。結構、都合の悪いファイルは、ゴミ箱に移動させるけど、初心者なら……。そのまま残っている場合もあるし、削除したファイルを復元するソフトもあるんで……。」

と久米田は説明した。

高石は、不満そうに久米田の顔を見た。

「手柄を横取りされる！——

と想い、久しぶりに久米田の顔を挑戦的というか半ば憎悪のこもった敵意で見た。これは憎悪というよりは嫉妬かもしれない。

「それと携帯電話も調べたい。」と久米田は言った。

「それがね。私も日根野夫人からお借りして確認したのだけど、メールなどは全て消去されていたのよ。ここが不審な点だよ。もちろん電話帳も消去されていたわ。通話記録でもあればね……。」

と小百合嬢は言った。

「携帯電話は一台とは限らないよ！俺なんか二台契約しているぞ！仕事用とプライベート用だ。」

と白鷺が口をはさんだ。

小百合嬢は、白鷺の発言を無視して、

「いろいろとPCを調べていて分かったことだけど、亡くなった日根野さんだけど、出会い系のサイトに頻繁に接続していたようね。それも丁寧なことに覗いたサイトのページを保存していたのよね。今、高石さんに渡したUSBにコピーしてあるけど、たくさんの怪しげな女の人の画像が保存されていたわ……。」

男って情けないね。死後に自分の恥部がこんな形で他人に知られるなんて。まあ、画像の収集だけが目的だった可能性もあるけどね。とにかく関係ありそうなファイルは全てコピーしてあるから何か分かるかもね。」

「白鷺くんの方は何か分かった？」と小百合嬢は、まだ顔が青白く緊張が残っているような表情をしている白鷺に言った。

「俺はどうしてもY市のスキャンダルと関係があるとか考えられない。日根野の役割が何かあったと想う。事情聴取では、何も言わなかった日根野だが、何かを隠しているような気がするんだ。その暗号化されたワードの文書をどうしても読んでみたい！何かの秘密が、そこにあると確信している。」

「想いこみはダメよ！何か根拠がないと……。」

「そうならないように、スタッフ全員で情報の収集を行っているところだ！」

「スタッフ全員と言っても白鷺くん。あなたと親せき筋にあたるあの若い男の子……そして、受付兼電話番号のおばさんしかいないじゃないの！」

「そんなことはない！河内長野市と岸和田市に支局がある。そこも動員して調査中だ！」

「新聞社を退職したOBでしょう！それもパートで最賃以下の時間給って聞いたわよ！」

「それを言ったらおしまいだ！」

白鷺の形勢が悪くなってきたので、高石は

「白鷺！お前のデスクにあるPCを借りるぞ！」と言った。

高石は、白鷺のノートパソコンの電源をONにしてUSBを挿入した。そこには膨大な数のファイルが収められていた。

次に久米田が黒カバンより封筒を取り出し、その中に収められていた現地調査の写真をテーブルの上に並び始めた。そして、昭文社の地図を広げて説明を شدした。

「まず、現地だけど……この地図を見てほしい。横尾山は低山だけど結構人氣のある山なんだ。横尾山は、西国四番札所の施福寺があつて有名なところだ。施福寺が、横尾山の山頂だと誤解している人も多いが、山頂は別なところにあつて、蔵岩はその近辺にある。仏岩などと呼ばれるところもあつてクライマーの絶好の練習場所となつてゐる。そういう意味では、観光からハイキング、そしてクライムまで楽しめる山と言える。

横尾山へのルートは、青少年の家、根来谷、施福寺からのコースなど多岐にわたつていて、ダイヤモンドトレールの最終地点ということもあつて滝畑からのコースもある。

地図を見てもらうと分かると想うが、様々なところから入つていけるところなんだ。

俺自身の現地調査としては、やや広域的に調査した。まず、その山がどんな雰囲気のものか知りたくなつたというわけだ。

青少年の家から八ヶ丸山。この展望台から蔵岩が望める。五ツ辻を通過して尾根分岐、そして横尾山最高峰（標高六〇一m）の標識のある山頂、そして急降下するような感じで行けば蔵岩が視界の中にどんと現れる。蔵岩のてっぺんからの眺望はすばらしいね。

ちやうど、クライマーが練習中なので、同じく写真と新聞記事を手渡して聞き込みをしたが成果はなかつた。仲間にも聞いてもらえろということ、連絡先の名刺を渡してきたけれどね。ただね……。このクライマーは凄いで！年齢を推定すれば、後期高齢者だと思ふ。ハース姿にクライミングシューズ……。胸にカラビナをいっぱい付けた夫婦なんだ。俺は想つた。人間死ぬまで青春なのだ！と。

蔵岩のてっぺんにも立つてみたが、通常なら滑落する場所ではないなあ。死体発見場所まで降りてみたが、まともに落ちたら死ぬ……。」「

と、久米田は幾つかの写真を指さしながら、いつになく饒舌に説明した。久米田の説明は続く……。

「このポイントで滑落したとは、俺には想えないけどね。十分に注意すれば、通過できるところだからね。突き落とされるか、もしくは自分の意思で……。

ここはマニアでないと来ないところだね。子ども連れのハイカーにはなじまないだろうな。下手して落ちると大変だ。俺は、そこから施福寺に降りって行った。ここに茶店があるんで、日根野三郎の写真や新聞記事を見てもらって聞き込みをしたが、憶えがないということだった。一旦、施福寺の参詣コースを降りて、駐車場付近の観光センターにも同様に聞き込みをしたが成果はなかった。

そこから、高石に渡してあるその手書きのマップどおり観光センター付近のバス駐車場から蔵岩まで目指した。このコースは、一般向きではないね。知りあいのクライマーに教えてもらったルートで蔵岩の基部までいける。日根野三郎の死体発見場所まで、こんどは下から登って見てきたよ。

その日は、まだ時間もあつたので滝畑まで行った。日根野三郎のY市自宅からすれば、こちら方面の方が便利だと想うんだが・・・。ルートの好みは人それぞれだからな・・・。滝畑周辺もあつちこつちと歩きまわった。出会う登山者や茶店の人にも同様に聞き込みをした。

夏場には、涼を求めて滝畑から沢登りをするグループも結構多いんだ。

俺は日根野の写真と新聞記事を五〇〇枚ほど印刷して、茶店の人のご協力をいただいて店先に置いてきた。それと所要所のコース標識に防水カバーをしてぶら下げてきたよ。情報提供の連絡先は、俺の携帯電話なのだけど・・・。何かあればみんなに連絡するよ。」

久米田は、自分が作成したA4サイズの情報提供を呼びかけるチラシを各人に手渡した。

「無口な久米田が長々と喋ったという驚きと行動力に感動する！——と高石は思った。

「それで、何か不審点はあつたのか？」と白鷺が質問した。

「あるね。滝畑の有料駐車場の管理人のおばさんに聞いたのだが、有料駐車場に車を止めないで、かなり上の方の林道の路肩に車が一晚置かれていたそうだ。翌日の夕方には、なかったと言っていた。大体にして、ここの山域は日帰りコースが定番で車が一晚置かれることは、まずないとのことだ。キャンプでもしていれば別だけど、この場合は有料駐車場に預けるのが本当だからね。もっともバードウォッチングを趣味にしている人は、かなり奥まで入り込んでテントの中で人の気配のしない朝方にシャッターチャンスを狙っているケースもあるんで、何とも言えないけどな・・・。」

「車種とかナンバー分かっているの？」と小百合嬢が確認した。

「何しろ車に興味の無い世代だからね。乗用の軽四という事と色しか記憶がないそうだ。色は赤だ！」

―赤色で軽四……。通勤車だな……。女？。本格的にアウトドアする奴は、車までこだわるからな。しかし、日根野の車はRV車で滝畑とは反対側の青年の家付近の駐車場だ。普通同伴者がおれば、少なくとも同じ駐車ポイントだ。それに、日根野の自宅からすれば、久米田が言うように滝畑からの登山が便利そうだが……。何で青少年の家からのルートなんだ？赤の車と関連性はあるのか？―と、高石の頭脳は回転していく。何しろ高石には体力がない。あるとするなら人と変わった見方をするということだ。

犬・猫ペットの搜索を引き合いにだしては本人に対しては失礼かもしれないが、犬・猫に成りきって、彼等彼女の心というか本能に同化して行動パターンを精査する。おかげでペット搜索については高石の右にでる探偵はいない。高石にとって犬・猫も人間も大して変わらないというのが持論である。

浮気調査の依頼の際には、調査対象者に成りきって行動パターンを考察する。ただ、膝が悪いこともあって行動力や敏捷性に欠け調査対象者に気づかれて逆に追いかけまわされることも度々ではあるが……。高石が、「成りきり探偵」という異名を持つのも、彼自身の異能のせいかもしれない。

―とにかく久しぶりの大事件の調査だ！―
と想うと高石は武者ぶるいした。

「日根野夫人が言っていたことだけど、遺体と一緒に山のザックと一眼レフカメラなどが帰ってきたのだけど、夫は山行の際にはもう一台のカメラ、コンデジカメラも持っていくのだけど、このコンデジカメラが見当たらないと言っていたわ……。それとGPS機器。」

それと夫の日根野さんは、現役の時から飲酒運転は絶対にしない主義なんだから……。山行の時は、ノンアルコールビールのキリンフリーを持参するのが常だったと言っていたわ。それなのに、発見時においても酒臭かったなんて不思議だよな。」

と小百合嬢は、視線を宙に泳がせながら言った。

―現役を離れば、足かせが外れて呑むことはありうるけどなあ。たとえ飲酒運転で捕まっても失うものは少ないということ……。―

た高石は思ったが、小百合嬢の反応が怖いので黙っていた。

「とにかく不自然な事が多いのね。PCの中の画像などを徹底的に調査してください。直前まで撮影していたと想われる一眼レフの画像もUSBにコピーしてきますからね。それと、日根野さんは、山行の記録をブログで公表していたようだよ。検索で「ひねたんの山記録」でOKと日根野夫人は言っていた。ここにも何かヒントが隠されている可能性はあるよね。」

日根野夫人は、夫の死が事故死だと信じられないとのことなので、徹底的に調査して欲しいと言っていた。結果的に、多少の恥ずかしいことも出てくるかも知れないけど、何も知らないよりましです。このままでは、成仏も出来ない・・・。

ということ、各人頑張ってね。」

高石は、すぐに白鷺のノートPCに向かい「ひねたんの山記録」で検索してみた。

「白鷺！まだ光にしていらないのかよ！遅いでこれ！」と高石はイラつきながら言った。

「すまんすまん・・・何分予算がないもので！」

「アホ言うな！白鷺家の跡取りボンボンが何をケチっているんだ！これで、よくもニュースブログをやってますなあ！」

やっこのことで、「ひねたんの山記録」がInternet Explorerに表示された。出来栄は大したもので、画像満載のブログだ。気のきいた文章も掲載されている。

「これは、ヒントの埋蔵場所だな。——と高石は思った。

「人間なんて、朝に紅顔、夕べに白骨。死して屍残すものなしとは言うけれど、人間は死んでもブログは消されずに残るのか・・・。そう思うと無常だね。」と高石の口からそのような言葉が漏れた。

ブログには、深田久弥の日本百名山の山行記録から近畿の山々、近場の山々などの記録がカテゴリー毎に掲載されていた。

「画像を分析すれば、山仲間が分かるかも？」と高石は考えた。

「ところで日根野さんは、山は一人で行くのか？」と高石は小百合嬢に質問をした。

「ほとんど単独行とのことよ。Y市役所をあんな形で止めたものだから、すっかり人間嫌いになったと日根野夫人は言っていた。病気が快癒してから人間が

変わったように山へ行き出したようね。今が青春だ！と言っていたとのことよ。」と小百合嬢は答えた。

ブログには大量の記事と画像が満載されていた。

―分析に時間が掛かるかも―

いずれにしてもコンデジカメラとGPS機器を発見しないと日根野の歩いたコースが特定できない。

「それとね。今回、警察が事故だということと事件性がないと判断しているのが、日根野夫人宛ての携帯メールなのよ。新聞報道には、記述されていないんだけど、これを一番最初に報告しておく必要があったわね。」

私にすれば、おかしいのよね。携帯メールの内容は、時系列で言うくと

午後4時32分着信

*足をくじいたので、自力で降る。

午後5時40分着信

*もう歩けないので、救助を頼む。

と言う内容なのね。」

と小百合嬢は、一人一人の顔を見ながら言った。

―疑問点は、救助を必要としているなら何故一一九番に緊急連絡しなかったのかだ？何かあれば、一一九番が常識のはずだ。それにルートだ。蔵岩で滑落となると限定されてくる。平日ならハイカーは少ないところだが、今山登りの中心は中高年だと言われている。現役と違って毎日が日曜日なので、平日にも行くだろうに……。この日は誰とも遭遇しなかったのだろうか？それに救助メール？―と高石は考えた。

「おかしいでしょ。日根野夫人は、ちょうどこの時に友人達とコンサートに言っていた時間帯で携帯の電源をOFFにしていたそうなの。このメールに気づいたのが、コンサート後のお食事会で携帯の電源をONにした時で、それまで分からなかったと言っていたわ。すぐに消防署に連絡を入れたのだけど、遭難場所の特定が出来ないことと日没後だったこともあって消防署も動きが取れなかったようなのよね。日根野夫人は、もっと早く知っていれば、こんなことにならなかったのに……。と非常に悔やんでいた。」

「日根野さんの携帯電話は、死体発見時にはあったのか？」と久米田が小百合嬢に質問をした。

「携帯電話は、ポシェットにあったそうよ。」

「今想いだしたことだが、数年前に兵庫県の氷ノ山で遭難した登山者が救助メー
ールを他県に住む娘に送信していたケースがある。山に慣れた登山者でも、大
事な時に理性を失って当たり前のことをしていない。一一〇番でも一一九番で
も至急に連絡を取ってあげれば、結果は異なったかもしれない。このケースでは、
結局ルートを外して不動滝の滝坪に遺体が浮かんでいるのが捜索で発見され
た。」と久米田は記憶を呼び起こそうと顔の筋肉をピクピクさせて言った。

「世間体もあるからね。自力プラス家族の救援ですむ場合は、表にでないか
ら・・・」と白鷺は小さい声で言った。

「とにかく調査する資料は、たくさんあるから、次回の会議までに各自の努力
で分析しておいてね。」

と小百合嬢は三人に念押しをした。

「本当に今日は、大変な邪魔が入ったもんだわ。白鷺くん！警察から今日の出
来事の取り調べ結果の連絡があれば、必ず私に報告してよね。」と小百合嬢は最
後に緋牡丹のお竜さんのようにきりりと言いまわして会議をしめた。

「ここで小百合嬢が・・・」義理と人情のしがらみに、女を賭けた流れ旅・・・
渡世に狂い咲く意地と度胸の緋牡丹一輪。人呼んで、緋牡丹お竜とは、あたし
のことでございます。」

などと仁義を切りながら、この事件を絶対に解決すると宣言したならば、往年
のファンは喝采しながら狂喜するであろう・・・

と、この駄文作者の〈蜻蛉21〉は考えた。脱線しました御免！

その日の会議は、夜九時半頃に終わった。

小百合嬢の見送りのために、白鷺の事務所を出ると銀座商店街は人通りも少な
く閑散としていた。

小百合嬢は、親の介護があると言って白鷺が用意したタクシーに乗り込み、
後ろを見ることもなく去って行った。久米田も明日の勤務があると言って、愛
用のスーパークラブを駐輪場所から引っ張り出すと小百合嬢が乗車したタクシー
を追いかけるかのように颯爽と帰って行った。

残されたかのような白鷺と高石は、お互いの顔をみながら恐怖体験の後遺症
だろうか。または、その反動だろうか。顔の筋肉が多少、弛緩しているような
感じで間の抜けた顔をしていた。

「白鷺！疲れたなあ・・・。生ビールでも呑みに行くか！」と高石は言った。

「そうだね。今日は、心底疲れましたよね。」

と言いながら大きな欠伸をした。
「欠伸が出るほどなら、白鷺はまだ元気だ！大丈夫だろう！」
と高石は、夜空に向かって聳え立つように建っている堺市役所の高層館ビルを眺めながら想った。

白鷺と高石は一旦事務所に戻った。

白鷺は、やっと落ち着きを取り戻した受付兼電話番号のおばちゃんに……。おばちゃんと言っても白鷺より若いけれど……。

「お種さん、怖かっただろうね！ご苦労さまでした。怪我がないだけ不幸中の幸いでした。」とねぎらいの言葉をかけた。

「坊っちゃん。何か危険なことに手を出してはいないですね？」
と、涙でぐしゃぐしゃになった顔を気にしながら心配そうに言った。

「思い当たることがないんだ……。」と白鷺は考えながら言った。
「裕次郎くんも、とにかく遅くまでご苦労さまでした。」と言った。

「そんなことはないです。良い勉強をさせてもらっています。今日はすこしばかり怖かったです……。」と裕次郎くんは言った。

ジャーナリスト志望のこの青年は、仕事の合間の空いた時間は自主学習をしても良い約束で雇っている形になっていた。彼は独自のテーマを持っていた。インドや中東諸国へ取材旅行に頻繁に出かける。このままいくとフリージャーナリストということになってしまいが、白鷺が出来なかったことを、この甥っ子が実践しているということに満足だった。

仕事の時間は、一応午前10時から午後三時までである。特別に残業を願うすることもあるが滅多にない。一階の奥の部屋を個室としてあてがっていた。

給与は、月二〇万円ほどである。仕事の中身から言えば破格の待遇である。

白鷺にすれば、奨学金のつもりだった。もうすぐ裕次郎くんの本が出版されるようだ。

白鷺の事務所職員は、身内で固められていた。就職氷河期で正社員になれない親戚の甥っ子、裕次郎くん。いわゆるロスジェネと言われる世代だ。構造改革という政権のために格差が拡大し、日本企業的美徳と言われた終身雇用制度もぐらつき、青年も中高年も絶望の淵に追いやられた。たとえ、裕次郎くんのように国立大学を卒業していても正社員になることが出来ない。ネットカフェ難民という言葉がテレビ・新聞で化け物のように踊っている。

白鷺が、親の残した雑居ビルの家賃収入で白鷺自身の生計や一族の前途有為

な青年を、「難民」にしないために身内で固めているのも理由があった。ある意味、税金対策と言う意味もあるが、有用な若い人材を埋没させて、無為に時間を浪費することは社会の損失だと考えて、甥っ子が正業につくまでということとで面倒を見ていた。しかし、フリージャーナリストが正業かと言えば疑問が残る。この世界でも成功するのは一握りだ。

もっとも最近では、子どものいない白鷺は、このミニコミ紙の跡継ぎとして裕次郎くんを考えていた。いい加減にヤクザな報道方針をあらためて、まっとうな地域のミニコミ紙として再出発する必要があるような気がしていた。ただし、飯が食えるかどうかは不明な世界だ。

「悪いけど、後片付けは明日にして戸締りを確認して帰ってくださいね。本当にご苦労さまでした。」と、白鷺はお種さんと裕次郎くんの二人に声をかけて高石とともに人通りの途絶えた銀座商店街に出た。

午後一〇時前だというのに商店街の中を歩いている人々の数はあまりにも少ない。酔っ払ったおじさんがふらふらと歩いていた。もっとも高石にしても人さまの行動に対して非難することが出来ない。ついこの間も、高石自身が呑み過ぎてふらふらとタクシー乗り場まで歩いていた時に、駅前の上でギターを弾いている青年がいた。ストリート・ギターパフォーマンスと聞いたら、その青年の顔が、東京でアルバイト生活している息子の姿と重なった。

高石は、想わず涙が出た。ストリート・ギターパフォーマンスをしている青年には失礼かもしれないが、高石は財布から五千円札を出してギターケースに投げ込んだ。

人通りが少なくなっても、あっちこっちとストリート・ギターパフォーマンスが行われていた。高石と白鷺は、いつもの立ち呑み屋さんの暖簾をくぐった。

女将が笑顔で、

「おかえり！今日は遅いのね……。もう閉めようかと想っていたのよ。ところで、久米田さんは、いないの？」と白鷺に聞いた。

「あいつは、バイク！俺と高石で悪かったね！」と皮肉のつもりで返事をしたが、女将は

「いや……。残念だわ。久米田さんのお顔を見れば一日の疲れなど吹っ飛んでしまうのに……。あんた達ではね……。」と直接攻撃をしてきた。

「あれえ。ちようだい。マグロ」

高石は、話を遮るように注文をした。

ビールも二杯目になってくると、体の芯がだんだんと冷えてくるような気がしてきた。熱中症対策には、やはり生ビールだ！と想う。

店の中の様子にも関心を向けられる余裕もでてくるころ、高石は、先ほどから気になっていた事が頭をもたげてきた。

斜め向かいに立っている建設労働者風オツチャンの横にいる

〈おんな〉の立ち振る舞いが、やや違和感を覚えさすのだ。

小麦色にやけた顔とは、おせいじにも言いがたい真っ黒な顔。

アイシヤドゥーは、まあまあ上出来。白いブラウスに、花柄のスカート。

しかし、女将と、奥の調理場から出てきた女将の母親とその〈おんな〉の途切れ途切れに聞こえてくる会話の中身がどうもおかしい。

女将が、〈おんな〉の胸を触って言うことには、

「このパットはかたいねえ。」

女将の母親が、〈おんな〉の化粧品を手にとって、

「これえ。いくらしたのう？」と、尋ねている。

「これは、九〇〇〇円……。」

値段を聞いてびっくりした女将は、

「わたしら……。一〇〇円化粧品しかかわへんよ。」と、これまた手に持ってびっくりしている。

どうもおかしい。高石は、隣の白鷺に小さい声で聞いてみた。

「あの〈おんな〉。ちょっと変やおもへんかあ？」

「別に……。」

と、白鷺は無表情に答える。

しかし、変だ。笑う時に、口をお隠しになる時かいまみた手には、指輪がはめられていたけど、どうもゴツゴツした感じの手だ。

ハンマーを握っている方が、よく似合う。科(しな)を作っているポーズがやはり不自然だ。これは、やっぱりおかしい。男装の麗人ならへタカラツカで興味もわくが、こいつは〈おとこ〉だ。

やっぱし、男だ。透き通って拜見できるブラジャーのラインは不自然だ。

乳房の丸みもチグハグでおかしい。弾力感が感じられない。――高石の視線は、〈おんな〉の体の一部始終を偵察する。

――お尻には、やはり柔和な優しさというものが感じられない。首筋も太い。いくらビールを飲んで酔っているとは言え、これ位はわかる。一見したら、女に見間違えられど、やっぱし〈おとこ〉だ。――

あああつつ……。アホなこと考えているから、醤油がシャツにかかっ

てしまったではないか。

その「おんな」客が帰った後、

「あの人、いつもこの店にきてるんかあ。あれえ、男やろ。やっぱし」と、いぶかしげに首をひねりながら高石が聞くと

「ああっ。そうです。いつも来ているよ。夜になると、あの格好して来るのよ。女装が趣味なんやね。高石さんと違って肉体労働してはるから、気晴らしなんやろうな。」

と、女将は言った。

「ふうふうふうん。そうか。しゃあけど。この店には、けったいな客が多いなあ。」

と、高石は呆れた顔で言うのと、女将は俺達の方を見て笑った。

「あんたらもだいぶ変わっているよ。——と、言いたげであった。

「しゃあどなあ。高石さん!!この間。あの格好で飲んで、帰る時なあ、言うてあげたんやでえ。まあ、あの通り身につけている物は、ええもんばっかしや。自転車乗って帰るのは、ええんやけど。」

軍手はめて帰ろうとするから、それだけは、ヤメテオキって言うたんや。」

六

白鷺の心に不安が充滿した。別に悪いことをした覚えはない。むしろ今回は明白な被害者だ。しかし、堺署に出向くことに何故か抵抗があった。取材等では、ドあつかましく刑事に嫌がれるほどくらいいつくのだが、いざ自分のことになると意気消沈してしまう自分自身が情けなくなってきた。

白鷺はバッグから携帯電話を取りだすと高石に電話した。こんな時には高石の助言が欲しい。

「なんや?白鷺。昨日、呑み過ぎて頭が痛い。どうした?」と高石は邪魔くさそうに言った。

「あのなあ。堺署から電話があって今日の午後一時に来いとのことだ!」

「そうか!それで・・・。」

「高石!昼から休暇を出して、俺と付き合え!」

「なんでだよ!」

「俺に最後まで言わすな!それが友情というものだろ。」

「ハハハハ・・・怖いのか?」

「正直言って怖い・・・。」

「分かった!付き合ってやるよ。その代わりこの代償は大きいぞ!」

「分かった。立ち呑み屋で呑み放題食い放題だ!」

「安いな・・・。」

そんなこんな会話が続いて、白鷺は電話を切った。不思議なもので高石と話をするだけで、先ほどの不安は霧が晴れるように消えていた。

白鷺は、高石と翁橋の一〇〇円駐車場で待ち合わせた。そして、そこから徒歩で堺署に行くことにした。

しばらく歩いて灼熱の太陽光線を直接浴びる事態に後悔してきた白鷺は、お種さんから借用した折りたたみ日傘をひろげた。高石と二人で女物の日傘に大の男が紫外線を避けて歩いているのを見ると、なんとも滑稽な姿に見えた。通りすがりの通行人が投げつける奇異な視線にも無関心でいられたのも、案外この二人の神経は図太いのもかもしれない。いや・・・鈍感なだけかも。

白鷺は通い慣れた堺署の玄関前に到着した。いつもの風景なのに、今日の風景に違和感を感じた白鷺であった。かつて若い時に翁橋で呑み過ぎて泥酔状態になったことがあった。おかげで当時は堺北署と呼ばれていた古い建物のどこか一室で、一晩お世話になった記憶があった。酔いがさめて、気がついた時に何故、自分が檻の中に入っていたのか分からなかった。

こんな想い出も古き良き青春時代への郷愁なのだろうか。

白鷺と高石は、別室に案内された。せめて応接セットの椅子に座れると想ったが、係官の言うことには、

「会議室は、あいにく全てふさがっていますので・・・。」と決まり悪そうに言った。

案内された部屋は、どうやら取調室らしい。薄暗い部屋に机が二つ。パイプ椅子が三脚の部屋だった。窓は天井近くにあって窓外には鉄格子が見えた。

この環境では、デリケートな白鷺の心は委縮してしまう。ましてや同類の高石にしても気持ちよさそうな顔をしているわけがない。

―どう見ても待遇は、被疑者扱いだ！まいったまいった！―と白鷺は想った。

狭い部屋の奥側のパイプ椅子に座るように案内された白鷺と高石。まるでこれから取り調べが始まるような緊張感が白鷺、高石の脳裏を刺激した。いざ座ってみるとこの尻の感触といい、机といい・・・なんとなくこの部屋の雰囲気はどこかで体験しているような気持ちになってきた。

何だかこの風景は見覚えがあるようなないような・・・。白鷺と高石は同時にイメージした。既視感（デジャビユー）でも無さそうだ。

そうだ、あれは四〇数年前の高校一年生の時だった。夜の闇に乗じて、白鷺

と高石は町内の電柱という電柱に謄写版印刷のポスターを張り巡らした。

白鷺の役目は、古くなった靴下にビニール袋詰の洗濯糊（割り箸で突いて一〇ヶ所ほど穴を開けておく）を入れて、すばやく電柱を磨くように糊を付ける。高石は、すばやく事前に幾枚も丸めたポスターを手早く電柱に張り付ける。その時間は、わずか数秒の仕事だった。

気分は、戦前の非合法活動家であり革命の戦士だった。

この時に、巡回パトロール中の警察官に発見され、

「こらあ！誰だ！お前達？」と

誰何されるも逃げた！逃げた！自転車で追いかけられたが、狭い路地に飛び込んだこともあって追跡から逃れることができた。

そして、久米田の家で手を洗い今日の成果を語り合った。そして、帰り際に応接室の前を通った。なんと久米田の伯父貴が久米田の父親と話し込んでいた。久米田は、この件と関係はないが伯父貴は夜の闇が暗いとはいえ、白鷺と高石の顔を憶えていた。白鷺と高石を、追いかけていた警官とは、久米田の伯父貴だった。

「あれっ・・・君たちは先ほどの・・・」
と、ニヤニヤと笑みを浮かべながら言った。

「後で、駐在所に来なさい！」
と厳しい声で言った。

久米田の親父は、

「何かあったのか？」と聞いた。

「いや、なんでもない！すこしばかり話を聞きたいことが・・・」
と言って久米田の父親には何も言わなかった。

白鷺と高石は、仕方がなくしよぼしよぼと駐在所に出頭した。

「俺も行く！」と久米田。

「お前は関係ないし・・・」と言いつつ

― 一緒に来てくれたら、追及の手も緩むかも・・・―
などと言う甘い考えが二人の頭に去来した。

駐在所に行くと久米田の伯父貴が笑みを浮かべながら待っていた。

小さな部屋に案内され、パイプ椅子に座らされた。（思いたしたぞ！この感触だ！）

そうするといきなり高石が言った。

「断固と黙秘権を行使するぞ！」と。

しかしその声には力がなく蚊がなくなような小声で、白鷺にもよく聞き取れなかった。しかし、相手には伝わったようだ。

「ヒヤヒヤッ！ヒヤヒヤッ！」と久米田の伯父貴は豪快に笑った。

そして、白鷺や久米田に牛乳の入ったコップとケーキを出した。

「お食べなさい・・・」と久米田の伯父貴は言った。

逮捕され、拷問を受けて監獄に入れられるというような事を想像していた白鷺たちはあっけらかんとした。

「今日は、何も言わないから・・・。君たちがした電柱のポスターだけど全部綺麗に剥がして元通りにしておきなさい。本官からお願いだ！」
と言うだけで、何も詰問してこなかった。

白鷺たちは、ケーキをペロっと食べ終わると早々に駐在所を後にした。

「さすが、伯父貴だな。」

と久米田は、白鷺と高石に向かって言った。

そして、白鷺と高石は久米田の手伝いもあって夜明けまでには電柱に張り付けたポスターを全て撤去した。

こうして白鷺と高石の左翼小児病的革命ごっこは終わった。

「*どうもこの駄文物語は挿話が多いね。反省します。作者」

しばらくして、私服姿の男が部屋に入ってきた。高石とさほど変わらない出で立ちだ。くたびれた白のポロシャツ姿で、折り目が消えかかったズボン。どうみても風采があがらない中肉中背の中年男という印象を感じさせた。

「どうもご苦労さまです。被害届の方は、後で出していただくとして、白鷺さんに単刀直入にお聴きいたしますが、今回の襲撃について心当たりはありませんかね？」

と、物言いは丁寧だが何かを含んだ調子で白鷺に質問をした。

「心当たりといっても、別に・・・ですが。」

「そうですね。実は、あの三人の暴漢を昨夜から取り調べているんですが、おかしなことに、この三人は事件当日までお互いに面識がないのですよね。問い詰めて聞けば、何とネットで募集されて集まった連中というのが分かりました。

最近新聞でも報道されてご存じでしょうが、いわゆる闇ネットと言われている例のやつです。」

「なんですか？それ？」
と高石は聞いた。

「必殺仕事人とか仕置人とか言われているやつですね。したがって、彼らの所持品を検査したのですが、白鷺さん！あなたの写真と事務所の住所・氏名、事務所の見取り図などのメモを持っていました。彼らは、極めて協力的で何でも素直に答えてくれます。よほど、怖かったようですね。私からすれば、いくら

正当防衛権の行使でも、いささか過剰防衛のような気がいたしますが、相手が久米田さんではね。」

と、この刑事はいかにも面白おかしそうに言った。

「久米田のことをご存じなんですか？」

と白鷺は、余談だが聞いてみた。

「この業界で知らなかったら、もぐりですよ。大阪府警！伝説の警官ですからね。いやはや実は私もファンの一人です。熱烈に尊敬している次第です。彼は、任務中でも本物の銃は持たずに勤務していますよ。俺は、人殺しの道具は持たない！と言ってね。ただね・・・彼の全身が武器ですから要らないかも知れませんが・・・。射撃は百発百中！柔道・剣道・合気道の段は低いですが、実力は、おそらく大阪府警ではNo.1でしょうね。」

おっと・・・と。本題からそれちゃった・・・。

ということ、背後関係は不明なんですよね。聞くところによれば、白鷺さんとは例の蔵岩事件を熱心に取り上げているようですが、Y市のスキャンダルは別として、あれは事件性がないということと処理されているようです。何ゆえ蒸し返すようなことをしているのか、私には納得できませんが、何か掴んでいらしゃるんですか？」

と、いかにも不可思議な表情をしながら聞いて来た。

「とにかく、どうやら久米田さんが噛んでいるということ、我が署も他の所轄のことなので、越権的な行動は出来ないのですが、個人的には協力したいという気持ちがあります。署内の若い警官なんかは、伝説の警官と話が出来た！と言って、久米田さんの携帯番号を登録した自分の携帯の電話帳を同僚に見せびらかしている始末ですよ。」

「・・・」

—久米田という人間は、とてつもなく大きな存在なのだ！俺たちは、すごいこととは分かっていたが、これほどとは・・・。—

と白鷺と高石は痛感した。それゆえの絶句であった。

「白鷺さん！本当に思い当たるところはないですか？たとえば、言いにくいことですが、女性関係でトラブルを抱えているとか？人からお金を借りて返していないとか？ですが・・・」

—女性関係？有るといえばあるし・・・無いと言えばウソのような・・・。—

白鷺は、胸に手を当てて考えてみた。

白鷺の家庭は、外から見る限り平和な家庭だった。子どもはいないが夫婦円満とのことだ。ただ少しばかり白鷺の女癖が悪いことは否めない。時々、平和

な夫婦間に波風が立つこともあると仄聞していた。

「こいつ！ひよっとすると訳のわからない女と・・・」

と高石はさもありなんと思った。こいつの女性関係で、今回の事件が起こり、小百合嬢を危険な目に遭わしたことが事実であれば、おそらく恐ろしいことが待っている。

「久米田は黙ってはいないな！ひゃっ・・・恐ろしい！」

と高石は、久米田の仁王像のように激怒した顔を想像して身震いした。

「まあ・・・今日は、これぐらいにしてですね。何か気がつけばご連絡してください。」と刑事はいいっつ尻ポケットから薄い財布を取り出し、中からくたびれた名刺一枚を白鷺に手渡した。まさに手垢で汚れた名刺で使い回しているような感じだった。名刺には、「湖論暮啓司」と印刷されていた。

白鷺と高石は、その名刺の名前を見て

「マジかよ・・・ありえないだろう！」

と二人はお互いの顔を見つめながら想った。

白鷺と高石は、灼熱の太陽光線が降り注ぐ署外に出た。熱い大気が情け容赦なく二人を包みこむ。

白鷺は何か思い当たるころがあるのか考え込んでいた。身から出た錆かもしれないが、高石はなんだか白鷺の気持ち进行い憚って気を紛らわすように言った。

「白鷺！約束だ。ビール！ビール！」

お種さんから借りた折りたたみ日傘を上げた白鷺は、元氣を取り戻すように、あたかも自己催眠をかけるかのように・・・

「行こう！行こう！白昼からではあるが、むしように呑みたい気分だ！」
と言って近くの立ち呑み処に向かって歩いた。

九月に入っても真夏のような暑さが続いていた。西日本や東日本は高気圧圏内で、気温は、体温ほどの温度であり、「残暑」という表現を超える強烈な暑さだ。

確かに地球がおかしくなっていると思う。この異常な暑さは、高齢者を直撃していた。熱中症で倒れるものも多く、死亡者も多かった。

それでも、地面に映る影はだんだん長くなり、少しずつ小さな秋が感じられるようになってきた。

日根野三郎が、蔵岩で滑落してから一ヶ月を経過していた。

高石は、小百合嬢からの渡されたUSBに入っているファイルを一つ一つ丁寧

に中身を確認する作業に没頭していた。

暗号化されたワード文書については、未だ解除されていないが日根野三郎のブログや山行記、撮影画像から、高石は、日根野三郎自身に成りきって想像力を働かした。パスワード解除のために、小百合嬢は家族や本人の生年月日などの情報を記述したワード文書もUSBにあった。

この作業の中で、日根野三郎自身に成りきるためには、やはり現場に行つて確認することが必要だと痛切に感じた。

そのために高石は、職場の青島青年に相談した。青島青年は、現地調査に同行すると言う。

「係長！現地調査となると低山でも最小の山道具を揃える必要がありますよ。今日付き合いますからモンベルかヒマラヤに行きましようか？」

と青島青年は、探偵業務に関われるということで張り切っていた。

青島青年の指示のとおり山道具を購入すると、結構物入りだった。膝が弱いと言うことでサポータータイツ、山靴、ザック、ゴアの合羽・・・などを揃えると、すっかり山男気分になってくる。かつて、耐寒登山で中学生の時に金剛山に登った記憶はあるが、それ以来山など行つたことがない高石だった。久米田から渡された地図を青島に見せた。

「なるほどね。このコースは一般のハイカーは行かないルートですね。相当のマニアでないと行かないルートですね。巖岩ですか。クライマーにとっては有名なところですね。ここは・・・」

そのような会話をしているとミサキ嬢が聞き耳を立てていたのか。

「係長！私も同行していいですか？」

と、ミサキ嬢が拒否を許さない語調で言った。

「分かりました。同行をお願いいたします。では、今週の土曜日ということ・・・。」

ミサキ嬢の満足感で満たされた視線は、青島青年の方にあった。

「蛇が出てきても知らないよ・・・」と青島青年はミサキ嬢に言った。

「蛇！へび！蛇は嫌いじゃ！」と高石は一オクターブ高い声で叫んだ。

「係長！大丈夫です。私が先頭に立ちますので。」と青島青年。

「大体、二番手が危ないという話を聞いたことが・・・。」

「係長！二番手は、私が！」とミサキ嬢。

そんなこんなで現地調査となった。白鷺からの連絡もあってジャーナリスト志望の裕次郎君も同行することになった。

「何か、伯父さんのやっていることに協力したい！」と言うことらしい。

九月四日の土曜日。「青少年の家」付近の駐車場で落ち合うことになった。高石は、自分の運転するノアの助手席に青島青年。後部座席には、ミサキ嬢を乗せて槇尾山を目指した。ミサキ嬢は、すっかりハイキング気分のようなだった。後部座席で鼻歌を歌いだした。

外環状線からカーナビの指示どおり車を走らせた。バス停留所を見て左折していくが、狭い道だ。しばらく走らせると左側に釣り堀があった。そして、しばらく行くとダム工事でもしているのか狭い道の左右の山の斜面の樹木が伐採され、大昔に施福寺にお参りした時の印象とは大きく異なっていた。

「青少年の家」は右手前方に現れ、しばらく行くと左側に駐車場入り口の坂道があった。

すでに裕次郎君がRV車で到着していた。完璧な山スタイルであった。足元に、大きなザックが転がっていた。さすが、インドや中東に出かける人間の姿は完全無欠の装備であった。一方、高石の姿は、これまたモンベルで揃えた山姿で、新品の香りがするかのようであった。ひよっとするとまだ値札が付いているかもしれない。

高石が驚いたのは、ミサキ嬢の姿だった。噂では聞いていたが「山ガール」ということで若い女の子の間でも登山がブームになっているとのこと。

まさに「山ガール」だった。高石は、しばし眼のやり場に困った。ピチピチのタイツに布きれのようなスカート……。

高石は、今回の調査参加者を前に昭文社の地図を広げて、今回の目的を説明しだした。

「この駐車場が日根野三郎さんの車が発見されたところです。日根野三郎さんが、どのルートで蔵岩に至ったのか！ということが重要です。当日の目撃者情報を絞るためです。そして、彼は日根野夫人に救助メールを送信しています。

一一九番や一一〇番にも連絡せずに妻にメールを送信しています。通常このような低山では、多少の捻挫ぐらいなら自力で下山できるような気がします。蔵岩から滑落して死んだことは、間違いがない事実ですが、どのポイントで怪我をしたのか？何故？蔵岩なのか？ルートの上で言えば、槇尾山山頂から蔵岩に至る途中で捻挫したと推測できますが、これらを実地に検分して確かめたいと思っています。それと、事件があつて一ヶ月も経過しているので現場の保存というのは期待できませんし、警察も単なる事故として処理しています。日根野夫人によれば、コンデジカメラとGPS機器が見当たらないとのこと。遺体発見場所にも当然行きますが、周辺の捜索もお願いしたいと思います。

いずれにしても、不審な点もあることから我々は事件性ありということ、日根野三郎さんの無念の死の真実を明らかにしたいと考えています。」

高石は少々齒切れの悪い説明だと想いながら概略を喋った。エアコンの利いた快適な車内から外に出たとたんに外気のあまりの暑さでダメージを受けたようだ。

青島青年は、

「係長！例の地図どおり行ってもいいですが、まず八ヶ丸山の展望台へ行くコースを取ります。途中で左手の方向にはつきりと蔵岩・仏岩などが見えますので・・・」

と言って先頭を歩きだした。

高石は、ミサキ嬢の後ろだがミサキ嬢は裕次郎君が気になったのか、必要以上振り返って高石と話をする。そして、我慢が出来なくなったのか

「係長！まだ紹介してもらってませんが・・・。」とミサキ嬢が言った。

「そうそう・・・すまんね。俺の高校生時代の友人の甥っこで、名前は裕次郎くん。ジャーナリスト志望で友人のミニコミ紙を発行している会社に勤めています。」

「ミサキと言います。この係長と同じ職場で・・・。」とミサキ嬢は、今まで聞いたことがない柔らかい声で言った。

「こちらこそ！よろしくお願いしますね！」

「ハハハ！」

高石は、「青少年の家」までのわずかな距離を歩くだけで、全身から汗が噴き出してきたのを感じた。朝とはいえずに大気は熱く、直射日光が情け容赦なく降り注ぐ。燦々と言う言葉はあるが、それ以上の表現の太陽光線が九月だと言うのに矢のごとく天から撃ち込まれてきた。

日陰と日向では大違いの熱気だった。高石は、出来るだけ日陰を探して歩いたが段々と後悔してきた。しばらく登ると、青島青年が振り返って

「係長！あれが蔵岩です。あの岩肌がむきだしになっている崖の様な奴です。その下側が仏岩ですね。」

「すごいね！ありゃ・・・落ちたら死ぬな！そうすると右側の小高いところが槇尾山頂上かな？」

「そうですね。山頂は標高六〇一mですが、そこから蔵岩に降りるのは急降下ですね。」

「青島！よく知っているな！」

「係長！ぼくも山登りは好きな方なので、ちよくちよく行きますよ。」と青島青年はミサキ嬢の方に視線を移しながら言った。

当のミサキ嬢は、今までのタイプと違う裕次郎くんと対面してから乙女心に化学反応があったのか裕次郎くんと仲良く談笑していた。いつのまにか歩く順

番は入れ替わり、高石は二番手の位置にあった。

当然のことながら、三番手と四番手は並行しながら歩いていた。

―色気づいたかミサキ嬢！男は、青島だけではないぞ！ほんまにイケメンに弱いミサキ嬢め！―

必死の想いで、体を前へ前へと運ぶ。蜜柑の樹木の香りがしてきた。しばらくすると、八ヶ丸山の芝生広場に着いた。ここで小休憩を取ると青島青年は言った。高石は、右手にある東屋のベンチでペットボトルのお茶を飲んだ。

「いいところだね・・・。」と高石。

「そうでしょう！さあ行きましょうか！」と青島青年。

ここからがまた大変だった。階段を登り、ローラー滑り台を左手に見ながらさらに少し歩くと展望台が見えた。そこも階段だ。青息吐息・・・桃色吐息だった。

展望台へつながるコンクリート階段をかじりつくように登った高石は、周囲の風景を見て感動した。大阪湾や六甲山が綺麗に見えた。

「係長！あれが先ほどの蔵岩です。芝生広場のあそこに倉庫がありますね。その登山口から登って五ツ辻に出ます。最初は急登ですが、そこを過ぎれば気分はハイキングですよ。五ツ辻の分岐で、施福寺方面へ行きます。岩湧山が綺麗に見えるところがあります。ここで、結構皆さん休憩ポイントにしているところですが、下を見ればストーンと落ちている断崖ですね。ここから少し行ったら途中のポイントで左側の道を登ります。蔵岩への案内標識があったりなかったりで見落としてしまうところなんです。私は何度も行ってますので分かりません。このポイントから少し歩いて横尾山山頂に出て、登山路を急降下して蔵岩となります。」と、青島青年は彼方の山々に向けて指を差しながらルート説明をした。

「近くに思えるが、結構遠いなあ・・・。」

「係長！今回はそのルートは行きません。一旦「青少年の家」に戻ります。そこから、少し施福寺の方に向かって歩いて、例の手書きマップのルートに登ります。蔵岩へのルートですね。蔵岩周辺を探索した後、係長には十分に山歩きを堪能してもらいます。そうでないと意味がありませんし推理するだけの想像力も湧いてこないと思いますので・・・。蔵岩から山頂、山頂から五ツ辻、五ツ辻から根来谷に降りて、駐車ポイントへ帰ってきます。」

青島青年は、高石の体力を計算していたようだ。とにかく中学校時代の耐寒登山以来のお山である。BMIでは、「肥満度1」のメタボだ。心肺機能は限界に達していた。しかし、「成りきり探偵」としては、少なくとも日根野三郎が歩いたコースは確認する必要があると想った。

—ありがとうね。ご配慮していただいて……。それでも何だかキツそう。—

八ヶ丸山展望台から横尾山の山域を眺めた高石は、低山なれど魅力に溢れるこの山域が好きになった。いきなり北アルプスとか南アルプスだと言われると腰が引けるが、この程度の山なら訓練すればなじみのある山となれるかも知れないと想った。

日根野三郎は、日本全国の百名山を登ったという。あと少しで完全制覇というところで無念な死を遂げた。遠征が出来ない時に、日根野三郎は近場の山で体を鍛えていたのだろう。「成りきり探偵」としては、登山も経験しないと日根野三郎の心と同化できない。今日は、青島青年の言う通りにおこうと想った。

登って来た道を通って高石達は下山することにした。ミサキ嬢は、先ほどのローラー滑り台に目をつけていたのか挑戦したいと駄々をこねるように言った。—遊びモードだな、こりゃ……。—と高石は仕方なく同意した。

ミサキ嬢は、裕次郎君の手を引っ張りローラー滑り台に向かって歩いた。結構長い滑り台だ。

—こりゃ面白そうだな—と高石は久しぶりに童心にかえった。

「俺も滑るわ!」と高石。

「ええっ!係長も!」と驚く青島青年。

一番手は、ミサキ嬢で颯爽と滑り落ちていく。裕次郎君が続く。高石も挑戦した。結構勢いもあってカーブの時はスピードが出た。高石は奇声を発して滑り落ちて行く。

「面白かった。しかし、ケツが痛いぞ!こりゃ……。」と高石は、ローラー滑り台を見上げながら言った。

ミサキ嬢は裕次郎君とすっかり意気投合状態となった。

—あはん……。こうして新しい恋が始まるのか。—

裕次郎君もまんざらでも無さそうで、ミサキ嬢の言いなりになっていた。

下山には、それほどの時間もかからなかった。高石は、念のため「青少年の家」を訪ねた。思ったとおりだった。玄関先には、久米田が作成した「お尋ねポスター」が貼ってあった。高石は、玄関先で忙しく立ち働いているスタッフに挨拶をして聞いてみた。

「ああ……。すいませんね。お忙しいところ。このポスターのことで調査している者なんです。その後何か情報がありましたか?」と、高石は丁寧に質問してみた。

「いや……。ね。前の人にも説明しましたが、ないですね。」とスタッフは申し訳なさそうに言った。

「何かあれば、またのご連絡をお願いしますね。」と言って「青少年の家」を後にした。

相も変わらずミサキ嬢は、裕次郎さんと楽しく話し込んでいた。それを眺めている青島青年は、何だかほっとした表情であった。

―なるほど。青島は、ミサキ嬢に取りつかれていたのか。そうだな……。X市の職員の中で裕次郎くんのような個性を持っている男なんていないよな。これは今後の展開が楽しみだ。―

と高石は、心の中で微笑んだ。

ノアを置いてある駐車場前の道路を施福寺に向けて歩いた。しばらく歩くと綺麗な公衆トイレがあった。ここにも久米田作成のポスターが掲示されていた。無理をすれば一〇台ぐらい駐車できるだろうか。

「係長！あそこですね。ここから、根来谷コースということで五ツ辻に行く登山路です。五ツ辻では、右に行けば八ヶ丸山へ行けます。左に行けば施福寺方面ですね。自己責任の世界と言うことで、清水（きよず）の滝へも行けます。

日根野さんは、「青少年の家」付近の駐車場に車を止めたそうですが、係長も歩いてお分かりのように、「青少年の家」からか、もしくはここ「根来谷」から登った可能性がありますね。」

と青島青年は昭文社の地図を見ながら言った。

「なるほどね。周回して、駐車ポイントまで帰ってこれるんだ。その時の体力や時間的余裕でコースを選択できるんだな。」

「そうなんですよね。係長の後ろにある山は「焼山」と言って三角点もあるお山です。僕は、冬場で雨降ってましたけど「青少年の家」から八ヶ丸山、五ツ辻、蔵岩、施福寺、兜卒岳、焼山、施福寺。施福寺から参詣コースを下って駐車ポイントまで歩きましたね。結構面白かったですね。」

「なるほどね……。」

「滝畑からのコースもありますね。横尾山はダイヤモンドトレールの最終地点ということもあって人気もあるようです。ただね。滝畑は、岩湧山に行くにしても横尾山に行くにしても登山口の駐車場が有料なので、避ける登山者も多いと聞いています。和泉市側のこちらでは、無料駐車場が完備されているので人気があるようです。」

「なるほど……。」

「さて、例のコースを行きましようか！」

と青島青年は、ミサキ嬢と裕次郎くんに合図を送って先頭を歩き始めた。ミサキ嬢は、すっかりと裕次郎くんのとりこになったようだ。

―女と言うのはわからん―

と高石は想った。裕次郎くんもご機嫌よくミサキ嬢のお相手をしている。

青島青年は、手書き地図を見ながら参詣バス用の駐車場に入って行った。そして、駐車場奥の登山路入口から登って行った。

少し登って行くと高石の心肺機能は徐々に慣れてきたようだ。一番手は青島青年、二番手は高石、三番四番のミサキ嬢と裕次郎君は並行だった。

―すっかりデート気分だな。ミサキ嬢は・・・。―
と高石は想った。

くねくねとした登山道を登っていく高石の歩き方もリズムがついてきた。これほど体を動かすのは久しぶりだ。サポータータイツは窮屈だが、テーピング効果のお陰で膝の調子も問題はなさそうだ。樹林の中までは、強烈な太陽光線は入ってこなかった。少しばかりの風が高石の顔を撫でていく。しばらく行くと「お堂」らしきものが見えてきた。

「係長！参考に仏岩を見にいきます？」

「行く行く」

青島青年は、背が高いこともあって歩幅も広い。しっかりした足取りだ。その後を肥満度Ⅰの高石がついて行くわけだが、どうしても遅れ気味になった。しばらく行くと、岩場が見えた。岩場に怖々立ってみると、目の前に三〇メートル以上はあるだろうか。凄い絶壁があった。ちょうどこのポイントは、前の絶壁を眺めるテラスみたいなどころだと高石は想った。

「係長！あれが仏岩です。あれですね！」

「凄いね。あれを登ったり降りたりするわけ？」

「係長！懸垂下降ぐらいいは体験したらどうですか！度胸がつきますよ！」と青島青年が笑顔で言った。

「高石さん！何ならやってみます。」とそれまで高石や青島青年に対しては、無口だった裕次郎君が言った。

「へ・・・？」

裕次郎君は、大きなザックを肩から外し中からザイルを取り出し始めた。

「ちよい待て！俺はそんな気はない。」と高石。

「面白そう！ミサキ！挑戦したい！！」と、どこからこんな声が出るのか不思議だと思われるような甘い声でミサキ嬢は、裕次郎君に言った。

「今日はそんな計画はない！予定外の行動はダメ・・・。」と高石は言いかけたが、ミサキ嬢の視線は厳しくそれ以上言うものならば「殺して喰ってしまうぞ！〜」というような雰囲気であった。

「係長はお年やから止めといてもいいですよ。あの絶壁は無理ですので、ここテラスのところなら落ちても死にませぬね。」と青島青年まで言い出した。

「アホ言うな！ここも結構高いぞ！」と、高石は怖々崖下を覗き込んだ。

「人を年寄り扱いしやがって！やってやる。」と高石は言ってから後悔した。

「では、一番手は係長ということで・・・。」と青島青年は裕次郎君に目で合図を送った。

「こいつら！事前につるんでいたな。初対面だと想っていたが・・・。」

裕次郎君は、大きなザックの中から高石が初めて見る様々な道具を取り出して自分の体に装着した。

「まずは、僕がお手本を見せます。」と言ってするすると降りて行った。岩壁を蹴ってポンと落ちていく。裕次郎君にすれば、物足りない感じの高さのようだ。

崖下から這い上がってきた裕次郎君は、次に高石の体に色々なものを装着していく。高石は手渡された手袋をはめた。高石の体に何本ものザイルが巻かれた。

「高石さん。念のため確保のザイルもしていますので、墜落して死ぬようなことはありません。」と裕次郎君が言った。

高石にすれば細いと思われるザイルを握りしめながら覚悟を決めた。8の字のような輪っばを見ながら更に覚悟を決めた。

恐る恐る崖上の端に立った。後ろ向きで降りていくわけだが、膝が笑っていた。

「ここで逃げれば男がすたる。——と想った高石は、岩肌の感触を足裏で感じながらゆっくりと降りて行った。

裕次郎君は、しっかりと確保のザイルを握り高石の動きに合わせて調節しているようだ。緊張のあまり周囲の風景を眺める余裕はなかったが、横を見ると青島青年が、確保のザイルなしに岩場に張り付くようにしながらカメラのレンズを高石に向けていた。

「係長！チーズチーズ！」と青島青年が言った。高石は、無理に笑顔をつくり青島青年に向けてピースした。

「はぁ・・・い！そこで飛んでくださーい！気持ちいいですよ！」と頭の上から裕次郎君の声が聞こえる。高石は、崖下を見た。不思議と怖い感じはしなかった。意を決した高石は、飛んだ！高度差にすればわずかなものだが、高石の体は宙を飛んだ。

「これが懸垂下降か！気持ちいいぞ！！——と高石は感動した。無事に崖下に着地した高石は、崖上を見上げた。裕次郎君とミサキ嬢、そして青島青年が笑顔で手を叩いていた。祝福の拍手だった。

「次はわたるゝし！」とミサキ嬢が続いた。さすが、若者の運動能力は違った。「わたし、これをやってみたかったんだ。」とミサキ嬢は、まるで子どものような笑みを浮かべて崖下から這い上がってきた。さすが、この時のミサキ嬢は、可愛いと想った高石であった。

仏岩での訓練が終わり蔵岩の基部に向けて高石たちは歩き始めた。爽快な顔をした高石が歩いていった。

「これが山の魅力というものなのか？登山道を歩くのもいい気持ちだ。森林浴だな。それに岩登りも面白そうだ。」と高石にすれば未知だった世界が眼前に展開されてきた。何とも言えない新鮮な気分だ。

分岐があったところで、青島青年が言った。

「こちらへ行くコースは奥の院道ですね。この道もいい雰囲気の道ですよ。」

しばらく行くとまた分岐があった。青島青年は、久米田が書いた手書きのマップを見ながら

「こっちですね。どちらも蔵岩には行けるので・・・。」と言って歩きだした。山の斜面を巻くような平坦な道だった。そんな青島青年が、両手を拡げて立ち止まった。

「なんだなんだ？」と高石。

「あそこです。」

「あそこってなんだ？」

なんと登山道の路肩に蛇がとぐろを巻いて、こちらを見ていた。蛇の眼と高石の眼があった。

「ウギャッ！」と高石が悲鳴にも似た声をあげた。

「蛇は嫌いじゃっ！」と高石は二歩ほど後ずさりした。

「ありゃ！mamシではないか！mamシは大胆不敵で逃げないと聞けど。」と高石。最後尾にいた裕次郎君は、前に出てきてmamシに近寄って行った。ストックを伸ばして、mamシを突いた。mamシは逃げようともせず、居すわったままだ。

裕次郎君は、ストックを使ってmamシを拾い上げ思いきりスイングした。mamシは、空高く飛んで行った。

「これで大丈夫でしょう。高石さん！」と裕次郎君が言った。胸をなでおろす高石であったが気持ちが悪くなってきた。

ミサキ嬢は、裕次郎君の雄姿を見て感動していた。これ以降、高石は足元の根っこを見るたびに蛇と錯覚しビビりまくった。

沢を渡り、急な登りに取りかかって、しばらくすると斜面を巻くような平坦

な道があった。

「係長！もうすぐですね。この涸沢を越えると蔵岩の基部に到着するはずですよ。」と、青島青年は、マムシと遭遇した恐怖が癒えず顔がまだ青白い高石に言った。

蔵岩の基部と言われるところに到着した。地図がなければ見落としてしまうところだ。登山道のルートを外れ涸沢を登って行くという注意事項が無ければ通り過ぎてしまうだろう。ごつごつとした岩石を踏みつけながら一歩一歩確かめながら登った。すでに何人かのクライマーが岩登りの練習をしていた。

高石にすれば、こんな危険なところをすいすいと登ったり降ったりしていること自体が信じられないことだった。

青島青年の顔を見ると、やってみませんか！というような感じである。高石は、青島青年を無視するように蔵岩の頂を見た。そこには、すでに岩に取り付いているクライマーの姿があった。

「よくやるよ！——と高石は思った。

高所恐怖症とは言わないが、先ほどの懸垂下降の経験で充分に話のネタになると想った高石である。

「係長！ここでよく消防とか自衛隊の隊員たちが訓練しているところなんですよ。」と青島青年は説明した。

高石は、青島青年を見た。いかにもやりたくてムズムズしているような印象を受けた。

「皆さん。今日は現地探索が目的ですので高石さんの意向が一番だと思われませう。岩登りの訓練は、僕が別の機会にセットしますので・・・」
と、裕次郎君はミサキ嬢と青島青年に言った。

何しろ裕次郎君の言うことだ。ミサキ嬢はうんうんと頷いて完全に納得した。青島青年も裕次郎君の一言で、本来の自分である現地調査に気づいたようだ。

「さすが裕次郎君。白鷺と同じ血が流れていると思われないほどの説得力！——と高石は思った。

ところで、日根野三郎はどこで発見されたのだ。久米田の地図によるとこの蔵岩の基部の少し上の所らしい。新聞報道では、四〇mほど落ちたと書いてあったが、基部から頂を見ると結構高くて遠い気がする。そうなるかと、日根野三郎はあの蔵岩の頂から滑落して、ボールのように転げ落ちてきたのか。

日根野三郎は、滑落して即死ではなく運よくどこかの木に引っ掛かって落ちるところまで落ちて、瀕死の状態で基部の下まで行こうと考えて降りて行く途中で絶命したのか。

—どちらにしても、あそこから落ちれば死ぬな！—

「裕次君！やはり少し登ってみよう。サポートを頼む。」と高石は決断した。しかし、目の前の岩壁をみるとやはり自信はなかったが……。

裕次郎君は、すいすいと登っていく。猿山のサルだと高石は思った。

「高石さん！ここで確保しますからザイルを結びつけて上がってきて下さい。」と裕次郎君は巖の基部下の踊り場のようなところにいる高石に声を飛ばした。上を見ると、高い位置に笑みを浮かべている裕次郎君がいた。

—あんな所に行けるかな？—

高石は、三点確保で用心深く登って行った。しかし、途中で怖くなって岩にしがみついた状態で動けなくなつた。いくらザイルで確保されていると言っても怖いものは怖い。岩を掴んでいる両手が疲れて震えてきた。肥満度Ⅰの体重を支えている膝が猛烈に笑いだした。

「だめだ！恐怖だ！やめとく！」と高石。裕次郎君にしっかりと確保してもらつて高石は、お尻も使つた五点確保で降りてきた。

—これでは猿回しのサル以下ではないか！—と高石は何とも言えない恥辱を感じた。何とか踊り場のような平坦な地面に無事降りてこられた高石は、地面に二本足で立っていることの幸福を感じた。

青島青年とミサキ嬢を見ると、

—自分だけ楽しんで……—というような羨望の眼差しだった。

高石は、この二人を敵に回すと明日からの仕事にも影響すると思った。

「分かりました。君たちも訓練して下さい。私は、ここで煙草を吸って待機しておきますので、ごゆっくり……。」と高石は懇ろに言った。

「わくわくい！」とミサキ嬢。さっそく高石からザイルを奪い取ると、ハーネスと言われるものを付けて岩壁と格闘した。確保しているのは、信頼感一〇〇%の裕次郎君なので怖いものなしだった。

—裕次郎君と私、運命の赤いザイルで結ばれている。—と想つたミサキ嬢はやや頬を紅めながら、岩の突起ポイントを見事に利用してどんどん高度を稼いで行つた。

—若さと言うのはすごいなあ……—と高石は想つた。

「係長！こっち！こっち！」と声を上げるので、視線を向けると見上げるような位置にミサキ嬢は居た。

—そりゃ・俺も行きたいけど怖い……—

—続けて青島青年もチャレンジ！—

—今日は、一体何の日だ？岩登りの訓練日？—と高石は想つた。

—一時間ほどの訓練（？）が終わった。お陰様でマイルドセブン8を五本も吸

った。紫煙を燻らせながら、高石は日根野三郎のことを考え続けた。しかし、何もイメージされなかった。そんな時に、ミサキ嬢と青島青年が裕次郎君におねだりしている声が聞こえてきた。

「次回は、あそこで岩登りや懸垂下降をやってみたい。ご指導お願いします！」と巖岩の頂を指さしながら言っていた。

「はいはい！そこまで！そこまで！撤退します。」と高石は切り上げ宣言をした。

青島青年は再び先頭に立って、一般道に戻った。そして、巖岩の頂に向けて歩きだした。結構な登りだった。樹林の間を抜けると岩場があった。頂の樹林に括りつけられた久米田のポスターが風に揺れていた。情報提供とコンデジカメラ・GPS機器が発見された場合の連絡先を表示したものだ。すでにこの頂にも中高年のクライマーが数人いた。何本ものザイルが崖下に垂らされていた。このような場所に不慣れな高石は緊張した。右側の切れた断崖を怖々覗き込んだ。足が震えてきた。

一方、ミサキ嬢は喜色満面の表情をしていた。さわやかな風がミサキ嬢の黒髪をなでて行った。大阪湾や六甲山が見えた。

しばらくすると高石も慣れてきたのか狭い空間ではあるが、あっちこつちと歩けるようになった。施福寺が見えた。岩湧山も見えた。先ほどの八ヶ丸山が見えた。

「ここから落ちたのか。日根野三郎……確かに怖いところだが、久米田が言うように、用心すれば落ちないよな……。」

「係長！少し戻って下に行きましょうか。急なところなので、少々危険ですけど……。」と青島青年。

「そうだね。行こうか。」

先ほどの恐怖の岩登りや懸垂下降の訓練のお陰だろうか。急な降りだが恐怖感はなかった。用心しながら降りていった。

急斜面を降りていくものの頻繁に滑るため途中の所から巖岩の頂を眺めた。樹木が視界を遮ってよく見えない。先ほどの基部からすれば、上の位置になるが、ここから降りて行くことに躊躇した。いくら裕次郎君がいたとしても、高石自身の身体能力からすれば危険だと想った。

樹木にしがみついて、かろうじて立っている高石にすれば、これが限界だと痛感した。

「どうやらあの辺の場所ですね。遺体発見場所は……。」と青島青年。

「コンデジカメラの発見というのは難しいね。その辺に落ちてれば、遺体発見時に収集されているだろうしね。これほどのクライマーが岩に張り付いていた

ら、たまたまどこかに引っかかっていたとしても誰か見つけるよな……。」

高石たちは、再び蔵岩の頂に戻った。もう怖くはなかった。むしろ清々しい気分になってきた。

「ここからの眺望はいいな！ここでビールが呑めたら最高だね！」と高石は思った。

成りきり探偵としての高石の頭脳が回転する。事実の積み重ねで推理しているのではなく高石の場合は、自分自身の感性を信じていた。日根野三郎という存在と同化していく……。

「日根野三郎よ！ここで何があったんだ？」と高石は独りごちた。

「係長！この蔵岩からあの山に行きますよ！」と青島青年が言った。

「あれが、山頂部分ですか？」

「そうですね。」と言った青島青年は、先頭に立って歩き出した。

「ここを降りますが、注意してくださいね。用心しないと落ちますよ。」と青島青年は言った。確かに嫌な箇所だ。

高石は用心深く足を進めた。露岩を掴み、へっぴり腰で降った。わずかな高さだが用心しないと危ない。久米田がアルコール抜きで行け！と言った意味が分かった。

山頂までは急登だった。木々を掴み登った。降りだと滑って転倒する可能性があった。日根野三郎は、ここを降ったのだろう。そして、あの蔵岩で滑落した。

山頂には、標識があった。標高六〇一mとなっていた。捨身ヶ岳という標識もあった。青島青年は、高石の体力を気遣って、小休憩の合図をした。高石はザックからペットボトルを取り出して水分補給をした。相も変わらずミサキ嬢は、裕次郎君にペタリと張り付き飴玉を手渡している。

「すっかり世話女房の雰囲気だな……。——と高石は思った。一方の青島青年は、先輩にあたるミサキ嬢と裕次郎君を和やかな視線で見守っていた。

今回の山行が決まった時に、青島は詳細な打ち合わせをしたかったので高石の携帯に電話をした。高石の携帯電話がつかないこともあって、おそらく白鷺事務所にお邪魔しているのではないかと想い事務所に電話をした。その時、電話口に出てきたのが裕次郎君だった。その場に高石がいないこともあって伝言をお願いすることになった。そこで青島青年と裕次郎君は、意気投合したのだ。裕次郎君が岩登りを趣味にしていることもあって、青島は仏岩での小訓練を提案した。高石が少しでも山慣れするために、少々過激なことも必要ではないかという考えである。

青島にすれば、ミサキ嬢の呪縛から逃れたかった。電話での会話であったが、裕次郎君の誠実さが伝わっていた。後は、ミサキ嬢がどう判断するかであった。

どうやら成功したようだ。X市役所の職員の中では、年頃の男は少ない。年齢構成はイビツで、老壮青の年代区分も滅茶苦茶だった。

青島青年は、高石たち全員に向かつて言った。

「そろそろ行きましょう！ここを降って、五ツ辻方面に行きます。そこで、清水（きよす）の滝へ寄道をして滝壺あたりでお昼の食事ということで、どうでしょう？滝を見ながらお弁当を食べるといいうのもいいですよ。五ツ辻からは、根来谷を降りて駐車ポイントへ帰ります。」

「清水の滝って面白いのでしょうか？裕次郎さん！」とミサキ嬢。

「そうだね。行くのは自己責任ですよ！という標識があるぐらいだからね。スリルあると想うよ。滑って転んで怪我をするのは勘弁して欲しいけどね。」

山頂から降って、はっきりとしたルートに出た。そこを右の方に進路をとり五ツ辻方面に向かつて歩いた。すこし行くと、岩湧山がはっきりと望めるポイントに出た。

「あれが、岩湧山か！いいお山だ。だが待てよ……」と高石は想った。

「青島！悪いが引き返したい。日根野三郎は、蔵岩で突き落とされたんだ！事故ではないぞ！日根野三郎の無念の声が聞こえる！はっきりと聞こえた！日根野三郎が歩いた道を、同じ方向で歩きたい！」

「分かりました。何か閃いたんですね。係長！」と青島が言った。

「閃きとは言い難いが……。聞こえた！」と真顔の高石。

ミサキ嬢も裕次郎君も頷いて聞いていた。

高石たちは戻った。無駄な行為かも知れないが何か得るものがあるかもしれない。山頂まで戻り、蔵岩へつながる登山道を降った。登りと降りとは印象が違う。まさに急降下だ。樹木を掴んで滑らないように降った。膝の調子もよさそうだ。しばらく行くと、ドドンと露岩の蔵岩が視野に飛び込んできた。この方向から眺める蔵岩の頂には迫力があつた。地表から岩の塊が突き出している。恐れ多さを感じさせる光景だった。高石は、先ほどの露岩に慎重に手をかけてよじ登った。左側の断崖を覗き込み考えた。

「日根野三郎の声が聞こえる！あいつの無念の声が！」

高石は蔵岩の頂で考えた。頭の中で、日根野三郎が背中を押されて落ちていく光景が浮かぶ。突き落とした人間の影が浮かぶ。高石の頭は回転し過ぎたのか、鉛のような重たさを感じた。ふらふらと眩暈がした。バランスの失った高石の体が揺れて二歩三歩と断崖の方へ吸い込まれるように動いた。

奇妙な行動に出た高石を見て、危険を感じた青島青年と裕次郎君は走り寄り

両脇を掴んだ。そのまま行けば落ちてしまうところだ。高石は何かぶつぶつと呟いている。

「日根野が呼んでいるんだ！日根野が！」

高石は、二人の手を振り払おうとして抗った。

「係長！」

「高石さん！」

裕次郎君は、高石の両頬に平手打ちを撃ち込んだ！それで、眼が覚めた高石は、自分がかんじがらめに拘束されていることに気がついた。

「何しているんだ！お前たち！」

「お前たちは無いでしょう！」と青島。青島の顔は青褪めいていた。驚きのあまりミサキ嬢はへたりこんで泣いていた。

裕次郎君は、高石を安全な樹林の方に引きずるように連行してから手をはなした。自由になった高石は、何故かほっぺが痛いことに気がついた。両頬をさすりながら言った。

「何があっただ？」

「何も覚えていないんですか？」と裕次郎君。

青島が一部始終説明をした。

「そうか！そんなことが・・・」と高石は絶句した。

「日根野三郎の声が聞こえたんだ。あいつの悲痛な声が！」と高石。

「青島！頼んでいたモバイルPCを出してくれ！」と続けざまに高石は言った。

「はい只今」と言いながら青島青年はザックからモバイルPCを取り出した。

高石は、胸ポケットからUSBを取り出してPCに装着した。そして暗号化されたワードのファイルを開いた。パスワード入力を要求する画面が現れた。高石は、パスワードを撃ち込んだ。

周りのクライマーたちが怪訝な顔をして高石たちの行動を見ていた。先ほどの高石のひゃつとする奇行といい蔵岩の頂でPCの画面に喰らい付いている訳の分からない男三人と女一人。

「開いた！」と四人は同時に大きな声を出した。このころになるとミサキ嬢も落ち着きを取り戻していた。

「係長！すごい！どうして分かったんですか？！」とミサキ嬢が敬意を込めた声で言った。

「職員番号さ！中高年のパスワードは生年月日がほとんどだけど、何十年と使っていて、他人にとっては何の興味もない番号。日根野三郎が、先ほど俺に言

つてくれたのさあ・・・。」

暗号化されたワードファイルは、すべてこの番号のパスワードで開くことができた。高石の成りきりパワーは進化したようだ。成りきりという異能は、恐山のイタコさんのようになったのか！命がけの進化だった。一歩間違えれば、日根野三郎と同じ運命を辿って墜落死するところだった。

高石は、携帯電話を取り出すと白鷺に電話した。

「分かったぞ！白鷺！パスワードは、職員番号のXXXXXXXXだ！」

「でかしたぞ！高石！さすがだ！」

「お前が派遣してくれた裕次郎君のお陰だ！すぐに調べろ！」

高石は涙が出るのを止められなかった。青島の手を握り、裕次郎君の肩をたたき、そしてミサキ嬢の手を握った。ミサキ嬢は、鼻水を垂らしながら泣いている高石を見て感動した。清々しい九月の風がミサキ嬢の黒髪を撫でて行った。ついでに薄くなった高石の頭髪も撫でて行った。

蔵岩の頂に降り注ぐ太陽光線は、刺激的なほど厳しいものであったが、ここからの二度目の眺望は一段と素晴らしかった。

—あの空の上で、日根野三郎が笑みを浮かべて俺たちを見ているのだ！—と高石は思った。そして、日根野三郎を突き落とした黒い人影。顔の識別は出来なかったが、あの人影は脳裏に焼き付いていた。

高石たちはその後、施福寺方面へ行く急坂ルートを降った。施福寺にお参りし、久米田のポスターがぶらさがっている茶店で多少の聞き込みをした後、

「青島！ミサキ！ビールを飲んでいいぞ！」と言った。

「わーい！」と青島とミサキ嬢。

「裕次郎と俺は車なので、キリンフリーで乾杯だ！」と言いながらザックから保冷したフリーを取り出しそのうちの一本を裕次郎君に手渡した。

七

横尾山の山行から一週間が経過する頃。昼間の日出しは、まだ強く夏を感じる暑さだが、夜には涼しい秋の大きに包まれて気持ちのよいころになったと高石は思った。空には秋らしい雲も見ることができる。

高石は、自宅の書斎にこもってパソコン画面を凝視した。解除されたワードファイル。そこには、日根野三郎の業務記録、大阪地検での取り調べ内容、山

行記録などがあつた。

高石は、白鷺と分担した。山関係は、高石。それ以外は、白鷺とした。白鷺にすればY市のスキヤンダル事件の核心を調査したいと言う意向が強い。Y市の事件については、日根野三郎の滑落事件との関連は薄いと判断している高石ではあるが、白鷺には何も言わなかった。

高石は、小百合嬢や久米田にも解除されたワード資料を送信した。

「さすが、高石くんね。できると想っていたよ。あなたは常人とは違う何かの能力があると想っていた。しかしね……。イタコさんレベルまで進化するとは想像もしていなかったわ……。さすが！です。」と小百合嬢からお褒めの言葉があつた。

久米田からは、

「開花した才能おめでとうございます。やると想っていたよ！」と言うメールが届いていた。

高石は想つた。久米田は超人的なパワーを有している怪物だ。白鷺にしても女癖は悪いが、高校生時代からガリ版と鉄筆を持ってアジビラ（宣伝ビラ）を作成することにおいては、右に出る者はいない。独特の字体で、扇動的なビラをつくる。これが、今の仕事をする上で有効になっているかどうかは別だが、白鷺が作成した謄写版印刷のアジビラは、同世代の高校生を感動させた。おかげで、多くの仲間が参集した。全国に散らばってはいるが、絆は今も切れていない。何かあれば……。特に、小百合嬢に何かあれば飛んで帰ってくる連中だ。

—ある意味では、俺たちは異能グループかもしれない。小百合嬢のカリスマ性は、今でも衰えてはいない。むしろ輝きは、増している。—

そんなことを考えながら、日根野三郎が残した資料を読んでいた。気になるのは、あの時、フラッシュバック現象のように脳裏に浮かんだ人影だ。シンナーや覚せい剤などの中毒者は、幻覚や妄想を見るといふが、そのような現象でもなさそうだ。もともと高石は、薬物中毒者ではない。あえて言えば、アルコール中毒者……。一歩手前かも……。

—アルコール飲み過ぎてアルチューハイマー。これが本当の痴呆公務員！—などと高石は愚にもつかぬおやじギャグを唱えながら資料を読みこんだ。

人影で性別が分かるものではないが、屈強な男の影ではなかった。

—日根野三郎は、俺に何を伝えたかったのか？—

暗号化されたワードには、画像も挿入されていた。何かあっても、ひと様に見られたくないファイル……。

高石は、ひとつひとつ慎重に確認していった。ブログの山行記録・・・暗号化されたワードの山行記録。

日根野三郎は、単独行を好む。ブログでは、山頂の三角点の画像や山頂から見える山々の風景が掲載されていた。ひと様が写りこんだ画像には、個人情報ということでモザイク処理がされていた。自分自身の登頂記念の画像にしてもセルフタイマーで撮影したのだろうか、丁寧にモザイク処理されていた。

そんな資料の中で気になる山行記録があった。ブログを見ると、昨年八月に岩手県の早池峰山行記録だ。深田久弥が選定した日本百名山の一つである早池峰山。高石は、最初何と読むのか迷ったが「はやちねさん」と読む。漢字といい名前といい、漢字の美しさと音の響きがたまらない山名だ。

記録によれば、河原坊に車を止めて小田越まで徒歩。小田越の登山口から登り始めて、山頂へ。しばし休憩の後、河原坊の駐車ポイントへ。途中で、天候の急変があり、視界不良となるほどの土砂ぶりがあったとのこと。

下山途中で「打石」で風雨を避けるように蹲っている女性登山者と遭遇。話を聞いてみると、途中の下山ルートで足を挫いたとのこと。日根野は、そのまま見捨てる訳にも行かず、女登山者に肩を貸すような格好で下山したとのこと。

ただ、日根野は女登山者のザックを担ごうとしたが、何が入っているのかわからなかったが、結構重たかったこと。重たい割には、女登山者は雨対策の合羽も所持していなかったとのことだ。日根野は、予備に所持していたポンチョを貸したとのこと。増水した岳川を何とかロープ頼みで沢を超えて、麓の駐車場に到着した。日根野は、この女登山者を訝ったが話してみると大阪から来たとのこと。訛りから言えば、大阪南部の泉州だと推量した。年のころなら四〇代前半。眉目秀麗な小顔の美人だったとのこと。女は、日根野に丁寧なお礼の言葉をかけて利き足が動かせるというので、おそらく空港近くのレンタカー会社で借りた軽四に乗りして帰ったとのこと。

ブログの内容は、よくある美談のたぐいだ。しかし、高石は榎尾山に行くだけで、相当の道具を購入させられた。青島青年は、命にかかわる道具は「安物」はだめだ！ということとゴアの合羽、パンツ、靴下、山靴、ザックなどなど一通り購入することを強制し、高石の色好みとは違うものを無理やりカゴに入れてレジまで運んだ。そんな経験から、早池峰山に登ろうとする女登山者の装備不十分が信じられなかった。

それと、暗号化されたワードの山行記録だが単独行の日根野の画像にいつのまにか同伴者らしき画像が挿入されていた。前方を歩く後ろ姿の登山者が撮影されていた。性別は、女である。同じような画像が、大和葛城山、金剛山、和

泉葛城山、岩湧山、南葛城山など山の山行記録にもあった。

高石が気になるのは、たまたま太陽の日照角度が事件当日と同じだったのであるうか。高石の脳裏に鮮やかに刻印した蔵岩の人影とよく似ていると思われる画像があった。歩いている後ろ姿の画像だが、前方に伸びた人影も映りこんでいた。じっくりと高石は、その人影を観察した。

「間違いはない！この人影だ！——と高石は確信した。直ぐにプリントアウトすると書斎の壁に張り付けた。

「ウウウツ・・・日根野三郎が、俺を助けているぞ！何を語りたいのだ！日根野！——と高石は半ば呻きながらマウスを操作した。

高石は、この膨大なファイルの大海の中で、きつとこの女の正面画像があると確信した。後は、根気勝負だ！と想った。

高石は、自らの推理を小百合嬢、久米田、白鷺たちにメール送信した。内容は、

② 仏の啓示か日根野三郎の怨念かも知れないが、現地調査で得た蔵岩の人影は、女であること。

② 八月の早池峰山の山行以降、ブログや山行記録を見る限り、それまで単独行であった日根野三郎に同伴者が出来た。

③ 同伴者の人影は、蔵岩で啓示された人影と一致。

④ 早池峰山登山以前と以後とでは、日根野三郎の山行記録は微妙に表現がことなる。

⑤ 早池峰山で、何があったのか。早池峰山女登山者は、大阪府泉州地方の女。

⑥ 早池峰山の女と蔵岩の人影は、同一人物か？

⑦ 日根野三郎は、その後早池峰山の女登山者と再開して山行の同伴者となったのか。

高石は、進化した能力で得た「啓示的事実」・・・これは、他人から見ればオカルト的で非科学的な邪推と言われるかも知れないが、日根野三郎の山行記録を読み込むなかで早池峰山での日根野三郎と女登山者の遭遇をイメージしてみた。

近くの本屋で、購入した山の書籍を開いた。早池峰山紹介のページを読んだ。岩場や瓦礫があつて急斜面の登山道。緊張を強いられる登山道のように高石は想った。八合目あたりにある「打石」は天を指すような大岩のように想えた。

日根野三郎の山行記録と画像も観察しながら瞑想に耽る。遭遇の現場となった「打石」の画像を眺めた。「打石」には、「昔、天狗があまり風光が美しいのに興じて飛びまわっていたら、急に雲がわいて周辺が見えなくなり、この岩に頭

を打ったといった伝説がある」とのことだ。

天候急変による突然の雨。視界不良の中での不安と焦燥……。遠い東北の地で日根野三郎は何を見たのか？何を感じたのか？

―日根野三郎の声が聞きたい！―
と、高石は想った。開け放たれた窓から虫の鳴き声が聞こえる。

遅い秋の訪れを待ちくたびれた虫たちが哀しい声で鳴いていた。明らかに空気の質感が変わっていることに高石は気がついた。

その時であった。高石の机に置いてある携帯電話が鳴り響いた。

久米田からの電話だった。

「高石！堺署のころんぼ（湖論暮）刑事って知ってるか？」と久米田が言った。

「ああ・・・つ！あの刑事か！面識はあるよ！」と久米田は先日の取調室での対話を思い出した。

「今、堺東のスナックでその湖論暮刑事と呑んでいるんだ。先ほどお前がくれた携帯メールの内容をあいつに話をする機会があったんだ。そうすると相当に興味ある眼をして言うんだ。早池峰山での出来事に興味があるらしい！」

「なんで、湖論暮刑事と一緒になんだ？所轄が違うだろうに・・・。」

「同病相哀れむという関係さ！俺には、あっこつちと友人がいる。大阪府警なんて狭い！狭い！色んなところに情報源があるのさ・・・。どうやら堺署管内での事件と関連するかも分からないと言っていた。詳細は聞いていないけどなあ・・・。ひよつとすると飛んでもない事件と絡んでいるかもしれないぞ！」

「ところで、コロツケじゃない湖論暮刑事はいったい何者だ？」と、

高石は以前から気になっていたことを聞いた。

「堺署の名物刑事！よく言えば辣腕刑事か！早く言えば変わり者。実証を積み上げて推理するタイプの刑事！お前とは異質の推理をするぞ！」

「変わり者と言えば、お前もじゃないか！」

「ということ、みんなと会いたいときあ！詳細は、その時に説明するのとことだ。」

と、久米田は言い放つと携帯電話を切った。会話の合間に久米田が好きな「同期の桜」の歌声が聞こえていた。おそらく歌っているのは、湖論暮刑事だろう・・・と高石は想った。

翌日。高石は職場で小百合嬢からの電話を受けた。最初に電話を受けた青島青年が高石に転送の合図をした。

「係長！お電話です！転送します。」

「もしもし高石ですが・・・。」

「わたし。久米田さんから聞きました。今日は、定休日でお店が空いているので、全員集合を掛けてくれるかなあ。湖論暮刑事も同席することだから……よろしくね。」

「はい！了解いたしました。」

いつの間にか高石の傍に近づいていた青島青年が聞き耳を立てていたのか。

「係長。今、全員集合という言葉聞いたのですが、この場合は……僕は含まれていませんか？」

と、何か切望するような眼をしながら聞いた。

「ムムツ……。」と高石。

「この場合の全員集合は……全員集合だろ！山を巡っての事件だから、山の知識がないと前に行かんしな……。ところで、青島！お前は、岩手県の早池峰山って登ったことがあるのか？」

「ありますよ……。学生時代に、小田越から登りましたが。」

「そうか！そうか！頼もしい奴だ！ただし、条件があるぞ。」

「何でしょうか？」と不安な面持ちで青島青年が聞いてきた。

「ノアの運転はお前がすること。そして、俺を自宅に送って翌朝は迎えにくること。これが条件です。」

「何と！自分自身は呑むんですね！」

「お前は、キリンフリーの呑み放題！」

「分かりました！了解いたします。」

「冗談だよ！」

そのような会話を斜め向こうから観察していたミサキ嬢が高石の顔をじっと凝視していた。いつもののなら、すかさずに口を挟むミサキ嬢だが、何かを考えているようだ。

「怖い……。——と高石は背中に冷たいものが走るのを感じた。

「ミサキ嬢の沈黙の眼差しほど怖いものはない。——と想った高石は、ミサキ嬢に言った。

「裕次郎君も来るらしいぞ！ミサキ！今日は、習い事の日か？」

「そんなことありません。キャンセルします。係長！是非、私も参加させて下さい。お願いします！」といつもと違う丁重さで言った。

急に表情が明るくなったミサキ嬢を観察していて乙女心の複雑さ難解さを悟った高石であった。

仕事の終了を知らせるチャイムが鳴ると高石たちは、小百合嬢のスナックまでタクシーを飛ばすことにした。帰りは、代行運転会社に依頼してもいいのだが、帰宅時間が不明なこともあり、今回はタクシー利用となった。

外にでると、秋らしい大気に包みこまれている感触を感じた。生駒や大和葛城山、金剛山から吹く風に秋の気配を感じた。

「今年は、秋が短いかもしれない。」と高石は想った。

タクシーの助手席には青島青年が乗り、後部座席には高石、ミサキ嬢が乗った。

「係長。係長はなぜ探偵業などをしているのですか？」と青島青年が振り向きながら聞いて来た。

「天命かも」と高石。

「いや・・・僕も興味があるのですが、テレビや小説のような派手さはないですね。実際は・・・。」

「そうだよ！俺などペット探索探偵だよ。今でも！」

と高石は、やや自嘲ぎみに言った。

「そんなことはないですよ！蔵岩での係長を見ていたら鬼気迫るようなものを感じました。」と青島青年は車窓に映りこんでは流れ去っていく街の風景を眺めながら言った。

高石は、タクシーの窓を少し開けた。日没前になると気温も下がって、爽やかな風が、気持ちよく高石の顔を撫でて行った。

「秋の訪れを感じるなあ・・・」と高石は想った。

タクシーは、小百合嬢の店の前に止まった。高石は支払いを済ませると、最後に降車した。

「係長！支払いの方、ありがとうございます。」と青島青年とミサキ嬢が笑みを浮かべながら言った。

「いいよ！いいよ！年寄りの役目でございます。」と高石は言った。高石は、「本日は定休日」と書かれた店のドアを開けた。

すでに白鷺と裕次郎君、久米田と湖論暮刑事が到着していた。すでに生ビールを呑んでいたのか白鷺の頬が紅い。とにかくこじんまりとしたスナックだ。裕次郎君は気をきかして席を移動した。店の奥には、白鷺、高石、久米田、湖論暮刑事が集まった。ミサキ嬢はカウンターの中に入り、若者は若者ということでミサキ嬢は、青島青年と裕次郎君を対面において談笑していた。

「高石くん。ご苦労様でした。あらためてあなたの才気に脱帽するわ・・・。」と小百合嬢がねぎらいの言葉を高石にかけた。

「いや、そんなことはないよ。たまたまです。」と高石。

「さて、本題なんだけど湖論暮刑事も来ていただいているので、お話を聞いてみたいと思います。」と小百合嬢は、湖論暮刑事の方に視線を移した。

「どうも！堺署の湖論暮です。」と湖論暮刑事は席を立ちながらみんなの顔を見て言った。

「久米田さんと呑む機会があつて、高石さんの話を聞きました。実は、管内の未解決事件があつて、これが早池峰山も絡んでくる事件なので参考にしたと想っています。事件の概要を説明すると、昨年の夏の八月ですが、管内で医者の子どもの誘拐事件があり身代金として準備した一億円が消えてしまった事件なのです。幸い子どもは無事保護されました。

犯人の指定したところが、岩手県の早池峰山です。大阪の泉州からすれば、とんでもない遠方です。犯人は、ザックを送りつけてきました。このザックもよくあるザックで中国製です。千円もしない廉価物なのです。このザックに古い紙幣で一億円を詰めて、早池峰山の頂上に運べという内容でした。

当日は、岩手県警の協力も得て登山口や山頂に張り込んでいたのですが、ちょうどこの日は、地元の中学校の親子登山や大阪のツアー会社が企画した「東北の山：岩手山・早池峰山を巡る」百名山ツアーの登山者が三〇人ほどもあつて山頂は込み合っていたのです。当然のことながら単独行で来ている登山者やグループ登山者もいます。我々からすれば、すべての登山者が容疑者なのですが、一人一人職務質問をする訳にもいかず事態の推移を見守っていました。結局、犯人と接触出来なかったのですが、下山途中でザックの中を確認すると一億円の現金が消えていました。急遽、登山口を張っている地元の岩手県警に無線で連絡を取りましたが、無線の状態もイマイチでしたし、大阪の言葉、特に泉州弁というのは、地元の人々には分かりづらいところもありますからね。大阪弁も吉本のお陰で全国に流布されていますけどね。地元の警察との意思の疎通が取れてなかったことも大きな要因でしたね。大方の登山者は、下山していませんでした。

また、このザックにしても大量生産された廉価物ですし、犯人の遺留物とか指紋などは出なかったですね。通常、髪の毛とか何か付着しているものなんです。……。付着していた髪の毛は、父親のものだけでした。

早い話、山頂でザックをすり替えられたという間抜けな話です。登山者のザックにしても、ほとんどの登山者は防雨用のザックカバーをしていますので、同じザックを持った登山者の特定も出来ませんでした。百名山ツアーの参加者にもザックを見せて聞き込んだのですが、ひと様のザックまで興味を持って記憶している人はいなかった。

それと、すり替えられたタイミングですが、現金を運んだのは子どもと父親なんです。当日は曇り空で雨もぱらぱらと降るような天気なので、山頂小屋の廂で一時雨宿りをしていました。親子登山の子ども達も保護者も山頂小屋に集

中するなかで、どさくさの混乱の中でいつのまにかすり替えられたのですね。我々も不自然な行動もできず、他の登山者と同じ行動パターンを取っていましたが・・・。登山者については、望遠カメラで個々に撮影していますが、男は別にして女性登山者は曇り空といっても時たま晴れ間も出てくるので、紫外線対策で完全に顔を隠しますので顔が撮れていない登山者もいます。

当日の駐車場に停めていた車のリストアップも完璧なんですけど、その後調査しても不審な輩は突き止められなかったこともあって犯人の移動手段の特定もできていないところです。当日の早池峰山においては、単独犯なのか複数犯なのかも不明です。ほんとうに間抜けな失態です。ただ、子どもが無事に帰ってきたことが幸いでした。」と湖論暮刑事は、疲労感がにじみ出るような説明を長々とした。

「それだけでは、蔵岩を調査している件との接点はないぞ！」と久米田が湖論暮刑事に向かって言った。

「実は、その百名山ツアーの参加者に日根野三郎さんが単独ですがいたのですよ。当然のことながら日根野三郎さんにも事情聴取しましたけどね。とにかく、彼は警察というものに不信感を抱いていますので、けんもほろろの応対でしたけど・・・。」と湖論暮刑事はその時のことを想起しながら言った。

「彼は、容疑者だったんですか？」とミサキ嬢が聞いた。

「いや・・・容疑者ではなく何か記憶していることがないかと聞いただけなんですけどね。」と湖論暮刑事は申し訳なさそうに言った。

「日根野三郎は、早池峰山には二度行ってますよ。それも同月の八月に・・・記録では、二度目は単独行ですが・・・。」と高石は言った。

「よほど気に入ったんだなあ。早池峰山」と白鷺が言った。

湖論暮刑事は、自分のシオルダーバックから分厚い封筒を抜き出し、その中からファイルされた写真を取り出した。早池峰山で撮影した登山者の写真だった。それを受け取った高石は、一枚一枚確認した。確かに、日根野三郎が一人で写りこんでいる写真を見た。何か遠くを不安げに見つめているような顔つきだった。それ以外にも確認したが、確かに多くの登山者はザックカバーをしていたし、顔がはっきりしない登山者もいた。

「高石さんに、そのファイルを預けます。」と湖論暮刑事が言った。

「湖論暮さん！何か隠しているでしょう！ここでは捜査上の秘密とか守秘義務はどうだとかは言わないでね。」と小百合嬢は甘い声で言った。

小百合嬢にすれば、これだけの話では納得出来なかった。

「いやそんなことはないですけどね。いい忘れていたわけではないのですが、その後ですね。登山道から少し離れたところで高山植物を撮影していた地元の

アマの写真家が瓦礫の中から一千万円の札束を発見したのですよ。普通ならばネコババしそんなものですが、極めて真面目な方ですので地元の警察に届けたのです。当然のことながら地元の警察は、誘拐事件のことは知っていますので紙幣の番号を確認したら誘拐事件の一億円の一部の札束だと分かりました。どうやら犯人は、ところどころに札束を埋設した可能性が有りますね。ほとぼりがさめたら回収にくる段取りであった可能性が有ります。その後、地元の警察は山に精通している登山グループの協力を得て登山道周辺を探索しましたが、後の部分は発見できませんでした。犯人も時間がなかったのかこの一千万円だけがぞんざいな埋設をした可能性があります。」と湖論暮刑事は言った。

「そうなる」と犯人は、単独犯か少数のグループとなりますよね。ツアー参加者にはそのような事をしている余裕はありませんものね。」と青島青年が言った。「そうなる」と日根野三郎さんは、白ですね。」とミサキ嬢。

「いや・・・そうとは限らない。犯人は事前に、山頂が混乱する状況を見込んでいた。ツアーの予定とか親子登山の予定とかを把握していたかもしれない。そこで、日根野三郎自身が何かの役割があったかも知れない。山頂にいた登山者は、すべて容疑者だ。警察以外はね。」と裕次郎君が言った。

「日根野さんは、早池峰山が気に入ったようだけど再度登っていることも怪しい要因になっているとのこと?」とミサキ嬢が誰彼となく質問した。

「日根野三郎さんは、この件については白でしょうね。」と小百合嬢が言った。「彼は仕事を止めたけど、根っからの公務員だから犯罪には手を出さないよ。」と高石は確信をこめた調子で言った。

「根っからの公務員は、実は小心者だからね。こんな大それた誘拐事件など起こさないね。」と久米田が断定するように言った。

「その一千万円の札束も意識的に犯人が分かるように埋設した可能性もあるのでは・・・。」と高石が言った。

「どうしてですか?」と青島青年が不思議な眼で言った。

「犯人は、金目当てではないかも知れない。愉快犯として、警察のお手並み拝見ということ、遠いところで笑っているかも知れない。」と久米田が言った。

「いずれにしても犯人は、残りの九千万円を持ち去ったか。まだ、分からないところに埋設しているかも知れない。または、すでに埋設場所から持ち去ったかな。」

と白鷺が言った。

「大量製造のザックを事前に用意して、足がつかないようなことをしている用意周到な犯人ですけど、天気も予想していたのかな・・・。雨が降らなければ、ザックカバーをしないわけだし、同じザックをしていけば目につくしね。」とミ

サキ嬢が言った。

「この時期の東北の天気は、不順な状態であったことは確かなようです。局地的な雨は、もう珍しくはないですが犯人すれば何か方策があったのでしょうか。天気予報士並みの知識を持っていたのかもしれないですね。やばくなれば、その日に決行する必要も無いわけですからね。」と湖論暮刑事は言った。

「いや・・・大き目のザックに同様のザックを入れておけば、分らないよ。ちなみに一億円の重さって知っているかい？」と久米田が問いかけた。

「・・・」

「そうだろうね。俺も見たことがないよ！聞くところに寄れば、およそ10.2kgとのことだそう。容積は、タテ38cm、ヨコ32cm、高さ10cmだね。計算があつてれば、12kgリットルほどかな・・・。」と久米田が自信なさそうに言った。

「貧乏人には想像が出来ないけど、10kgなら・・・これだけなら背負えるなあ・・・俺・・・とにかく一億円だから・・・。」と白鷺が言った。周りの軽蔑するような眼差しを感じた白鷺は首を引つ込めた。特に裕次郎君は身内ということもあつて恥ずかしさのあまり下を向いてしまった。

「犯人からは、どのような方法で指示があつたのですか？」とミサキ嬢。

「父親の携帯電話に公衆電話から連絡がありました。」と湖論暮刑事。

「若者組が良く発言するな！青年探偵団に負けてはられないな・・・中高年探偵団としては・・・。」と高石は笑みを浮かべながら焼酎のロックを呑んだ。

「僕としては、高石さんの話。日根野三郎が助けた早池峰山の女登山者のことに興味があります。お話自体は、美談ですが日根野三郎自身も疑念を持った重たすぎるザックの話です。雨対策もしていなかった女登山者。そして、大阪の泉州訛りがあつたという話ですね。誘拐事件は、堺署管内の事件なので犯人像も大阪の人間だと想定しています。父親の話を聴取しても、声はボイスチェンジャーによって変換されていましたが女の声で泉州の人間のようにだと言っておりました。」と湖論暮刑事が言った。

「ところで、お子さんはどのような状態だったのですかね？」と小百合嬢が聞いた。

「それがですね。塾帰りに誘拐されたのですが、あまり大きな声では言えないのですが、医者の子どものものに分数の計算も出来ない落ちこぼれの小学生の男の子なんです。拉致されている間に相当に痛めつけられたようで・・・。いやあの・・・肉体的に暴力を受けたということではなく勉強ですね。とことん学習させられて躓いたところを完璧に叩き込まれたようで、今では、成績も

上位になってきたということで、親が喜んでるんですよ。子どももすっかりこの犯人・・・子どもに言わせると綺麗なお姉さんに親切丁寧に教えられたことで、自分自身が誘拐されていることも忘れて、算数に没頭したようです。今でも、あの先生に教えて欲しいと親に泣きつくと言っているようです・・・まあ、とにかく医者の子息ですから将来は医者ですからね。一億円は安いと言つて逆に親が喜んでる始末です。はあ・・・っ・・・」と湖論暮刑事はため息をつきながら言った。

―犯人は複数でないとその犯行は成立しない。子どもの面倒を見る女。おそらく元教師か塾教師。現地で、10kgほどの現金を運ぶ体力。普通に考えるなら屈強な男。しかし、一千万円を埋設というか埋伏させたことから男とは断定できない。小分けして運ぶ計画だったのか?―と高石は考えた。

―ところでね。少々、問題が起こりましたね。どこから漏れたのか不明なんです。早池峰山に九千万円の札束が眠っているという噂が飛びまして、ネット上でも流布されてまして・・・これを目的に登山する不埒な輩も全国から出現していたのです。」と湖論暮刑事は困った顔で言った。

―そんなもの！搜索依頼した山グループから漏れたのに違いないがな・・・。―と高石は想った。

―それは、楽しいピクニックになるな！ゴールドラッシュ！」と白鷺が意味不明なことを呟く。とうとう裕次郎君は、我慢の限界を超えたのか伯父貴である白鷺の首を絞めるポーズをした。白鷺にすれば、頭に浮かんだ想ったとおりの言葉を出しているだけなのであるが、どうやら周囲の空気を読んでいないことに、やっとな気がついたようだ。

「日根野三郎さんの記録上の【早池峰山の女】と【蔵岩の人影】とは、高石さんの啓示的推理によって関係があるとしてですよ。それと、その【早池峰山の女】と【誘拐犯の女】とはどうなるのですか?」とミサキ嬢が質問した。

「何だかややこしくなってきました。日根野三郎さんが助けた女【早池峰山の女】が兩具なしの状態で重いザックを持っていたこと。ここに引っかかるものがあったということ。泉州地方の訛り。そして、高石さんの見た人影【蔵岩の人影】が女であるとのこと。これが、【早池峰山の女】の人影らしいとのこと。どれも確固とした連結の環というものが無いのですが、藁にもすがる想いで、みなさんと相談しているわけでございます。」と湖論暮刑事が頭を掻きながら言った。

―藁だって・・・この諺の意味って「せっぱつまつたときには、頼りにならないものまでも頼りにしたくなることのとえ」のことだけど、失礼だよね!―

と高石は思ったが黙っていた。

「しかしこの捜査方法は、実証を大事にする湖論暮刑事らしくないですね。」と久米田が言うと

「先ほども言いましたが、初期捜査で間抜けな事になっていきますので、この際ですね。何でもありで、神仏にもすがりたい想いです。ということ、ご協力願います。」

「とうとう神仏になってしまったか……。」と高石は含み笑いをした。

「どうやら早池峰山の女の画像を、あのUSBファイルの中から発掘するしかないか！」と高石は思った。

「ネット上で噂になった時期は、いつですか？」とミサキ嬢。

「すぐに地元の山グループに依頼して捜索していますからね。同月の八月中です。あ……つとと言う間でした。」と湖論暮刑事。

「ネット情報も犯人側が流した可能性もあるのでは！そのため一千万円だけを埋伏させた。」と裕次郎君。

「意図は？」と青島青年。

「捜査の攪乱を目的とした！」と裕次郎君。

「捜索して発見できないほど巧妙に隠しているわけですよ。」と青島青年。

「九千万円は、持ち去っていると想うよ！僕は！」と裕次郎君。

「宝探しゲームになっているのです。これじゃ山は荒れますよ。あそこには絶滅危惧種の高山植物の固有種も……環境破壊です。自然破壊です。警察の責任は、大きいです！」とミサキ嬢は大きな声で言った。身を委縮させながら湖論暮刑事が言った。

「地元警察の奮闘努力のお陰で、すぐに終息いたしました。自然環境には影響を与えていないと想います。」

「それならいいですけど……。」

「そうすると、日根野三郎の同月二回目の早池峰山登山も、宝さがしと関係があるのかもなあ……。それに【早池峰山の女】も【誘拐犯の女】ではなくて【現金を発掘した女】かも知れない……。そんな可能性も出てくるよね。」と久米田。

「この際、【誘拐犯の女】のことは度外視して【早池峰山の女】と【蔵岩の人影】は、同じ人物ということを考えて……。これが特定できれば、【早池峰山の女】と【誘拐犯の女】を類推して行かないと却って混乱しますよ！」と高石。

「まあ……今までの話は、情報提供ということでご理解して下さい。私とし

ても今日の話は有意義なものであったと想います。」と湖論暮刑事は、満足な顔で言った。

「今日はこれぐらいにして、みなさん！呑みましょう！今日は、私からのサービスよ！」と小百合嬢が言った。

「ウエイ！」と若者組が叫ぶ！

年寄り組は、年寄り組らしくチビチビと焼酎のロックを舐めていた。いつの間にか若者組のカラオケが流れた。負けじと久米田と湖論暮刑事の軍歌が聞こえた。何とも言えない白鷺の歌も聞こえてきた。そして、高石の「桃色吐息」が店内いっぱいポリウームで聞こえてきた。

お彼岸だ。秋が来た。

「おおおっ・・・寒いな・・・冷える！」と高石は言いながら、半袖から長袖のシャツに衣装替えした高石は、いつものようにインスタントコーヒーを呑み、朝刊を拵げた。ここ最近賑わしている記事が飛び込んでくる。

厚生労働省の元局長の無罪が確定したと想えば、証拠隠滅の疑いで大阪地検特捜部の主任検事が逮捕されるという前代未聞の事件だ。久米田や湖論暮刑事など現場の警官達は、必死になって正義感を燃やし任務を達成している。

「警察と検察は違うと言えは違うけど・・・鬼の平蔵が、フロップीडイスク（FD）のデータ改ざんを行うようなもので、あり得ないだろう！あってはならない！この世から義理と人情！そして正義感がなければ暗闇だ！」と、高石は訳の分からない理屈で考えた。

「科学的であろうが非科学的であろうが、神仏の啓示であろうが、死者の怨念の啓示であろうが・・・第六感であろうが・・・それが端緒となって真実につながるなら結果オーライ！だ。しかし、権力者による証拠の改ざんなんて時代劇ドラマの悪代官の世界だ。怖い・・・怖い・・・」

と、朝の冷え込みのためかどうかは分からないが、高石は身震いした。

蔵岩の事件から二ヶ月が経過しようとしていた。USBファイルの探索は相当地に進んだと想う。今のところ、早池峰山の女・・・蔵岩の女・・・の正面画像は発見されていない。暗号化されたワードファイルにも正面画像は挿入されていないかった。ブログにも正面画像はない。日根野三郎自身の画像は、綺麗にモザイク処理されていた。山頂の風景写真に写りこんだ他人の顔も丁寧にモザイク処理されていた。画像のオリジナルは存在しない。

発見されていないコンデジカメラは何を写したのか？

今のところ人影だけが手掛かりだ！高石の脳裏に鮮やかに刻印した蔵岩の人影。歩いている後ろ姿の画像前方に伸びた人影。書斎の壁に張り付けた人影の画像。

高石は、もう一度「蔵岩」に行くことを考えた。場所も分かった。一応、地図もある。ゆっくりと登山道を歩いてみよう……。パソコンに向かっているだけで事件が解決できるものではない。

—このお彼岸の間に行くか？ 煩惱や迷いに満ちているこの世（此岸しがん）で俺は、何を感じるのだ！ 無念を残した日根野三郎の魂は、まだ彷徨っているのかも知れない。—と高石は考えた。

高石は、X市役所に出勤した。自席に座ると、湖論暮刑事に電話をした。

「もしもし……。湖論暮さん。私です。高石です。」

「はい。湖論暮です。」

「お彼岸の間に、蔵岩へ行こうと想っているのですが、湖論暮さん同行しません？」

「そうですね。これも何かの縁でしょうね。山も久しぶりですね。行きます。」

「お山やっていたのですか？」

「大学時代はワングルでした。」

「本格的ですね！ じゃ……。明日。迎えに行きますので……。」

青島青年が、高石と湖論暮刑事とのやり取りを聞いていた。

「係長！ 僕も同行しましょうか？」と青島青年。

「いや……。今回は、ゆっくりと心静かに歩くよ……。調査目的もあるが、半ば供養だなあ……。コースは、青少年の家から蔵岩の頂。ぐるっと回って蔵岩の基部あたりへ行ってくるわ！」と高石。

「……。」

青島青年は、高石の気持ち痛いほど分かっているつもりだ。進展しない捜査の中で多少の焦りもある。高石の推理力を高める必要があった。ここは、心静かな環境に置いておく必要があるだろう。

だが、サポートは必要だ。青島青年は、陰で応援することに決めた。目立たないように尾行登山することにした。

—これも探偵修行になるかも知れない。—と青島青年は想った。

翌日、高石は愛車のノアに乗って湖論暮刑事を迎えに行った。待ち合わせ場所では、すでに湖論暮刑事が熟練した山男スタイルで煙草を吸いながら待っていた。高石は、自分の格好を見て少しばかり面映ゆくなかった。全身を新品の道具で固めている自分の山姿が、なんだか場違いのような気を起こさした。

「御苦労さまです！」

「すいませんなあ……。迎えにきつてもらって……。」

「いいす！いいす！」

「ところで、コースはどうしますか？」

「今日は、ゆっくりと味わって歩きたいと想っています。実は、体力もないのですよね……私……。」と高石が自嘲ぎみに言った。

「ほな……ビスターリで、青少年の家からぐるりと蔵岩までゆっくりと歩きましょうかね。」と湖論暮刑事が言った。

ノアは、横尾山を目指した。外環状線走りぬけ228号線に入って行った。バス停を左に折れ、狭い路地のような道を抜けて、突き当りを右に行く。しばらく走らせると、車窓にダム工事風景が映り込んできた。

「高石さん。横尾山施福寺というのは、行基や弘法大師も修行したと伝わる天台宗の寺院だそうですね。」と湖論暮刑事。

「西国三十三ヶ所の第四番札所としても有名ですよね。」と高石。

「あれが、青少年の家か！」と湖論暮刑事は、右前方を見ながら言った。少しばかり走行したところに駐車場があった。

高石は、愛車のノアを止めた。すでに三台ほどの車が樹陰の下に止まっていた。青島青年は、その三台のうちの一台に潜伏していた。窓は、遮光カーテンで覆われていた。僅かな隙間から高石達の行動を観察した。

―想ったとおり……この駐車場だったな。―

高石たちは、ザックを担ぐと青少年の家方向へ歩き出した。青島青年も動き出した。登山帽を深く被り、タオルを首に巻いた。遠目だと分からないだろうと想った。ただ一定の距離を保持して尾行することにツラサがあった。とにかく時間調整でやたら周囲の風景を撮影した。そうでもしない限り追い抜いてしまいたい。

高石は、二三歩ほど前を歩いている湖論暮刑事に背後から声を掛けた。

「変な奴が、我らを尾行してますなあ……。」

「そうでんな！あれは、尾行ではないですな……。」と湖論暮刑事。

「あれは……すいません……。うちの若いもんですわ。」

「青島くんだったけ……。」

「まあ！無視ということをお願い出来ますか！」

「そうしましょうか。今、声を掛けるとプライドが……。」

「ご配慮ありがとうございます。本人の自尊心が大事ですからね。」

「ウホウホウホッ……。」と二人は忍び笑いをした。

そんな会話がされているとも知れず青島青年は尾行を続けた。

山の風は、地上より早く季節を知らせるようだ。少しばかり冷えた風が、気

持ち良く頬に触れて去っていく。芝生広場の東屋でベンチに座りながら水分補給をした。展望台までの階段を登った。前回よりも楽だった。

展望台からは、泉州一帯、大阪湾、淡路島や六甲山を望むことができた。樹林の中からこちらを窺っている青島青年も見えた。蔵岩もはっきりと見えた。高石と湖論暮刑事は、蔵岩に向かって合掌した。

—この爽快な気分こそが、日根野三郎が求めたものなのだ。—と高石は思った。湖論暮刑事も何かの考えに集中しているようだ。数々の難事件を解決してきた堺署の名物刑事。正義感の塊！湖論暮刑事。

高石は、頼もしい湖論暮刑事の存在を力強く感じた。

展望台から芝生広場に出た。登山口を確認し階段を登っていく。結構、急坂な登山道だ。樹林の中に入っていくと気分はアルプスだ。おそらくそうだろうと高石は思った。高石にすれば、アルプスと聞けばスイスのそれしかイメージできない。それもテレビや雑誌の世界でありアニメの「アルプスの少女ハイジ」の感覚しかないが・・・。

—いいですね！南アルプスの感覚ですよ！これは・・・！—
同伴者の湖論暮刑事が高石の心中を読んでいたのかどうかは定かではないが、いみじくも言った。

樹林の間からの木漏れ日が、清々しさを倍増させるような感じだ。都会の生活に疲れた人々が、その日々のストレスを打破して回生する空間としてこの場があると高石は思った。

途中のルートでは、イノシシが大好物のミミズをさがすためだろうか、登山道を掘り起こした個所があちこちとあった。

—こんな風に掘り起こすのか・・・—と高石は感心した。

五ツ辻の分岐に到着した。右に行けば自己責任の世界の「清水（きよす）の滝」。左に行けば、「根来谷」ルートで公衆トイレのある無料駐車場に出る。直進すれば施福寺方面。ここでしばし高石と湖論暮刑事は煙草休憩をした。

—何気なく後方を見れば、樹林の陰に身を隠しているつもりの青島青年がいた。何かあれば、いつでも飛び出すような感じだ。

—身を隠すのはヘタな奴だが、ありがたいことだ！—と高石は思った。

煙草休憩も終わって施福寺方面に向けて歩き始めた。多少のアップダウンを繰り返しながら歩く。心地よい歩きだ。歩いている時は何も考えない。空白の思考タイムが続く。

汗が、オーロンのTシャツに吸収されては、発散されていく。このTシャツは、

高石が登山をすると聞きつけた同僚がくれたお下がりだった。

「いいものはいいぞ！こいつは濡れても冷たくならない化繊だ！今は、新しい素材があるらしいが、これが最高だぜ！」と同僚の山男が言った。

岩湧山が右手に綺麗に見えるビューポイントに到着した。すでに先客の高齢者夫婦が仲良く座り込んでいた。テルモスを取り出して、お茶をコップに注いで呑んでいた。ここでの煙草休憩を諦めて、少し歩いた。蔵岩への分岐ポイントを確認した。

蔵岩へ行くまでの途中で、槇尾山山頂（六〇一m）がある。「捨身ヶ岳」と書かれた標識があった。山頂にはベンチがあって絶好の休憩ポイントとなっていた。また、樹木が刈り取られていて関西国際空港、淡路島などが眺めることができるビューポイントとなっていた。ここで、高石と湖論暮刑事は木製ベンチに座りながら、煙草休憩と水分補給タイムをとった。

周囲を見ると、小さな標識がぶらさがっていた。「蔵岩↑左」と書かれていた。前回来た時は、逆方向と言うこともあって気に留めなかった標識である。

休憩タイムは終了した。高石と湖論暮刑事は、蔵岩に向かって歩きだした。いきなり急坂の登山道を降った。

高石は樹々に掴りながら慎重に降って行った。しばらくすると眼前に威厳のある露岩の塊が出現した。いつ見ても怖れを感じさせた。

高石は、頂の方を見た。九月の朝陽を浴びて花束を持つ女登山者がいた。

―蔵岩で花束……。似合わない状況だ。―と高石は思った。

女は、蔵岩の頂に花をそえると合掌した。高石の脳裏に電撃が走った。

「湖論暮刑事！あれは、早池峰山の女だ！蔵岩の人影だ！」と高石は叫んだ。

「早池峰山」と聞いた女はびくっと驚いたようだ。急いでザックを拾い上げると樹林の中に消えて行った。

高石は追いかけてしようとしたが、眼前の露岩がハードルとなって前進できなかった。足をかけて左右の断崖を見ると眩暈がした。

「俺が行く！」と湖論暮刑事。

湖論暮刑事は、高石を打ち捨てて露岩を駆け上って行った。

「青島！追いかける！」と高石はあらん限りの声を上げた。

後方の樹林で待機していた青島青年は、高石の悲痛にも似た声を聞くや否や露岩を蹴って駆け上り、女を追跡した。樹林の中に入ると分岐があった。施福

寺方面の急降下ルートは、湖論暮刑事が走り降った。麓の満願滝方面へは、青島青年が走った。

女登山者は、足が速かった。青島青年も全力で追いかけた。次の分岐で判断に迷った。左に行けば、おそらく蔵岩の基部へ行く。右に行けば、結局同じ駐車場あたりに出ると思われるが・・・迷った。青島青年は、蔵岩の基部方向の登山道を選んで走った。

女登山者は、歩き慣れていた。様々な登山道についてよく知っていた。

施福寺方面の急降下ルートを走った湖論暮刑事が蔵岩の頂に帰ってきた。青島青年も非常に疲れた顔で帰ってきた。

高石は二人の顔を見て判断した。どうやら追跡は失敗したようだ。

「係長！僕のことを知っていたのですか？」と青島青年。

「分かっていたよ！最後まで分からない振りをしようと想ったけど、意外にも女がいた。あの女が、人影の女であり早池峰山の女だ！」

足元に花束があった。日根野三郎への吊いの花だった。

——人を殺めた人間が吊いの花束・・・矛盾しているではないか！何だ？——と高石は想った。

湖論暮刑事も残念だという想いで心が充満していたが、取り逃がしたものの「早池峰山の女」の後ろ姿を見た。忘れられるものではない。

——収穫はあった。——と湖論暮刑事は想った。

高石たちは、女の正体を確認することは出来なかったが、今日ここで出会えたことに奇縁を感じた。高石が啓示的に受けた犯人の人影は、彼女のそれではあるが本当の犯人は別のところにいるような気がしてきた。突き落とした人間が現場に花束を添える事などはしない。彼女は、日根野三郎の何を知っているのだろうか。我々の知らない日根野三郎の秘密を握っているのに違いないと想った。高石の啓示的認識も蜃気楼のような現象に陥ることもあるだろう。プリズムによって光が屈折するようにすんなりと反映されるとは限らない。

事件解決までには様々な迷路に陥っていくだろう。しかし、一つひとつ解決していかない限り真実へは到達しない。

高石と湖論暮刑事そして青島青年は、蔵岩の頂に立ち合掌した。

「高石さん。今日は大変な日でしたね。こんなことになるとは予想もしていませんでしたね。同じことを考えていると想いますが、あの女登山者は日根野三郎の墜落死には関わっていないですね。日根野三郎とあの女登山者は、早池峰

山での接点はありますが、殺人とは無関係ですね。」と湖論暮刑事は言った。

「そうですね。おそらく誘拐事件の首謀者は、彼女でしょう。しかし、日根野三郎の死には関わっていないですね。日根野三郎の隠されたものを洗いなおす必要がありますね。」と高石が言った。

「推理を修正する必要があるようです。新たな角度で見ないと真実は掴めないですね。」と湖論暮刑事が言った。

高石たちが槇尾山に登山した翌日。事態は急展開した。女が、堺署に現金四千万円を持参して自首してきたのだ。このことは、「伝説の警官」ファンダールの警官よりY署の久米田の携帯電話に一報が入った。当然のことながら久米田から高石、白鷺、小百合嬢に連絡がいった。

女は、湖論暮刑事の取り調べを受けた。逐一、取調の内容が久米田に伝えられる。取調というより女の訴えだ。日根野三郎の無念の死について彼女は語っていた。

以下は、湖論暮刑事から久米田宛ての携帯メール。

・名前は、美章園文子（びしょうえん ふみこ） 四〇歳

・職業は、看護師。

・趣味は、山歩き

・日根野三郎との出会いは、早池峰山。

・日根野三郎は、誘拐事件とは無関係

・誘拐事件については、自分が主犯であること。

・誘拐した子どもの父親とは愛人の関係であったこと。

・そして、子どもの生母は自分であること。

・医者夫婦には、子宝はなかったこと。男は養子。

・医者の妻は、夫の愛人の子どもを後つぎにすることにした。

・愛人だった男に、理不尽にも子どもを取り上げられたしまったとのこと。

・早池峰山での現金受け取りを計画したことも自供した。

・現金、九千万円の内、五千万円はまだ早池峰山の登山道近辺で眠っているとのこと。

・誘拐した子どもの面倒を見たのは、熟教師の経験もある妹であること。

・妹自身については、犯行に参画した意識はなく落ちこぼれの小学生の息子をスパルタで面倒みてくれたとのことなので、徹底的にしごいただけとのこと。

・子どもも従順で、医者である父親の自宅で過ごすよりも、血が繋がっている叔母さんと過ごす方が気楽だった。綺麗なお姉さんということで、逆になつてしまったとのこと。

そして核心部分の日根野三郎のことである。彼女が語る日根野三郎の実像は、湖論暮刑事を圧倒させ、久米田自身の肉体を震わすほどの事実だった。

日根野三郎は、Y市退職後、民間の捜査機関にリクルートされていた。

世の中には民間軍事会社も存在している。民間軍事会社は、軍事的サービスを行う企業であり傭兵組織だ。同じように民間捜査会社があってもおかしくない。

アメリカのドラマでは、霊能捜査官ということで民間捜査機関も登場しているようだが、現実はこの日本でも民間捜査機関は存在している。高石は、「霊能」とは言えないが異能な探偵であり、小百合嬢をチーフとする組織も小さいが立派な民間捜査機関だ。

日根野三郎が所属した組織は、政府が出来ないことを遂行する機関であり国内外の腐敗と闘う非政府組織だ。政府内の腐敗と闘うこともある。表向きは、社会的弱者を救済するというNGOを装っていた。日根野三郎は、退職後悶々とした気持ちで生活を送っていた。社会的正義が実現されないことへのいらつきがあった。自分自身のような被害者を出してはいけないという想いもあった。

リクルートされた要因としては、かつてのY市汚職事件において検察特捜部の連日の事情聴取は、精神的につらいものがあつたが、無言を貫いたことが評価されたようだ。もつとも知らないものは答えようがないが、検察の描く筋書きにも乗らなかつたということでもあつた。飽くまでも愚直だった。この愚直さが評価されたのかも知れない。

日根野三郎は、素手で悪に立ち向かつた。自分の余生を社会的正義の実現のために燃焼し尽くしても構わないという心意気だ。

日根野三郎は、何を追っていたのか？

美章園文子は知りえた日根野三郎の真実を語った。

八

湖論暮刑事は、満員電車の車両から弾き飛ばされるようにプラットホームに押し出された。人の群れが改札口に向かう流れの中で、駅屋根の彼方に垣間見える空を見上げた。晴れた空に秋の雲が流れていた。

——少々風が肌寒いなあ……。季節はすっかり秋らしくなった。——と湖論暮刑事は想った。

湖論暮刑事は、堺東駅から堺署まで歩くことを日課としていた。わずかな距離であったが、その時々、眼に飛び込んでくる街路の光景が季節を感じさせることも多いのでささやかな楽しみとなっていた。今日も元気な小学生たちが笑みを浮かべて校門をくぐった。南海本線堺駅から徒歩で堺東方面へと歩く多くの勤め人がいた。毎日毎朝顔を合わすと挨拶も交わすようになる。つい先日まで半袖シャツだった姿が長袖のシャツとなり、女性たちの服装もすっかり秋らしく華麗だ。

今日も朝から美章園文子の聴取だった。せまい取調室には、湖論暮刑事と若い刑事、そして美章園文子がいた。

「この間の蔵岩では、なぜ急ぎ足で逃げたというか走り去ったのかな？」と湖論暮刑事は聞いた。

「はやちね・・・という言葉が聞こえたので、咄嗟に恐怖を感じたんです。日根野さんのことが頭に浮かびました。怖かったんです。日根野さんを殺めた連中だと誤解しました。」と美章園文子は恐る恐る言った。

美章園文子自身も身の危険を感じて出頭することになったと言う。日根野三郎から多くのことを聞いていた。

湖論暮刑事の質問に対しては、全て正直に応答していた。我が子を誘拐し、実の父親から身代金を盗ったことは罪になることは分かっていた。美章園文子にすれば、そのようなことは問題ではなかった。

「あなたのことは、まあ・・・横に置いてですよ。日根野三郎さんのことです。彼は何を追いかけていたのですか？そのことによつてあなたにも身の危険が及ぶとはどういうことですかね？」と湖論暮刑事は出来るだけ優しい声で尋ねた。

「あの人との出会いは、早池峰山で埋伏したお金を回収するために山行した時でした。ザックを空にするために雨具とかを車の中に置いていったのですが、突然に天候が変わったこともあり猛烈な雨が降ってきたのです。河原坊の駐車場に車を置いてあるのでこのコースで降りてきたのですが、足元の悪い瓦礫の登山道なので不注意で足を捻挫しました。視界は悪いし、雨具もないなかで「打石」のところで風を避けていました。そこに日根野三郎さんが通りかかったのです。彼は、寒さで震えていた私を発見しました。

彼にすれば、私の状態は異常だと想ったのでしょね。声をかけてくれました。彼は、予備のポンチョを貸してくれました。そして、テルモスから熱いコーヒーも出してくれました。おかげで寒さも防ぐことができ体力も回復したのです。

彼は、私のザックが膨れているのにもかかわらず雨具がないのを訝っておりました。しかし、彼は何も聞かず私を抱き起して降りましょう・・・と言ってくれました。彼は、私の不自然に重いザックのことは何も聞かずに担いでくれました。私は、彼の肩を借りて不安定な瓦礫の登山道を降りました。一人でも大変なルートなのに彼は何もいわず力を貸してくれたのです。増水した沢では、彼は自分のことより私の安全を優先して、安全な渡河ポイントを探してくれました。あの時は、大変だったと想います。捻挫していなくても渡河するとなると怖い状態でした。」と美章園文子は、その時の恐怖を想起したのか不安げに言った。

「それから・・・。」と湖論暮刑事。

「彼は駐車場までエスコートしてくれました。お礼のこともあり名前を聞きましたが、いいよ！いいよ！と言うばかりで何もおっしゃらなかった。ただ、短い会話でしたがお互い大阪の人間だと言うのがわかりました。それが、親近感を呼びました。私は丁寧に敬礼を言いました。利き足が捻挫してないので車の運転はできるので私は、車でその場を立ち去りました。彼には感謝してもしきれないです。あんな男らしい人はいないですね。」

その後、偶然にも金剛山の頂上で再会したのです。山頂のベンチでお握りを食べている時に、私の方が気がつきました。彼は何かを考えているかのよう、うつむき加減で歩いていました。売店でビールを買って美味しそうに呑んでいました。私は、彼に声をかけました。びっくりしたような顔をしていました。どこの誰だか分からなかったようでした。早池峰山でのお礼をあらためて申し上げたら思い出してくれたようで、あの時の・・・という反応でした。彼も山好き、私も山好き。二人とも単独行を好むタイプなんですが、話が合いました。山では男も女も、金持ちも貧乏人も関係のない世界ですから・・・。それから彼と連絡を取り合うようになって二人で山行することが多くなりました。

あっちこつちと二人で山行しました。女が単独でなかなか行けない山でも彼がおれば安心して行けました。当然のことながら私も女ですので、彼に魅かれ始めている自分を感じていました。しかし、あの方は潔癖なんですよね。私の気持ちを知っているのに、何も求めようとしません。そういう意味では、山の同志・・・友人です。男の中の男を人生初めて会うことができました。」と美章園文子は懐かしそうに言った。

「美人だ！」と湖論暮刑事は美章園文子が語る口元を見ながら想った。

昨日、美章園文子が四千万円の札束を持参して自首してきた時は取り乱していたこともありまともな聴取は出来なかった。何かに脅えているような挙措で

あり、湖論暮刑事は持ち込まれた札束の番号照合をする程度で終わっていた。聴きとった内容は、昨日に久米田に携帯メールした程度の内容だった。核心的なことについては、これからだった。美章園文子にすれば、昨夜こそが本当に熟睡できた時かもしれない。堺署に留置されたことで心の平安が取り戻されたようだ。

「日根野さんは何をしていたのですか？」と湖論暮刑事は核心に入る質問をした。

「彼は……。」と美章園文子は言いよどんだ。

「彼は、人身売買の闇組織を追跡していました。」と気を取り直すように言った。

「……」

「私のハンドバックを返していただけます。そこにメモがあります。」

湖論暮刑事は、若い刑事に合図をした。若い刑事は、退室した。しばらくして美章園文子のハンドバックを持ってきた若い刑事は、湖論暮刑事に手渡した。「彼は、山行の途中で後ろを振り返ることが多くなりました。何かを気にしているようでした。私は、彼に尋ねました。何かびくびくしているように思える何かあるのか？と。そうすると彼は、重たい口を開いて言いました。最近、山に入っても誰かに尾行されているような気がする。最初は被害妄想ではないかと聞き流していたのですが……。そのうち山行を重ねているうちに確かに尾行されているようなことを私も感じ始めていました。ある時、彼は言いました。これ以上、一緒に山行することは危険だ。君にも危害が及ぶ恐れがあると仰いだしたのです。なぜ？と聞きました。彼は、言い出しにくそうに語り始めました。彼が、今取り組んでいることを……。そして、彼が参加している組織のこと。チームの一員として闇組織を調査していることを……。」

湖論暮刑事は、美章園文子の前にハンドバックを置いた。美章園文子は、中から手帳を取り出した。そして、湖論暮刑事の眼を見つめながら言った。

「このサーバーに彼の暗号化されたワードのファイルなどがアップされています。IDとパスワードは、ここに書いてあります。ワードファイルの解除パスワードは、●●●●●●です。」と言った。

「……」

湖論暮刑事は、凍りつくような衝撃を背中に感じた。

またもや湖論暮刑事は、若い刑事にパソコンを運び入れるように指示した。若い刑事も調書を書いていて事態の重さにショックを受けていた。すぐに無線ラップ装備のパソコンを取調室に持ち込んできた。

若い刑事は、すばやくパソコンを立ち上げるとVector（ベクター）からFF

FTPソフトをダウンロードした。そして、メモに記載されているサーバーに接続した。湖論暮刑事にすれば、何をしているのかさっぱり不明な作業だ。サーバーに接続すると若い刑事は、湖論暮刑事に向かって言った。

「刑事！これです！」と言いながらサーバー上のファイルをデスクトップにダウンロードした。若い刑事は、美章園文子が口頭で言ったパスワードを入力してワードファイルを解除した。

そこには、日根野三郎が調べ上げた調査内容があった。湖論暮刑事は、衝撃を受けた。国家権力である捜査機関が調べようと想っても出来ない事実が記述されていた。

「何と！素人のできることではない！——と湖論暮刑事は想った。湖論暮刑事にすれば、高石たち素人が行っている捜査をある意味で軽視していた。

「素人がすることは所詮、探偵ごっこだ！——と想っていた。しかしこれは何たることだ。

「警察が出来ないことはない」と想っていた湖論暮刑事の固定観念を完璧に打ち砕いた。打ち砕かれたのは、湖論暮刑事のプライドであった。

若い刑事もワードファイルに挿入された画像や調査内容を読む進むうちに、わなわなと体を震わして泣いていた。

「日根野さんは、自分の身に何かあれば……。このことを信頼できる人に知らせてくれと言っていました。覚悟していたのです。日根野さんは、チームで動いていましたが、組織の防衛上のこともあって、相互の連絡が取れない組織だと言っていた。チームで動くといっても単独の自己責任の世界だ！とも言っていた。日根野さんは、事故死ではありません。」と美章園文子はきっぱりと言いつつ切った。

湖論暮刑事は、署の上司に報告する前に久米田に連絡した。それが仁義だと想ったからだ。当然、久米田から高石、白鷺、小百合嬢に連絡された。

この後、湖論暮刑事は堺署の上司に報告した。プリントアウトされた資料を読んでいたトップも驚愕のあまり言葉は出なかった。堺署は、このことでひっくり返るような騒ぎとなった。府警本部に報告するとともに大規模な捜査本部が立ち上がった。捜査本部が置かれた大会議室の入口に「槇尾山蔵岩殺人事件捜査本部」という大看板が掲げられた。所轄外で起こった事件だが、蔵岩だけの事件ではないということもあり和泉署とも連携を取った大阪府警全体の捜査となった。

湖論暮刑事の正義感は燃えあがった！警察官になった時の初心がよみがえった。

湖論暮刑事たちは、日根野三郎が残した資料（日根野ファイル）に基づき捜査を開始した。さすが、国家権力の力を背景にした捜査は確実に強力だった。民間捜査機関ほどの柔軟性はないが組織としての機動力は抜群であった。

確実に捜査の範囲は絞られて行った。人身売買の闇組織は、海外の犯罪組織とも連携が取られていた。犯罪もグローバルだ。日根野三郎を謀殺した犯罪組織を潰さない限り市民の平安は確保できない。今こそ「正義」を貫くことが湖論暮刑事たちに与えられた使命だ。

捜査の大枠の部分は日根野ファイルによって具体化されていたが、裏付けを担保していくという作業においては遅々としてすすまなかった。

そのような時であった。サイバー犯罪捜査をマニアックに研究している和泉署の若い刑事が不審を抱いた。たまたま自宅でネットオークション関係のサイトに接続していた。そのサイトで偶然にも「コンデジカメラ」と「GPS機器」がセットでオークションにかけられているのを知った。日根野三郎のコンデジカメラとGPS機器が行方不明であることは、周知のこととなっていた。和泉署の若い刑事は、そのサイトのページを保存するとともに売り手の情報を確認するために競りに参加した。どういうわけかその出品物については人気があり、こまめに金額が上昇していた。オークションの終了時間が迫るまで後わずかな時間の間に金額を入れて競りに勝つ必要があった。上司と相談している余裕はないと想った。若い刑事は、パソコン画面を見ながら久米田の携帯電話に連絡した。

久米田からの指示は、絶対に競り勝てとのことだった。若い刑事は、品物の価値にすれば少々高い金額の数字を入力した。結果的に落札したが、これが事件と何の関係のないものであれば、痛い出費となると想った。しかし後悔している余裕はなかった。しばらくすると先方から確認メールが届いた。

翌日に指定の口座へ入金した。品物は、三日後宅配された。若い刑事は、品物が届くと梱包されたまま捜査本部に持ち込んだ。

その品物は、念のため鑑識に運ばれた。日根野三郎の指紋が検出された。捜査本部はにわかに沸騰した。

湖論暮刑事も報告を受けた。さっそく売主の住所、氏名が記載された配達伝票がファックスされてきた。堺署管内の住所ということもあって、湖論暮刑事たちは急行した。売主の自宅に行くと、本人は勤務中とのことなので家人に勤

め先を確認して、そこに湖論暮刑事たちを乗せたバトカーは疾走した。

勤め先で本人に事情を聴きとった。供述によれば、大阪の難波駅周辺のリサイクルショップで購入したとのことだ。

湖論暮刑事は、難波駅周辺を所轄している駐在所に緊急連絡した。持ち込んだ人間の調査だ。

連絡を受けた大阪府立体育館横の駐在に勤務する警官は、指定のリサイクルショップに駆け込んだ。

リサイクルショップに持ち込んだ人間の情報が、湖論暮刑事に届いた。リサイクルショップ近辺でよく見かけるアジア系の外国人だとのことだ。住所氏名は不明とのこと。早速、リサイクルショップ近辺での張り込みが行われた。リサイクルショップの店員の協力もあって、そのアジア系外国人が特定できた。

この男の画像も日根野ファイルにあった。夜になれば、繁華街で道行く男に何がしかの声をかけていた。張り込みをしている若い刑事にも声がかかった。

片言の日本語で、男の欲望を掻きたてる声掛けをしていた。その類の不法行為だ。日本の警察でおとり捜査的なことが許容されているかどうかは不明だが、この若い刑事は、不信感を与えては今後の捜査に障害になると判断した。意を決して誘導される店に飛び込んだ。実に如何わしい店だった。この店も日根野三郎が残した資料の中にもあった店だ。そこで、この男が捨てたタバコ箱パッケージを取得した。指紋照合のためだ。すぐに指紋照合がされた。コンデジカメラ・GPS機器と同じ指紋が採取された。

物証が確保できたこともあって逮捕状が請求された。翌日の夕方、難波駅周辺で男は逮捕された。容疑は殺人と窃盗だった。同時に関連する箇所へ捜索が入った。

一部の捜索対象ビルで抵抗があった。捜査陣に対して闇組織の構成員による散弾銃の発砲があった。捜査に加わった一人の若い警官が負傷した。たちまちビル周辺は、異様な緊張に包まれ厳戒態勢がひかれた。武装した闇組織の構成員と大阪府警察M A A Tが雑居ビルの集中する繁華街で対峙した。

制圧戦で新型放水車が導入された。ホースを持つのは日常的に訓練された屈強な若い機動隊員だ。まるで爆弾を処理するような防護服を着用して機敏に動いた。凄い圧力の放水が闇組織の構成員に向けて放射された。入口のドアは圧力で吹き飛び、とともに放射された人間の体躯はボールのように転げまわった。催涙剤が混入された水塊を、顔面に受けた暴漢はしばし息も出来ずにのたうちまわった。

押収したパソコンのハードディスクに日根野三郎たち、久米田、白鷺、高石、

小百合嬢の日常行動資料があった。このことは、すぐに久米田へ連絡された。捜査本部としても緊急に保護する体制が取られた。日根野三郎の周辺を調査していた小百合嬢グループのことは闇組織も無関心ではいらなかったようだ。残存する闇組織の一部は地下に潜ったようだ。そして、闇組織からの報復が開始されようとしていた。

湖論暮刑事は、逮捕したアジア系外国人の取調を担当した。すでに湖論暮刑事は、「仏の湖論暮」ではなかった。鬼のような形相でかみつく。間に入る通訳を抜きにして徹底的に絞った。(ただし肉体的暴力は行使せず。あくまで鬼のような気迫です。)何かあれば自分が責任を取るつもりだった。退職も考えて背広の内ポケットには用意した辞表を入れていた。

取調は、時間との勝負だった。湖論暮刑事にすれば、時間が経過すればするだけ日根野三郎の仲間たちや小百合嬢のグループへの危害が予想された。市民への危害を許さない。この最低線を守るのが堺署の刑事としてのプライドだった。「正義感」だけでは「正義」は実現できない。力が必要だ！今、必要なのは気迫だ！

被疑者であるアジア系外国人は、ぼつぼつと片言ではあるが自供を始めた。日根野三郎の殺害時の状況を自白しだした。

闇組織は、山行に出かける日根野三郎を尾行し、車ごと拉致した。和泉市にある雑居ビルのアジトに連れ込んだ。多少の暴行では日根野三郎は何も言わなかった。口だけは固いのが取柄の日根野三郎だった。日根野三郎は、敵の隙を見つけ逃亡を図った。その際に踊り場で揉み合い、雑居ビルの階段から突き落とされた。犯人たちは、処置に困った。

日根野三郎を槇尾山に運んで滑落死を装うことを計画した。無理やりウイスキーを日根野三郎の喉に流し込んだ。瀕死状態の日根野三郎を後部座席に乗せて和泉市の山中の槇尾山まで運んだ。すでに日根野三郎の息はなかった。携帯電話を取り上げて偽装メールを送信した。犯人たちは四人がかりで日根野三郎を巖の頂に運んだ。頂には、平日ということもあって登山者はいなかった。頂から日根野三郎を放り投げた。

これが日根野三郎の殺人状況の顛末だった。コンデジとGPS機器は、物珍しく思った犯人の一人、アジア系が持ち去った。

かくして日根野三郎は、探偵戦という戦場において「名誉の戦死」を遂げた。壮絶な死だ！殉職だ！

残された家族からすれば、何が名誉だ！と嘆き叫ぶだろう！

湖論暮刑事は、日根野三郎の無念を想った。そして、取調室の壁に頭を打ちつけながら泣き崩れた。同席している若い刑事も声をおさえて泣いていた。通訳担当も咽び泣いた。

湖論暮刑事は、立ち上がり背筋をピンと伸ばした。そして、和泉市槇尾山方面の方向に向かって最上級の敬礼をした。

事態は急迫していた。

湖論暮刑事の携帯電話が振動した。

湖論暮刑事は、携帯電話を胸ポケットから取り出した。久米田からの着信だ。

「もしもし湖論暮ですが・・・」

「俺だ！浅香との連絡が取れない。警護体制はどうなっている？」

「所轄からパトカー一台で警官二名が交替で張り付いている。」

「そうか。嫌な予感がする・・・」と久米田。

久米田は、高石に電話した。

「俺だ！異常はないか？高石！」

「今のところ何もない。家族は、親元に避難させた。」

「そうか！浅香との連絡が取れない。」

「なんでだ！」

「わからん。気になるので浅香のスナックに行く！」

高石は電話を切った後も何だか胸騒ぎがしてきた。高石は、白鷺に安否確認の電話を入れた。

久米田は、愛用のスーパーカブを取り出し小百合嬢のスナックに向けて走った。太陽も落ちて周囲は闇だ。この季節になると日没時間は早い。真っ暗な道を飛ばす。人通りのない農道を全力疾走して走った。三〇分ほどで、小百合嬢が経営するスナックの前に着いた。

その時、久米田のスーパーカブに向かってあわや衝突するのではないかと想うほどの急発進で一台のRV車が突っ込んできた。かろうじて避けた久米田は、不安を感じた。小百合嬢の店に入ると店内は荒らされ、小百合嬢の姿はなかった。店近くの路上に警護中のパトカーがあった。久米田が窓越しに覗きこむと、警官の一人は、右肩を銃弾によって打ち抜かれていた。出血はそれなりであるが、命には問題なさそうだ。久米田は、とりあえずの止血処置をした。もう一

人の警官は、頭をかかえて店前の路上で呻いていた。背後から金属バットか何かで殴打されたようだ。こちらにも命には問題なさそうだ。

「大丈夫か？すぐに救急車を呼んでやるから・・・。」

「久米田！不意にやられてしまった。申し訳ない。相手は、四人組だ。銃で武装しているぞ！追え！俺たちにかまうな！」と顔なじみの警官は、苦痛で歪んだ顔を久米田に見せないようにしながら声を絞り出した。

久米田は、一一九番に緊急電話をするとともに捜査本部に通報した。

「浅香が拉致された。賊は、309号線を御所市方面に向かって逃走した。車種は、●●●のRV車。ナンバーは○○○○だ！緊急配備を頼む。なお、賊は拳銃で武装しているぞ！俺は、今から追跡する！」

久米田の連絡で、309号線の各所に緊急の検問が設置された。そのうちの一つである黒山署付近の船渡北交差点で検問体制を取っていたところに不審車両が警官の制止を振り切って突っ込んできた。

その際に黒山署の若い警官が、自らの体を張って不審車両を止めようとした。空に向かって生まれて初めての威嚇射撃をした。物怖じしない犯人グループのRV車は突っ込んできた。弾き飛ばされそうになった若い警官は、前のめりにジャンプして車の前部にしがみついた。犯人グループの車は、夜の309号線を蛇行運転して、くらいつく警官を払い落としにかかった。助手席に座る犯人は、散弾銃を取り出した。これ以上のくらいつきは自分の生命も危険ということもあるが、流れ弾が関係のない市民を襲うことも考えられた。

若い警官は、意を決して手を放した。柔らかな体なので、舗装された道路上に数回転しながら転がったが幸い怪我はなかった。

犯人グループの車は、全力疾走して309号線を駆け抜けた。スパーカーブで追跡する久米田であるが、やはりRV車には負ける。車から弾き飛ばされた若い警官の傍でスパーカーブを止めた。

「大丈夫か？怪我はないか？」と久米田はこの勇敢な若い警官に聞いた。

「本官は大丈夫です。しかし悔しいです。」と少しばかり出血した額の血を右手でぬぐった。

四人組の犯人グループは小百合嬢を拉致して309号線を御所市方面に逃走していた。

―何で奈良県方面に逃走するんだ？盆地に逃げ込んでどうする気だ。普通なら海・・・港だろ。そこから船に乗り換えて逃走するのが一般的なような気がするけどな・・・と久米田は思った。

すでに大阪府警から奈良県警に連絡が取られていた。奈良県側の主要な道路

は奈良県警によって封鎖されようとしていた。

―309号線となると水越トンネルだな。賊もあそこを封鎖されることも分かっているはずだが……。読めん！―

水越トンネルの出入り口では、封鎖準備の途中であった。幾台かのパトカーで封鎖しようとしていた。奈良県側では、まだ封鎖は完了していなかった。水分、青崩と通過してきた犯人グループのRV車が暗闇を背景に突っ込んできた。銃を取り出したもの人質をとられていることもあって実際には発砲は出来ない。現場で緊張が走る。

犯人のRV車は、前方の封鎖線を無視して右折した。水越峠に抜ける旧道を全速力で犯人グループのRV車は疾駆した。

すぐに水越峠を封鎖しているパトカーに無線連絡が取られた。幾台かのパトカーが青崩方面に向かって走る。ハサミうちだ。

無料駐車場に犯人グループのRV者が乗り捨てられていた。この場所で見えれば、犯人の逃走先は、金剛山の山中でしか考えられない。

至急に大阪府警本部に連絡された。山頂の宿泊施設の香楠荘や社務所などを保護する必要があった。それも一時間半以内に手配する必要があると判断された。人質づれの登山として考慮してもそれぐらいの時間で体制をつくる必要があった。これ以上人質を増やす必要はなかった。

大阪府警のヘリコプターが飛んだ。大阪府警M A A Tの部隊だ。念のために大和葛城山の宿泊施設にも部隊は投下された。

大阪府警による総力戦が始まろうとしていた。正義は実現されなければならぬ！

金剛山周辺の道路は、大阪府側・奈良県側とすべて封鎖された。ありとあらゆる登山ルートへの登山口に武装された警官が配置された。山域は、蟻の子一匹も出入りできない厳重警戒のもとにおかれた。

犯人グループは、藪の中から現れた。そして、金剛山キャンプ場に進出した。犯人グループは、小百合嬢を人質にしてバンガローの一角を占拠した。すでに大阪府警によって、当日の宿泊キャンパーは保護され別の安全な場所に移動していた。また、ロープウェイ駅などの周辺の施設は、大阪府警によって制圧されていた。

犯人グループ四人と大阪府警との対峙が始まった。その距離数十メートルだ。

防弾服に身を固めた警官が、前方を注視していた。銃撃戦になれば、幾人かの死傷者も出る可能性はあった。しかし、人質救出が最大の優先課題だった。

大阪府警は、香楠荘に現地本部を設置した。それとともに多くの車両が運びこまれていた。

バンガローを取り巻く大阪府警の部隊は、およそ一〇〇人。周辺の登山道封鎖では、ありとあらゆる場所から動員された部隊が何百人と厳戒態勢に入っていた。奈良県側では、奈良県警がカバーする形になっていた。

すでにこの闇組織の構成員のほとんどは、各所轄の奮闘で逮捕されていた。一部の犯人グループは抵抗し銃撃戦となったところもあったが、死傷者は出なかった。残された犯人は、この山頂に居座るこのグループのみだった。おそらく闇組織のボスが含まれているだろうと推測できた。

「何ゆえ金剛山なのだ！ここに追い込まれた訳でもないはずだが……」と久米田は想った。

現地での指揮は、府警本部長自らが執ると言う。人質解放への交渉が始まった。

九

大阪府警の交渉人担当が、車両の陰からハンドマイクを握り呼びかけた。映画やテレビドラマでよく見るシーンだ。月並みな言葉で呼びかける。

「……君たちは、完全に包囲されている。ただちに人質を解放し、武器を捨てて出てきなさい……」と呼びかけた瞬間。

犯人グループが籠るバンガローの窓から銃撃が始まった。想わず資器材搬送車のトラックのかけに身を隠す交渉人担当。一方的な銃撃は、およそ五分間続いた。

空気を切って頭上を掠める銃弾。防弾盾の背後に隠れ、身を縮めて退避する警官。散弾銃の弾がパラパラ空から降ってくる。狙いが正確なライフルの弾丸が、車両のガラス窓を撃ち抜く。投光機は撃ち砕かれ一瞬、漆黒の闇に包まれたがすぐに別の投光機が光り輝く。発砲音は、麓の千早赤坂村まで響き渡り村民は恐怖に打ちふるえた。

「どうやら相当の量の弾を持っているぞ……」と水越峠で待機していた久米田は想った。

包囲網の最前線部隊に後退が命じられた。事態は膠着状態だった。久米田にはひとつの不安があった。先ほど小百合嬢のスナックに入った時に、荒らされ

た店内の床上に注射器が散乱していた。どうやらインスリンのようだ。小百合嬢が糖尿病を患っているとは聞いていなかったが、あの気の強い性格であれば自分自身の弱みを決して他者に見せたりはしない。拉致されて、数時間が経過している中で、もし小百合嬢が糖尿病を患っているなら時間がないことになる。秋が深まっていく山中では、徐々に気温が低下していった。投光機が煌々と光輝く。犯人グループが閉じ籠ったバンガロー周辺は、真昼のような明るさだった。

高石たちは、堺東の白鷺事務所に集結した。小百合嬢が、またもや拉致されたという急報を聞いた全国に散らばるH高校同窓生一〇数人が、仕事や家庭を放り投げて参集してきた。お種さんとミサキ嬢は、あわてふためいて炊き出しの準備をしていた。

高石にすれば、今は何もできないという忸怩たる想いで胸が詰まった。参集した同窓生たちは、高石に状況の経過説明を求めた。

高石は、今までの経過を逐一説明した。日根野三郎のこと・・・美章園文子のこと・・・蔵岩での滑落を装った日根野三郎の殺人事件などを・・・。浅香小百合が拉致されて金剛山で犯人グループと大阪府警が対峙していることは、NHKのニュース番組が報道した。高石たちは、テレビの前に釘づけとなった。今のところテレビからの情報しかなかった。高石は久米田の携帯に電話をしたが、電波状況が悪いのか不通だった。湖論暮刑事に電話した。

湖論暮刑事にしても大きな組織の中の小さな歯車でしかない。彼の持っている情報からは、小百合嬢の安否情報は不明だった。

「申し訳ない！高石！状況が分かれば連絡する。」と湖論暮刑事は無念さを堪える声で言った。

どこで調べたのか不明だが、白鷺事務所に続々と北新地時代のお馴染みの客だった政界、財界、宗教界などなどのトップが訪れるようになった。小百合嬢拉致のテレビニュースを聞きつけて、何をすればいいのか？何か出来ることはないのか？と心配顔で高石たちに説明を求めた。彼らにとっても浅香小百合は、マドンナだった。彼らは、「体力的には何もできないが・・・。」と言ってかたわらの秘書から小切手を受け取り「金で申し訳ないが、金があれば何かと出来る。悪いが怒らないでくれたまえ・・・。」と言い残して一〇〇万円単位の金を残していった。

一夜が明けた。高石たちは一睡も出来なかった。高石は、NHKのテレビニ

ユースを見た。大和葛城山の頂上から金剛山を眺めた映像を流しながら、アナウンサーは、「強行突入も時間の問題！」と大阪府警のある幹部からの取材だと断りながら報じていた。

これを聞いた白鷺事務所の同窓生の一人は、はいていた靴を脱ぎ白鷺事務所の貴重な備品であるアナログテレビのブラウン管に向けて投げつけた。一瞬、アナウンサーの顔が歪んだ。

「何だと！見殺しにするのか！馬鹿な！」

お種さんの嗚咽にも似た泣き声が聞こえてきた。ミサキ嬢の臉にも涙が充満して今にも泣き出しそうだった。小百合嬢の二人の子どもも肩を寄せ合って泣いていた。

高石の携帯電話に一本の電話が入った。

「高石さんですか？」

「そうですが、どちら様ですか？」

「いや突然に申し訳ございません。実は、日根野三郎さんと同じ組織に属していたのですが・・・。」

「はあ・・・」

「いや我々も何かしなければならぬと結論が出ました。ただ、我々は戦うということについては、全くの無力です。しかし、死を恐れぬ五〇人ほどの志願者がいます。何か手伝うことがあれば、連絡してください。あいつの弔い合戦をしてやりたいのです。」

高石は名状しがたい感動に襲われていた。

そんな時。白鷺事務所の玄関ドアが開いた。疲れ切った顔の久米田が入ってきた。白鷺事務所に参集した仲間は一様に久米田を見た。久米田を見ると、小百合嬢の二人の子どもが小走りで近寄った。久米田は、二人の肩を抱きよせた。二人の子どもは、久米田の厚い胸の中で泣きじゃくった。

「久米田！お前は現場のはずだろう？どうした？」と高石は驚きの声で言った。

「俺は、先ほど辞表を出してきた。みんなもニュースで聞いたと思うが、どうやら強行突入の可能性が出てきた。このままでは、浅香は巻き添えをくって命の保証はない。とにかく時間がない！」と久米田は悲壮感を隠そうともせず言った。

「なんでだ？いつしかのA山荘の事件の時は、犠牲者は出たが人質は救出されたぞ！鉄球作戦とか色々大阪府警も考えているだろうに・・・。」と白鷺が言った。

「あのようなバンガローで鉄球を使えば、中の人間は死ぬ・・・。それに、

正味の銃撃戦になれば、銃弾はバンガローの壁をたやすく貫通し中の浅香も巻き添えをくうだろう。死ぬぞ！」と久米田は断定するように言った。

「今晚が山場だ。最後のチャンスだ！俺は、浅香を助ける！」と言い切った。

「何か作戦があるのか？」と高石。

「あることはあるが、今回は俺だけの力ではどうしようない。みんなの助けが必要だ！」と久米田。

「お前だけのマドンナじゃないぞ！久米田！」と九州の単身赴任先から何もかも放置して飛んできた同窓生が言った。

「そうだ！そうだ！」と異口同音に他の同窓生も言った。

「俺の考えを言う。今夜、単身で乗り込む！」と久米田。

「そこでだ！作戦を説明する。必要な物資のリストだ。」

白鷺事務所に集まった高石たちの同窓生仲間、お種さん、ミサキ嬢、裕次郎君、青島青年・・・などなどはお互いの顔を見回した。壮大にして楽しいそんな救出作戦だった。しかし、久米田には危険が伴う作戦だった。皆は押し黙った・・・。

「そりやおもしろそうだ！浅香には悪いが、これは面白そうだ。」と白鷺が言った。裕次郎君は、このどうしようもない伯父貴の背中たるんだ贅肉をおもいきりつねった。

「ひえ・・・っ」と白鷺は小さな悲鳴をあげた。

作戦の内容は、大和葛城山の頂上で五千発の花火を打ち上げるとのことだ。花火そのものは、久米田の伯父貴の友人が花火師ということもあってここから調達する。すでに久米田が退職OBの伯父貴に作戦内容のことは伝えてあった。伯父貴と友人の花火師は無条件に協力することのこと。調達資金は、北新地のお客様が潤沢なほどの小切手を置いていってくれた。久米田からの連絡が入ったのだろう。

これは、包囲する大阪府警への攪乱となる。さすが、組織に反抗することにこだわりのある久米田は潔く大阪府警を退職する道を選択した。この季節はずれの花火大会は、バンガローに籠る犯人グループにも一定の動揺を与えるかもしれない。とにかく、あの嚴重な包囲網を突破するには異常な行動が必要だ。ただ、大和葛城山の頂上は今、各報道機関の取材陣で占拠状態になっていた。また、周辺の道路にしても嚴重な検問体制がひかれていた。また、一部の道路は封鎖されていた。犯人グループのほとんどが所轄警察の奮闘で身柄を拘束されているとのことだが、残余の犯人たちが後方から反撃してくる可能性もあった。とにかく予想外の闇組織だ。これほど武装している犯罪組織も珍しい。

日根野三郎は、これほどの巨悪と対峙していたのか。と思うと高石も怖れ戦くのだった。山頂へ物資を運ぶ段取りについての説明があった。とにかく大阪府警をだますには申し訳ないが、背に腹は代えられない。これについては、湖論暮刑事が協力することだ。湖論暮刑事も組織に抗うことは出来ないというタイプの人間だった。しかし、彼も胸ポケットに忍ばせていた辞表を提出した。

山頂までのルートはいくつかあった。青崩付近は、嚴重警戒のため一般車は通過できない。奈良側のルートも奈良県警が抑えていた。

久米田の伯父貴が定年退職後勤務していた警備会社のパトカーもどきの営業車を使うという。夜であれば、ちよつとした細工でパトカーに見える。これに湖論暮刑事が乗車して花火を積んだトラックを先導することだ。運転は裕次郎君だ。湖論暮刑事が、辞職願を出したことはすぐには伝達されていない。湖論暮刑事のことを知らない警官は、おそらく大阪府警にはいない。この盲点を利用して、包囲網を突破し「弘川寺」まで運ぶ。あとは、登山道や林道を利用して山頂近辺に到達する。これら作戦資材のボツカ担当は、同窓生一〇人と日根野三郎が属していた組織の弍い合戦部隊五〇人が担当することになった。色々が必要なものがあつた。これについては、青島青年が調達すると言う。着々と準備が進む。時間がなかつた。集合場所は、「弘川寺」と決まつた。山頂付近の目的ポイントへ集合する時間は、午後九時三〇分。作戦開始時刻は、午後一〇時と決まつた。

犯人グループからの意思表示があつた。犯人グループは、包囲する大阪府警MAATの前に、小百合嬢を引き出した。散弾銃を小百合嬢のこめかみに押し付けて大声で言つた。

「逃走用のヘリと海外脱出用の飛行機を関空に用意せよ！」とのことだ。小百合嬢は、元氣そうだった。少しやつれた緋牡丹お竜さんの感じがした。しかし、彼女は恐れを抱いた顔をしていなかった。氣丈夫な振る舞いをしていた。

小百合嬢は叫んだ！

「私のことはいい！ただちに突入してこいつらを撃ち殺して！」と。さすが緋牡丹のお竜さんだ。犯人グループの一人は驚いた。普通なら泣き叫んで命乞いするものだが、この女は違う。氣迫が漲っていた。ただ、これら犯人グループのメンバーは、これから彼らの身に降りかかる真の恐怖を、まだ知る由もなかつた。久米田が動く。あの「伝説」が再来するのだ。それも警察官という足枷が外れた久米田が浅香と交わした四〇年以上前からの約束を守るために鬼になつてこの難局に挑む。

大阪府警の方針は明確だった。「テロリストとは取引をしない」のが原則だった。いつまでも今の膠着状態を継続する訳にはいかない段階に達していた。包囲する陣営にも少しばかりの疲れと焦りが生じていた。たとえ突入したとしてもこちら側の死傷者も幾人か出るだろうと推測できた。人質の生命を保証できない。また、死ぬのは、前途有望な若者だ。

香楠荘に置かれた現地本部で、喧々諤々の議論がされていた。大阪府民も奈良県民もテレビの前に釘づけだった。現場には、カメラは入ることは出来なかった。大和葛城山の頂上からの金剛山の映像を流し続けていた。時折、遙か上空を飛ぶ取材ヘリがとおまきに映した金剛山頂上の映像をテレビに流していた。

弘川寺近辺に作戦資材が集結した。湖論暮刑事はほっとした。幾つかの検問を通過してきた。思ったとおり警察手帳やバッチがなくても顔パスだった。

すでに日没だった。周囲は暗い。限られたヘッドランプだけで目的ポイントまで荷を運ぶ必要があった。高石は、各人の役割を指示した。このコースの案内人は、青島青年だった。このルートを何度も踏破しているという。彼は、先頭にたつてこの大部隊を誘導した。

目的ポイントに到達するのは、通常ルートだけでは行けない。目立つことは厳禁だった。大阪府警の部隊のほとんどは、金剛山周辺に動員されていることもあり、こちら方面は手薄だとしても警戒する必要があった。

藪漕ぎをしながら進む。取材陣にも気付かれてもいいけない。青島自身の背中にも大きな荷物が括りつけられていた。

「いや・・・ぞくぞくするな・・・この緊張感はずばらしい！——と青島青年は思った。

予定より早く目的ポイントに到着した。秋も深くなって気温も下がって来ていたので山頂の取材陣はごくわずかだった。まさか、日没後以降において、急展開はないだろうとの判断だった。NHKのカメラクルー数人が金剛山を背にして談笑していた。目的ポイントは、金剛山方面に向けられたテレビカメラの前方になる。ここで、久米田は高石たちと別れた。久米田は、青島青年一人を連れて別方向に移動した。

「ところで、予報は確かなのだろうか？」と久米田が言った。

「間違いありません。私は気象予報士の資格を持っています。このあたりの気象データを過去数年分調べました。今日は絶好の条件です。それもここ数時間の勝負です！」

「時間がない！頼むぞ！青島！」

「まかしてください」

青島は、星明りもない暗闇の中でザックから何かを取り出した。そして、それを久米田に手際よく装着していった。

久米田もザックから荷物を取り出した。ヌンチャクと回転リボルバーだ。闇の中で見れば本物と見間違うほどのものだった。

「これが、伝説のエアガンか！——と青島青年は想った。

「久米田さん！それは何ですか？」と青島青年は、久米田が持つ卵のようなものを指さしながら尋ねた。

「ああっ・・・これか花火玉だよ。特別仕様の花火さ。急遽、伯父貴の友人である花火師に作ってもらった。これが威力を発揮するぞ！」

決行時間が迫っていた。決行時間の前に久米田の作戦を実行する必要がある。青島青年が確信を持って言った予報というか予想が当たった。風が下から吹きあがってきた。

「今ですよ！久米田さん」

久米田は、上昇気流をうまくつかんで飛んだ。真っ黒に染められたパラグライダーが高度を上げていく。風の方向も青島青年が予想したとおりだった。久米田のパラグライダーは、どんどん上昇し金剛山方面に向かって飛んでいく。

「まさに神風だ・・・。良かった——と青島青年は素直に想った。

こちらの花火部隊では、久米田の伯父貴と友人の花火師が談笑していた。

「クメさんよ！ありがとうな・・・冥土の土産になるぞ！一世一代の大仕事だ。花火師の仲間も協力してくれてよ。それぞれ自慢の花火玉が集まった。これは、見事なショーになるぞ！」と言いながら発火準備にかかっていた。打ち上げの段取りはプログラム化されていた。後は、所定の時刻にキーボードを操作するだけだ。

「クメさんよ！今日の花火は、特別仕様だぜ！ちよつと工夫をしてあるものばっかしだぜ！空高く飛びあがってから炸裂するように仕込んである。おそらく大阪の海岸付近からも見えるぜ！大阪の人間も奈良の人間も度肝を抜くぞ！こんな晴れ舞台のチャンスを与えてくれたクメさんに感謝するぜ！」

「そうかい！生きていて良かったなあ・・・。」と久米田の伯父貴が言った。

「さて時間だぜ！行くぜ！」

午後一〇時になった。準備は花火師の計画どおり要領よく整っていた。わずかな時間しか与えられていない作業だったが、六〇人の大部隊は効率的に動いた。周囲のススキが風に揺れていた。潜伏していたボッカ部隊六〇人は、音も立て

ないでじっと蹲っていた。これから起こるであろう出来事は、人生の記憶に鮮烈に刻み込まれるだろう。孫にも自慢できるエピソードとなるだろう。高石も白鷺もワクワクしてきた。激しい鼓動が感じられた。

一発目は、漆黒の空に飛び上がった。そして空高い地点で炸裂した。続けさまに次々と打ち上げられた花火が炸裂した。

その音に驚いたNHKのカメラクルーは何事かと想った。想わずカメラのレンズを空に向けた。すぐにこの状況はNHKテレビの映像としてお茶の間に流れた。この花火の炸裂音というか爆発音にいち早く気づいたのは、窓も玄関口も必要以上に施錠していた麓の市町村の住民だった。皆！驚いた。大阪平野の遠くからも花火が確認できた。

PLの花火（教祖祭PL花火芸術）が再現されたような感じた。特別仕様の花火は、遠くからも視認できた。

近辺の住民は、恐る恐る戸外に出た。当然のことながらバンガローを取り巻く包囲陣の隊員たちも、大和葛城山方面に釘づけとなった。

ボッカ部隊は、潜伏する理由がなくなった。それぞれが奇声を発して山頂の広場に駆け上がった。真上に打ちあがり炸裂する花火は圧巻だった。この世のものとは思えない幻想の世界だった。

犯人グループは、当初攻撃が始まったのかと錯覚した。凄い音が響いてくる。バンガローのガラス窓が絶え間なく振動で揺れていた。まるで艦砲射撃の砲撃音のようだった。

バンガローの外では、包囲している隊員達が夜空を見上げて歓声をあげていた。世界最大といわれている四尺玉が炸裂したようだ。直径八〇〇mほどあるだろうか・・・見事な花火だった。

「たまや・・・！」

「かぎや・・・！」と叫んでいるのは大阪府警MAATの隊員たちだ。

犯人グループに動揺が走った。

「なんだ！これは・・・」

意味不明なことが起こると人間はパニックになる。バンガローの中からは外の風景は見えない。ましてや大和葛城山山頂の上空で何が起きているのかは不明だった。

小百合嬢は想った。久米田、高石、白鷺たちの反撃が開始されたと確信した。きつと久米田くんが助けにくるーと小百合嬢は想った。

その瞬間に備える必要があると心づもりした。何があっても機敏に対応する決意だった。

ほとんどの者が、大和葛城山上空の花火で夢中になっている時に、久米田の真つ黒なパラグライダーが静かに上空を旋回していた。これに気づいた最前線の現場指揮官がいた。この現場指揮官は、内密の指示をトップから受けていた。「久米田が辞表を出した。何をするのか不明だが、あいつは誰が止めようとかをする。この山を囲む封鎖線を破ってやってくる。俺は、昔・・・あいつの北新地での超人的な働きを目撃した。おそらく単独で突っ込んでくるだろう。邪魔するな！援助しろ！」

現場指揮官は、無線で各隊の責任者に緊急連絡をした。

「気を引き締める！今から歴史的な瞬間！歴史的出来事が起こる！この場にしたことを光栄に想うことが起こる！諸君は、目撃者だ！」

この無線連絡により一瞬にして綱紀肅正の徹底がなされた。包囲する大阪府警MAATの隊員や他県の機動捜査隊の隊員達は見た。

投光機にライトアップされた真つ黒なパラグライダーが静かに旋回しながら降下してきた。バンガローの屋根に見事に着地した。花火の炸裂する振動で、バンガロー自体が揺れていることもあつて、屋根に男一人が着地してもバンガロー内の人間は、誰も気づかなかつた。

久米田は、装備をはずし小百合嬢の位置確認をした。おそらくこのあたりにいるはずだと検討をつけた。

久米田は背中ザックから花火玉とロープを取り出した。花火玉の取り扱いは伯父貴の友人から説明を受けた。久米田は、屋根の突起物にロープを括りつけた。後は、突っ込むだけだった。

久米田は、前線指揮官に合図を送った。

手話が分かる若い大阪府警MAATの隊員が前線指揮官に近寄って報告した。

「クメダハ イマカラ トツニユスル」

「成功を祈る」と返答してくれと前線指揮官は、若い隊員に指示した。若い隊員は、手話で久米田に応答した。

久米田からは、

「ゾクニモ ハナビケンブツ シテモラウノダ」との返答が帰ってきた。

前線指揮官は、一部始終を記憶に留めようとバンガローを注視した。隊員達も全神経と全知覚器官を前方に集中した。

久米田がロープを握りしめてジャンプするのが見えた。バンガローの窓ガラスがうち破られる音がした。散弾銃の発砲音があった。直後、バンガロー内で花火の炸裂があった。妖しいほど綺麗な閃光が窓から噴き出した。その後、数発

のライフル発砲音があった。窓から飛び出してきた物体があった。人間だった。

このあたりの事情を久米田サイドから描写してみると・・・

久米田は突入した瞬間。小百合嬢を見張っていた散弾銃を持つ賊の臉に回転リボルバーのBB弾を撃ち込んだ。うろたえた賊は散弾銃の引き金を引いた。しかし視覚を奪われた賊が撃ち込んだ先に別の賊の仲間がいた。誤射された賊は床上でのたうち回った。ボスらしき賊がライフルの照準を久米田に合わせた。久米田は、瞬時に小百合嬢をその大きな体躯で抱き包み、花火玉を床に叩きつけた。特別仕様の花火玉は炸裂した。一瞬にして視覚と聴覚を奪われたボスらしき賊は、乱射しだした。久米田は、すばやくヌンチャクを賊の手に投げつけた。動きが止まった瞬間、久米田は賊に体当たりした。そして、強烈な回し蹴りを加えた。賊は、ぶっ飛んだ。久米田の怒りと憎悪はこれだけでは終わらなかった。胸倉を掴み、頭突きを数発与えてから賊の体を持ち上げて放り投げた。賊は、窓からはじきだされた。久米田は、最後の賊を探し求めた。最後の賊は、階段ベッドの下の隙間に頭を突っ込み恐怖で震えていた。この賊も視覚と聴覚が奪われる中で、今、何が起こっているのか分からなかった。ただ、頬をかすめる銃弾に恐れをなして、手探りで潜れる所を探したようだ。久米田は、首根っこを掴み平手打ちを加えてバンガローの外に蹴り出した。

バンガローの外に蹴りだされた賊は、MAATの若い隊員達に逮捕された。仲間に誤射された賊は命には異常は無さそうだが、肉塊に食い込んだ散弾の取り出しには苦勞するだろうと想った。視覚を奪われた散弾銃の男も逮捕された。久米田は言った。

「浅香！帰るぞ！子どもたちが待っている。」

久米田にエスコートされるように浅香小百合がバンガローから出てきた。久米田の左肩が撃ち抜かれていたようだ。出血が止まらないようだ。大阪府警MAATの隊員たちが取り巻くように迎えた。隊員達は、眼前に起こった出来事が信じられなかった。誰も言葉を発するものはいなかった。後方にいた前線指揮官は、人垣を掻き分けて久米田の前に立った。前線指揮官は何も言わなかった。ただ、彼は久米田と小百合嬢の前に直立不動の姿勢で、背筋をピンと伸ばし最上級の敬礼をした。

その他の隊員達も久米田に向かって敬礼をした。

「止血しなければ・・・」と小百合嬢は言った。久米田の聴覚もおかしくなっていたのか小百合嬢の声が聞こえなかった。しかし、久米田には小百合嬢の口の動きで意味が分かった。

「いい！聞いたことはない。それより高石や白鷺たちの花火を見てやってくれ！」と久米田は大和葛城山方面を指さした。

花火は、景気よく夜空に炸裂していた。

「花火見物には、間に合ったようね・・・。」と小百合嬢は言った。

久米田は、小百合嬢とともに歩きだした。誰もが道を空けた。麓まで降りるようだ。

大阪府警M A A Tの前線指揮官の補佐が、指揮官に質問をした。

「このまま帰らしてもいいのですか？せめて応急処置を・・・」

「いいのだ！この件に関して久米田は関与していない。そうしないとあいつは本当に警官を辞めてしまう。これは、トップからの指示でもある。あいつの警官魂が、若い隊員達の記憶に残ればいい。ここにまた一つ伝説が生まれた。」と前線指揮官は言った。

大阪府警M A A Tの若い隊員たちは、久米田たちが漆黒の闇の中に消え去るまで敬礼し続けた。

すでに登山口の警官達にも山頂からの無線連絡が入っていた。登山口の山道両脇には、「伝説の警官」久米田達を迎える若い警官達が最上級の敬礼をしながら待っていた。ここでも言葉を発するものはいなかった。この五八歳の「伝説の警官」は、細い小百合嬢の肩に支えられながら歩いた。花火の光が登山道を明るくしていた。登山口に近づくと、すでに五千発の花火玉を打ち上げてしまったのだろうか。すでに山の麓はいつもの静寂と闇を取り戻していた。風は止んでいた。青島青年の予報どおりだった。麓の登山口には、ライトを照らしながら湖論暮刑事と裕次郎君が待機していた。伯父貴が用意した例のパトカーがあった。

偽パトカーは久米田達を乗せて近くの救急病院に向かった。各所にある検問所を通過する時に、裕次郎君は見た。行く先々で、老若男女の制服警官達が最上級の敬礼をしながら迎えてくれた。

裕次郎君は思った。このシーンは何かの映画の場面だと思った。あれは、なんだったか思い出そうとした。途中で本物のパトカーが先導してくれた。無事に、久米田は救急病院に運ばれた。

翌日の朝刊各紙は、大阪府警を絶賛していた。

「大阪府警 人身売買組織を壊滅！」

「人質を無傷で解放！大阪府警の巧妙な作戦！」

「大阪府警 前代未聞の花火作戦で闇組織を殲滅！」

などなどの見出し文字が一面のトップに踊っていた。大阪府警のトップの談話も掲載されていた。しかし、久米田に関する記事は一字もなかった。もちろんのこと高石たちの行動も記述されていなかった。

高石は市長室に呼ばれた。市長直々の口頭注意処分である。高石、青島青年、ミサキ嬢が無断欠勤したことにより業務が著しく停滞したということでも処分が下された。

高石だけの口頭注意処分だった。市長は、居並ぶ副市長などの幹部の前で高石を叱った。そして処分の言い渡しが終わると別室に來いという。高石は、別室に行った。

市長は言った。

「高石くん！今回は御苦勞であった。君たちの行為は、公務執行妨害とか色んな罪になるが、大阪府警は処分しないと内々に連絡が来た。なかったということだ。ただ、季節はずれの花火は良かったよ。私も家内と一緒に眺めた！君の行動は、不法行為だが奉仕者としては、称賛に値する。表彰したいぐらいだ！それと浅香さんを無事に救出したことは最大の功勞だ。個人的にも感謝いたします。」

「はぁ・・・」

久米田が運ばれた病院に、Y署の署長が見舞に來て久米田が提出した辞表を返しにきた。

Y署の署長は言った。

「御苦勞であった。しばらく休め！」久米田にすれば、その一言で十分だった。

湖論暮刑事の辞表は、「受け取った事実はない。」とのことで終わった。

事件から一ヶ月後、久米田の退院祝いが小百合嬢のスナック「愛」で行われた。綺麗に店も改装されて以前より高級感があった。

「あの時は、ビビった・・・。時間がないと想ったよ。インスリンの注射器が散乱していたのでビビった・・・。」と久米田は言った。

「あれ・・・？あれは、あなたとこの市長さんが忘れていったものよ。私は健康体です。」と小百合嬢は、笑みを浮かべて高石の顔を眺めながら言った。

「はぁ・・・それか。あのボケ市長め！」

「私は、日根野さんの事を誤解してしまった。出会い系の資料があまりにも多かったから、男って嫌だ・・・と言ってしまった。あれは、彼の調査資料だったのね。」と小百合嬢は悔やむような声を出して言った。

「ところで、白鷺事務所への襲撃はどうなったのだ。あいつらの犯行ではないとのことだけど・・・。」と高石は言った。

「さぁ・・・ね。迷宮入りだね。あれは・・・。」と湖論暮刑事は、白鷺の顔をまじまじと眺めながら言った。白鷺の素行が原因になっているとは言えなかつ

た。

「美章園文子の件は、どうなった？」と久米田が湖論暮刑事に質問した。

「あの件は、示談が成立したことで、浅香さんがかつての北新地のお客さんでもある政界、財界などなどのトップにもお願いして集めた万を超える嘆願書が提出されたこともあってお咎めなしということになった。美章園文子の子どもは、今では母親と一緒に住んでいるよ。早池峰山の五千万円の現金も無事回収された。そのお金は、結局子ども達の養育資金として美章園文子が管理することになったね。」

「めでたし！めでたし！だね。」と白鷺が言った。

「高石！日根野三郎の組織から招請状が来たって本当か？」と久米田が聞いた。「断ったよ！俺は・・ね。やはり犬猫搜索のペット探偵だよ。」と高石は言った。

そんな時に、久米田が選曲したカラオケが流れた。「同期の桜」だった。久米田と湖論暮刑事は立ち上がりマイクを握って熱唱しだした。

いつのまにか高石も白鷺と肩を組んで歌いだした。高石は、壮絶な戦死を遂げた日根野三郎への哀悼を込めて歌った。白鷺の歌は、相も変わらずひどかった。

十

穏やかな秋空が広がっていた。ひと時前の酷暑が嘘のようだった。空気もそれなりにひんやりとして気持ちよい風が肌に触れていく。

裕次郎君は青島とミサキ嬢を誘いだして龍門山の明神岩に行った。かねてからの約束でもあったクライムの練習だった。

阪和道を南下し24号線に入る。粉河で右折し竜門橋を越えて一気に農道を駆け上っていく。しかし、裕次郎君のRV車では、狭い農道を走行するのは少々つらいものがあった。途中で畑を世話している地元の農業関係者の対向車と遭遇した。裕次郎君は、先方に丁寧な会釈をしながら、慎重にRV車を操ってわずかな隙間とも言える路肩に後退した。その時に、眼下に光り輝く紀ノ川の水面を見た。かなり高度を稼いだものだ。

左右の蜜柑畑の樹木を眺めながらぐんぐん上がると田代登山口に着いた。駐車スペースがあった。今日の登りは、この駐車スペースの奥からだ。

「ここから登るよ。」と裕次郎君は言った。スライドドアを開けて大きなザックを引っ張りだした青島は、

「ここから登って、田代峠に出るのだよね。分岐を右方向だね。途中で磁石岩

があるってガイドブックに書いてあった。そこから山頂に到達した後、中央コースに出て明神岩だね。」

「そうだね・・・。まずは足慣らしでゆっくりと行きましようか！」

「明神岩ってどんな岩なのですか？」とミサキ嬢。

「見てのお楽しみですよ！ミサキさん！」と裕次郎君が優しく言った。

三人は、ゆっくりと登って行った。沢を横切るときに「お地藏さん」があった。田代峠に出て分岐を右に歩いた。そして、山頂で小休憩を取った。眺望は素晴らしかった。粉河から望めば、どこが紀州富士だと想うが、見るところから見れば富士山とのこと。頂上からは淡路島が見えた。

山頂には、すでに先客がいた。年の頃は五〇代ぐらいだろうか。地図を片手に、デジカメで周囲の風景を撮影していた。裕次郎君は、軽く会釈をした。先方も同じく軽く会釈を返してきた。

山での相互挨拶は、「お互いに敵意はありません。」というシグナルのようなものだ。裕次郎君は常々想っていた。こちらが挨拶した時に、無視されることもあって後味が悪いこともしばしばであった。

水分補給の小休憩が終わり、明神岩に向けて歩いた。

明神岩に到着した。蛇紋岩の三〇mの岩がせり出していた。

「凄い！凄い壁だね！」とミサキ嬢は言った。明神岩の頂に三人は立った。ここからの眺望も素晴らしかった。

裕次郎君は、ザックからザイルなどを引っ張りだして準備を始めた。

「この近くに風穴（ふうけつ）があるのだよね。楠木正成が逃げ隠れたという穴だけ・・・。」

と青島が物珍しそうに言った。

「見ておいでよ！」と裕次郎君。

青島は、ミサキ嬢を誘って偵察に行った。冷たい風が洞窟から吹き出てくる。怖々、闇の奥深くを覗き込んだ。落ち込めば、這い上がるのが困難な気がした。

岩の頂では、すでに裕次郎君の準備は終わっていた。この後、裕次郎君の指導で三時間ほどの訓練をした。青島とミサキ嬢の精神は高揚し、満悦していた。これで、いっぱいしのクライマーだと想った。

太陽も西に移動し、日没時間が迫っていた。

「すっかりと熱中してしまったね。帰ろうか！」と裕次郎君は言った。帰路は、中央コースだ。中央コース登山口に出て田代コース登山口の駐車ポイントに到達すれば、今回の山行は終わりだ。帰りには、温泉に入ろうと裕次郎君は考えた。

中央コース登山口まであと少しのポイントで、数時間前に山頂で出会った五

○代の登山者がうつぶせに倒れていた。左手で昭文社の五万分の一地図を握りしめていた。色んな記号・数字・メモが書き込まれていた。

外傷はなかった。着衣の乱れも争った形跡もなかった。平坦なところなので、滑って転倒した可能性も低い。

裕次郎君は、念のため登山者の右手首の脈を確認した。脈はなかった。だが、体温はまだあたたかい。

「どうやら、死んでいるような感じだ。とにかく救急車だ！」

「俺が、下まで行くよ！あの道を車で行くのは怖いので走って行く！下りだからこの方が速い！」と言うなり青島はザックを置き捨てて走り去った。

裕次郎君とミサキ嬢の二人は残されるような形になった。正確には、三人だが……。

「青島君は、気が短そうだな……。」

「そうじゃなくて、彼は決断が早い……。」とミサキ嬢は苦笑した。裕次郎君にしてもミサキ嬢にしても為す術がない状態で、ただ待つしかなかった。日が暮れかかってきた。何だか心細くなってきたミサキ嬢は、裕次郎君に寄り添った。裕次郎君は、ミサキ嬢の不安を和らげるために右手を握った。これで、ミサキ嬢も少しは安堵したようだ。

裕次郎君はザックから懐中電灯を取り出した。たとえ日帰りの山行でも懐中電灯は忘れたことがない。

何があるのか分からないのが、山であるからだ。気温も下がってきた。裕次郎君は、まだ体温のある登山者にザックから引っぱり出したフリースや雨具などを被せた。とにかく生きているのか！死んでいるのか分からない状態でもしなないで放置するわけにはいかなかった。

相当の時間が経過したような気がする。本当は、そうでもない時間だったかも知れない。下の方の暗闇から青島の声が聞こえてきた。

「おっ！おっ！おっ！」

「こっちだ！こっちだ！」と裕次郎君はライトを振り回す。

青島達のライトが声とともに近寄ってきた。

登山者は、救急隊員によって直ちに中央登山口で待機している救急車に運ばれた。裕次郎君は、搬送先の病院名を聞いていた。

「これも何か縁だと想うので、僕は病院まで行くよ。君たちは、明日は仕事だろ……。青島君！僕の車でミサキさんを送ってやってくれ！」と裕次郎君は固い決意をこめて言った。

「いや・・・俺たちも行く！」と青島が言った。ミサキ嬢も頷いていた。

やや遅れて搬送先の病院に着くと地元の警察も来ていた。

「君たちが第一発見者かね？」

「まあ・・・そうですが」

「身元が確認できるものが、全くないのだ。それに、どうやら死因は心不全で事件性はないとのことなので、今地元の役場の担当者にも連絡を取っているのだが、行旅死亡人の扱いになるだろうね。所持品の中に、二トロを持っていたなあ・・・。」と警官はあっさりと言いつ切った。

「こうりよしぼうにん？」と裕次郎君は不思議そうな顔をして訊いた。

「身元不明の人が死んだ場合に、役場の福祉担当者が葬儀のだんどりをしてお骨をお寺に持っていくのです。役場ごとに決まったお寺があるようです。後日、身元が判明する場合もありますね。確か、遺留品は役場が保管することになると想うわ。」とミサキ嬢は言った。

「さすが、X市役所の職員だ。所管以外の仕事も知っている。——と裕次郎君は感心した。

これも縁だ！と考えた裕次郎君は、最後まで付き合うことに決めた。死体というか遺体を見たのは、これが初めてではない。近親者の葬儀には、この歳になれば何度も出席していた。お別れの際には、お花を遺体の傍らに供えてもいた。取材でインドを旅した時も、大きな河のそばで火葬に付せられる死体を見たことがあった。木々の上に寝かされた死体が、今にも着火されるような場面だった。初めて見た時は、いささか衝撃であった。今にも起きだしてきそうな感覚があった。そして、河の中では、人々が沐浴していた。風土や文化が異なれば、色々だな・・・とその時、裕次郎君は想った。

「やはり、君たちは明日仕事なので、僕が残るよ。君たちは、この間の事件で処分こそ受けなかったけど、二人とも休むと高石係長に迷惑がかかるよね。」と裕次郎君は、少々重い調子で言った。

「そうだね。いいのか！」と青島が言った。

「僕は、白鷺事務所では戦力になっていないから。」と裕次郎君は笑みを浮かべながら言った。

裕次郎君は、愛車のキーを青島に渡した。

湖論暮刑事は、寝覚めの悪い起床をした。変な夢が断続的に頭の中で砂塵のように巻き起こり消えていくような感覚だった。これが、湖論暮刑事の眠りを

妨げた。

連日。大阪府警に出向している湖論暮刑事の目下の関心事は、例の闇組織の資金源のことだった。今、湖論暮刑事は、大阪府警の特別チームに参加していた。日根野ファイルの解明がひとつのテーマだった。日根野ファイルには、闇組織の資金のことについても触れられていた。

出勤時刻までまだ時間があった。いつものように自分でインスタントコーヒ―を作りトースターに食パンを突っ込む。チーズをのせて三分ほど経過すると出来上がりだ。ここ数年、毎朝の行事だった。

気だるい体を無理やり移動させながら、玄関ドアの新聞受取箱から朝刊を引っ張りだしテーブルの上に拡げた。

三面記事を見ると、大阪府と和歌山県の県境にある鍋谷峠で焼死事件があったとのことだ。目下、自殺か事故かかと捜査中とのこと。もう一件の記事は、岩湧山の登山ルートである「いわわきの道」コースの水場付近で登山者が殺されていたというニュースであった。大きな事件の割には小さな記事だった。埋め草のような記事だった。各紙の新聞報道もこの程度の記事であった。おそらく所轄で発表された限定情報の記事だろうと想った。

―同じ日に二件の事件か・・・―と湖論暮刑事は呟いた。単なる遭難事故でない出来事が連続していることが異常だった。龍門山の行旅死亡人のことについては、白鷺から聞いていた。

―待てよ・・・鍋谷峠と言えば、三国山・・・そして和泉葛城山。「いわわきの道」と言えば、岩湧山に目が奪われそうだが、南葛城山へ行くルートでもあるな・・・なんだ・・・これは？葛城山というのは、四座あると聞いたことがある・・・―と湖論暮刑事は訝った。日根野三郎自身は、これらの山々に出向いていることを想起した。単なる山趣味で、日根野三郎は出歩いていた訳ではなさそうだ。そんな直観が以前から湖論暮刑事の頭の奥深くで燻っていた。いわゆる民間捜査機関の実力については、驚愕する思いだった。高石と呑んだ時に、この組織から招請状がきたことが話題になったことがあった。高石によれば、組織の名称は「フェニックス」と呼ぶらしい。

―不死鳥か・・・―

高石自身は、身に余る光栄だと感謝していたが、この招請は断ったとのことだ。あくまでも犬猫ペット捜索探偵で生きるとのことだ。高石らしい決断だと思った。この組織のことについても詳細は不明だった。大和葛城山での作戦では、共闘したものの組織の実態については謎が多かった。この時の作戦にしても、浅香小百合が無事に救出されたと確認できた瞬間に、この組織の参加者は瞬時に跡形もなく消えていた。ある意味不気味な印象を受ける組織だった。

―やはり・・・相談してみるか。核心的な捜査情報も提供する必要はあるだろうが、例の事件も根本的には解決していない。捜査上の秘密などクソくらえだ！何が守秘義務だ！―と湖論暮刑事は思った。辞表届を出して以来、もう怖いものがないという心境だった。刑事という不規則な生活を送る中で、妻は子どもを連れて実家にもどってしまった。戸籍こそ夫婦であり親子であるが、ここ数年の間は顔も見えていない。おそらく子どもは高校生になっているはずだ。毎月決められた養育費というか生活費は、きちんと口座振込をしていた。ときには、子どもの顔を見たいと想ったことがしばしばであったが、無理にこの心を殺した。例えば、湖論暮刑事の仕事上の意気込みが雲散霧消してしまう懸念があった。正義の代償と言えば格好いかもしれない。しかし、自分自身の家族も維持できないで、何が正義だ！と想うこともあった。利他主義の生活もここまでかも知れない。あの時、辞表を提出した時に妻や子どもが受け入れてくれるなら家族として再出発できるのではないか！という淡い希望もあった。湖論暮刑事のくたびれた財布には、幼い子どもの写真が一枚入っていた。とめどもない想念が脳裏をよぎっていった。

お種さんは、相も変わらず雑務と電話の応対で追われていた。

白鷺事務所は、ここ最近のところ平和だった。常日頃と変わらない日常が流れていた。変わったことと言えば、裕次郎君が二日ほど事務所に顔を見せなかったことぐらいだった。事情は、坊ちゃんから聞いて納得した。最後まで面倒をみるというのは、すばらしいことだとお種さんは想った。

―それにしても山の中でね・・・そんなこともあるんだ・・・南無・・・
―とお種さんは、南の方向に向けて合掌した。

午前一〇時過ぎになって裕次郎君が出勤してきた。いつものようにお種さんに朝の挨拶を済ますと自室にこもった。昨年に取材旅行した中東関係のルポを整理することに専念する必要があった。しかしながら、考えがまとまらなかった。どうしても、龍門山での出来事が脳裏から離れない。役場の担当者が裕次郎君に遺留品の確認で立会を求めた。死者が握りしめていた地図とGPS機器、デジカメなどが遺留品だった。

役場の担当者によると「行旅病人及行旅死亡人取扱法」というものがあった、
第15条 行先死亡人ノ遺留物件ハ市町村之ヲ保管スヘシ但シ其ノ保管ノ物件滅失若ハ毀損ノ虞アルトキ又ハ其ノ保管ニ不相当ノ費用若ハ手数ヲ要スルトキハ之ヲ売却シ又ハ棄却スルコトヲ得
・・・ということらしい。

相当の期間を経てから身元が明らかになるケースもあるので、保管することだ。地図にしても数字や記号などが記入されていて何か重要なメッセージを含んでいるような気がした。裕次郎君は、半ば興味半分であったが役場の担当者の許可をもらってデジカメで撮影をした。鉛筆で記入されたところは映りも悪くて判読し難いが何かのメッセージが発信されていると気になるものだ。

それにしても朝刊で報道されている記事を見ると何かが和泉山脈近辺で起こっているという感覚が消えない。「鍋谷峠」「岩湧山」での事件の詳細は新聞報道で見ると限りの浅い記事だった。何かか隠されているような報道だった。新聞社も警察でもらった情報を記事にしているという印象だった。

ただこの疑念を白鷺伯父さんに説明するのは難しいと想った。白鷺伯父さんは、自分にとって興味のあるテーマはとことん追求するタイプだが、興味が湧かないことについてはまったくの無関心だった。

―さて、誰に相談すべきか？―

こうなると高石しか思い浮かばなかった。裕次郎君は、青島を交えて相談することにした。そう決めてしまえば、踏ん切りがついた。これで、本来の仕事に没頭できると想った。

湖論暮刑事は、定時に出勤した。特別チームにあてがわれた倉庫のような地下室部屋の自席に座るや否や、チーフと呼ばれた。

「君も朝刊で読んだと想うが、鍋谷峠での焼死事件だが報道されていないことがある。焼けただれた車の中から銃が発見された。単なる登山者ではない。また、岩湧山での登山者のザックから同様の銃が発見されている。銃の種類は、中国製のトカレフ『Т-33だ！』とチーフは溜まっていたものを一気に吐き出すかのように言った。

「・・・」

「どうやら、連中の組織の中で内部抗争が始まっているらしい。」

「内部抗争？」

「そうだ！日根野ファイルを更に検証する必要があるが、闇資金を巡っての抗争だと上は見ている。」

「闇資金？いわゆる国内派と国際派との主導権争いですか？」

「結構！大規模な闇組織だ！残余勢力が息を吹き返した！」

「ところで、何故に和泉山脈の山々で事件が発生するのですかね？」

「わからん！手段は問わないとの上の指示だ！湖論暮！」

―手段は問わないか・・・行き詰っているということか！―と湖論暮は想った。

こういう場合には国家権力を背景とした捜査には限界があると痛感しているの

は湖論暮刑事だけではなさそうだ。それは、幹部も同じ認識だろうと想った。ある意味で手が汚れることも覚悟しないと真相は把握できない。民間捜査機関の「フェニックス」も相当に動いているだろう。彼らはどういうわけか命がけで勝負に挑んでいた。民間捜査機関に情報をくれ！とは言い難い。国家権力のこけんにかかわる。「正義は、国家が実現しなければならぬ。」というのが湖論暮刑事の信念だった。しかし、この信念も最近の複雑な事件の連続で動揺していた。

湖論暮刑事は、自席に戻ると久米田の携帯にメールを送信した。内容は、「今夕に時間を作ってくれ！高石達の同席も願う。場所はスナック愛」というショートメールだった。湖論暮刑事にとって、今やこのグループの仲間はずれだった。民間捜査機関の「フェニックス」に頭を下げることは出来ないが、同志に遠慮はしない。

小百合嬢が経営するスナックに参集したメンバーは、湖論暮刑事、久米田、高石、白鷺、裕次郎君、青島、ミサキ嬢。そして、当然のことながら小百合嬢の八人だった。久々の豪華メンバーだと言いたいところだが、何だか湿っぽい空気が漂っていた。誰かが口火を切って喋り出すのを待っている雰囲気であった。大まかな話は、久米田から聞かされていた。

闇組織との壮絶な戦いが終わったと誰しもが考えていたのだが、何と残余組織が再組織に向けて蠢動していると聞かされると、あの時の体験・・・恐怖がよみがえってきた。特に小百合嬢にすれば、死と隣り合わせの体験を経たことから落ち着かない気持ちで不安なはずだった。沈滞した雰囲気破るように、白鷺がおどけて言った。

「ところで、今日はなんで集合なんだ！久米田の快気祝いをやったばかりではないか！」と意識的か無意識なのか定かでないヒントはずれの質問を投げかけた。計算して言ったわけではないが、このアホな問いかけによって場は和んだ。さすが、伯父貴はいいキャラをしている。これだから、このどうしようもない伯父貴はこのメンバーとしての価値があるんだなあ・・・と裕次郎君は伯父貴に対する考えをあらためた。

「そういうことで、どうやら残余勢力の中で内部抗争が始まっているようだ。鍋谷峠の焼死体の車の中からも岩湧山での殺人現場にも同種の銃が発見された。岩湧山での状況は撲殺とのことだ。犯人は何も奪った形跡はないが、ザックには昭文社の地図とGPS機器が残されていた。そのほかにめぼしいものはなかった。」と湖論暮刑事は、慎重に言葉を選んで経過を説明した。

「昭文社の地図？昭文社の五万分の一地図ですよ！」と裕次郎君は驚いた顔

をして矢継ぎ早に言った。

「龍門山での行旅死亡人さんも昭文社の地図を持っていました。何やら不思議な記号と数字、メモが書き加えられていましたが・・・何か関連性があるのでは！」

「その後、龍門山の仏さんの身元は分かったのかな？」と高石は重い声で訊いた。

「いや・・・時々、役場に照会を入れていますが、まだわからないそうです。」と裕次郎君はポツリと言った。

「岩湧山は、南葛城山・・・。鍋谷峠は、和泉葛城山ですね。これは・・・。」と力を込めるように言ったのは青島青年だった。

「そのとおりだよ！青島君！俺もそのように推理している！」と湖論暮刑事は、自分の直感を言った。

「ところで、葛城山っていくつあるのですか？」とミサキ嬢がお隣に座っている青島に訊いた。

「大和葛城山、中葛城山、南葛城山、和泉葛城山の四座ですね。ついでに金剛山の葛木岳を入れると五座ですね。」

「ふ〜ん・・・。そうなる、この連続殺人事件は後二、三件起こる可能性があると言うこと・・・。」と小百合嬢は、ややこわばった顔をしながら言った。

「そうなる可能性はあるかもしれないし、ないかもしれない。」と湖論暮刑事は自信なさそうに言った。

「なんで、どうして葛城山なのだ！」と白鷺が素っ頓狂な声で言った。

「組織が成り立っているのは、なぜだと想う白鷺！それは、金さあ！資金源だよ。この資金を巡って残余組織の中で争闘が起こっているのではないか！」と久米田が確信的に言った。

「この大阪府を取り巻く山々のどこかに埋蔵金が眠っているということか？」と白鷺が眼を丸くしながら言った。

久米田は二杯目のジョッキを小百合嬢から受け取ると、

「それはそうとあの四人組は何故、水越峠から金剛山に逃げ込んだと想う？」と久米田が周囲の仲間を見渡しながらか呼びかけるように言った。

「俺は、このことが、あれからずーと気になっていたことなのだ。金剛山の山中に逃げ込む必要性はなかったはずだ。逃走経路としては不適切だ。」

「何か変わったことは無かったか？浅香！」と久米田は小百合嬢の方を向きながら訊いた。

「そうよね。大概の事は事情聴取で説明したことだけ・・・。彼らは、整備された登山道を歩いているかと想えば、道なき道を藪漕ぎしながら前進してい

た。確か、地図らしきものとGPS機器も持っていた。それに、すごく重たそうなスーツケース。とにかく日没後の暗い時間帯なので、私にはよく分からなかった。」

「そうなのだ！逮捕後にバンガローを探索したら・・・そのスーツケースとGPS機器は発見出来なかった。しかし、押収したザックに金塊と大量のドル紙幣があった。海外への逃走資金用だろ・・・。」と湖論暮刑事は焼酎のロックをなめながら言った。

「そのスーツケースは、金剛山のどこか山中に埋められているということか！」と高石が天井の一点を凝視しながら言った。

「可能性としてある！」と湖論暮刑事は焼酎のロックを飲み干し吐き捨てるように言った。

「しかし奇妙だな。何故あつちこつちの葛城山が登場するのだ。因果関係は？」と怪訝そうに高石は言った。

「わからん！」と久米田と湖論暮刑事は同時に叫んだ。

「犯人の逃走経路からして、金剛山の山中に隠された可能性は高いと想うが・・・。」と湖論暮刑事。

ズーとビールのジョッキを握りしめていた久米田は、ひとくち呑むと、「金剛山といっても広いよな・・・。水越峠から最後に逃げ込んだバンガローのライン周辺だと推測するけど、登山道を外すと山林の中だよ。広すぎて埋めたポイントは確定できないね。」と歯切れ悪く言った。

「金剛山に埋蔵金か？」と白鷺はしみじみと言った。白鷺にとつて埋蔵金となると目の色が変わる。とにかくこの手の埋蔵金の話は興味が尽きない性格だった。徳川埋蔵金伝説の話題になると時間を忘れた。

カウンターの向こうから和服姿の小百合嬢が、小気味よく言った。

「搜索するにしても地権者に無断ですることもできないわね。金剛山だけでも地権者は、一〇〇人を超えると聞いたことがあるね。」

「今日のマドンナ・・・いつもより綺麗だ！」と高石は想った。あの金剛山で人の質状態の中でも自分を喪失しなかった凛々しくも力強い気性のエネルギーはどこから湧出するのかと想った。

「埋蔵場所は、分散されているかもしれない。それぞれの山々にあるかも。和泉葛城山ならマイカーでも行くことができる」と聞いたことがあるけど・・・。ここなら重いものなら運搬しやすいぞ！」と高石が白い歯をこぼしながら言った。

「高石！例の民間捜査機関のなんだけ・・・。フェニックスだったけ。そちら

からのコンタクトというか情報はないのか？」と久米田が訊く。

「ない！一応あたりを付けてみるよ。」と高石。

「ところで、地図を見るだけで山々の位置関係がイマイチよくわからない。金剛山と大和葛城山というのは何となく分かるけど、それ以外の山々は山好きでないと分かりません。」と白鷺が遠慮がちに言った。

「そうだね。登山でもしないとイメージは掴めにくいよね。」と小百合嬢。

「いい場所があるぞ！」と久米田が断定するように言った。

「それは、どこ？」と白鷺。

「黒山警察署の屋上なら・・・。」と久米田は白鷺に笑みを浮かべながら言った。少しばかり白鷺の体が委縮した。

「警察署？」と白鷺は口をゆがめて笑った。

警察はもう勘弁して欲しいと想う白鷺だ。堺署ならまだなじみがあるが、出入りの少ない警察署には抵抗感があった。

そんな白鷺の挙措を見たミサキ嬢がほほえみながら、

「白鷺さん。いいところがありますよ。最近できた美原町役場の新庁舎。いや、堺市美原区役所だったけ。この六階の展望ロビーなら生駒、二上山、大和葛城山、金剛山。金剛山から紀見峠。紀見峠から岩湧山。岩湧山から滝畑、滝畑から三国山。そして、鍋谷峠から和泉葛城山。そして紀泉アルプスが望めますよ。それも只で・・・私の祖父と祖母がよく利用しています。秘かな高齢者の憩いのスポットです。」とささやくように言った。

「いずれにしても現地を踏まないと、何とも言えないなあ。」と高石は言いきった。高石にすれば、山装備は一通り揃えていた。また、歩くのかと想うと何だかうキウキしてきた。

湖論暮刑事は思った。家に帰れば孤独な一人暮らしだが、ここには仲間がいた。この連中との邂逅が生活に潤いをもたらしている。今までの俺の人生とは何だったのだろうか！と想った。社会的正義を実現するために我武者羅に突進してきた長い時間の流れを振り返った。確かに仕事は充実していた。そのはずだった。自分自身の心の内奥を覗き込むと、そこには孤独があった。人一倍に家族の絆を願望してきた。しかし、現実は厳しかった。仕事に集中すればするほど、家族とのすれ違いが大きくなった。人はひとりでは生きられない。愛すべき対象の存在があつてこそ人は人であることができる。

この連中との出会いが湖論暮刑事の人間性を覚醒させた。久米田とは、同業ということもあつて頼もしい存在だ。それぞれの個性が見事にうまく結合されていた。

湖論暮刑事は、くたびれた財布から一枚の写真を取り出した。そして、久米

田に見せながら言った。

「もう一度やりなおすことにした。素直に連絡を取ってみることにする。」と湖論暮刑事は声を詰まらせながら泣いた。

「・・・」

久米田にすれば、湖論暮刑事がなぜ泣いているのか不明だった。湖論暮刑事の今の心象風景が見えていなかった。しかし、何故か共振した久米田はもらい泣きをした。久米田にすれば、心の奥深く繋がっている仲間が泣いていることだけで共鳴できるのだ。周りの仲間は、湖論暮刑事と久米田を見守った。悲しい時は泣けばいい・・・。涙は癒しの効果がある。青島青年や裕次郎君、ミサキ嬢は湖論暮刑事と久米田が突然と涙する光景を見て一瞬何事かと想ったが、この若い世代も何か感ずるところがあつたのだろうか・・・静かに見守っていた。

どこかの寮歌だったと想うが久米田の口からしみじみと出てくる言葉があつた。「友の憂いに我は泣き 我が喜びに友は舞う・・・」

十一

初冬のような寒さが続く一〇月二八日。今年は、秋が短かったというよりなかったような季節だった。朝の冷え込みが、この時期にしては少しばかり違和感をもたらす感じだった。加えて台風が沖繩の南の海上を北上し、明日頃には沖繩・奄美に近づく予想とのこと。台風の手想進路を見れば近畿を通過するよさうな感じだ。ちなみに今回の台風の名前は、チャバ(Chaba)と呼ぶらしい。もつとも名づけた国はタイで、由来はハイビスカスとのこと。日本の場合は、台風の影響が大きい船乗りになじみのある“星座の名前を採用している”とのこと。

高石は、台風情報を提供するネットの記事を想いだしながら職場に向けて愛車ノアを走らせた。走る車窓から空模様を見た。冷たい雨粒がフロントガラスをたたく。

—この寒さで台風か！大峯では紅葉がいらいらしい・・・と青島が言っていたな。週末は、久しぶりにお山に行けると想ったけどなあ、それも事件現場の山に・・・これでは、無理か！—と高石は想った。

法定速度を守りながら慎重に運転する中で、先週の「スナック愛」での会合を想い起こした。突然と久米田と湖論暮刑事が泣きだした。周囲の人間はどう対応していいのか逡巡し、事態を収拾するために白鷺が気を利かして選曲した

「同期の桜」の旋律が流れると久米田と湖論暮刑事の感情は最高潮に達した。

二人は、肩を組み大きな声で歌いだした。マイクなど無用だった。小百合嬢は、母親が幼子を見守るような視線を投げていた。泣きたい時は、泣けばいい。何が哀しみの原因かは高石には分からなかったが、言葉での説明は必要がなかった。湖論暮刑事も何か哀しみの十字架を背負っているのだと高石は想った。

―それにしても朝方の夢は、嫌だった・・・―と高石は、夢の断片を想いだした。傍らで眠る妻の話によれば、うなされて寝言を言っていたとのこと。聴きとれた寝言は、「助けてくれ!」と重い悲痛な声で叫んでいたとのこと。

高石は、夢の断片を想い起こす・・・。

息を切らしながら山の斜面を登っていた。道なき道だ。藪漕ぎしながら後方から追ってくる男から逃げていた。男の右手にはトカレフが握りしめられている。笹の茂みが歩くのに邪魔だった。後ろを振り返る余裕などなかった。膝の痛みなどを忘れて、とにかく足を前に進めた。頭を上げ、斜面の上方を見上げると進路方向の樹間から光がこぼれていた。灰色の空が見えた。斜面を登りきった。しかし、前方を見ると足をおくべき大地がなかった。絶壁に追い詰められたことが分かった。

男は、高石に追いついた。男は、おもむろに高石に向けて照準を合わせた。高石は絶望を感じた。頼みの「北斗神拳 ケンシロウ」のような、久米田もない。男はじりじりと高石に近づいてきた。この絶壁から飛び降りたとしても生命の保証はない。ごつごつした岩石が天に向かって高石が飛び落ちるのを待っているようだった。

この時、不思議なことにキンモクセイの花の匂いがした。余裕のない瞬間であったが、高石自身も感動した。

高石は、膝を折り両手を合わせた。醜悪な姿だった。高石は、プライドを捨てて命乞いをした。今にも久米田が颯爽と現れて救出してくれることを期待した。しかし、やはり久米田はいない。高石の眉間に、男のトカレフが押し付けられた。銃口の小さな穴の先にある闇が不気味だった。赤い鮮血と飛び散る自身の脳漿をイメージした。

男は、にやにやしなからトリガー（引金）を引いた。断片化した夢だが、続きはなかった。悪夢はここで切れた。ここで・・・俺は、絶命したのだと想った。その時に叫んだ言葉だけは鮮明に残っていた。

「すまん！先に逝く！楽しかったぞ！日高校生時代！万歳！浅香小百合！我ら

のマドンナ！万歳！」

高石は、妻に揺り起こされて眼が覚めた。昨夜から使用している毛布が寝汗で濡れていた。

そのような夢だった。後味の悪い夢だった。今でも思い起こすと脇のあたりから汗がにじみ出るような感じだ。

—こんなことははじめてだ！怖い・・・怖いぞ！—と高石は思った。

雨足が、少しばかりきつくなつたようだ。愛車ノアのフロントガラスにたたきつける雨粒が大きく強いものになつたと思った。

—やはり、俺は小市民だ。銃を所持した犯罪組織に立ち向かう根性はなさそうだ。夢の中の自分の無様な姿が、俺の本質だ。とてもじゃないが、久米田のように振る舞えない。—と高石は走る車の中で思った。

日根野三郎の壮絶な戦死を思った。見返りのない仕事に没頭した日根野三郎のエネルギーは、どこから湧きだしたのだろうか。

高石は、一瞬にして襲つた戦慄・・・。

ブルルツと震える自分の体軀を、愛車のハンドルを前屈みで強く握りしめることで抑えた。

—しかし、逃げる訳にはいかないぞ！ペット捜索探偵にも意地があるぞ！—と高石は弱気の底に落ちて行く自分自身の心を支えた。

—俺には、少なくとも仲間がいる。この仲間と一緒になら出来ないことはないはずだ！—

高石は、自分にそのように言いかけた。そのようにしないと自分自身の恐怖が周囲に伝染すると思った。そして叫んだ！

「俺には仲間がいる！怖いものなんかないぞ！」

—俺が出来ることと言えば、久米田のような超人の能力ではない。ましてや、小百合嬢が持つようなファシリテーターとしての能力もない。独特のキャラで、場を和ます白鷺のような能力もない。湖論暮刑事のような、捜査のプロでもない・・・。俺は・・・オレダ！—と高石は確信した。

十一月は、冷たい雨風で始まつた。

湖論暮刑事の車は、309号線を走っていた。青崩（あおげ）に向けて走った。捜査の基本は、現場に足繁く通うことだと思った。チーフには、行先を報告してあった。

—何か？閃くかも知れない。遠慮しないで行ってこい！—とこの頃不規則な生活で肥満体形になってきたチーフは、額の汗をハンカチで拭いながら快く湖論

暮刑事を送りだした。寒さもひしひしと押し寄せる中で、何故か汗を掻いているチーフの姿がなんとも言えないほど安定感を感じさせた。

大和葛城山では、まだ和泉山脈で起こっているような事件は発生していない。水越トンネルの手前を右折した。奈良県に抜ける旧道に入ると、すでに多くの登山者の車が停められていた。

湖論暮刑事は、駐車スペースを探した。路側帯にあるわずかな隙間を見つけ、そこに車を縦列駐車した。そして、水越トンネル出入口を右手に見ながら登山口を目指した。登山口にある標識の草むらにトトロを描いた小さい絵看板があった。

湖論暮刑事は、先日のスナック愛での出来事を想い起こした。意味もなく久米田は号泣した。それは、湖論暮刑事が泣いたからだ。一枚の写真を見ることによって・・・おそらく久米田は知ったのだろうと想った。湖論暮刑事は勇気づけられた。この友が、そばにいる限り俺は自分自身を忘れない。

湖論暮刑事は、高校生になる我が子に手紙を送った。電話をすれば済む話ではあるが、声を聴くのが怖かった。だから、手紙にしたのだ。拒絶されるのではないかと恐怖に震えた。しかし勇気を奮い起して、正直な今の自分の心情を綴った手紙を送った。

湖論暮刑事にすれば、今のままの断絶状態が続けば、家族に・・・我が子に・・・永遠に会えない事態も考えられた。今、取り組んでいる事件は、身に危険が及ぶことは間違いない。現に民間人の日根野三郎は殺された。自分自身の背後に巨大な国家権力があつたとしても、現実に飛んでくる銃弾の盾にはならないのだ。

無性に、我が子の声が聴きたかった。

—こんな父親を許してほしい・・・—と言いたかった。

それが、昨日の捜査会議中に湖論暮刑事の携帯にメール着信の振動があつた。胸ポケットに無造作に突っ込んである携帯電話が振動した。通常なら気がつかないのに、この時に限って携帯電話の振動が自身の心臓の鼓動と共振したかのようだった。

ホワイトボードに向かってチーフが捜査状況を総括していた。いつもなら捜査会議が終了した時に、携帯メールや着信状況をチェックする湖論暮刑事だった。

しかし、この時は胸ポケットから携帯電話を抜き出して画面を覗き見た。長く顔を見ていない妻からの携帯電話から発信されたメールだった。少しばかり訝

しげに想ってメールを開いた。

「お父さん！お手紙ありがとう！お母さんから事情は聴いています。お母さんが言っていた。お母さんも警察官の娘だったから、お父さんのことを理解できるって！お仕事がんばってください！私も、お父さんのように正義のために頑張る！女性刑事か女性検事を目指すぞ！」

という内容のメールだった。おまけに母と子がピースサインをする画像まで添付されていた。

湖論暮刑事が厄年過ぎて生まれた子どもだった。結婚して一〇数年も経過するの子どもは出来なかった。それもそうだ……。とにかく出勤すれば、一週間も自宅に帰らない日々もあった。そんな時に授かった子どもだ。出産にも立ち会えなかったダメ親父だった。ただただ……。申し訳ないという気持ちで湖論暮刑事の胸の中で充滿していった。家族と仕事の狭間のなかで湖論暮刑事も悩んだ。刑事と言う仕事をやめようと想った。しかし、仕事を優先した。眼前の悪を許せなかったという理由もあった。しかし、通常の家生活は出来なかった。

妻は、何も言わずに笑みを浮かべて、

「お身体だけは気をつけて下さい。」と言って子どもを連れて家を出た。

湖論暮刑事は歩く……。天狗谷コースの沢を渡り水場も通過して登っていった。小粒の雨が、ゴアの合羽を濡らしていた。心地よい汗が噴き出していた。頂には、六〇分ほどで到達しただろうか。自分では、結構……。早足のペースで歩いたつもりだった。途中で何人かの登山者を追い抜いた。

三角点を確認して広い頂を散策した。光が少ないのだろうか……。風が、スキの穂を哀しく揺らしていた。

視界は、悪かった。隣の金剛山の頂を眺めると黒い雲が覆いかぶさっていた。山麓から白色の霧が湧きおこっていた。見ようによつては、雪が被っているのかと錯覚してしまうほどだった。同様に、和泉山脈も灰色の雲に覆われていた。唯一、滝畑にあたる上空に、わずかながら雲のない空間があった。そこだけが光り輝いていた。上空の天気は、海風の影響だろうか反時計回りで大阪平野を循環しているのではないかと想った。

台風は、近畿地方を避けた。台風は温帯低気圧となって消えてしまったが、ここ二日ばかり湖論暮刑事の心の中にある焦燥感は消えなかった。

湖論暮刑事は、雲に覆われた和泉山脈を眺めた。あの山々で日根野三郎は何

を調査していたのかを想像した。そして、蠢動する闇組織の残党が徘徊していた。このままであれば、ストレス解消のために心の安らぎを求めて山行する一般登山者にも危害が及ぶ可能性もあった。

どうやらキーワードは「葛城山」らしい……。しかし、湖論暮刑事の推理はここで暗礁に乗り上げていた。湖論暮刑事は、ザックから昭文社の五万分の一地図を取りだして濡れそぼった木製ベンチに拡げた。じっくりと、地図と実際の風景を見比べた。ヒントは、この地図の中にあると確信した。金剛山に逃げ込んだ四人組。あえて逃亡ルートとしては、必然性のないルートだ。ここから見えるあの金剛山のどこかに四人組が隠したと思われる資金が眠っているはずだ。

取り押さえた四人組の口は固く、頑として口を割る様子ではなかった。事情を精通しているのはボス格の男だけで、他の三人は護衛役と運搬役であり情報を持っていなかった。不気味な黙秘を続けていた……。

湖論暮刑事は、地図を凝視しながら四ヶ所の葛城山に印を付けた。和泉葛城山、南葛城山、中葛城山、そしてこの大和葛城山だ。

湖論暮刑事は、大和葛城山の頂を周回するように散策した。先日の大和葛城山花火作戦を想起した。楽しい作戦だった。久米田の超人的な働きで、浅香小百合を無事に救出し、闇組織の四人組も逮捕した。しかし、事件は根本的に解決したわけではなく事態はさらに複雑で危険な状況となっていた。意外にも早く残余組織が表に出てきた。追い詰められた者たちは必死だった。

湖論刑事は、金剛山まで足を延ばすことに決めた。湿り気のある大阪平野からの風が、故論暮刑事の顔をなでるように吹きつけていた。奈良県方面を見ても透明感がない光景が続いていた。山の頂にいてもメリツトがない状況だ。くぐもったような金剛山を眺めていると、つらくなるような想いがこみ上げてきた。

水越峠に降るルートを選択し、そこから金剛山に登ることを決断した。コースは、まだ決めていなかった。降りながら考えようと想った。国民宿舎葛城高原ロッジを左に見ながら通過した。そして、水越峠に降る登山道を歩いた。こは、季節が季節なら真っ赤なツツジが咲き誇っているはずだった。大昔、この真っ赤なツツジを眺めて山火事のようにだと想ったことが懐かしい。

水越峠に降るコースの階段差にはリズムを狂わされた。結構、膝に衝撃を与えた。このコースは、有名なダイヤモンドトレールの一部だった。それでも気持の良いコースだった。大昔、湖論暮刑事が学生だった頃に、二上山から金剛山までのルートを歩いた。また、時期は異なるが、紀見峠から岩湧山を経由し

て横尾山まで歩いたことを想いだした。ダイヤモンドトレールは、屯鶴峯（どんずるぼう）からスタートして最終的には横尾山での全長四五キロの自然歩道だ。大阪府と奈良県にまたがっているルートだ。

湖論暮刑事は、水越峠に到着し、金剛山の登山口に出た。コースは、ガンドガコバルトだ。浅香小百合を連れ去った四人組が、入り込んだルートはおそらく太尾東尾根ルートではないかと当初、湖論暮刑事は推測した。しかし、最期に立てこもった金剛山キャンプ場のバンガローの位置関係を考えると、いささか無理があると想い再考しなおした。あっちこっちと藪こぎしたとしても人質を連れて、登山道はずして歩けるものではない。結局のところどこから入山し、どのルートを通って金剛山キャンプ場に出たのか不明だった。浅香小百合に、どのような道を歩いたのかと訊いてみたが、夜道と言うことと疲労困憊・・・恐怖のもとでは記憶も定かでないということになる。さすが、浅香小百合でもこれ以上問詰めるのは気の毒だと想った。そのうちに想い出すこともあるだろうと期待するしかなかった。ただ素直に考えればダイヤモンドトレールが一番素直なルートだと湖論暮刑事は考えた。彼ら四人組は、金剛山キャンプ場で、大阪府警M A A Tに阻止されなければ、久留野峠を通過して中葛城山に向かったのだろうか。

湖論暮刑事は、考えれば考えるほど思考が混乱した。四人組が歩いた道なき道でも、浅香小百合がそばにいるようなポイントで資金源の金塊を埋蔵するとは考えられない。生きて返してこそその人質だからだ。後で証言されるような過失を犯すわけがないのだ。また、犯人グループは、途中で二手に分かれた可能性もあった。あえて、浅香小百合を藪こぎさせることでルートの攪乱を図ったかもしれない。

湖論暮刑事は、出来るだけ四人組の逃走ルートを推定しようと思った。推測すれば、水越峠から金剛山の頂近辺にあるバンガローまでのライン周辺と思われるが、あまりにも山域が広いこともあって組織が資金源を埋蔵した可能性があると言われるポイントは確定できない。金剛山での地権者（山主）は、先日浅香小百合が何気なく言った一〇〇人以上より実際はもっと多く、ある資料（ヤマケイ関西 別冊山と溪谷 金剛山 NO. 3, 2003）によれば、金剛山一帯で二五〇人の山主がいるとのことだ。おそらく、それぞれの地権者たちが所有する山々は、複雑に絡み合っているだろうと想った。そして、これら地権者たちは、確固とした証拠もなく捜索だということも多く、捜査関係者が山に入るのを拒否するだろう。山が荒らされるのを拒否するのは当然のことだ。

湖論暮刑事は何人かの登山者を追い抜いた。

―脚は衰えていないなあ……。日頃、聞きこみなどで出歩いていることの成果かも……。―と湖論暮刑事は笑みを浮かべた。心肺機能も問題なかった。足を前に進め、一歩一歩と高度を稼ぐことが楽しかった。

高石は、昭文社の地図や市販のガイドブックにルート説明として掲載されていない横尾山域の山を歩いていた。紅(黄)葉の季節のわりには、樹々の色模様が冴えない。

最近の高石は、正規ルートとどうか人が歩く道を選んでいた。人間嫌いではないが、登山中に人と会って挨拶するのが面倒だった。思考が中断することを恐れていた。他の登山者と遭遇すれば、高石は、体育会系の人間ではないが、きつちりと挨拶するように心がけていた。昇りの斜面で心肺機能が最高潮に稼働している時は、さすが声は出ないので会釈していた。それでも、最近はこちらが挨拶しても無視して通り過ぎる登山者が多い。

そのような時に、無粋な対応をされると違和感を覚えた。違和感を解消するのに、しばらくの時間の経過が必要であり、想念が断絶するのだった。今、高石の頭の奥深くで、ヤカンのお湯がグツグツと沸騰するような熱い想念があった。それは、金剛山域に埋蔵されたと言われる闇組織の活動資金のことだった。捜査とつか捜索は少しも進展していない。先日も湖論暮刑事が、大和葛城山から金剛山まで足を伸ばしたとのこと。闇組織を壊滅させるためには、復活を担保する資金源を断ちきる必要があった。

湖論暮刑事の問題提起を受けて、大阪府警の捜査本部が推定される山域を山主の了解を得て、定期的に巡回パトロールすることになった。この巡回パトロール隊のメンバーは屈強な若い機動隊員によって構成され、常時三人のチームで行動していた。通常の登山ルートだけでなく怪しいと思われる一帯を藪漕ぎしながら監視行動をしていた。たやすく闇組織のグループが、この山域に近づかないための措置だった。これは、すでに……。この世の「埋蔵金伝説」として、一部ネット上で「金剛山埋蔵金伝説」として巷間に流布されていた。このことをもあって、心無い輩があっちこちと地面を掘り起こして山を荒らさないようにするための抑止力でもあった。

湖論暮刑事にしても捜査の壁にぶち当たっているようだ。高石にしても浮かぶヒントはない。しかし、「なりきり探偵」としての意地があった。高石は、自

分自身の思考を深めるために、低山ではあるが正規の登山ルート傍らにあるかすかな踏み跡を辿って、他の登山者が絶対に足を踏み入れない領域に入ってしまった。かすかな踏み跡は、しばらく歩くと落ち葉の堆積で道らしくなくなり、藪漕ぎをしなければならぬただの山の斜面になった。

―獣道（けものみち）か……。今、我々に必要なのは動物的な勘かも知れない。探偵にも動物的感情性は必要かも―
と高石は想った。

生来の方向音痴の高石は、青島青年に無理やり所持させられたGPS機器を身に付けていた。購入すれば、結構なお金が必要な代物であるが、青島青年は上司の奇行を心配して使用方法を丁寧に説明した。

「係長！これさえあれば現在地は分かりますよ。ただし、樹林の中とか深い谷では電波の受信状況は悪いので用心して下さい。念のため地図とコンパスも忘れずに携行してください。ああ……。それと懐中電灯二個と笛を忘れずに。」と青島青年は、あたかも徘徊認知高齢者を見るように言った。

青島青年は、加えて……。哀れむように言った。

「最近の係長の山行は、徘徊者ですね。認知高齢者のそれですよ。低山でも迷えば、降るのではなく尾根に向かって昇ってくださいね。見晴らしの良い尾根にいれば、行くべきところが分かりますからね。迷った時や怪我して動けない時は、煙草でも吸って落ち着いて下さいね。携帯の電波の届くところであれば、一一九番。消防に電話した後でいいですから、僕にも連絡してください。デート中でも彼女を振り切って、係長の救援に向かいますので……。GPSには現在地の緯度・経度が表示されていますからね。それと、笛ですよ！笛！大きな声は、そんなに続かないから……。ああ……。それと、飴玉を持てるだけ持って……。ああ……。それと日没時間の事前確認……。」

なんと心優しい危機管理意識の強い青年だろうか……。明日にでも高石が遭難することを考えている。

確かに高石の山行は、無茶苦茶だった。ここに来るまでもヒヤヒヤとすることがあった。横尾山の登山者駐車場に愛車ノアを停めた高石は、駐車場の奥のルートから登って行った。真夏なら嫌な蛇でも出てきそうな感じのところだった。最初の取り口は、ぬるぬると濡れている岩を登る必要があった。若い時代なら一歩足をかければ、地面を蹴ったもう一つの足の力で前進できるほどの高さだが、持病として腰痛持ちの高石にとっては、こんなところでも慎重に行動しな

ければならないと思った。左足をかけて、ぬるぬるとした岩の突起部分を右手で掴んで、這い上がった。若い子が見れば、なんと醜悪な行為だと想うだろう。掴んだ岩肌の感触までもが、高石を嘲笑っているかのようだった。

ほんのしばらく歩くと分岐があった。右に進路を取った。沢を横切った。この沢の奥に小さな滝があった。行者が修行する場所だと想った。この滝に打たれて推理すれば、解決策が見つかるかも知れないと想った。踏み跡を辿って行者場の右側の斜面を登った。登ったというよりは、這い上がった感じである。足元の登山靴を通り越して眺める行者場は、崖下にあった。恐怖で、膝が笑うほど震えた。ロープにしがみついて通過した。

―誰にも見られたくない姿だ―と高石は額の汗をタオルで拭った。

おそらく仏岳方向だろうと想うが、この進路はロープで封鎖されており「危険」という標識がぶら下がっていた。さすが、行く気にはなれず、結局のところ小さな滝の上部を巻いて、一旦降り、昇りの踏み跡を探した。そして、斜面を登って行った。ルート上に赤テープが巻いてあった。何故かテープを見ると安堵感がこみ上げてくる。高度を稼いで行くと、男女の話声が聞こえてきた。なんと仏岩の下に出てきてしまった。若い男が岩に取り付いていた。下で確保していた若い女が、高石の風体を眺めて訝しげな表情をしていた。それもそのはずであろう。先ほどの沢で、ブーンブーンと羽音がするのでスズメ蜂では難儀だと想いフリースの上にジャンパーを重ね着して、夏用の帽子の上に耳あて付きのスキー帽子を被っていた。首にはスポーツタオルをぐるぐる巻いていた。これで、持参したマスクでもしていれば不審者だった。

仏岩の下部で水分補給をした高石は、踏み跡を辿って斜面を昇って行った。斜面の上方を見ると樹林の間から光が差し込んでいた。踏み固められた登山道に出た。左側に行けば仏岩の頂に行ける。ごつごつした岩を踏みながら、しっかりと重心をとって高石は慎重に歩を進めて頂に立った。

眼下には、駐車場に止められた数台の車が視認できた。大阪湾も見える。せまい頂の上に立つと膝が震えてくるが、名状しがたい爽快感が充溢してくる。幾重にも重なった山々が樹々に覆われている。この風景が高石の眼に入ってくる。高石は呟いた。

―この山々に包まれていると本当に心が落ちつく・・・―

仏岩を辞した後、高石の徘徊とも言える山歩きが始まった。時々、青島青年から借用しているGPS機器をポーチから取り出して現在位置を確認した。低

山といえども用心することは大事だ。通い慣れたルートであれば、所々の標識や風景は記憶の中にあった。どこをどう歩いたのか分からない。

—ここはどこだろうと？—と高石は思った。

登山者用駐車場からスタートして仏岩、そして先ほどの「けもの道」のような斜面、落ち葉で堆積した斜面を右往左往しながら巖肌を左方向に見ながら歩いた。何かの枝尾根かもしれないなかった。あっちこっちと歩きまわって、再びしっかりと踏み固められた登山道と遭遇した。

そこから意味不明の状態で徘徊山行が続く……。どうやら方向的には、南方向だ。

十五丁石地蔵を過ぎたと想われるポイントで高石は、ザックをおろして水分補給のための小休憩をとっている時だった。二人組の男が、藪の中から出てきた。赤松が育つ山などでは、地元の地権者たちが藪の中をマツタケ採集している光景を見たことがあるが、この二人組はそのようないでたちをしていなかった。二人組の男たちは、登山用のザックも携行していなかった。目つきはするどく、必要以上に周囲を警戒しているような様相であった。男たちは、帽子を二重に被り寒くもないのにフリースの上にジャンパーを重ね着し、スポーツタオルをぐるぐると首巻きして露出部分が顔上半分という高石の姿を見て、ただの変な登山者と判断したのであるうか、一瞥を加えただけで槇尾山頂方向に向かって歩いていった。

高石は軽い会釈でもと想ったが、無視した。この場合には無関心を装う方が自然だと想った。ただ、高石は自分自身の「ペット捜索探偵」としての長年のカンが閃光のごとく脳裏を駆け巡るのを感じた。

—不審者だ！—

高石は、ゆっくりと煙草を味わった。この場合に慌てると不自然な行動に出してしまう。

—落ち着いて山を楽しむ普通の登山者を装って尾行することが決定的に大事だ。—と想った。

しかし、結果的にはこの行動は高石に恐慌事件をもたらした。徹底的に無視してそのまま松原越の道を歩き、上山や三国山方面へと進んでいれば今回の災厄は防止できたかもしれない。高石は、つかず離れず尾行した。高石は、ゆっくりと追跡した。しばらく樹林帯の中を歩いている時に、突然と左右の藪の中から男達が飛び出してきた。厳つい表情をした男が、近寄ってきてドスの効いた声で言った。

「追尾してくる変な奴がいると想っていたが、お前が高石か？飛んで火に入る夏の虫だな！貴様の榎尾山登山の情報は探知していた。あっちこっちと探したぜ！俺たちは、お前を捜していたのだ。世話をやかしやがって！手間が省けたぜ！」

男は高石の胸倉を掴んで、頬に平手打ちを加えた。顔が歪んだ気がした。鼻血が飛び散った。一瞬にして高石を恐怖のどん底に突き落として抵抗する能力を奪った。高石には、久米田のような戦闘能力は元々なかった。

高石のメガネは顔面から弾き飛ばされていた。メガネをかけていないとしまりのない顔になった。ましてや鼻血が噴き出していた。この世のものとは思えないほど引きつった表情をしていた。高石の胸倉を掴む男の左手にも鮮血が飛び散ったようだ。男の左手頸に何かの印のタトゥーが見えた。

男は、更に言った。

「お前達が、うるさく嗅ぎまわるのでボスがお怒りだ！お前を拉致してこいという指示を受けている。さあ！俺たちと一緒に同行していただこう！それとも日根野のように蔵岩からダイビングするか！」

高石の両足は、自分自身の体重が支えきれないほどわなわなと震えていた。――しまった！――と想った。

俺自身が標的だったとは予想外だった。低山で遭難どころか、これでは第二の榎尾山蔵岩殺人事件の再来だ。闘争では、最も弱い部分を攻めて相手側陣営にダメージを与えるのが戦術だ。ここには、頼みの久米田も湖論暮刑事もいない。

久米田を攻めるには、戦車が必要だ。現役の刑事を攻める愚などは、知能のある犯罪者なら行わない。そうなると最も軟弱な高石を攻め取るのが、最も効果的だ。身辺の安全対策は取っていなかった。まさか、と想っていた。闇組織の残余勢力が蠢動していることは分かっていた。だが、このように自分自身が狙われることは想定外だった。

もう一人の男がニヤニヤと不気味な笑みを浮かべながら百万ボルトのスタンガンを手にとって近づいてきた。スタンガンがバチバチと音をたてて唸っていた。いかにも高圧電流が流れているように放電が起こり、怪しげな閃光を発生していた。高石は、戦慄した。

――殺される！――と高石は想った。いつぞや観た悪夢を思い出した。トカレフで頭を撃ち抜かれる夢だ。

――正夢だったのか！――と高石は想った。

あまりの恐ろしさにわななきがとまらなかった。汗がひいた。なんとも言えないおぞましい寒気が襲ってきた。今にも漏れそうな状態だ。男としては、失禁

することは避けたい。死体となって発見された時にズボンの股間部分がビシヤビシヤでは一族の恥辱だ。嫁の顔が浮かんだ・・・子ども達の顔が浮かんだ・・・小百合嬢たちの顔が浮かんだ・・・青島青年の顔が浮かんだ・・・ミサキ嬢の顔が浮かんだ・・・

—そう言えば、ミサキ嬢が俺に持たした物があつた。—

高石は、ズボンの尻ポケットに手を入れた。震える手でポケットの中の物を取り出すと高石は勇気を奮い起して眼前の男の顔に向けてスプレーを吹きつけた。

「ギャッ！何しやる！」

ミサキ嬢が痴漢対策で携行していた催涙スプレーだった。何とも言えない臭気がした。有効射程距離三、四メートルの高拡散性の催涙スプレーだった。近寄るスタンガン男の顔面にも噴射させた。高石の胸倉から手を放した男の股間を思いきり蹴りあげた。これは、常日頃から久米田から教えられている弱者の最大攻撃方法だった。高石自身がこのような敏捷な行動をとれるとは思ってはいなかった。

—我ながら感心する。—と高石は想つた。

登山道でのたうち回る男がふたり・・・止めの一撃！催涙スプレーをスタンガン男に噴射した。

「このやろう！殺してやる！」

視力を奪われた男どもが高石を捕捉しようと思つながら動き回る。スタンガン男は、胸ポケットから黒光りする物を取り出した。

—トカレフだ！—

更なる冷たい恐怖感が高石を襲つた。高石は、全力でその場を離れた！

—逃げるが勝ち！—

とにかく、走つた。後方から二度三度の発砲音がした。直後、高石の傍らにある樹木の幹に何かが命中した。鈍い音がして樹木が折れた。更に、足元の岩に銃弾が命中したのか、弾ける鈍い音がした。高石は、走つた。恐怖のために思ったより足が進まないことに苛立ちを覚えた。藪の中に飛び込んだ。この後、どこをどう駆け降つたのか不明だ。後方を見る余裕などなかった。膝が痛いとか腰痛がどうのこうのと考えている余裕はなかった。とにかく転がるように走つた。小さな根っこに足がひっかかり転倒した。高石の体は、宙を飛んだ！そして、さほど高くない崖下に転がり落ちた。

深夜、一二時も過ぎた時に久米田の携帯電話が鳴つた。深い眠りの底で彷徨っている頃だ。夢うつつの状態で枕元に置いてある携帯電話を手探りで捜した。

—こんな時間に誰だろう？—

と久米田は訝った。携帯の画面を確認すると、高石の妻からの着信だった。久米田の脳裏に不吉な想念が浮かんだ。

「はい・・・久米田ですが・・・」

「夜分に申し訳ございません。主人の高石が、この時間になっても帰宅いたしておりません。ひよっとすると同窓生のお仲間と一緒させていただいて呑んでいるのかと想いまして・・・」と高石の妻は遠慮がちに、少々不安をまじえた声で訊いた。

「いや・・・今日というか昨日は会合の予定はなかったですよ。」

「そうなのですか・・・。実は、朝方から榎尾山に登ると言って車で出かけたのですが、その後皆さんと呑んでいると想っていたのです。」

「榎尾山・・・」

久米田の背中に、激しい電流が走ったような衝撃を受けた。

—しまった！—と想った。

「奥さん・・・分かりました。今から、榎尾山に行きます。何か分かれればご連絡を入れますのでご心配なさらずに・・・」と久米田は先方に不安を与えないように言った。

久米田はすぐに布団から飛び出した。久米田は、直ちに浅香小百合、白鷺の携帯に電話をした。それぞれには、緊急事態が発生したこと。高石の生命が危機に瀕していることを手短かに説明した。余計な説明は不要だった。今から榎尾山の登山者用駐車場に集合するようにと伝えた。白鷺は呑みつぶれていたが、理解能力はあった。直ぐに、白鷺は裕次郎君に電話した。深夜にも関わらず伯父貴の白鷺と小百合嬢を迎えに行くとのこと。

久米田は、自宅車庫からスーパークラブを引っ張りだして外環状線を猛スピードで駆け抜けた。警官の制服姿の久米田が恐ろしい形相をしながらスーパークラブを運転していた。疾風の様に走行した。考える事は、沢山あった。小一時間程度で榎尾山の登山者用駐車場に到着した。当然のことながら、この時間帯では、人の気配はない。漆黒の闇の中に沈んでいる山の静寂さは不気味だった。

久米田のスーパークラブのライトが駐車場奥に停まっているノアの車体を浮かび上がらせた。

—高石の車だ！—と久米田は想った。

しばらくすると酒の匂いをプンプンさせた白鷺と浅香小百合、そして裕次郎君を乗せたRV車が到着した。

白鷺は、すでに真顔になっていた。高石の安否が不明という連絡が酔いを醒

ましたようだ。

「状況は？」と小百合嬢が手短かに訊く。

「わからない・・・」と久米田。

「俺のカンだが、高石は今、極めて危険な状態にある。ひよっとすれば、手遅れかも知れない。油断していた・・・。例の闇組織の連中に襲撃されたかもしれない。」と久米田は悔恨の情を隠さずに言った。

「そんな・・・。」と白鷺が絶句した。

「今からみんなの協力が必要だ。裕次郎君は俺と、この山域を搜索する。怪我をしているかもしれない。この季節だ。結構、気温も低い。生きていれば、一分一秒が生死の分かれ目となると思う。もし拉致されていたとしても何だかの痕跡があるだろう。浅香は、高石の家族支援を頼む。白鷺は、在阪のH高校同窓生に緊急連絡して搜索隊を組織してくれ！搜索隊は、早朝の五時集合だ。日の出より搜索を開始してくれ！状況は分かり次第連絡する。警察・消防関係は湖論暮刑事に連絡してもらってくれ！時間がないぞ！みんな！」と久米田は畳みかけるように言った。

冷えた大気に包まれた槇尾山域は、漆黒の闇の中にあった。樹々の匂いを含んだ夜風が小百合嬢の黒髪を撫でるように吹き去っていった。小百合嬢は、星明りが一つもない夜空に向けて手を合わせて仲間である高石の無事を祈願した。

月曜日。いつもより早く出勤した青島青年は不安で胸がはちきれそうだった。いつもなら既に出勤してスポーツ紙を読んでいる高石係長の姿が見えない。主がない椅子は、なんだか哀しいそうだった。青島青年は、裕次郎君からの携帯メールで状況報告は受けていた。深夜の三時過ぎ頃にそのメールは着信した。電波状況の良いポイントだったので送信できたのだろう。今、久米田さんと裕次郎君とが必死で搜索しているとのこと。登山道より少し外れた斜面で高石のザックが発見されたとのこと。血痕が付着していたとのことだ。

青島青年は、出勤してきたミサキ嬢に状況説明をした。ミサキ嬢もショックを隠しきれないようだ。係長のデスクを見ながら、涙を浮かべていた。青島青年は、これからどう行動すべきかと逡巡している時に、始業前にもかかわらず庁内放送が流れた。

「緊急の連絡です！出勤している各課の管理職は、ただちに大会議室に集合してください。この放送は緊急放送です。これは訓練ではありません！」と秘書課の女性職員が滑らかな声で放送していた。

あわてふためいて、大会議室に入っていた各課の課長連中は、びっくりした。真正面のテーブルに防災服スタイルでヘルメットを装着し威風堂々とした市長が腕を組んで、すでに着席していた。

事情の分かっていない秘書課長がおもむろに開会の言葉を述べると、市長は静かに重々しく言った。

「突然の緊急集合で申し訳ない。実は、諸君もご存じだと想うが、我が市役所の優秀な職員である高石くんが、和泉市の槇尾山中で行方不明とのことだ。事件に巻き込まれた可能性がある。昨日から連絡が取れていない状況である。先ほどの情報では、血痕の付着したザックが登山道より外れたところで発見されたとのことだ。

ここで諸君に申し訳ないが我が市役所でも有志の捜索隊を出したいと想う。一刻を争う必要がある。高石くんが負傷しているとすれば、一分一秒の無駄も出来ない。人の命は地球より重い。捜索隊の隊長として私が先頭にたつつもりだ。ただし、公務でないので諸君の年休対応でお願いしたい。時間外手当も出ないし、何かあっても自己責任となる。今日は、週初めの月曜日ということもあって、どこの課の仕事も繁忙を極めていると想うが、公務に支障のない範囲で参加して欲しい。所属に戻って、課員に報告してください。これは、業務命令ではない。私からの個人的なお願いだ！心ある職員の好意に期待する。捜索隊のバスは、私のポケットマネーで用意した。出発は、九時一五分。駐車場に集合です。以上です。」

説明というかお願いの話が終わると、市長は質問を受ける時間ももつたいないと想ったのか、いそいそと駐車場に向かって歩いた。そのあとを、事情が全く分からない秘書課長が随行した。大会議室に残された課長連中は、お互いの顔を見ながら途方にくれていた。多くの課長連中にとっては、意味不明だった。

始業のチャイムが鳴る少し前に、課長が執務室に戻ってきた。深刻な顔をしていた。課長は、居合わせた青島青年やミサキ嬢などの課員を集合せると、先ほどの市長のお願いなるものを説明した。青島は、一番に志願した。仕事のこともある。公務を停滞させるわけにはいけないので、ミサキ嬢が居残ることになった。

青島は、ロッカーに入れてある予備の山の道具を引きずりだした。山姿に服装を変えて駐車場に向かった。もちろん休暇届を提出した。市長が私費で用意したマイクロバス四台に、ぞくぞくと市職員たちが集結した。それぞれ想いのスタイルだが圧倒的に防災スタイルだった。長靴にヘルメット・・・。今にも台風が来襲するかのような様子だった。集結した有志の捜索隊は、二〇〇人を超えた。小さな衛星都市の役所である。これほどの有志が集結するのは、現役職員の葬儀ぐらいだった。四台のマイクロバスでは収容できない数だ。あふれた捜索隊メンバーは、各自のマイカーに分乗して槇尾山に目指すことにな

った。市長が搜索隊の結団式ということで、短いスピーチをした。傍らには、防災服を着た労働組合の委員長や書記長が並んでいた。

市長は、涙ぐみながら言った。

「諸君！ありがとう！これほどの人間が参集するとは想っていなかった。感謝する！先ほど入った情報によると大量の血痕が付着したスポーツタオルが発見されたとのことだ。搜索地域は、発見されたザックやタオルのポイント周辺が重点地域となるであろうとのことだ。なお、昨日登山したハイカーの情報によれば、銃だと想われる発砲音が数発聞こえたという情報も入ってきた。表面には出ていないことだが、この際！言おう！高石くん達は、犯罪組織と、この間闘ってきた。普通の公務員がすることではないが、彼は正義を貫くためにこの仕事に打ち込んできた「公僕の戦士」である。あの大和葛城山の花火作戦を想起せよ！あれは、高石くん達の仲間が計画実行した救出作戦だ！その作戦によって人質となった善良な市民が救出されている。この事については、マスコミ報道でもご存知であろう！この話を聞いて恐怖を感じる職員もいるであろう。家族のことや恋人のことを考えれば、この搜索隊に参加することに躊躇すると思う。何かあれば、私有家財を売り飛ばしてでも個人として出来る限りの補償をする。いざ！いかん！槇尾山へ！敵は本能寺だ！」と市長は、学生運動が盛り上がった1960年代後半のアジテーターのごとくまくしたてた。（実際は、応援団所属だけだ）

「ウオーっウオーっ！ウオーっ！」と集結した二〇〇人の搜索隊メンバーはトキの声をあげた。

忠臣蔵の討ちこみもこんな感じだったかも知れないと青島青年は想った。

当初の情報とは違うが、身の危険の怖れがあると聞いてもX市職員の有志搜索隊に志願し、参加した人間の中で、誰一人も逃げ出さなかった。

庁舎の各窓から大きな拍手が起こっていた。行きたくても目先の業務を停滞させるわけにはいかない。市民生活を維持させなければならぬのだ。断腸の想いの職員が涙を流して手を振っていた。小さな衛星都市の市職員は、お互いのことは全て知っていた。ある意味・・・ほとんど親戚関係かも知れなかった。

マイクロバス四台とそれに続く多くの車は、外環状線を走った。青島青年たちは、槇尾山の参拝用観光バス駐車場に到達した。すでに日高校の同窓会搜索隊一〇数人が、日の出とともに搜索を開始していた。

「なんと！結束の強い同窓会だ！今時、考えられない連帯感だ！」と青島青年は想った。

マイクロバスを降りたX市長は、何かを探すように周囲を見た。

浅香小百合嬢が、市長を見つけ近寄ってきた。眼には涙がたまっていた。

「ありがとうございます。」と浅香小百合嬢は頭を下げた。

「なんのなんの！少々、数は少ないが、有志捜索隊を連れてきたよ。」と市長は言った。

青島青年は思った。

―市長は、浅香小百合嬢の緊急連絡に応えたのだ。―

「ところで誰の指示を受けたらいいのかな？」と市長は浅香小百合嬢の肩を優しく包み込むように抱きながら言った。

「はい！こちらの車で指揮を取っています。各捜索隊にはトランシーバーを所持させています。電波状況の悪いところもありますが、逐一情報は入ってきます。念のため、捜索情報を共有するために横尾山頂、上山、三国山、焼山、そして、滝畑方面をカバーすべく岩湧山と南葛城山にも無線局を配置しています。」と小百合嬢は言った。

小百合嬢の側で、すっかりと酔いの醒めた白鷺がきびきびと無線係の総括担当の仕事をしていた。

「市長の捜索隊は、一班一〇人体制でこの山域地帯の捜索をお願いします。山狩りのようなものです。登山道周辺関係は、H高校同窓会捜索隊が周辺も含めて捜索しています。ただ、昨日の一般ハイカーの情報では銃の発砲音が確認されています。これは、警察関係からの情報です。犯人と思われる輩も潜伏している可能性もありますが、地元の警察署も拳銃所持で捜索に入っているのです。大丈夫だと思えます。ザックやスポーツタオルの発見場所から言えば、この周辺なのですが高石くんの性格だと意味不明な道なき道を、逃げているところがあります。そういう意味で、逃げ惑っている状況を考えて、予測がつかみません。すべての谷筋を捜索する必要があります。一部、仏岩や蔵岩などの岩場では、滑落する危険箇所もありますので非常に要注意です。それから、高石くんの性格ですが……。彼は攻撃されると、身を縮めて潜伏するタイプです。いわゆる小心者です。したがって拡声器などを使って呼びかけても……。彼の自衛本能は、逆方向に行きます。このように静かに我々が捜索していても敵だと判断して、身を隠します。今回、市長様にお願したのは……。万一……。このことがあるので……。遺体の発見……。をお願いします。」

小百合嬢の泣き顔から漏れる言葉は、途中で……。止まった。しかし、気高く……。精神世界では、偉丈夫な小百合嬢は地図を指し示しながら説明をした。

この小百合嬢の説明後。

市長は、傍に侍る秘書課長ではなく青島青年を呼んだ。

「お前が、この搜索隊の指揮官だ！好きなように指示して、この二〇〇人部隊を有効に機動させよ！俺が責任を取る！文句を言う奴とか不服従の奴がおれば、俺に言え！即刻！首にしてやる！」と市長は、周囲に聞こえるように大声で叫んだ。これは、市長の杞憂だったけど・・・それに、青島青年に逆らうような搜索隊員はいなかった。皆の心は一つだった。

―救え！仲間を！―

青島指揮官は、尊敬する高石係長救出のために指揮官に成り切った。指示された搜索の作戦とイメージは出来ていた。青島指揮官は、日常なら決裁文書のハンコを頂くためにペコペコと頭を必要以上に下げて、へいこらしなければならぬ管理職達に指示した。虎の威を借りるなんとかではなかった！この搜索隊の心と同一した精神が、青島青年を動かしていた！

「各局部で、一班一〇人体制でチームを作成して下さい。その中で、リーダーを選出して下さい。リーダーの資格は問いません！選出後、手短かに作戦を支持します。三分後に私のところに参集して下さい！以上！」

青島青年の側に立つ市長は、青島青年の適格な言葉と凛々しい態度・・・そして、搜索隊のメンバーの顔を見ながら考えた。真に・・・X市が東・南海地震などの危難と遭遇した時に、通常の役所の職階体制に基づく防災体制では、機敏な行動をとれないだろうと想った。市長は、青島青年の姿にX市の輝かしい未来を見た！

―防災対策の再構築を！―と想った。

寒さで高石は、眼が醒めた。恐々と薄目をあけて周囲を見た。太陽が沈んで真つ暗な闇が高石の体を包んでいた。いま・・・何時頃だと想った。

体を起こそうと想っても動かすことが出来なかった。右足が特に痛い。どうやら骨折しているようだ。

背中感触に違和感があった。転倒した際に、衝撃を緩和するザックが見えたらぬい。背中にも、うずくような痛みがあった。出血した血が乾燥して凝固したのだろうか。顔の下半分がゴアゴアしていた。

首に巻いていたスポーツタオルもなかった。ポーチはしっかりと腰に装着されていた。

この季節、低山といっても夜になると結構冷え込む。ポーチから懐中電灯を取りだそうとしたが、あの二人組が高石を探しているかと想ったのでやめた。

どこをどう駆けぬいてきたのか分からなかった。

星明かりもない夜だった。高石は、自由が効く左右の手を使って周囲にある落ち葉をかき集めた。何かの記事で読んだことがあった。落ち葉をシュラフ代わりにして寒さを防いで助かった遭難者の話だ。

風よけにもなつて、結構暖かい。

高石は、ポーチから飴玉を取り出して口に入れた。甘い匂いが周囲に広がった。

高石は、心配している家族のことを想った。妻の顔・・・子どもの顔が浮かんだ。妻のことだから、深夜になっても帰宅しない夫のことを案じて久米田達に連絡しているだろうと想った。何かあれば、久米田たちに通報するようには言っていた。久米田のことだから、今頃は必死になって、この山域を搜索しているのに違いないと想った。

ポーチから携帯電話を引っ張り出した。圏外だった。どこかの谷筋に入り込んだようだ。とにかく逃げることで、精一杯だった。このままでは、発見が遅れて死んでしまうかもしれない。

何かの方法で、ここに高石がいる・・・俺がいる！それも生きているというのを伝えたいと想った。しかし、有効な手段は思い付かなかった。

漆黒の闇の中でも何かできることがあるかと考えた。そういえば、最近読んだ本で「風雪のピヴァーク」松濤明の遺書を思い出した。壮絶な遺書だった。

―俺も遺書を・・・―と高石は想った。

松濤明の遺書がカタカナを多用して書かれている意味が分かったような気がした。暗闇の中で、漢字の混じった文章を書くのは困難だ。受けた教育の時代も関係するが、高石の今の状況で言えば、カタカナで書く方が容易な気がした。

高石は、松濤明の遺書の断片を想い起した。

全身硬ツテカナシ。

何トカ湯俣迄ト思フモ有元ヲ捨テルニシノビズ、

死ヲ決ス

オカアサン

アナタノヤサシサニ タダカンシヤ。

我々が死ンデ

死ガイハ水ニトケ、ヤガテ海ニ入り、

魚ヲ肥ヤシ、又人ノ身体ヲ作ル、

個人ハカリノ姿　グルグルマワル

高石は、ポーチからボールペンと地図を取り出した。書きやすいように無理をして寝返りを打った。楽な姿勢を確保した。どちらの面が、裏か表か分からなかったが、書き始めた。

イシヨ

タカイシマモル

ツマヨ　ユルセ

コドモタチヘ　ユルセ

オトンハ　キミタチニ

タイシタコトヲ　シテヤルコトガ

デキナカツタ　ユルセ

クメダ　コロンボヘ

テガカリハ　クモダ

シラサギヘ

ノミスギルナ　サキニイク

ユウジロウケンヘ

シラサギオジキノコト　タノムヨ

アサカヘ

マドンナ　バンザイ!

アオシマ　ミサキヘ

シゴトノコト　タノム

•
•
•

松濤明のような格調高い壮絶な文章は残せないが、言い残したいことは書けたような気がした。

前頭部からも出血しているのだろうか地図に何かが滴り落ちてポタポタと音がした。記憶が薄れていく……。意識が混濁していくのが分かった。そして、抗うことが出来ない猛烈な眠気が襲ってきた。高石は、睡魔と戦った。眼を閉じて眠ってしまったら、死ぬと想った。再び、仲間や家族と再会できないと想った。ボールペンを握りしめる力が徐々に弱くなってきた。どうせ死ぬなら最後の煙草を！一本でいいから吸いたいと想った。

高石は、再び眠りの底に落ちて行った。

「俺は・・・死ぬのだ・・・」と高石は想った。

日没前で一旦、搜索は打ち切られた。警察・消防関係は、一部の部隊を残して撤退した。X市役所の二〇〇人の有志搜索隊は、規模を縮小した。現地に残るのは、青島指揮官と労働組合の青年部一〇数人が残ることになった。

市長は、青島指揮官に言った。

「とりあえず今日は撤退するが、明日はメンバーを入れ替えて来るからな！」
「ありがとうございます！」と青島指揮官は市長に敬礼をした。

後に残るのは、昼前に到着した日根野三郎が属していた民間捜査機関「フェニクス」の炊き出し部隊のメンバーだった。どこから情報が伝達されたのか不明だが、炊き出し部隊はまさに「大阪のおばちゃん」達の一〇人グループだった。この炊き出し部隊が握った「おにぎり」は最高に旨かった。「フェニクス」が持つ組織力に圧倒された。まさに「大阪のおばちゃん」達は、れっきとした構成員であるとのことだ。実に人材が多層な構成の組織なのだ！

青島指揮官は、残ったメンバーを召集した。今日の総括と明日からの対策を協議するためだ。X市役所の有志搜索隊の会議はすぐに終了した。明日の搜索のために体力回復をはかる必要があった。市長の指示で、空きスペースに急遽たてた災害用テントで寝るよう指示をした。当然のことながら、地元の市長へ電話連絡して使用の口頭許可を受けていた。

青島は、全体の搜索隊のリーダーである浅香小百合嬢に会いに行った。

浅香小百合嬢は、無線のマイクを握りしめて誰かと通信していた。どうやら久米田さんとの通信らしい。

浅香小百合嬢は、久米田さんに一旦撤退するように指示していた。浅香小百合

嬢の指示は絶対であった。「伝説の警官」と言われる久米田さんも逆らうことは許されない。このグループの鉄の規律だった。

しばらくして久米田さんと裕次郎君の二人が山から降りてきた。青島青年は驚いた。二人の服は、相当の藪こぎをしてきたのかボロボロだった。裕次郎君の顔には疲れが感じられた。握り飯を手渡されると、しばらくの間をおいてからかぶりついた。そういえば、ろくな食事をしていなかったはずだ。携行した行動食で道なき道を這い回ったはずだ。

すぐに全体の総括会議が始まった。結論はすぐに出た。一分一秒を争う事態であったので、結論というか方針はすでに決まっていた。三〇分の食事休憩の後、捜索続行という方針だった。誰も異論はなかった。

この後も夜を徹して高石係長を捜すとのことだ。青島も志願した。参加メンバーは、久米田、湖論暮刑事、裕次郎君、青島、日高校の同窓生捜索隊のメンバーだった。

三人一組で谷筋を重点に捜索すること。道なき道に行くので、相当に危険だった。地元警察・消防の捜索責任者が、このことを聞きつけて飛んできた。二次遭難の可能性があるので自重してはどうか、ということらしい。しかし、それ以上のことは言わなかった。一分一秒を争う事態であることは誰もが知っていたからだ。「伝説の警官」久米田を慕う若い巡査達が志願した。

地元警察の捜索責任者は、久米田に言った。

「これらの若い警官達は、自己責任で捜索隊に加わるものである。したがって、当方とは全く関係はない。君たちの傘下に入る。働きの悪かったら容赦なくしごいてくれ！」

若い警官達は、久米田の前に進み、直立不動の体制で最高級の敬礼をした。そのうちの一人の若い警官は、

「ウオッス！我々は個人責任で行動します。一切のことは、自己責任だと思っています。只今より久米田さんの指揮下に入ります。」と力強く言った。

こうなると地元消防署の体力の余っている若い連中も続々と志願しだした。騒ぎのような状況になっているので、災害テントで就寝しようとしていたX市役所の労組青年部の連中も青島を取り囲んで談判を始めた。

「オイラ達が行かずしてどうすんだ！時間がない！高石係長は、オイラ達が救出するぞ！」

青島が顔をくしゃくしゃにして泣いていた。青年部の連中も泣いていた。

裕次郎君のRV車で横になっていた疲労困憊状態の高石夫人は、涙でグシャ

グシャになった顔をしながら、ドアを開けて車から転げ落ちるように出てきた。そして、よろけるような歩みで捜索隊に近寄ってきた。一部始終を目撃していた高石夫人は、一人一人の顔を見つめ神様が仏様に向かうかのように、手を合わせて感謝の気持ちを表現した。言葉も出ないほど高石夫人は精神的にダメージを受けていた。

小百合嬢は高石夫人の肩を抱き一緒になって泣いていた。

誰もが眼に涙を溜めていた。その時であった。裕次郎君のRV車から雑種の老犬が、空けぱなしになっていたドアから転げるように出てきた。

「これこれ・・・出たらだめじゃない。コロコロや！」と高石夫人は、小さな声で犬を呼び止めた。どうやら老犬の名前は、「コロコロ」というらしい。確かにまるまると太った犬だ。自分の体重を支えることが難しいのではないかと想えるほどだった。

コロコロは、二三歩ほど歩いて真っ黒な山に向かって吠えた。主の高石に呼びかけたのだろうか。閉ざされたRV車の外に出て、主の助けを求めるテレパシーを感じたのか。それとも、主の懐かしい加齢臭を嗅ぎとったのか・・・主の血の匂いを感じ危機存亡の瞬間だと感じたのか。コロコロは、周囲の人間達の存在を無視して、とぼとぼと山に向かって歩きだした。

風は山の上から麓に向けて流れていた。

高石夫人は、コロコロを追いかけた。高石夫人もでっぷりとした体躯なので、二三歩ほど歩いただけで相当に疲れた様子だった。その時だった。久米田が叫んだ！

「コロコロの後を追尾する。コロコロなら知っているぞ！高石のいる場所を！」

誰もが不可思議な顔をした。

「間違いはない！なぜ！このことに気がつかなかったのだ。ペット捜索探偵が、子犬の時から可愛がっていたコロコロだ。両者には、得体の知れない絆がある。浅香！一時間だけ猶予をくれ！この風がチャンスだ！今しかない！最小の捜索チームを結成する。青島、裕次郎君、湖論暮刑事、そして俺だ！高石を発見したら無線で連絡する。生きているよ。コロコロが教えてくれた。救急車の手配と受け入れの病院を確保しておいてくれ！青島！担架の用意を頼む！」と久米田は矢継ぎ早に言うなりコロコロの後を追尾した。

（こういう場面になると白鷺の存在は薄くなる。しかし、白鷺は捜索隊が集結している場所を離れて、大地にへたりこみ、ひざまずいた。そして、天に向かって祈るように手を合わせた。そして盟友・・・同志！高石の生存を祈願した。

額を地面に打ち付けて拜んだ。涙が止まらなかつた・・・。

「たかいし！」と白鷺は叫んだ。

「みなさん！すいませんね。みなさんには念のため待機しておいてください。一時間経過して成果がない場合は、当初の計画どおり続行します。」と小百合嬢は遠慮がちに言った。確かにこんな状況では、ヘタをすれば二次遭難は確実だった。単なる使命感だけでは、解決は出来ない状態だった。小百合嬢は、リーダーとしてそのあたりを判断したのだろう。

老犬・・・いや愛犬コロコロは風上にむかって歩いた。お犬様には、登山道などという道は関係がなさそうだ。まず、道という観念はなさそうだ。道はずれ藪の中を軽快に進む。追尾する久米田達は、道なき道を行くコロコロを追跡する。コロコロしか通過出来ない岩場には、さすが超人！久米田は困った。

懐中電灯を所持していても、はるか前方を行かれるとコロコロの現在位置が確認できない。自由奔放の様に歩いているようなコロコロの追跡は疲れる。コロコロも疲れたのだろうか、途中の沢で水を飲んでいた。

青島青年は、すばやくコロコロに追いつき首に軽量の懐中電灯を取り付けた。追跡を、少しでもたやすくするためだ。コロコロは、更に道なき道を行く。さすが、急斜面になるとコロコロは悲しげな泣き声を小さくつぶやくように吠えた。主の懐かしい加齢臭の発生源へと進んでいるはずだ。名犬コロコロは一歩と主である高石のもとに接近していた。

しかし追尾する久米田達は、へとへとに疲れていた。超人！久米田も少しばかりの疲れを感じていた。久米田にして、この状態であれば他のメンバーの疲労は想像を絶するであろう。だが、このような疲労で死ぬとは誰もも想像していなかった。高石の状況は一刻を争うのだ。

名犬コロコロは、主である高石恋しさに歩いた。

道なき道を進むコロコロ。後ろに続く捜索隊を待っているのか、それとも堆積した落ち葉を座布団代わりにして休憩するのが嬉しいのか。コロコロは鼻をならしながら待っていた。首につけられた小さなライトが点滅していた。

青島青年は、暗闇の藪こぎをはじめての経験だった。後ろに続く湖論暮刑事の呼吸は、不規則なりズムだった。懐中電灯の光が届く範囲は、そんなに広範囲ではなかった。足元を照らすには、十分であったが鬱蒼とした樹林に入ると、傍らに人が倒れていても見落としてしまう。青島青年は、愛犬コロコロの心中

が理解できた。主恋しさで、高石の心地よい加齢臭をたよりに歩くコロコロ……
―俺も、係長恋しさで歩きまわっている。俺も、優秀なペット捜索探偵になれるかなあ……―

湖論暮刑事は思った。高石が死ぬわけがない。闇組織のメンバーと接触したなら何かの収獲をしているはずだ。転んでも只では起きない高石のことだ。何かを掴んでいるはずだ。捜査の突破口になるかも知れない。徹底的に闇組織を壊滅させないと……。

―高石！死ぬな！もうすぐだ！―

風向きが変わらない間に高石を確保する必要があった。高石が発見された時の準備をしておく必要があると考えた。久米田達が、相前に疲労していることを考慮すると高石を麓まで搬送する余力はなさそうに想えた。

小百合嬢は、待機している捜索隊のメンバーに指示を出した。

「皆さん！集合してください！今から指示を出します。高石くんがどこで発見されるか不明なため、また今捜索を実行している捜索隊の疲労を考えれば……高石くんの状態にもよりますが迅速に搬送するために、あらかじめこの地図上のポイントに待機部隊を置きたいと思います。不測の事態も想定されるので、警察と消防の有志、X市労組青年部、H高校同窓会などなどの混成部隊で編成します。高石くんが発見され次第、もつとも近い待機部隊は迅速に行動して高石くんを収容してください！どうか皆様の力で、我らの仲間……高石くんを救出して下さい！」

捜索隊リーダーである浅香小百合嬢の指令は絶対だった。小百合嬢の顔にも疲労の色が隠しきれないほど出ていた。誰しもが疲れ切っていた。しかし、不満を口にする捜索隊員はいなかった。

むしろ積極的で戦闘的だった。鼓舞激励されるまでもなく捜索隊員のアドレナリンは全開状態だった。捜索隊員は、浅香小百合嬢の冷静にして憂いがひそむ声に感動していた。浅香小百合嬢の前に整然と参集した捜索隊員達は、何ゆえ浅香小百合嬢がH高校のマドンナと言われるのか。何故、久米田や高石……H高校同窓生たちが心よりの信頼をおいて浅香小百合嬢に対して従順になっているのか、その本領を見たような気がした。

―仲間を救え！―という共通の志が、この捜索隊の原動力だった。

捜索隊員達は、身震いするほど勇気が湧いてきた。怖いものはなかった。

待機部隊は、再編成された。一班は、五ツ辻で待機。二班は、蔵岩の頂。三

班は、仏岳。四班は、「奥之院道」五班は、八ヶ丸山。六班は、施福寺。それぞれの捜索隊は、意気揚揚と隊列を整えてそれぞれのポイントへ出発した。

炊き出し部隊の民間捜査機関フェニクスに所属する「大阪のおぼちゃん」達は、行進する各部隊に向けて手を振りながら言った。

「美味しい豚汁を作って待っているからね！」

それぞれの隊員の持つ懐中電灯の光は、ひとつひとつは弱いものであるが、これほどの人数が凝結して発光されると見事な光の芸術だった。焼山の頂で無線局として駐在している捜索隊のメンバーが無線で連絡してきたように季節外れのホタルの乱舞のようだった。

名犬コロコロは縦横無尽に山中を駆け巡った。さすが前夜から休むこともなく捜索している久米田達の体力は限界に近づいていた。まず青島が大地にひれ伏すように倒れた。

「申し訳ない・・・先に行ってください・・・」と青島青年は、久米田に言った。

「そこで、しばらく休憩しておけ。ただし動くなよ！」と久米田。

次に、裕次郎君が不注意にも足元の岩に足を引っかけたのか樹林の中で転倒した。堆積している落ち葉の上に倒れ込んだので怪我はなかった。しかし、一旦倒れ込んでしまうと起き上がる気力はなかった。

「そこを動くなよ。動けば、二次遭難になる可能性があるぞ！」と湖論暮刑事は息も絶え絶え状態で言った。湖論暮刑事も体力の限界点に達していた。

「たかいし・・・イツ！がんばれよ！」と湖論暮刑事は自分自身に言い聞かせるように言った。

久米田は、青島青年・裕次郎君の所在ポイントを記憶に留めた。暗闇の中であるが、懐中電灯が点滅している限り確認できる。高石を収容後、二人を回収するつもりだった。久米田は焦っていた。風向きが変わりそうだった。今ここで風向きが変わると、名犬コロコロの臭覚のこともあるが、コロコロの体力も限界に近いと想われた。コロコロもこれ以上は歩けないと想った。主恋しさに無目的に彷徨っているように思えるコロコロの足跡だが、特定方向にコロコロの羅針盤は設定されていた。

前方を行くコロコロの足が止まった。そして、久米田達に「ここだ！ここだ！」と知らせるように二度三度吠えた。久米田と湖論暮刑事は、コロコロが主の高石を発見したと想った。懐中電灯の光を前方に向けた。こんもりと落ち葉の堆積した箇所コロコロはいた。日、月と二日間も風呂に入っていない高石の体

からは、何とも言えない加齢臭が周囲にただよっていた。

嬉しそうな表情をしたコロコロが鼻を鳴らしていた。久米田と湖論暮刑事は、全力で斜面を駆け上った。すでにコロコロが、高石の顔を舐めまわしたようだった。高石の全身は落ち葉で隠されていたが、顔の部分だけが露出していた。久米田と湖論暮刑事は、高石の顔を見た。血だらけだった。メガネをはじき飛ばされた高石の顔は、しまりがなかった。凝固した鼻血で汚された顔は不気味だった。前頭部からは出血していた。しかし息はあった。久米田は、傍らに落ちている高石の地図を拾った。なぐり書きされているようなカタカナらしい字が読めた。

―イシヨ タカイシマモル・・・―

このイシヨは、まず久米田が読んだ。そして、湖論暮刑事の手に渡された。

遅れて青島青年、裕次郎君達が到着した。この二人も湖論暮刑事から、手渡されたイシヨを読んだ。久米田は、高石の負傷した部位の応急処置をしながら泣いていた。高石の体を少しだけ揺すった。高石は、気がついたのか薄目を開けた。懐中電灯の光が眩しかった。高石の眼に、涙でくしゃくしゃになった久米田の大きな顔が視野に入った。同じく泣いている湖論暮刑事の顔も見えた。号泣している青島青年が見えた。懐中電灯の光の先に、コロコロを抱きよせている裕次郎君が見えた。

「たかいし！気がついたか！もう大丈夫だ！」と久米田が耳元で優しく呼びかけた。

高石は、夢を見ていた。心地よい夢だった。人は絶望の境地でも夢をみる。高石の周囲に美人ホステスが待り、歓待を受けている夢だ。おかまバーだったかもしれない。キスマでしてくれる。だが、実際は愛犬コロコロが主恋しさに舐めまわしたとは、高石は知る由もない。だが、正常に働く脳機能の一部分が働き、死ぬ前に伝えるべきことがあると高石は想い、瞬間的に覚醒した。

「久米田！湖論暮！手掛かりは、クモダ！」と一言つぶやくと、また深い眠りに落ちて行った。

「クモダ？それはなんだ！高石！」と湖論暮刑事は訊いた。

「青島！無線連絡だ！生存を確認！現在地を連絡！」と久米田は言った。青島青年は、最近新たに買求めたGPS機器をポーチから取り出すと、トランシーバーのマイクに向かって嬉々とした声で言った。

「久米田隊、午後一〇時四五分！高石を発見！生存を確認！前頭部を負傷！至急応援頼む！現在地は、清水（きよす）の滝！南方向近辺の斜面！手持ちのGPS機器の現在地表示は北緯34度23分×秒、東経135度29分×秒！繰り返し

返します！北緯34度23分×秒、東経135度29分×秒！」

この青島の無線連絡は、焼山の無線局で鮮明に受信された。ただちに焼山の頂に駐在している捜索隊員は、電波状況が悪くて受信できない無線局も想定されるので受信した内容を反復送信した。白鷺の所持するトランシーバーにもこの朗報が入った。要所要所に配置された無線局スポットの捜索隊員も受信した。

「自分の願いが天に通じた！」と白鷺は小躍りしながら想った。

「こちら岩湧山頂局！救出！おめでとう！」

「こちら南葛城山頂局！受信した！やったぜ！」

小百合嬢は、一番近い五ツ辻の待機部隊に搬送の応援指令を出した。その他の待機部隊・各所の無線局に撤収指令を出した。五ツ辻の捜索部隊は、すでに青島青年の無線を受信していたので、直ちに救出ポイントを地図で確認していた。

五ツ辻捜索部隊のリーダーは、地元消防署の有志捜索隊員であった。リーダーは手短に注意事項を配下の捜索隊員達へ伝達した。

「今から清水（きよす）の滝、南方向に向けて前進しますが、この近辺は日中でも危険なルートです。十分に注意して歩行して下さい。」

その後、救出支援に向かった五ツ辻捜索部隊の無線連絡によると高石は、右足も骨折しているとのこと。意識はないが、前頭部の負傷も命に問題はないとのこと。根来谷ルートより搬送するとのことだ。

小百合嬢は、高石夫人を抱きよせて観光バス駐車場から根来谷登山口まで移動した。しばらくすると登山口の向こうからゆらゆらと揺れる多くの懐中電灯の光が降りてきた。今回の最大の功労を達成した名犬コロコロは、裕次郎君が抱きかかえていた。担架に乗せられた高石が見える距離になると高石夫人はよたよたと駆け寄った。小百合嬢もそれに続いた。多く捜索隊員達に拍手で迎えられる高石は、待機していた救急車に乗せられて、地元の救急病院に搬送された。高石夫人、愛犬コロコロが同乗した。当然のことながら、高石の安全確保のために地元警察のパトカーが前後に二台付いた。

小百合嬢、久米田、白鷺、日高校同期生、湖論暮刑事、青島青年、労組青年部員達、裕次郎君は、去りゆく救急車のテールランプが視界から消えるまで立っていた。もちろんその他大勢の地元警察・消防関係の有志捜索隊員達も・・・。

青島青年は、市長に連絡した。

「夜分すいません。青島です。高石係長を救出しました。生存を確認できました。ありがとうございます。」と青島青年は嗚咽まじりで報告した。

「御苦労！青島指揮官！」と市長は、青島青年を優しい声でねぎらった。この後、市長は、秘書課長に電話をした。市長は、すでに布団の中で眠りこけていた秘書課長をたたき起こした。

「寝ている場合か！俺でも防災服スタイルで自宅待機しているのに！」と市長は秘書課長を怒鳴りつけた。市長は、秘書課長に職員間の緊急連絡網で高石の生存を確認できたこと。救出して救急病院に搬送されたことを全職員に周知するようにと指示を出した。この朗報は、瞬時にX市役所全職員に伝達された。

かくして高石は、闇組織殲滅！の重要な手掛かりを獲得して生還した。だが、救急病院に運びこまれた高石の意識は、すぐに戻らなかった。生まれて初めて銃撃を受けたショックが、高石の精神世界に大きなダメージを与えたようだ。高石は、点滴栄養を受けながら三日三晩眠りこけた。病院の特別許可を受けた番犬コロコロが、主の身辺警護を兼ねて高石が眠るベッドの上でスヤスヤと眠っていた。

高石が発した言葉「クモダ」の意味が不明だった。湖論暮刑事は、高石の意識回復を待つしかないと考えると内心忸怩たる感情が彷彿した。

「俺は、プロの捜査官だ！民間人の高石にしてもこれだけのことはやっている！」

湖論暮刑事は、高石の周囲を二四時間体制で守護する身辺警護チームを配備した。なお、今回の事件報道に際しては、捜査上のことや高石の安全確保の面から高石自身は無事救出され生還したものの強度の記憶障害があるとの虚偽情報をもスクミ発表するようにと大阪府警上層部に堤言した。

大阪府警と闇組織残余勢力との本格的な闘いが始まるうとしていた・・・。

十二

高石は、病室のベッドの上で覚醒した。眼をあけて最初に見た光景が、愛犬コロコロだった。コロコロは、高石のベッドの上でスヤスヤと眠っていた。なぜコロコロがここにいるのか分からなかった。

午前中、にわか雨が降ったようだ。病室の窓ガラスに雨滴が張り付いていた。窓を通して青空が見えた。すでに紅葉時期も過ぎたのだろう。まだ、落下を許されていない樹木の葉っぱが、未練がましくしがみつくように揺れていた。

高石は、左右に視線を流した。妻がこっくりこっくりと椅子に座りながら器

用に眠っていた。右足が吊上げられていた。頭が包帯でぐるぐると巻かれていた。徐々に、高石の記憶がおぞましくよみがえってきた。恐怖で引きつった顔で、山中を走りまわっていた。平手打ちを食らった時にメガネが弾き飛ばされていたので、前方の光景は焦点があつていなかった。どこをどう歩いたのかわ明だった。銃撃もあつた。今でも、銃声が鼓膜の奥にあつた。とにかく生きることに執着して逃げたことを憶えている。遺書も書いたような記憶もあつた。

―そうだ！久米田、湖論暮に伝えることがある！―と高石は想つた。

妻が目覚めたようだ。高石の意識が回復したのを確認したようだ。何とも言えないほどの嬉しい顔をしていた。

―俺は、愛されているのか！―と高石は想つた。

高石は、妻に声をかけた。

「今回は、心配をかけたね。すまなかつた・・・」

高石は、妻から自分自身の捜索のために、どれほど多くの人達の協力があつたのか縷々説明を受けた。特に、X市から市長を先頭に二〇〇人の有志捜索隊が仕事を離れ、年休を使って参加したこと。また、浅香小百合嬢を先頭とするH高校同窓生のメンバー、そして日没後、地元警察・消防署の有志捜索隊が決死の覚悟で捜索したことなどである。

その中で、決定的に救出の大功労「者」は高石のそばで眠るコロコロだと聞いた時、高石の涙腺が爆発！した。

涙が滝のように流れ出てきた・・・。大きな涙の粒は、両頬を伝い・・・枕を濡らした。高石は、天井に向かって両手を合わせて感謝した。

「ありがとう！忘れないうちに久米田、湖論暮刑事に伝えることがある。呼んでくれないか！」と高石は、小さな声で言った。

高石夫人は、その豊かな体軀をゆったりゆったりと揺すらせながら、病室の戸口まで歩みを進めた。高石夫人は、ドアを開けた。

本能的に厳しい視線が高石夫人向けられた。拳銃所持の制服警官が二四時間体制で、高石を警護していた。

ドアの横で二人の屈強な若い制服警官が屹立していた。そのうちの一人に高石夫人は声をかけた。

「あの・・・もしもし・・・高石の意識が回復しました。ありがとうございます。夫が、久米田さん湖論暮刑事に伝えたいことがあると申しております。ご連絡の方を願いますか。」

「了解！」

若い制服警官の一人が、すばやく携帯電話を取り出すと、まず「伝説の警官」として畏敬の念を抱く久米田に電話をした。

「もしもし、久米田巡査（久米田の階級は、ズーと「巡査」）ですか。こちら高石さんの病室前で警護している●●署の者ですが、高石夫人よりの伝言があります。意識が回復したとのことで、伝えたいことがあるとのことですよ。」

「ありがとう！湖論暮刑事には、本官より連絡する。高石の警護を引き続き頼む！」と久米田は、安堵感ではち切れそうな声で応答した。

高石は、湖論暮刑事に連絡した。直ちに病院へ行くとのこと。

久米田と湖論暮刑事は、高石のベッドの傍らで事情聴取を行った。

「高石！意識が回復して良かった！とにかく良かったよ！」と久米田。

「もう落ち着いたか？お前のイシヨには泣いたけどね・・・」と湖論暮刑事。

「うん・・・ありがとう！迷惑をかけた。」

「そんなことはない。ところで、イシヨにもあったクモダとは何だ？」と湖論暮刑事はせっかちに訊いた。

「蜘蛛だよ！蜘蛛！蜘蛛らしきタトゥーが左手頸にあったのだ。」

「くも？」

「あの蜘蛛・・・タランチュラだ！」

湖論暮刑事の記憶がよみがえった。金剛山で逮捕した四人組のボスの左手頸に蜘蛛のタトゥーがあったことを・・・正確に言えば、タトゥーではなく痣だった。痣だったので気にも留めなかったのだが、どうやらこの蜘蛛のタトゥーに重要な手掛かりがあると直感した。捜査のプロである湖論暮刑事の直感はずれたことがない。

―俺には、自負がある！間違いはない！突破口は、蜘蛛だ！―

湖論暮刑事は、胸ポケットから携帯電話を取り出すと大阪府警特別チームの捜査責任者に電話をした。

「チーフ！手掛かりは蜘蛛・・・タランチュラです。四人組のボスの左手頸に痣がありますが、榎尾山山中で高石を襲撃した賊にも左手頸にタランチュラのタトゥーがありました。偶然の一致ではなく、このタトゥーに何か意味があります。データベースで検索してください。過去の犯罪ケースを徹底的に調査すれば、何かが浮上してくると思います。」と湖論暮刑事は、興奮を抑えた調子の声で言った。

「分かった！すぐに調べさせる！」とチーフは小躍りして喜んだ。停滞していた捜査が、これをきっかけに一挙に進展する予感がチーフの胸のなかに吹きあがった。

久米田、湖論暮刑事が「クモダ」の謎が氷解したことに大きな喜びを感じた。

高石が書いたイシヨの「クモダ」が蜘蛛とは想像もつかなかったからだ。

久米田・湖論暮刑事が意気揚揚と帰った後、天井のしみの数を数えながら今後のことを考えた。とりあえず捜査の突破口になるかも知れない。それと、仕事のことが心配だった。青島やミサキ嬢がうまく仕事をまわしているだろうと想った。

―別に俺がいなくても仕事はまわる―と高石は苦笑した。色々な雑念が頭の中を駆け巡った。

相当に疲労しているのが自身でも分かった。湖論暮刑事によると、高石の安全のために強度の記憶障害に陥っているとマスコミ公表しているとのこと。そして、二四時間体制の警護を取っていることなどを聞かされた。高石は、再び眠りに落ち込んだ。

白鷺は執務室で、テレビ報道を見ていた。大阪地検が、大阪府警警部補の暴言取り調べ問題で「告訴された捜査員を脅迫罪で立件する方向」とのことだ。

白鷺自身は、何度も警察のごやっかいになっていく経歴があった。別に犯罪を起こした訳ではないが、この捜査員に対して気の毒のような気がした。コメントーターが、取調の可視化について論評していた。可視化の是非はともかくとしても、また、冤罪を生む恐れもあるが……。

―優しい取り調べをしていたら、誰も白状なんかしないぞ！―と白鷺は想った。

執務室のドアをノックして裕次郎君が入ってきた。白鷺に取材の許可を得るために裕次郎君は資料を小脇に抱えて椅子に座った。最近、白鷺事務所では裕次郎君がミニコミ紙の編集方針を決めていた。白鷺は、そろそろ裕次郎君を後継者にしようと思っていた。裕次郎君の企画を追認するのが白鷺の役目だった。高石の榎尾山捜索で、裕次郎君は白鷺伯父貴の身代わりとして大活躍した。本来なら白鷺自身が、這いずりまわって高石の捜索に従事すべき立場だった。しかし、衰しいかな白鷺には体力はなかった。裕次郎君は、白鷺に対して愚痴をいふどころか、白鷺の盟友である高石の捜索に全力を注いだ。その結果、高石は生還し重要な捜査情報も獲得した。白鷺伯父貴にすれば、裕次郎君は頼もしい同志であった。

―そろそろ隠居でもするか……―と白鷺は考えていた。そんな白鷺にもたらされた今度の取材対象は「河内長野市の観光」だとのこと。

裕次郎君は、河内長野市が今展開している「奥河内」構想を取り上げるとい

う。
―おുകかわち……？河内の奥って……岩湧山と南葛城山の間……何にもないよ……どういうこと……河内は、大昔から北、中、南だ！奥なんて紛らわしい……―と白鷺は想ったが裕次郎君のプライドとやる気を損なっては

伯父貴とは言えないと想い沈黙した。

―口は災いのもと・・・―

裕次郎君の説明によると、

河内長野市は、「自然が豊かで神秘的なゾーンを持ちながらも、都心から近い河内長野をアピールするため、奥河内をイメージ戦略として進め」ること。奥河内のイメージエリアとしては、「金剛山から岩湧山、そしてその山麓に広がる区域（河内長野市、千早赤阪村の山林部や丘陵部）」と設定し、奥河内のコンセプトやイメージを活用した施策を展開」することだ。（*「内は河内長野市のホームページから引用」）

とにかく今は「町おこし」をしていかなないと生き残っていくことができない状況となっている。この点、河内長野市は、映画やドラマなどのロケーション支援を市の方針として事業を行っている。白鷺も大好きな韓国ドラマのロケ地として河内長野市は市庁舎を提供していた。とにかくやるのが斬新だ。これぐらいのことをしないとだめだと白鷺は想った。

白鷺は考えた。今、俺たち中高年探偵団が追究している「金剛山埋蔵金」（闇組織の資金）の発掘ツアーをどこかのツアー会社が企画すれば、いの一番に申し込むのになあ・・・この話題もすでにネット上で、盛んに議論されているとのこと。白鷺事務所の企画でやってみようか・・・爆発的な「町おこし」になるのでは・・・。

白鷺は、そんな不謹慎なことを考えながら裕次郎君の説明をうんうんと聞いていた。

「・・・ということ、これから取材のため、河内長野市役所に行きますので・・・」

と裕次郎君は言った。

お種さんは、裕次郎君を見送った。あの槇尾山での高石さん搜索以後、裕次郎君がすごく頼もしく想えてきた。大活躍したとの話は聞いていた。

―私も、この事務所の留守番役をしていなかったら、せめて炊き出し係で協力できたのに・・・と残念がった。

それにしても、白鷺事務所の後継者としての自覚が生まれてきたのか。お種さんは、自分のことのように嬉しくなってきた。

―そう言えば、ミサキさんとはうまくいっているのだろうか？―とお種さんは勝手な想像をした。ミサキ嬢と裕次郎君が結ばれれば、白鷺一族は安泰だと思った。

裕次郎君は、南海高野線の堺東駅プラットホームで河内長野駅に向かう急行電車を待っていた。冷たい風が裕次郎君に纏わりつく。寒さで体がブルツと萎縮してしまいそうだ。

裕次郎君は裕次郎君で、高石が見たという蜘蛛のタトゥーについて考えをまとめていた。想像力が必要だと想った。常識的な思考では、この謎は解けないと想った。

—蜘蛛か・・・—

揺れる電車の中で、裕次郎君は取材カバンより資料を取り出した。河内長野市に係る資料だ。河内長野市の面積は、109.61k²m。海拔は、最高924.2^m（しかし、南葛城山は確か923^mだったような・・・しかし、そうなるとそこが南葛城山の最高峰じゃないのか・・・と考えた。何がなんだか分からなくなった。）、最低で76^mとのこと。おそらく最高地点は南葛城山近辺だと裕次郎君は想った。

大阪府内で三番目に広い面積を持っていて、その面積の七割は森林だ。石川や石見川など河川沿いに平野が開け、北に向かって河内平野に続いていた。統計資料を見れば、人口は年々減少しているようだ。

とりあえず基礎的なことを頭にたたき込んでおかないと取材にはならない。一応、河内長野市の産業活性化室という仰々しい名前の課員とのアポは取れていた。

裕次郎君自身は、岩湧山にはよく登った。それより南方に南葛城山があった。いつしか南葛城山に足を伸ばしたいと想っていた。通常、葛城山と言えば「大和葛城山」を示すそうだが、葛城山には、中葛城山・南葛城山・和泉葛城山がある。大昔、この辺に勢力をもった「原始から古代」におけるこの時代の「葛城氏」と関係がありそうだ。

（*正確かどうか各自、研究して下さい。）

河内長野駅の改札口を出てしばらく歩いた時に、後ろから裕次郎君の服を引っ張る女性がいた。後ろを振り返ってみると、男物のダウンジャケットを着たいかにも専業主婦と想われる感じの中高年の女性が笑みを浮かべて立っていた。「久しぶりだね。わたし・・・ワタシよ！」と弾んだ声で、いかにも懐かしそうに裕次郎君の顔を見て言った。

裕次郎君は、猛烈な勢いで記憶を活性化させた。

「ああああ・・・つ！あの時は、お世話になりました！」と裕次郎君。

「どう？高石さんの状態は？」

「意識を回復しました！元気だそうです！」

「記憶障害があるって！新聞に書いてあったけど、大丈夫なの？」

「大きな声では言えないですが、あれは高石さんの安全確保のためのニセ情報です。」

「そうなの・・・よかった！」

なんと裕次郎君が駅前で遭遇したご婦人は、槇尾山での「炊き出し部隊」のリーダーだった。

民間捜査機関フェニクスの「大阪のおばちゃん」部隊だった。裕次郎君は、約束の時間まで多少の余裕があったこともあり、寒風の中での立ち話では厳しいものがあつたので近くの喫茶店に入った。母と息子のような組み合わせではあるが、周囲の情景に溶け込んでいた。

「ワタシが奢るからね！」と「炊き出し部隊」のリーダーが言った。

自己紹介によると、この河内長野市に住んでいて観光ボランティアガイドもしているという。名前は、滝谷千代子さん。何だか近場の駅名のようにだと裕次郎君は思った。

裕次郎君は、前から不思議に想っていたことを訊いた。どうして、あの「大阪のおばちゃん」部隊が民間捜査機関の正式構成員であるのか・・・という事を・・・。

「そうよね・・・。私は普通のおばさんだからね。実は、私の亭主がこの民間捜査機関に属していたのよね。」

「いた・・・。ということは・・・今は？」

「ここ数ヶ月・・・行方不明！」

「へえ・・・」

「山に出かけると言って、帰ってこないのよね。民間捜査機関の人達も必死になつて行方を捜しているんだけど、音信不通です！」と千代子さんは、涙腺が緩んだのか小粒の涙を流した。

「それは大変ですよね。」と裕次郎君は言った。慰撫する適切な言葉が見つからなかった。

「今は、亭主の意志を継いでワタシも組織に参加したのよね。おそらくどこかで死んでいるのかもしれない。せめてお骨（こつ）だけでも先祖のお墓に入れてやりたい・・・。あの人の事を忘れてはいけけないから、こうして夫のダウンジャケットを羽織っているのよ！貧乏だからじゃないわよ・・・。あの人の匂いがするの・・・あの人に抱かれている感じがするのよね。」

「警察の方には捜索願いを出しています？」

「うん！もちろん。だけど音沙汰なしよ。あの人、心臓が弱くて二トロがないと生きていけない体だから……。」

「今、何と言いました！」

「二トロ！」

「千代子さん！この間の山行でのことなんですが、龍門山で倒れた人も二トロを所持していました。身元不明で行旅死亡人扱いになっています。」

「龍門山？こうりよしぼうにん？」

「和歌山県にある山です。」

「そう言えば、あの人。和歌山に行くと行って出掛けた。くもがどうのこうのとぶつぶつ言いながら……」

「くも……クモ……と！」

「その日は、雲一つとない青空だったのに……」

「千代子さん！明日は予定あります。なければ、明日！行きましょう！向こうの役場へ！念のためにご主人のお名前を教えてください！」

「滝谷千早だけど……ひよっとして亭主かも知れない……ということ？」
と千代子さんが言った。涙顔に、少し笑顔が戻った。何だか夫婦で近場の地名に關係する名前だった。

「たきたに ちはや」と呟きながら、裕次郎君は取材ノートを払げてメモをした。そして、龍門山で出会った時の滝谷千早さんの服装や顔の特徴、持ち物などを説明した。

「間違いなく！一〇〇%以上の確立で滝谷千早さんだ！」と裕次郎君は確信した。

その後、裕次郎君は河内長野市役所での取材を早々にすませると急いで白鷺事務所に戻った。すぐに、青島青年の携帯電話に事情説明したメールを送信した。

すぐに青島青年から返信メールが届いた。今は、高石係長が病氣休暇中というところもあって係の仕事が正常に回っていない。出来たら同行したいが、仕事が出来ない。申し訳ないが、裕次郎君の方で対応してくれ！とのことだ。

「それもそうだ！」と裕次郎君は思った。係長不在では、何かと業務に支障がある。それにしても、滝谷千早さんの言葉である「くも」が気になった。この場合の「くも」とは、雲ではなく蜘蛛のことだろうと裕次郎君は推察した。滝谷千早さんは、何を調査していたのだろうか？裕次郎君は、記憶を辿った。そう言えば、遺留品の地図をデジカメで撮影したことを思い出した。

すぐにデジカメを取り出すと確認した。小さなデジカメの液晶画面では、分か

りづらい。

裕次郎君は、デジカメからSDカードを抜き出してパソコンに挿入した。そして、A4サイズでプリントアウトした。

「これでも分からない。明日、地図そのものを確認する必要があるな・・・」と裕次郎君は想った。念のために久米田さんに連絡を入れた。久米田さんは、裕次郎君に言った。

「明日は、俺は公務で身動きが取れない。重要な話だ。湖論暮刑事に連絡をしておくので、彼と一緒にいった方がいい。一人より二人だ。トンボの眼だ！復眼的な思考をしないと何かを身落とすぞ！」

久米田から連絡を受けた湖論暮刑事は、チーフを捉まえて明日の龍門山行き
の事を説明した。

チーフは、最近ウキウキしていた。どのように捜査しているのか頭を抱えていたからだ。四人組への取り調べは進展していなかった。脅しても強いても四人組のボス、左手頸にタランチュラの痣を持つボスは一向に口を開こうとはしなかった。おそらく時代劇に出てくる拷問道具を駆使しても白状しないであろう。もともと現代においては許されることではないが・・・。地道な捜査の積み重ねが一番有効な手段であり方法なのだ。

予想もしなかった展開になってきた。高石が獲得した「蜘蛛」情報。そして何かを調査していた民間捜査機関の滝谷千早が語った「くも」。何ゆえ滝谷千早は、龍門山に向いたのか？この謎を解決する糸口は、明日裕次郎君と一緒に地元役場へ行くことよって判明するかもしれないと湖論暮刑事は想った。滝谷千早の遺留品に重大なヒントがある。それにしても、日根野三郎、滝谷千早！なんと素晴らしい調査能力だ！と湖論暮刑事は感心した。

「民間捜査機関フェニックス！恐るべし！彼女らは命をかけているぞ！——湖論暮刑事は自らを叱咤激励した。

「負けるものか！悪にとどめをさすのは国家権力である警察だ！正義を貫く大阪府警だ！——と湖論暮刑事は、心の中で叫んだ！

翌日、裕次郎君はRV車のハンドルを握った。南海高野線の堺東駅前で湖論暮刑事と待ち合せた。まずは、ここで湖論暮刑事を拾うと河内長野市に向かった。滝谷千代子さんの自宅住所を事前に聞いていたので、カーナビに登録した。距離優先モードでRV車は猛烈なスピードで駆けた。

「おいおい！現職の警官が乗車しているからといってもスピード違反はスピード

「下違反だぜ！」と湖論暮刑事は裕次郎君の運転にクレームを付けた。
「すいません・・・ついつい焦ってしまいました。」と裕次郎君は言い訳をした。

滝谷千代子さんの自宅前に到着した。広い敷地に瀟洒な造りの家だった。周囲の自然を借景にしているような庭だった。手入れも行き届いていた。バブル全盛時代なら？億円はしたであろう。滝谷千代子さんは、昨日の貧乏くさい格好ではなかった。いかにもへお金は持ってます！という風体だった。車庫には、おそらくベンツが入庫しているような気がした。河内長野市民は、お金持ちだな・・・と裕次郎君は羨望の眼で見た。

「おまたせしました。」と言って道路へとつながる階段を優雅な物腰で降りてきた。昨日の男物のダウンジャケット姿とは雲泥の差だった。湖論暮刑事と並ぶとこの世の不公平さを呪いたくなるほどだった。

滝谷千代子さんは後部座席に座るなり裕次郎君に質問した。

「裕次郎さんは、今独身？付き合っている人はいるの？」と滝谷千代子さんは唐突に訊いた。

「あ・・・一人もんですが・・・」と裕次郎君。

「大学生の娘がいるのだけど、今度会ってくださる！」と滝谷千代子さんは言った。

「はあ・・・っ・・・」

裕次郎君の脳裏にミサキ嬢の笑顔が一瞬・・・浮かんでは消えた。

そんなこんなで裕次郎君のRV車は、紀の川市役所に到着した。すでに大阪府警より市役所担当者には連絡が入っていた。三人は、別室に案内された。

段ボール箱を両手で大事そうに抱えた男性担当者が部屋に入ってきた。ゲームテーブルを剥がしてテーブルの上に遺留品を並べた。

滝谷千代子さんは、テーブルに置かれた腕時計を見るなり今までの緊張感が突然と切れたのか、わなわなと震えだした。そして、顔を両手で覆い号泣した。湖論暮刑事ではなく、裕次郎君に寄りかかって叫んだ。

「おとうちゃん！」

「滝谷千早さんの所持品で間違いはないですね。」と市の担当者は柔らかない声で訊いた。

「間違いはありません。」と滝谷千代子さんは、か細い声で言った。裕次郎君の眼にも涙が溜まってきた。

担当者は、裕次郎君の方に視線を向けながら滝谷千代子さんに向かって言った。
「こちらの方が、倒れている滝谷千早さんを発見し救急車を手配した人ですよ。」

そして、最後まで滝谷千早さんの面倒を見られました。お骨は、近くのお寺でお預かりしています。私のご案内いたしますので……」

「裕次郎君が、最後までお世話してくれたの……。あの人は、なんて幸福な人なの……」

裕次郎君は、龍門山で滝谷千早さんと出会った時の話をした。そして、火葬に付すまでのことも……。

湖論暮刑事は、滝谷千代子さんの了解をもらい地図とデジカメを捜査資料として預かった。

ナイロン袋に地図とデジカメを丁寧に納めて、大阪府警の捜査本部に持ち込んだ。湖論暮刑事は、折りたたまれた地図をデスクの上に慎重に拡げた。今にも消えかかるといふような薄い蛍光ペンで、「クモ伝説？」と殴り書きされていた。大和葛城山、金剛山、中葛城山、南葛城山、和泉葛城山に○印が付けられていた。滝谷千早の調査は、かなり進展していて「金剛山埋蔵金」場所を特定できていた可能性があった。志半ばでの無念の死だった。

このことは久米田達のメンバーにも連絡した。もちろん裕次郎君にも連絡された。捜査上の秘密とか守秘義務とかは関係がなかった。謎を解くには、複眼的な思考をしろ！と久米田にも言われていた。様々な個人の想像力の結集が必要だった。

—それぞれがトンボの眼になることが大事だ！—と湖論暮刑事は痛感した。

湖論暮刑事は、龍門山に係る「蜘蛛伝説」を思い出した。「龍門山の蜘蛛伝説」である。この説話は、粉河町杉原の水原村大明神縁起に詳しく記載されているとのことだ。大龍と大蜘蛛との戦いである。しかし、この説話のどこにヒントがあるのか湖論暮刑事は悩んだ。

湖論暮刑事は、大阪府警の名誉にもかけてヒントを掴まないと「正義の大阪府警」とは言えないと考えた。きついプレッシャーが湖論暮刑事を襲った。

デスクに拡げられた地図を凝視し続けた。

—葛城……かつらぎ……カツラギ……—と呪文のように唱えながら地図を見た。地図に落とされた視線が、金剛山の東麓へと向かった。

—そうか！そうなんだ！蜘蛛伝説は、ここにもあった！—と湖論暮刑事は生き返る想いで独白した。そうなるのと次々と連想が巻き起こってきた。まず、四人組のボスの出身は金剛山東麓の奈良県だった。蜘蛛の痣を持つボス……金剛山東麓……。

裕次郎君は堺東の白鷺事務所に戻った。自分の部屋にこもった。湖論暮刑事

からの情報提供は受けていた。さすが、あの場で重要な捜査資料とは言い地図を拡げて思案する雰囲気ではなかった。裕次郎君の臉に滝谷千代子さんの哀しい姿が焼き付いていた。寺の住職から骨壺を丁重に受け取るやいなや、滝谷千代子さんは骨壺を抱きしめて泣いた。

「おとうさん・・・寂しかったでしょ・・・もう大丈夫よ・・・」と滝谷千代子さんは嗚咽混じりで骨壺と対話した。

「裕次郎君、近日中に葬儀をいたします。あなたも親族の一員として列席してちょうだいね！」

「親族？」

「最後まで主人を看取ってくれた上に荼毘に付してくれたのだから、あなたは親族よ！」

と滝谷千代子さんは裕次郎君の話を遮断して確定的に言った。

「それはそうと「クモ伝説？」と葛城の山々・・・」

裕次郎君は、昭文社の地図をザックから取り出してデスクに拡げた。おそろく湖論暮刑事も同じことをしているだろうと想った。

裕次郎君は、パソコンをONにして「くも伝説」という語句を入力して検索した。「龍門山の大龍（りゅうもんざんの たいりゅう）」という記事が引掛かった。龍門山に係る話は以前から知っていた。何か見落としがないか考えた。

色々な想念が裕次郎君の頭の中を駆け巡る。そういえば、彼岸花の咲き誇る葛城古道の取材に行った時に、一言主神社（ひとことぬしじんじや）の境内にある蜘蛛塚のことを想いだした。

一言主神社は、願いを一言だけ聞いてくれる「いちごんさん」として地元の人から親しまれている神社だ。

「葛城・・・かつらぎ・・・カツラギー」と裕次郎君は、同じ言葉を反復した。

この土蜘蛛と四人組ボスのタトゥーとどんな関わりがあるのだろうか。そして、金剛山に埋蔵された闇組織の資金・・・

そして、滝谷千代子さんの「親族」発言・・・。裕次郎君は、急にミサキ嬢に遭いたくなった。

冬の日差しが格子窓を通過して床面に反射していた。わずかな隙間から青空が見えた。金剛山で逮捕されて何日が経過したのだろうか。

「俺も大概・・・恐ろしいことをしてきた人間だが、あのバンガローに飛び込んできたあの警官には驚いた。あの状況では、あり得ないだろう。決定的にこちらが優先カードを握っていたはずだ・・・。それにあの女・・・気丈夫な女だった。俺の組織ならボス格だな・・・。」

四人組のボスは、腕組みをしながら述懐した。

―俺は、今の組織をつくるのに心血を注いできた。俺の生い立ちが・・・こうさせたのだ。―

とボスは左手頸の痣を見ながら想った。

俺は呪われて、この世に出生したのだ。俺の存在は、親にとっても疎ましいものであったようだ。当然、社会からも疎外されていた。俺の左手頸の痣は、まさに蜘蛛だった。今にも、狙いを付けた餌に喰らい付くように身構えている蜘蛛だ。

―この痣のせいで、俺は自分がなすべきことを悟った。―

俺の少年時代は、山が友達だった。金剛山東麓で育った俺にとって金剛山は自分の家の庭のようなものだった。登山道を歩くことに飽いて、道なき道を駆け巡った。藪漕ぎしながら自分自身のためのルートを作った。友達などいなかった。山が友だった。金剛山だけでなく、生駒・金剛・和泉山脈までを自分の庭としてきた。その中で、多くの伝承やその土地の話をよく訊いた。

金剛山・・・この名の響きが好きだ・・・俺は・・・かつては高間山・高天山（たかまやま）や葛城嶺（かづらきのみね）といわれていたとのことだ。正確な山頂は、葛木岳だというのは・・・後で知った。幼き頃に駆け巡った時は、どこが山頂かどうかは関係がなかった。

金剛山東麓では、「土蜘蛛伝説」があった。大昔、時の権力である大和政権と戦った土着の民のことを「土蜘蛛」と呼称されていた。（ヤマト政権に容易に従わなかった地方の小首長の卑称という説あり）

左手頸の痣と「土蜘蛛」との因縁を俺は感じた。俺は、自分の使命として正義とは反対の立場を選んだ。俺は大昔の土着の民・・・小首長に共感した。大昔の小首長にとっては迷惑なことかも知れないが、俺は、左手頸の痣・・・蜘蛛に愛おしいものを感じた。

現在社会の秩序を転覆するのだ。俺は、正義とは逆の悪を選んだ。正義と悪とに、どれほどの違いがあるのだ。対極関係にあるものは、突きつめて考えれば、同じものなんだ。この世に正義など存在しない。ましてや悪も存在しないのだ。正義というものがあるとすれば、それは強欲だ。強欲こそが正義なのだ。強欲こそが人間社会を発展させる原動力なのだ。

俺は、高校を卒業すると郷里を飛び出した。東京行きの夜行バスに揺られながらふつふつとした野望が湧きおこってきた。朝方に、大都会東京に着いた。当てなどない。年齢を偽りなんでもした。高度経済成長の時代だ。労働力は不足していた。出来ないことは何もなかった。俺は、この国家権力が集中してい

る首都で、俺の権力を確立するという野望のために何でもした。当然のことながら、悪の世界ではちよつとした存在になった。名前も売れた。

加入した組織の中で仲間を集め、組織のボスと争闘した。闇の世界での下剋上だ。強いものが勝つのは、どこの世界でも同じだ。俺はこの手でボスを葬った。組織の実権を掌握してから、肅清に肅清を重ねて組織を純化した。これが、今の組織の基盤となった。そして活動の本拠を関西に遷した。郷里の人間が恋しかった訳ではない。強いて言うなら、俺を育てくれた山々が恋しくなったのかも知れない。

山好きに悪人も善人もないのだ。

「俺の名前は、武内權道・・・本名を知る人間はいないだろう。あの湖論暮刑事にしても俺の本名は知らないはずだ・・・。今のところ俺は、「××警察署留置番号第7号」だ。警察のデータベースでは、大した情報は登録されていないだろう。俺は、郷里を出走した時に本名を捨てた。その後は、他人の戸籍を買って生きてきた。俺の両親の安否も知らない。顔も名前も忘れた。むこうも厄介払いできて喜んでいるだろう。俺と郷里との繋がりと言えば、言葉の訛りだけだった。東京暮らしは長かったが、これだけは消せなかった・・・。―とボスこと武内權道は、自分自身の思念に酔った。

俺の組織は、金になることなら何でもした。人身売買、ドラッグ、銃の密売、違法コピーの販売・・・などなどだ。時には、暗殺業まで請け負った。悪の総合商社だ。海外の組織とも連携を取ってきた。悪のグローバル化だ。お陰で、組織の中で国内派と国際派という問題を抱えてしまったが・・・。

俺は、組織の幹部特権として左手頸に蜘蛛のタトゥーを彫ることを強要した。これは、俺亡き後の後継者候補であることを示す象徴を意味していた。俺の組織で、このタトゥーがあるかないかで組織での立場は決定的に異なる。構成員の誰もが、この象徴を目指して努力してきた。

組織再生のための資金は、とりあえず隠しとうせるだろう。海外・国内の口座は凍結されてもあの金塊があれば、組織は立ち直れる。それに、あの場所はたやすく発見できる場所ではない。俺しか知らない場所だ。後は、俺が自由の身になることだ。おそらく子分どもが、俺の奪還計画を立てているだろう。

―今日は冬至か・・・―とボスは腕を組みなして足元の影をみた。この日は一年で最も夜である時間が長いという。昔の人々は生命の終わる時期だと考えていたようだが、俺はまだまだ生きねばならない。あの大阪府警の湖論暮刑事と

決着を付けないと、俺の人生は無意味だ。

素人の探偵ごっこ集団には手を焼いた。日根野三郎には死んでもらったが、この民間捜査機関なる連中は、雲霞のごとく押し寄せてくる。あの高石とかいう中高年探偵団グループは、一体何なのだ。

湖論暮刑事の取調は、苛烈を極めたものだった。あいつは、国家権力の正義を体現していた。自分自身が正義だと想っていやがる。あいつは、肉体こそ攻めないが精神を攻めるやり方だ。正義と悪との熾烈な神経戦が取調室で行われた。俺は、完全黙秘を貫いた。調書など一枚もない。俺には、脅しや賺しは通用しない。俺と対決する人間は、警察であろうとなかろうと調べ上げて一族郎党抹殺だ。そのリスクを抱えていることを認識するがよい。ここを出れば、いっしょにお返しをしてやる。俺の報復ほど怖ろしいものはないぞ！

「待ってろ！湖論暮！」とボスは薄ら笑いを浮かべて独りごちた。

湖論暮刑事は、浅香小百合嬢からの聴取で四人組ボスには、かすかな訛りがあると聴いていた。浅香小百合嬢のスナックは金剛山から見れば、西側の大阪平野にある。金剛山を越えて店に来る客はそれほどいないが、北新地時代からの経験からお客様の喋り方には注意を払っていた。

昨今の状況で言えば、大阪文化（否！喋り方）は「吉本」効果で全国に広がった。これはいいのか悪いのかは分からない。ただ、大阪の人間は公共の場でも大阪弁を使うようになった。ただしこれは一時の作られた虚像であることを大阪人は知る必要があるだろう。仕掛け人は、そんなことは十分理解した上で公共の電波に流したような気がする。

テレビ等の普及によって標準語なるものが日本全国に伝播した。その事によって、地域共同体の言語は消滅化していく過程にあると想われるが、どっこいしぶとく生きている。本人は、標準語で会話していると想っても、独特のアクセントやイントネーションを隠しとうせるものではない。たとえば、大阪弁だ。

大阪弁も地域によって微妙に異なる。湖論暮刑事が所属する大阪府警の堺署においても、それぞれの刑事の言葉は微妙に異なる。狭い泉州地域でも泉北弁、堺弁、泉南弁等が混在していた。注意深く聴けば、微妙に異なる。浅香小百合嬢が聴いた四人組のボスの言葉は、金剛山の東側・・・つまり奈良県側の言葉であると言っていた。かつての北新地時代の常連さんの喋り方と酷似しているとのことだ。

金剛山東麓と西麓では、山が境界となって人々の交流を物理的に妨げていた。

もともと県境とは、山脈によって分けられている。天空から降り注いだ雨が、東麓側に流れ行くのか、それとも西麓側に流れ行くのかで雨水自体の運命も異なる。分水嶺・・・人生の分水嶺は誰でもあるのだ。左手頸に、たまたま蜘蛛の痣があったために、そして家庭環境に恵まれずに育った四人組ボスは、世の中を憎んだ。無理やりに「土蜘蛛」伝説にこじつけて自己の存在基盤を正当化した。荒唐無稽な妄想が、自己のアイデンティティへと成長して行った。

湖論暮刑事は、自分なりにプロファイリングした。

—金剛山東麓の訛り・・・土蜘蛛伝説・・・—

これがキーワードだ！と湖論暮刑事は推察した。

湖論暮刑事は、データベースの検索結果で、大昔のことであるが金剛山東麓の市町村一帯で左手頸に蜘蛛のタトゥーのあるリーダーが率いる不良グループの存在を知った。いわゆる「愚連隊」だ。

資料によれば、ありとあらゆる悪事を重ねていた。リーダーが高校を卒業して、行方が分からなくなると核を失ったこのグループは警察当局の過酷な追及もあり自然解散したようだ。リーダーは、ある日突然と誰にも行き先を告げずに姿を消したらしい。手がかりは、この程度しかなかった。

湖論暮刑事はチーフに奈良県警に行くことを告げた。当時を知る警察官に事情を聴取するためだ。もうすでに現役を退いているはずだ。四〇年以上の前の話だ。当時の関係者の生存もあやしいと想ったが、湖論暮刑事は新たな事実の発見を期待した。

湖論暮刑事は、はやる心を押さえて奈良県警に向かって覆面パトカーのハンドルを握った。奈良県警では、当時の警察官の一人の住所氏名を教えてもらった。退職後も地域において町内会役員で活躍しているという。地元署の地域課を最後に退職した若草山 善次郎を訪問することにした。高田署分庁舎近くに住んでいるという。湖論暮刑事は、御所市へ向かった。

見事に剪定されている植木が印象的な家の前に湖論暮刑事が運転する覆面パトカーは到着した。曇天の空を見上げると粉雪が降っていた。ドアを開けると寒風がまともに顔に当たった。広い庭の一角を畑にしているようだ。畑仕事をしている年輩者が見えた。歳の頃なら八〇歳半ばだろうか。

門のインターホンを押して訪問を告げた。そうすると畑から、首に巻いたタオルで手を拭きながら人懐こい笑みを浮かべて、その年輩者は近付いてきた。どう見ても、あの久米田を想わすような風貌を持っていた。さぞかし現役時代は地域の安全のために駆けずりまわっていたのに違いない。門の門を開けながら言った。

「先ほど、県警から連絡がありました。大阪府警の湖論暮刑事ですよ。まあ・・・外は、寒いから家の中に入ってください。お話の要件は、県警の担当者から聴いております。お役にたつかどうかは分かりませんが・・・。」と言った。

湖論暮刑事は、案内された部屋の掘炬燵に足を入れて暖を取った。すでに訪問する事が分かっていたので、掘炬燵のスイッチは入っていた。湖論暮刑事の体は、車から出て数分もたたないのに冷え切っていた。

「大阪の冷え込みと奈良とは違うな・・・。」と湖論暮刑事は思った。

しばらくすると、お茶を運んできた内儀が言った。

「何もございませんが・・・。」と言って湖論暮刑事に葛餅を勧めた。

この家の主である若草山 善次郎元巡査長は、農作業の服装では失礼にあたりと想ったのか、きちんとした着物姿で部屋に入ってきた。時代劇の「水戸黄門さん」のような感じだった。何とも言えない威厳があつた。

「久米田もこの歳になるとこんな感じになるのかなあ・・・。」と湖論暮刑事は想像した。

若草山 善次郎元巡査長は、座布団に正座で座った。驚いた湖論暮刑事は、想わず掘炬燵から足を出そうとしたが、

「いや・・・そのまま・・・そのまま」と若草山 善次郎元巡査長は柔和な声で言った。

湖論暮刑事は、向い合せに対面するやいなや挨拶も抜きで、四人組のボスの写真を見せられた。善次郎元巡査長の前に差し出した。

「これが、現在のボスの顔写真です。逮捕当時の写真なので、顔面が張れておりますが・・・。」と湖論暮刑事は言った。

「・・・。」

そして、この間の出来事を、湖論暮刑事は簡潔に説明した。

「大和葛城山での五千発の花火作戦は、湖論暮刑事も関係していたのですね。

あれは、こちらでも衝撃的でした。年寄りには、早寝早起きですから・・・特に、こちら側でも事実上の夜間外出禁止の戒厳令状態でしたので、さっさと重なる戸締まりをして眠っておりましたら凄く爆発音で目が覚めました。空襲でも始まったのかという錯覚をいたしました。あわてて外に飛び出すと、夜空を彩るあの花火・・・あの四尺玉の花火には感動いたしました。もうこの世に未練がなくなるほどの感動でした。生きていて良かったと心底想いました。」と若草山 善次郎元巡査長はいかにも楽しそうに言った。

湖論暮刑事は、左手頸に蜘蛛の痣のある不良グループのリーダーのことにつ

いて質問した。

「そうですね。確かにそのようなグループは存在していましたね。今、この写真を見ても思い起こすような顔は浮かびません。四〇年以上の歳月が過ぎれば、生みの親でも分からないでしょうね。当時、私もまだ若かったこともあって、そのグループと対決というか追いかけてまわしました。

データベースには、未成年の不良グループということで実名は記録されていないのでしょね。そうですね・・・私の日誌がまだ残っています。妻には、私が死亡しましたら棺桶に入れてくれとお願ひしていますけど、何か役にたつでしょう。」と言いなながら堀炬燵の卓から離れて隣の部屋に体を運んだ。

若草山 善次郎元巡査長は大事そうに古い大学ノートを五〇冊ほど両手で抱えて運んできた。それを堀炬燵の卓上に置くと、そのうち一〇冊ほどを抜き出して湖論暮刑事の前に差し出した。

「これが、当時の記録です。」と若草山 善次郎元巡査長は言った。

すでに大学ノートは変色していたが、丁寧に扱われていたので痛みはなかった。小さい字でこまめに記述されていた。達筆であった。

「時々、認知防止で過去を振り返るためにノートを拡げて読み返すこともありますが、今となっては持病の悪化ということで、視力も低下して読むのは少しいものがあります。このノートを提供させていただきますので湖論暮刑事の方で調査していただけますでしょうか。手がかりになるものがあるかも知れません。」と若草山 善次郎元巡査長は申し訳なさそうに言った。

「確かに、齢八〇も過ぎれば記憶も定かではないだろう。しかし、この備忘録の凄さは何だ。「伝説の警官」が久米田なら、この御仁は「記録魔の警官」だ。データベースにもない記録が眠っているだろう！」と湖論暮刑事は思った。

湖論暮刑事は、丁寧な謝辞を述べて若草山 善次郎元巡査長の自宅を後にした。奈良県側の大和葛城山、金剛山を見上げた。斜面の樹木には、うっすらと雪が被っていた。このどこかに四人組が埋蔵した資金が眠っていると想うと闘志が湧いてきた。

湖論暮刑事が運転する覆面パトカーの助手席には、風呂敷で包まれた大学ノート一〇冊が大事そうに置かれていた。309号線に入り水越峠のトンネルを抜けた。奈良県側では、粉雪が降っていたが大阪側に入ると小粒の雨になっていた。フロントガラスに雨滴がぽつぽつと張り付く。

湖論暮刑事は、この大学ノートの内容が気になって仕方がなかった。

青崩で路側帯に車を駐車して煙草を吸った。煙草を吸い終わってから、助手席にある風呂敷包みを取り記録が一番古い大学ノートを抜き出した。年月日、

天気、その日の出来事や行動などが几帳面な性格を想わせるような筆跡で記述されていた。時代の証言となるような資料だった。「伝説の記録魔」は名文家でもあった。

丹念に読み進めると当該の記述があった。グループ名は、「黒蜘蛛」。何だか「鬼平犯科帳」の時代劇に登場するようなネーミングだった。主に高校生以下の少年達で構成されていた。鄙びた金剛山東麓の市町村で頭角を現わし、情け容赦ない攻撃と行動力で奈良県全域に影響力を持つようになった未成年の不良グループだった。赤く染められた布に黒蜘蛛を描き、そのフラッグを先頭で振りかざして暴走行為を繰り返していた。バイクを窃盗しそれを乗り回す暴走行為だけならまだ可愛げがあるが、仲間が増えるにつれて行動はエスカレートして行った。このグループは、既存の組織暴力集団に対しても抗争を挑んだ。まさに時代に反抗する集団だった。

核になっているリーダーの存在は確認されていたが、リーダーは氏名不詳となっていた。暴走行為をした未成年の複数の構成員（ノートには、実名が記述されていた。）を補導して、リーダーの名前を問い詰めても黙秘し続けた。白状でもすれば、恐ろしい災厄が待っているかのような顔をして口を開かなかつた。もともとリーダーなる存在は、決して表に出てこない仕組みになっていたようだ。そして、どこの学校でも卒業式が行われて、新学期が始まる頃に突然この不良グループは扇の要を失ったのか鉄の規律がなくなり内部分裂が起こつた。そして、離合集散を繰り返した後、県警による徹底的な壊滅作戦によってこのグループは雲散霧消した。後で分かったことだが、扇の要であるリーダーが行方不明になったことが要因とのことだった。

大阪湾のどこかの港に車ごと沈められたとか、金剛山の山深いところで埋められているとかの噂がまことしやかに流れた。

湖論暮刑事が、読み終えたところまでは、要約するとそのような記述であった。読後感で言えば、何だか哀しい感じの記述だった。事実と風聞が入り混じって困惑しているような表現だった。何とも不可思議なノートだった。実務的な記録であるのにもかかわらず、「黒蜘蛛」の個所になると表現が変化した。敵意でもない……しかし賛同でもない表現。あえて言うならば、親が子を思うような切なさ……。

湖論暮刑事は、期待に胸を膨らませて二冊目の大学ノートを拵げた。すでに太陽は大きく西に傾き日没前を示していた。路側帯で大学ノートを全て読み切るには無理があると想った。慌てて読み進めば、見落としの可能性もあった。

湖論暮刑事は、胸ポケットから携帯電話を取り出して、チーフ（大阪府警特

別チームの捜査責任者）に今日の成果を報告した。そして、このまま堺署に覆面パトカーを預けて直帰することを告げた。

チーフは言った。

「そうか！そうか！多少の手がかりがあったということだな！了解した！今日は、ゆっくりと眠れ！湖論暮！」

この後、湖論暮刑事は久米田の携帯にメールを送信した。

「奈良県で当時を知るOBと面会。貴重な資料を入手。解読に応援を頼む。場所は白鷺事務所」

すぐに、久米田より返信メールが届いた。

「了解！手配する！」

湖論暮刑事は、風呂敷包みを大事そうに小脇に抱えて堺東の白鷺事務所に着いた。裕次郎君達にも眼を通してもらう必要があると想ったからだ。この場合には、複数の眼で解読する方がいいだろうという判断だった。本来なら大阪府警に持ち込んで、捜査員達が読み込むのが正当ではあるが……

白鷺事務所のドアを開けるとお種さんが笑みを浮かべながら待っていた。「久米田さんからの連絡で準備しています。坊ちゃんの執務室ですが、椅子もテーブルも用意しました。裕次郎君と坊ちゃんは、すでに上で待機しています。もうそろそろ他の方も来られると思いますので案内させていただきます。」とお種さんはハキハキと言った。

「坊ちゃんというのは、白鷺のことだったよな……」と湖論暮刑事は多少の違和感を覚えながら二階につながる急階段を用心深く登った。急階段には、左右に手すりが設置されていた。あの襲撃事件以来、白鷺も改心したのだろうか。弱者に対するいたわりが感じられた。

「これなら、膝の弱い高石でも安心して昇り降りできるよな……」

白鷺の執務室には、大きめのテーブルとパイプ椅子があった。入院中の高石を除いて関係者全員の集合をかけているようだ。いつのまにか、中高年探偵団に若手が参入し活気がみなぎっていた。

湖論暮刑事は、白鷺と裕次郎君に挨拶をした。白鷺は、ドアを開けて湖論暮刑事が部屋に入ってくると椅子から立ち上った。そして、先日の槇尾山捜索について高石の同窓生として礼を述べた。

「何を言っているのですか。仲間ではありませんか。水臭い！他人行儀な話はないしてください。」と湖論暮刑事は、すこしばかり怒気を含めた声の調子で言った。しかし顔は笑っていた。

白鷺にすれば、槇尾山捜索では体力がないこともあって大した活躍をしてい

ないという自責の念があった。いくら甥っこの裕次郎君が大活躍したとはいえ、それはそれであって白鷺にすれば、内心逐時忸怩たるものが燻っていた。

階下での会話が二階まで聞こえてきた。お種さんの元気な声が聞こえた。――どうやら到着したようだ。――と裕次郎君は思った。

執務室のドアを開けて、先頭にミサキ嬢、次に青島青年、小百合嬢、久米田と続いた。

裕次郎君は、ミサキ嬢の頬笑みを浮かべた顔を見て心温まる感情をおぼえた。――いつ見ても可愛い。僕は、久米田さんのように永遠のボディガードに成れるのか？――と裕次郎君は素直に思った。

全員が着席したところで、湖論暮刑事は参加者全員の顔を見回しながら、この間の捜査経過と今日の奈良県警察官OBの聴取内容を説明した。そして預かってきたこの大学ノートに四人組ボスの過去が秘められていることを説明した。

湖論暮刑事は、風呂敷包みから大事そうに大学ノートを取り出して言った。

「回し読みをしていたら、気になるところがあれば付箋を貼付して下さい。決定的な箇所があれば、その場で発言をしていただいて結構です。大事なことは、四人組のボスに係わる情報です。隣同士で相談していただいても結構です。」と湖論暮刑事は言った。

「想像力を働かさないと読み込めないわね……。」と小百合嬢。

「トンボの眼だよ！復眼的な思考をしないと真実は発見できない！」と久米田。

「キーワードは土蜘蛛です！」と裕次郎君。

「高石係長の分まで、頑張るぞ！」と青島青年。

「行間を読むということですね。任して下さい。」とミサキ嬢。

「綺麗な字だなあ……。」と白鷺。

しばらくするとお種さんがコーヒーポットと紙コップを持って二階にあがって来た。

「大事な資料だと想われます。こぼして汚してはいけませんので、坊ちゃんのデスクの上に置いておきますので、各自適当に飲んで下さいね。」とミサキ嬢の方に視線を流しながら言った。そして、静かに消え入るように一階に降りて行った。

「ありがとうございます！」とミサキ嬢が言った。

湖論暮刑事は、三冊目……四冊目と次々に読み進めた。日誌は、日々の警察官としての職務の記録であり、個人の生活の記録であった。山行記録もあつ

た。湖論暮刑事は、読み進むのを一時停止して、テーブルを囲んでいる仲間を見た。誰もが静かに、そして必死に読み進んでいる。浅香小百合嬢の溜め息が聞こえた。久米田の唸り声のような呟きも聞こえた。それぞれが真剣勝負のようにページを繰っていた。

湖論暮刑事は思った。

—ここにあの異能！「ペット捜索探偵高石」が居れば……—

病室の窓から眺めることができる空間は限られていた。強い寒風が吹いているのが分かった。木々の葉っぱは、全て吹き飛ばされていた。朝方には、粉雪がちらちら降っていた。

—冬だな……新年は、病院で過ごすことになるのか……—と高石は思った。ベッドの上でコロコロがスヤスヤと眠っていた。ほとんど一日中、この老いた犬は眠っていた。時折、想いだしたように高石の顔を舐めに来た。

—俺は、コロコロに助けられた！—と想うと高石は、名状しがたい感動が込み上げてきた。傍らのパイプ椅子に座りながら、こっくりこっくりと妻も器用に眠っていた。

高石は、妻が近所の本屋で買い求めてきた小説を開いた。「大沢在昌」著の「ブラックチェンバー」というタイトルの小説だ。本の帯には、「法を超えた捜査機関 それは正義か、強欲か？」と書かかれていた。この小説の中に「民間捜査機関」が登場する。高石達の中老年探偵団ごときと比較にならないほどの組織力と行動力を持った組織だ。高石は、ベッドの上でぐんぐんと読み進んだ。結構、面白かった。

—現実と小説とでは、少し違うなあ……。現実には、こんな強い奴なんかいないぞ！久米田は現実だけど……。—と思った。

次に、加藤文太郎の「単独行」を読んだ。少しばかり「山とは何だ！」という事が理解出来てきたように想う高石にとって、この「単独行」は参考になった。

高石の元には、久米田や湖論暮刑事から逐一と情報が届いていた。情報の共有という事だ。事件から遠ざかってしまうと勘が鈍るということで一日に何度も携帯電話が振動した。その都度、高石は自分自身の感想を送信した。奈良県警察官OBのノートも、そのうち届くだろうと思った。

—今は、青島やミサキ嬢、そして裕次郎君などの若い感性が活躍するだろう！—と高石は期待を込めて思った。

湖論暮刑事は、最後のノート十冊目を読み終わった。このOBの闘いの記録

を感動込めて読んだ。地域の守護神として日夜、その職務を遂行してきた男の記録だった。久米田も目がしらを押さえて読んでいた。しかし、どこか読み落としているのかと想ったのか、発言は弱々しかった。久米田が言った。

「どうも読み落としているようだ！」

「そうよね……。記録としては素晴らしいものであるけど……。」と小百合嬢。

「不良グループとの関わりは、具体的な記述があつて、事細かなんだけど……。」と青島青年。

「確かに、この不良グループで実名の出ている人に事情聴取する必要があるけど、四〇年前の話だから……。なかなか難しいよね……。」と裕次郎君。

湖論暮刑事は、自分の想いを言おうとしたその時に、今まで控え目に沈黙を守っていたミサキ嬢の口が開いた。湖論暮刑事は、黙った。

「私なりに四人組ボスの人物像をプロファイリングしてみたのだけど、彼は自分では意識していないかもしれないけど金剛山に凄い愛着があるのよね。だから、金剛山に逃げ込んだ。そして、金剛山のどこかに資金を隠した。彼は、金剛山だけでなく和泉山脈までも自分の庭のように熟知している。鍋谷峠の焼死事件や岩湧山での事件も大いに関連するのだと推察するのだけど、和泉葛城山、南葛城山……。このノートで言えば、ここの箇所ですけど、OBの方の山行記が、日時の同時進行での記述ではなく回想として書かれている……。この箇所が気になります。」とミサキ嬢は大学ノートの一点を指さしながら言った。

「読み上げてみますね 日誌では、『196×年10月×日 天気：快晴 午後6時10分 駐在所に緊急電話。〇〇交差点で「黒蜘蛛」が暴走行為。応援依頼に基づいて出動。現場に到着するも「黒蜘蛛」の姿なし。東方向へ逃走。』この後に、過去の回想シーンがあります。要約して言えば、昔の山行記なのでですけど、このOBさんも無類の山好きで非番となると金剛山などに歩いていました。この時に、登山道から離れたところで一人の少年が蹲って泣いていた。近寄って見ると、小学生ぐらいの子どもが転倒でもしたのかしら、膝を怪我してひどい出血をしていた。噂で聞いていた『山を駆ける少年』だった。金剛山東麓だけでなく、その足で金剛山全域・和泉山脈まで道なき道を駆けまわっていた。そんな変な子どもことは、奈良県側の登山者の間では有名だったようね。OBさんは、止血の応急処置を施した。この子を背負って麓の病院まで運んだ。この時に、この子の名前を訊いている。この子は、出血の際の赤い血を見て恐怖を感じたのか、泣きじゃくりながら「タケウチ カイドウ」と名乗った。この時は、さすが嘘だと想ったようですね。だって近くに「竹内街道」が有名ですからね。少し陰のある子で、必要以上には喋らない。無口そのもので、幼い少年なのに眼光は鋭かったようね。その後も非番になれば山行を重ねるのだけ

ど、この少年はとんでもない藪の中から姿を現わして、すこし、はにかむような感じでこのOBさんに会釈したと書いてあるわ……。

このOBさんは、この『山を駆ける少年』と何度も山で出会っていた。弁当を分かち合って食べたとも記述している。この『山を駆ける少年』は、どこか寂しそうな感じで、一瞬、奥深い冷たさも感じられる少年だったと記述されている。二人の間では友情があったのだと想う。私は、この大学ノートに沢山の実名が記述されているけど、この『山を駆ける少年』が一番気になる存在だわ……。」とミサキ嬢はしんみりと言った。

「さすが鋭い感性を持っているな！ミサキ嬢！——と湖論暮刑事は頭の中で拍手喝采をした。

「確かに……。そうなるとあの警察OBは、分かっけていて庇っているかも知れないね。」と小百合嬢は言った。

「友情とは、そういうものだよ。たとえ違う方向！悪の方向に友人が行ったとしても友情は永遠だよ！友情には、年齢差なんかないよ！」と久米田が言った。

「あの『山を駆ける少年』が、今は闇組織の頂点にいるというのは予想外だったかもなあ……。」
と裕次郎君は言った。

ミサキ嬢は、静かな声で続けて言った。

「黒蜘蛛のリーダーが誰であるかを知っていた。OBさんは、『山を駆ける少年』の左手首の痣の事は当然知っているからね……。だって背負って山を降りて来たのだから、『山を駆ける少年』の左右の腕は、OBさんの頸のまわりにあったのだから……。当然、本人と山に会えば更生を勧めた。しかし、抗うことができない運命の流れが少年にあった。そして、いつしか自分の手元から離れて行った。そして、高校卒業時期あたりとなると消息不明となった。殺されたという噂もあった。しかし、友情は残る。それが、たとえ一方的な片思いであっても……。湖論暮刑事が自宅に向いて要件を説明した際に、過去が蘇った。あの『山を駆ける少年』が生きていたことに安堵を覚えたかもしれない。同時に更生させることが出来なかった自分を責める想いも吹き出してくる。しかし、自分の口からは言えない。だから湖論暮刑事に謎解きの課題を与えた。この十冊の大学ノート……。ここでお願いしたいことがあります。この謎解きが正解であっても、そのOBさんには連絡しないで下さいね。彼は、この謎が解けたら自死するつもりでいるはずですよ。湖論暮刑事が訪問したことで、忘却の彼方にあった悔恨が覚醒したのです。そ……。としてあげておいて下さい。OBさんは、心の中で……。今……。想起した『山を駆ける少年』と真正面に向か

い合つて説教しています。OBさんにとっては、闇組織の頂点のボスというのは想定外の範囲です。高校生時代までの『黒蜘蛛』までだと想います。」

この会議に参加したメンバーは、警察OBと『山を駆ける少年』との因縁を想像してしんみりとしていた。職務と友情……。

―情けがなければ、この世は闇だ。―と白鷺は想った。しかし、口には出さなかつた。そのような雰囲気ではないことは、さすが白鷺でも理解していた。

ミサキ嬢の想いは、会議参加者の共通の想いとなつた。

湖論暮刑事は、腕組みをしながら眼を瞑つた。そして、確信的に想つた。

―やはりこの連中と相談して良かった。堅物の捜査員ではこんな発想は出てこないだろう。プロファイラーとしては、最高のミサキ嬢だ！高石の周囲に何と有為な人材がいるのだ！取調での切り口が見つかった。人の出会いとは分からないものだ。俺にしてもこの連中との出会いがなければ、どうなっていたか分からない……。―

『山を駆ける少年』と奈良県警退職OBとの関わりは、すぐに高石の携帯電話にメールとして送信された。病室のベッド上で、一日中何をするとということもなく過ごしている高石にとつて、青島青年やミサキ嬢の活躍が嬉しかった。

―さすがミサキ嬢だな……。役場の事務職員とは想われない感性を持つているぞ！―と高石は想つた。

―『山を駆ける少年』か……。山好きの犯罪者……。山好きには善人も悪人もいないということか……。―

高石は、窓の外を見た。風強く寒そうだった。

窓の外に見える木々は寒さで震えあがっているかのように揺れていた。寒波が、多くの雪をもたらしたようだ。積もった雪のため村自体がとじ込まれ、交通が遮断されたところもあるという。また、道路が冠雪し立ち往生の車内で夜を過ごすトラブルも報道されていた。

高石が入院している病室からは眺めることはできないが、大阪平野を取り巻く山々である大和葛城山、金剛山、岩湧山が冠雪しているという。高石は、まだ金剛山の樹氷は経験していない。深い記憶の底では、中学生時代の耐寒登山として経験しているかも知れないと想つた。そんな事を考えながら高石は、ベッドの上で眠りこけるコロコロの寝顔を眺めた。

悪人という言葉から、親鸞聖人の言葉を記述した歎異抄の一節を想い起こした。

―善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。―

深い意味を持つ歎異抄の世界と「犯罪者である闇組織のボスの悪行」とは一致しないが、闇組織のボスが犯罪者でなければ高石と共に山の話で談笑できる仲間にも成りえたかもしれないと想った。まだ、悪の世界に落ち込んでいない頃の『山を駆ける少年』のイメージが強烈なものとして高石の脳に刻みこまれた。哀しい話だ。

—山自体には、人を善に領導する力はないのか。しかし、昔から人は、山を神として崇めてきた。山岳信仰は、今の世でも根強い力を持っている。山の神様は、『山を駆ける少年』を見捨てたのだろうか……。俺とボスとの共通点は、少なくとも山好きである。—ということだと高石は考えた。

ペット捜索探偵である高石の異能は、「ナリキリ探偵」と言われるように、対象に「成りきる」ということだ。この場合、ペットであれ殺された被害者であれ、その対象に「成りきる」ことによって見えないものが見えてくる。死者は、生きている者に何ほどかのメッセージを伝える。犬や猫は、言葉には成らないが何ほどかのイメージを伝える。獲得された対象認知は、多少のブレがあった。まだ、未完成な異能であった。

高石は、『山を駆ける少年』に成りきって考えてみようと思った。

高石は、瞑想した。あの深い金剛山域を駆け巡っている少年時代の自分をイメージした。頭が序々に重たくなってくる。そして、深い眠りに落ちて行った……。

湖論暮刑事は、闇組織のボスであるタケウチカイドウと向かい合って二時間ほど経過していた。狭い取調室で二人の男は真剣勝負をしていた。入口近くのデスクで若い刑事が筆記しているが白紙のページが開かれているだけだった。タケウチカイドウは、湖論暮刑事の世間話にも反応しなかった。背筋を伸ばし、胸を張っていた。そして、視線は湖論暮刑事の眼に固定されていた。何事にも動じない強い意志が感じられた。

湖論暮刑事は、まだタケウチカイドウという名前をまだ出していない。ヘタに出そうものなら有効な攻める手段を失うと想った。

湖論暮刑事は、風呂敷包みから十冊の大学ノートを引き張りだした。静かだが強い声で朗読を始めた。不動の姿勢でタケウチカイドウが聴いていた。

—この男にまだ少年時代の心と記憶があるならば、何かの反応がある！—と湖論暮刑事は推察した。一ページ毎に読み上げていく……。その都度、湖論暮刑事はタケウチカイドウの顔の表情を注視した。少しの変化も見落としてはいけない。微動だにしないタケウチカイドウの視線が、湖論暮刑事の眼を射る。強い憎しみの籠った視線だった。

大学ノートを一冊読み切った。すでに太陽は西に落ち、格子窓の向こう側は暗かった。じつくりと朗読する湖論暮刑事の顔には、すこしばかりの疲れが見えた。

大学ノートには多くの山行記が記述されていた。当然のことながら『山を駆ける少年』との交友の話題も記述されていた。奈良県警退職OBの元巡査長が、どのような想いでこの『山を駆ける少年』と接していたのか・・・心情が吐露されていた。

闇組織のボスことタケウチカイドウは、湖論暮刑事が突然と大学ノートの文章を読み始めた時に、思った。

―何を始める気だ・・・―

タケウチカイドウの姿勢は動かない。背筋を伸ばして顎を引き、じつと前方の湖論暮刑事の眼を直視していた。しばらくして、これは遠い記憶の彼方にある少年時代の頃だと想った。

―俺と関わりのある話だ・・・―と想った。

ふつふつと懐かしい記憶が蘇ってきた。瞼を閉じると金剛山などの山の姿が頭に浮かんできた。

あの時の中年登山者のことを想いだした。怪我をした時に、麓の病院まで背負って運んでくれた大人だ。背中に「おやじ」を感じた。俺は、親の情とは無縁な境遇で育っていた。背中の温もりにどれほどの安堵感を感じただろうか・・・。

山で会うたびに、俺は父親のイメージを求めた。二人の間では、大した会話はなかったような気がする。しかし、言葉は必要じゃなかった。

―そうなのか・・・あの時・・・現役の警察官だったのか・・・生きていれば、かなりの高齢なはずだが・・・―とタケウチカイドウは想った。俺のことを、これほどまでに気遣ってくれた人間はこの大人だけだった。

―幼いこともあって気がつかなかった・・・―

小学生時代は、山を駆け巡ることに喜びを発見した。体に筋肉が付くようになった中学生から高校生時代は、自分自身が内包する反抗のエネルギーをコントロール出来なくなった。俺は、山以外では悪の限りを尽くした。世の中、人生に不満を持つ不良どもが俺の元に集まった。「黒蜘蛛」という半ば犯罪者集団の不良青少年グループを結成した。

それでも暇を見つけては、山の中に入った。山で会うあの人は、無口だったが、ときおり憂いを含んだ視線を俺に投げてきた。何もかも見透かされているような気持ちだった。だからと言って一度も説教めいた事は言わなかった。

そして、誰に告げることもなく俺は、人生の不条理を悟って高校を卒業する

なり故郷を出奔した。タケウチカイドウは湖論暮刑事が朗読する言葉を一言一句漏らさずに自分の胸に叩き込んだ。

―嫌な攻め方をしやがる！どこでどう調べてきたのだ！こいつは大した捜査官だよ！―とタケウチカイドウは口もとの頬を緩ませた。タケウチカイドウの緊張の緩みが初めて顔の表情に出た。その時の笑みは、苦笑いというものではなく、少年のようなものだった。まさに『山を駆ける少年』の笑みだった。

一瞬のことかもしれないが、タケウチカイドウの凍りついた緊張感が融けて隙が出来たのかもしれない。しかし、タケウチカイドウは後悔していなかった。

―俺自身の中に、山を唯一の友として駆け巡っていた時の心がまだ残っていたのが驚きだよ。まいったな……。―とむしろ自分自身の反応に驚いた。

湖論暮刑事は、タケウチカイドウの反応を身落とさなかった。一瞬の笑み……。この笑みは、単なる苦笑いでもない。悪の限りを尽くした男の中に、純なるものを発見した気分だった。

湖論暮刑事は、取調という仕事を離れて自分自身の山行記録や山の感想を喋り始めた。他意はなかった。無いと言えば嘘になるが、捜査の対象者との連帯感というか接点を見つけたという淡い期待のようなものだった。昨年のニュースでは、取調で大阪府警の警察官が暴言を吐いたということで世間の非難を浴びたケースもあった。取調の内容は、録音されていた。湖論暮刑事もテレビの報道ニュース番組で流された音声は聴いていた。

取調には、直接的暴力は不必要だが多少の脅しは必要だと湖論暮刑事は想っていた。もっとも湖論暮刑事の取調は、このような方法は取らない。湖論暮刑事の武器は、信念だ！

タケウチカイドウが聴く耳を持っているか、そうでないかは関係がなかった。

一切のことを考慮せずに湖論暮刑事は自分自身の登山のきっかけを話し始めた。湖論暮刑事にすれば、「山好きに悪人はいない」というテーゼを今まで頑なに信じてきたタイプの人間だ。これからも永遠に信じるだろう。確かに、現実において山での犯行は多い。過去の例を持ち出すまでもなく、殺人者は死体の処理に山中を利用する。心無い者によって山は神聖さを汚される。しかし、山に救いを求める登山者……。山好きの老若男女にとっては、山は解放の場なのだ。山に救いを求めるのは、善人だけでなく、『山を駆ける少年』のようなケースもあるのだ。

湖論暮刑事は、まるでタケウチカイドウが昔ながらの山仲間のように喋り続けた……。湖論暮刑事の信念が炎のように赤く燃えあがってきた。

―俺の信念は、岩をも熔かす……。―

山は、善人の魂を救う、ましてや悪人だから言って区別することはない！

消灯後の留置場の空気は冷たかった。格子窓を見れば、うっすらと明るさを感じられた。外界の光が届かない狭い空間でタケウチカイドウは思った。

―予定では、そろそろだな……。―

闇組織のボスが逮捕もしくは死亡した場合は、残余集団の中で臨時の指導者であるボスを速やかに擁立すること。また、拘束された仲間を全力で救出するという鉄の規律があった。まだ拘束されていない組織の仲間が画策しているはずだ。

資金源と人材……。そして統率力のあるボスさえ居れば組織は再生する。タケウチカイドウは、予定の行動をそろそろ実行する頃だと考えた。

―あいつの山の話は面白かった。ある意味、共感できる部分もあった。―とタケウチカイドウは湖論暮刑事の愚直なまでの真面目さに感動した。犯罪者が刑事の話に感動して何になるのだ！と想いもするが、これが湖論暮刑事の切り口なのだろうと想った。

湖論暮なる刑事の存在が徐々に俺の心に食い込んでくることに少しばかりの驚きを禁じることができなかった。今までの捜査官とはタイプが異なるものを感じた。これ以上拘わっていると俺の精神……。不可侵の領域まで浸食してくることが予想された。

―言葉のマジック……。否……。あれは信念という湖論暮独特のマジックだ！

敵としては、最高最強の部類に属するだろう。まだ肉体を責められる方が、まだマシかも知れなかった。

おそらく俺の実名は把握されているだろう。俺の親のことだから出奔して、すぐに失踪届を役場に届けていてははずだ。戸籍までは、確認してはいないが……。死亡したのも同然の境遇だ。

「そろそろだ……。」とタケウチカイドウは寝返りを打ちながら呟いた。

翌日の早朝だった。太陽が、まだ完全に登りきっていなかった。見回りの警官が異常を発見した。タケウチカイドウが口元から少なからず出血してうめき声をあげていた。ただちに泊まり込んでいる湖論暮刑事にも伝達された。

湖論暮刑事は、仮眠所の布団の中から飛び出すと足早に通路を走った。冷気が足元に纏わりついているのが分かった。例年になく冷え込みだった。留置場に入るとベッドの枕元は、広範囲に血で赤く染まっていた。どうやら舌を噛み切ったようだ。中途半端に噛み切ったものの死に切れずタケウチカイドウは断

末魔のような声をあげてのたうち回っていた。

「致命傷にはなっていないようだ。救急車を手配してくれ！」と湖論暮刑事は落ち着いた声で周囲の警官たちに言った。

「この時点で自殺を図るようなタイミングではない！」と湖論暮刑事は不吉な違和感を覚えた。

闇組織の頂点にたつボスが簡単に自殺を図るような脆さはない。これは、何かの信号かもしれない。

すぐに、慌ただしく救急隊員は到着した。タケウチカイドウは、二人の救急隊員によってストレッチャーに乗せられた。暴れるタケウチカイドウ。湖論暮刑事は、念のため口にタオルを噛ました。署の裏手の駐車場には、救急車が停車していた。こちらの要請でサイレンなしで運行されてきたようだ。早朝の静寂を破ることは許されない。救急車が、サイレンを鳴らしながら警察署に入っていけば、余計な詮索を周囲の住民にあたえてしまう。それは、避けたかった。

湖論暮刑事は、救急車の赤いランプが異様なほど眩しく感じられた。湖論暮刑事は、護送の基本手順を確認した。この場合、瀕死の犯人であれ用心することとは大事だと思った。逃走する危険性は皆無とは言いつれない。念のため手錠をはめた。加えて腰縄までした。とにかく闇組織の頂点にたつボスだ。冷酷非道な輩に優しい対応は必要ない。闇組織残余勢力のボス奪還計画も充分に想定された。狂言かもしれないと湖論暮刑事は思った。狂言にしては、流れた血量は尋常ではなかった。

闇組織の残余勢力にしても、署そのものを攻撃することはないと思うが、とにかく何かがあるのか分からないのが、この闇組織の怖さだ。

救急車内では、暴れ狂うタケウチカイドウを押さえつけた救急隊員が叫ぶ！

「もう大丈夫だ！我慢しろ！」

救急車には、二人の制式拳銃を所持した警察官が乗り込んだ。さらに二人の警官が同乗したパトカーが後続した。行先は近場の救急病院だった。

湖論暮刑事は、数ブロック離れてからサイレンを鳴らして疾走する救急車が視界から消えるまで歩道に立ちつくしていた。街としてはまだ眠りから覚めてはいなかった。東の空に太陽が出ていた。何とも言えないほど綺麗な朝焼けだった。冷たい大気が清澄なためだろうか、光輝く空がオレンジ色に染まっていた。

空を見上げると、ちらちらと粉雪が降ってきた。一日が、これから始まるようにしていた。冷たい風が湖論暮刑事の体を吹き流していく。思わず身震いするほどの寒さだった。先ほどの得体の知れない違和感がハッキリとした不安に変化

したのを湖論暮刑事は感じた。

激動の一日が始まろうとしていた。闇組織と大阪府警との全面对決だ。正義と悪との激しい闘いが始まろうとしていた。

十三

【午前7：0×】

東の空から太陽が昇ろうとしていた。暁の光は、序々に柔な感じから力強さを増してきた。太陽は、大阪平野と奈良県側を境とする山の峰の一角から昇ってきた。

湖論暮刑事が救急車を寒風の中で見送っている際に、署に近いビルの屋上で蠢く人の影がいくつかあった。闇組織の監視チームであった。

「あそこに立っているのは、湖論暮だな・・・。」

一人の男が、胸のポケットから携帯電話を取り出すと周囲に、仲間以外は誰もいないにもかかわらず小さな細い声で言った。

「どうやら予定どおりにボスが自傷行為をしたようだ。時間も予定どおりだ。」

そちらチームは、どの救急病院に搬送されるか追跡せよ！確認したら連絡を！」

防寒服に身を固めて署の動きを監視していた闇組織の監視チームのチーフは、他の仲間に顎をしゃくって撤退のサインを送った。

「ボス奪還作戦始動だ！これから忙しくなるぞ！」と誰に言う訳でもなくチーフは力強く言った。

【午前7：15】

タケウチカイドウを乗せた救急車は、病院の手前でサイレンのスイッチをオフにして滑り込むように正面玄関前の駐車場に入って行った。出迎えの病院スタッフも寒さに震えながら、正面玄関前に飛び出した。救急隊員からストレッチャーに乗せられた患者を引き取ると、自動ドアを通過して手術室に移送した。この時点では、病院スタッフにすればこの患者の正体は知らされていないかった。勿論、救急隊員たちも知っていたわけではない。ただ、ものものしい武装警官がストレッチャーの傍らに付いていた。何とも言えない緊張感だけが周囲を異様に支配していた。

【午前7：20】

X市の市長は、朝の睡眠を楽しんでいた。今日はいつもとよりゆっくりと眠った。暖かいベッドの温もりが何とも言えないほどの幸福感をもたらす。朝のまどろみの中で、今日の予定を確認した。しばらくすると秘書課長が迎えにくる

はずだ。

今日は、持病（糖尿病）の定期健診でかかりつけの病院に行く予定となっていた。

―秘書課長が来るまで眠ってやれ……。たまには、惰眠を食うことも大事だ。あいつには悪いが……。―と市長は思った。

【午前7:25】

高石は病院のベッドでテレビを見ていた。個室といってもマナーが必要というところで、ポリウムを落として朝のニュースを聞くのが入院後の日課となっていた。愛犬コロコロは、高石のベッドの上で寝息を立てながら眠っていた。

―このコロコロは、まるで猫のように眠るなあ……。年も年だからね。このコロコロの奮闘で、俺は発見され助かったのだ。―と高石は感慨深げに槇尾山での出来事を回想した。

高石は、読みかけの書籍を手元に引き寄せた。探偵小説も好きだが、入院してから読み始めた小説のジャンルは警察小説だった。特に佐々木譲の警官物には、衝撃を受けた。北海道警を舞台にした物語の展開だ。妻にお願いしてDVDのレンタルまで借りて鑑賞した。映画「笑う警官」である。病室に持ち込んだパソコンで再生してみると劇場で鑑賞するほどの感動はないが、ストーリーは理解できた。原作を先に読んだこともあって、少しばかりの違和感を覚えた。やはり原作を越える映画というのは困難なのかも知れない。

高石にすれば、身の回りにいる警察関係者と言えば、久米田であり湖論暮刑事だった。佐々木譲の警官世界とは異質の個性だった。

高石は思った。人生でこれほどゆっくりとした時間の流れを味わうのは、新婚旅行の特別休暇以来だ……。夢をよく見た。また、見た夢をよく記憶していた。まだ日の出前で暗闇が支配していた時間帯、夢かまぼろしか定かでない境界域、まどろみの世界で見た夢が気になった。夢の中に出現する「山を駆ける少年」……。これは、自分のことかも知れないし、タケウチカイドウのことかも知れない。夢の中に登場する少年は、道なき道を駆け廻っていた。大和葛城山、金剛山、遠くは紀泉高原を抜けて海岸線まで駆け廻っていた。眠たくなれば、どこでも野宿をした。眠るところには困らなかった。野宿することになれば、麓の神社・寺まで降りて行った。軒下で雨露さえしのぐことが出来れば、充分だった。山麓には、好き嫌いを度外視すれば食べるものはなんでもあった。柿や蜜柑などは食べ放題だった。少年一人が食べるものを、畑から少しばかり失敬しても耕作者には分からなかっただろう。

少年が、山から村に降りてきた際に出合う村人の対応は親切だった。この少

年が「山を駆ける少年」だと分かると老婆などは、手を合わせて拝みながら握り飯を差し出したものだ。山は、この孤独な少年の魂を救済出来なかったのだろうか。それほど、左手首にある痣の因縁の方が強かったのだろうか。少年の心には、人々の情を理解できるだけの受容の感性は欠如していたのだろうか。高石は、「山を駆ける少年」と同一化する事によって見えないものが見えてくるのではないかと想った。理解できないことが理解できるのではないか・・・と想った。何か「山を駆ける少年」の運命を悪しき方向に誘い出したのだ。生まれながらの犯罪者など存在しないはずだ。

高石は、空調の整った病室で不自由なく過ごしている自分自身が恥ずかしくなった。この間にも久米田や湖論暮刑事たちが戦っている。このことを想うと焦りにも似た感情に襲われた。

【午前7:30】

湖論暮刑事は、署の地下にある自働販売機の前で悔やんでいた。缶コーヒ―を取り出す余裕もないほど不気味な不安がこみ上げてきた。

―出来すぎだ！何かあるぞ！―と湖論暮刑事は想った。タケウチカイドウには、四人の武装警官が監視と警護の任務に就いていた。よほどのことがない限り対応できる態勢だ。また、あれほどの出血だ。無茶な行動は出来ないはずだ。しかし、自殺とは考えられない。自殺するタマじゃない。

手術室のベッドに寝かされたタケウチカイドウは激痛に耐えながら周囲の様子を窺っていた。忙しく立ち回っている病院スタッフが視認できた。

―麻酔処置される前に行動を起こさないと・・・しかし、痛いなあ・・・。加減して舌を噛み切ったが、これは痛いわ！二度と出来ることはない。―とタケウチカイドウは想った。

ボスが警察などに拘束された時の「奪還マニュアル」というものが、闇組織の中であった。警察署の中に留置されている状況では、さすが武装された闇組織でも直接攻撃は困難だった。そこで、朝方に自傷行為をして救急病院に搬送された後に、奪還作戦を始動することになっていた。予定では、ここを察知した子分どもが踏み込んでくるはずだ。時間的には、ここ三〇分以内だ。

ここで部分麻酔ならまだ動きようがあるが・・・。「これから処置をしますが、口腔内の部分麻酔をします。口を開けてください。」と若い医師が優しい声で言った。

―部分麻酔か！よしチャンスだ！処置が終わった段階で行動開始だ。この痛みを和らげないと動きが取れない・・・。―

【午前8：00】

タケウチカイドウの手術は、無事に終了した。

若い救急医師の顔は、満足感で溢れていた。困難な手術ではないが、人の助けになつているといふ喜びが今の仕事、生活の支えだった。若い医師は、何か一言をタケウチカイドウに伝えようと顔を覗き込んだ、その時にタケウチカイドウは、傍らの医療器具の鋏を右手で掴み手術用ベッドから跳ね起きるや否や、すばやくこの若い医師の胸倉を掴んだ。

「うごくな！」とタケウチカイドウは言った。もつとも麻酔が効いた状態で喋る声は、何と言つたのか周囲の人間には分からなかった。ただ、右手に握りしめていた鋭利な鋏の先端が若い医師の喉元に向けられているのを見ると事態は誰でもが理解できた。

手術室に同席を許された二人の武装警官も瞬時に腰のホルスターから拳銃を抜き出すも、一旦人質を取られると無力だった。

「人質を離せ！凶器を捨てろ！」と若い巡査が叫ぶ。

当初、何事が起つたのか事態を理解出来なかつた若い女性看護師の悲鳴が手術室の外まで聞こえた。この悲鳴が発火点となつた。人質になつた若い医師を見捨てて、我さきに手術室から飛び出す医療スタッフ。開け放たれたドアから制式拳銃を手にした警官が飛び込んできた。

「動くな！鋏を捨てろ！人質を離せ！」と警官は叫ぶ。

四人の警官が、タケウチカイドウと若い医師の前面に立った。制式拳銃の銃口がタケウチカイドウに向けられていた。銃口が、あたかも自分自身に向けられていような錯覚に陥つた若い医師の両足の膝は、自分の体重を支えられなほど震えていた。医師としての魂が消滅して行くような気がした。患者からこのような仕打ちを受けることなど想定していなかった。

タケウチカイドウは、震えている若い医師の背中に回り込み左腕で若い医師の首を絞めた。若い医師は絶望感で胸がはちきれそうだった。人生の希望・・・幸福感が雲散霧消していくような喪失感の中で、必死に自分の体を支えた。立つていられることが不思議だった。喉元に鋭利な鋏があつた。呼吸をする度に鋏の先端が喉に触れた。そのたびに鋭い金属の冷たさが伝わってきた。―少しでも変な動きをすれば、自分の喉から血が噴き出すだろう。―と若い医師は、絶望の谷底へと滑落して行く自分自身をイメージした。

【午前8：05】

X市の市長を乗せた車が病院前の駐車場に到着した。運転席の秘書課長が、「ウウ・・・寒い！寒い！」と呟きながら車外に出た。

あまりの寒さに首を亀のように引つ込ませながら後部座席のドアを開けた。

寒風が後部座席に吹き込んだ。身も縮まるような冷気が市長の体を包み込んだ。「何という寒さだ！これはかなわん！」と市長はぼやいた。

秘書課長を先頭にして正面玄関を通過した。秘書課長は、いつものように診察カードをカード読取機に通す。予定では、午前九時からの受診である。予約番号は、一番だった。とにかく公務に穴を開けてはいけないと常日頃から心がけている市長であった。診察が終われば直ちに役場に出勤していた。薬の受取は、後日に秘書課の職員が行くことになっていた。

診察までは十分な時間があった。朝刊を広げて地域版から読み始めた。その時であった。正面玄関前を、ものすごいブレーキ音を立てながら複数の車が急停止する気配があった。正面玄関ドアのガラス越しに、マイクロバスと幾台かの黒塗り高級車が駐車しているのが見えた。マイクロバスからほとぼるような勢いで多くの胡散臭い男どもが戦闘服姿で飛び出してきた。そして、正面玄関を打ち破るような勢いで数十人の人相の悪い屈強な男どもが団子状態で乱入してきた。玄関ドアの金属部分と乱入した男どもの所持する散弾銃やライフル銃とが接触し歪な接触音を周囲に撒き散らしていた。恐ろしい光景だった。傍らの秘書課長の顔が凍りついていた。

と同時に二階から一階に繋がる階段を転げ落ちるように病院関係者が降りてきた。それぞれの顔は恐怖で引き攣っていた。乱入してきた男どもの一人が逃げ惑う男性の病院スタッフを足払いして倒し、胸倉を捕まえて訊いた。

「手術室はどこだ？」

訊かれた病院スタッフは、ここでも更なる恐怖を感じた。なぜなら乱入した男の手には黒光りする拳銃が握られていた。不本意ながら失禁した。生暖かいものが股間を濡らしていた。床面に水たまりのようなものが広がっていく……怖々ながら指で方向を指し示した。

「二階……エレベーターの前……」とかるうじて喉の奥から小さな声を絞り出した。

乱入した男は、他の仲間

「二階だ！行け！二班！」と指図をした。

この男から解き放たれた病院スタッフは腰が抜けた状態で這いつくばりながら正面玄関まで匍匐前進をした。床面から目を離して、目線をやや上方にした。視野が広がった。前をみると黒い靴が見えた。戦闘靴だった。

「自分だけ、逃げるんじゃないやねえ！この弱虫野郎！」と言って、この戦闘靴の男

は医療スタッフの両手を踏みつけた。

「ギャツ！」

恐ろしいほどの悲鳴が館内に響きわたった。

二階の手術室に飛び込んだ男どもは、ボスが人質を盾に、四人の警官と向いあっているのを確認した。救急病院に乱入した男どもの半数が手術室に飛び込んだ。四人の警官たちに向けられた一〇数丁の銃……。

若い医師の首からタケウチカイドウの腕が離れた。若い医師は、膝が折れるようにその場で崩れた。事態は更に悪化しているが、今の自分にとっては好転したことになる。喉元に突きつけられた銃の恐怖からは解放された。明らかに力関係が逆転したタケウチカイドウは、警官たちに背中を見せて数歩ばかり歩いた。そして、銃を手術台の上に静かに置いた。余裕がそうさせたのだろう。

今にも銃口から火を噴き出すような一触即発の状態。多勢に無勢……。

「命が欲しかったら、銃を捨てろ！」とタケウチカイドウは勝ち誇ったように言った。やはり何を言っているのか分からなかった。しかし、四人の警官たちには理解できた。

警官たちには、恐怖はなかった。ここで撃ち殺されようと後悔はない。警官たちはそれぞれ想った。

―俺は、正義を実現するために警官になった！―

―正義は我にあり！撃ち殺されようと銃は捨てないぞ！―

―このまま逃がしてたまるか！―

―この仕事を選択してからは、殉職は覚悟だ！許せ！妻よ！―

手術室の中では、しばらく時間が止まった。対峙は、数分間だったかも知れない。誰かが少しばかりの動きをすれば、それが発火点になる可能性があった。

膠着状態では、人間の真価がテストされる。年長の警官は冷静さを取り戻した。彼我との力関係を考えた。人質の生命確保が一番の優先課題であることも考えた。無念の言葉が出た。

「銃をおろせ！これは、命令だ！」

悔し涙が床面を濡らした。銃をおろすなり、闇組織の男どもが襲いかかった。男どもの鉄拳が飛んできた。四人の警官はボコボコにされた。半死半生の状態となるまで殴打された。

「そこまでだ！殺すな！こいつらには闘う男の志がある！もののふ(武士)だ！殺すな！」

とタケウチカイドウは子分どもに言った。徐々にタケウチカイドウの発声も正常域に戻ってきたようだ。子分どもは、ボスの指示があるとすぐさま殴打を止めた。かくして武装警官は、武装解除された。

警官たちの悔し涙が入り混じった血が手術室の床面を赤く濡らしていた。警官たちは後悔していなかった。人質の生命保護が優先される。発砲すれば、タケウチカイドウを射殺するだけの確信はあった。四対一での状況では、たとえ人質を盾にしていたとしても抑え込んでいただろう。

―くそ・・・！負けるものか・・・正義は・・・―

思考が薄らいでいく中で、年長の警官は自分自身を鼓舞激励した。仲間の警官が到着する。例えここで死ぬようなことがあっても、仲間が後を継ぐ・・・。

病院の裏口から、受診予定だった少なくない外来患者が危険を察知して逃げた。一一〇番には、危険を脱した外来患者より通報された。秘書課長が恐怖のため凍りついた。このことよって、X市の市長は逃げ遅れた。自分だけが逃げるわけにはいかない。市長としてのプライドがあった。確かにこの場を抜け出すことは簡単だった。常日頃からの危機管理は完璧だった。しかし、部下や市民を置き去りにして自分だけ助かるような卑怯な根性は持ち合わせていない。―俺は、市長だ！可愛い部下や市民を置き去りにして逃げれば、一族郎党・子々孫々までの恥となる。―

闇組織の戦闘部隊は、ボスであるタケウチカイドウの指示により人質を一ヶ所に集合させた。逃げ遅れた外来患者、病院スタッフなどは地下室に追いやられた。負傷した四人の警官への応急処置は、外科の医師が地下室で行った。命には別状はなかった。ただ、憤懣やるかたない表情をしたこの警察官たちの心のケアは必要だと想った。

入院患者については、病室にとどまることが許された。それぞれの階の詰所には必要最小限の看護師が配置された。階ごとの詰所に闇組織の戦闘部隊メンバーが配置された。騒ぐ入院患者はいなかった。怖くて何も言いたせないのが実情だった。

【午前8:30】

救急病院の全フロアーは、闇組織の戦闘部隊に制圧された。

【午前8:35】

通報を受けた大阪府警は、X市のみならず周辺警察署の警官を総動員した。病院周辺の住民を安全な場所に誘導避難させる必要があった。病院周辺・・・半径5kmの範囲内の住民に避難命令が出された。防災無線が、たちにもよりの場所に避難することを伝えた。朝の出勤時間帯でもあり登校時間帯でもあった。

―これが、堺市内の救急病院であれば民族大移動なみの混沌世界になっただろう。―と湖論暮刑事は思った。湖論暮刑事は、堺署所属だが今は大阪府警の本部に向向している身だ。タケウチカイドウの身柄を闇組織から隠すために徹底した情報管理をしていた。人目を回避するために、まだ牧歌的な雰囲気が残っているX市のとある署にタケウチカイドウを留置していた。不幸中の幸いだと言えば不謹慎だが救急病院の周辺は、まだ多くの田畑があった。近くに交通量の多い道路もあるが、交通を遮断し迂回させた。救急病院へ繋がる全ての道路は、大阪府警の機動隊によって封鎖された。

避難範囲については、順次拡大していく必要はあるだろうと想われた。銃撃戦という不測の事態となれば、流れ弾はどこに飛んでいくか予測がつかない。これは、すでに戦争状態だった。

【午前9：00】

周辺住民の避難は無事に終了した。速やかな行動だった。常日頃のX市の災害避難訓練の成果であった。

救急病院の周囲を取り巻く警官たちの包囲網。大阪府警M A A Tも出動した。幾重にも包囲陣が形成されていた。田畑には、ありたけの突入支援車が乗り入れられて集結していた。攻撃命令が出れば一斉射撃でもはじまりそうな雰囲気だった。しかし、成すすべは大阪府警にはなかった。なにしろ大勢の人質が、前方の病院内にいた。闇組織の戦闘員は、警察の狙撃を恐れて窓という窓をすべてカーテンで塞いだ。出入り口は、すでにイス・ロッカーや机が高く積まれバリケードが出来ていた。闇組織からは攻撃しやすい。こちらは、丸裸状態だった。防弾ベストと防弾盾で防備しているものどこか心もとない。車の陰に身をひそめている警官たち。しかし、周辺は田畑も多いために遮蔽物となるものが極端に少なかった。不用意に正面玄関に向かって突入したとしても、病院の屋上に陣取る闇組織の狙撃部隊のライフル銃が火を噴く・・・。

駐車場にX市の市長専用車の存在が確認されたことによって、人質の中に、このX市の市長がいると確認された。動員された周辺の警察官の中に、当然のことながらY署所属の久米田もいた。久米田は、高石、白鷺、浅香に状況報告メールを送信した。人質の中に、X市の市長がいることも含めて。

【午前9:10】

高石は、久米田からの携帯メールを受信した。高石は、妻を呼んだ。妻に事情を説明した。

「今から現地に行く……。命の恩人とも言える市長だ。行かねば……。」

「そんな体で行くのは、無理ではないですか。」

「いや、この体だからこそ行かねばならない。行っても何もできないけど……。」

こんな事態でベッドに寝て居れば、俺は気がおかしくなる。いざ！鎌倉だ！」

「そうよね！行かねば……。男じゃない！受けた恩の万分の一でも返さないと……。忠義を貫くのは我が家の家風ですものね。」

「そうだ！悪いが俺は病院を脱走する。コロコロを見ておいてくれ！」

「分かった！タクシーを用意するわ！」

「いや白鷺たちが迎えにくることになっている。」

夫婦の会話は自然だった。市長の身が絶体絶命の時こそ、部下である市職員がどう動いたかで人としての評価が定まる。ただの私利私欲・ボンクラ市長なら高石は恩義を感じない。この市長は、高石救援の榎尾山捜索隊に二〇〇人の職員を送り出した。青島を最高指揮官に任命したのも市長だ。

X市役所では、朝のニュースを聴いた市職員はびつくりした。次に、X市長が人質になっていることがテレビニュースで流れた。役所の中は大混乱だった。上級官庁から出向してきた副市長が、幹部連中を招集した。強力なリーダーがない会議は混沌としていた。方針が出なかった。烏合の衆だった。

― 自席で青島青年は決断した。空席となった高石係長の椅子を見ながら考えた。係長ならどうする？―

青島は、会議出席のため課長が不在なので課長代理に休暇届を出した。

「なんだ？」と課長代理は訊いた。

「急用が来ました。」

「おまえ！ひよつとして……。。」

「その、ひよつとしてかも。」

「おまえだけ行かす訳にはいかん。俺も行く！」

「仕事があるでしょ……。代理！」

「市長の生命が全てだ！」

「そんな古風な！」

「馬鹿いうな！市長は殿様と同じだ！」

押し問答の末、青島青年は無理やり休暇届を代決させた。ミサキ嬢も同じく続いた。青島は、ロッカー室に行き防災服スタイルに整えた。胸にはX市の市

章が縫い付けられていた。

青島青年は、庁舎の正面玄関から出ようとした。車で現地に行くことは不可能だった。同じX市内にある救急病院だ。地理は詳しい。人の知らない小路を通って現地近くまで到達する自信はあった。青島と同じようなことを考えている多くの市職員がいた。青島が、正面玄関から中庭に出た時に、すでに一〇〇人以上の市職員が自主的に休暇届を出して、リーダーの到来を待っていた。

青島が前に進むと誰しもが道をあげた。庁舎のどの窓からも中庭の様子が見えた。何をしようとしているのか市職員なら誰でも理解できた。どこかこの課でも休暇届が、主のいない課長デスクの上に積み上げられていく。男も女も関係なかった。庁舎内に残ったのは、ほぼ管理職だけになった。ほとんどの職員は休暇届を出した。

中庭に集合する職員は、五〇〇人を超えた。青島青年を円の中心にしたように人々は取り巻いていた。誰もが、青島青年の顔を見つめていた。高石救出捜索隊のリーダーとして皆が皆・・・青島青年の実力を評価していた。本当のリーダーは、危急存亡の瞬間に現れる。青島青年以外には考えられない。

青島自身、少しばかり躊躇いながら言った。

「行きましょう！皆さん！市長と秘書課長を救出するために！多くの言葉は必要ないと思います。部局毎に隊列を作ってください。それぞれの隊に連絡要員を選出しておいて下さい。決まり次第、こちらにいるミサキ嬢に報告して下さい。」と青島青年は透き通るような声で言った。

【午前9：20】

救急病院周辺を幾重もの包囲網が敷かれた。この包囲網を破ることは不可能だった。しかし、大阪府警にとっては、包囲したもののこれ以上の打つ手はなかった。膠着状態だった。救急病院近辺のビル会議室を借り上げて、そこに現地对策本部を設置した。そのうちに大阪府警本部長になるであろうという大阪府警のキャリアが、現地の対策本部の責任者となった。最高指揮官といっても現場に精通しているわけではなかった。具体の対策というか戦略、戦術を考察するのは、具体の大阪府警MAATの責任者だった。しかし、これほどの大事件というか大規模な事件に発展していることを考えれば、大阪府警MAATだけでは対応できなかつた。周辺の各警察署の署長連中も対策会議のメンバーとして参集を要請された。

灰色の空からちらちらと粉雪が舞って落ちてきた。

―積りそうだなあ・・・―と久米田は思った。久米田は、捜査車両の陰に寒さ

に震えながら隠れていた。いつ何時、闇組織のメンバーから狙撃されるかも分からなかった。今の久米田の立場は、周辺の警察署の応援部隊の一人に過ぎない。出すぎた真似は出来なかった。警察という階級社会では、一警察官が出来る範囲は狭い。出すぎた真似をするという場合は、警察という枠から抜け出す必要があった。何度も辞表を提出する訳にはいかなかった。

―俺にだって家族がいるし、生活もある……。しかし、浅香小百合からは何とかしてくれ！市長を救う方策を考えよ！という指令がきているしなあ……。おまけに高石を捜索救出するために市長の貢献は絶大だった……。よし！決めたぞ！―と久米田は体を包み込む冷気を振り払いながら想った。久米田には一案があった。念のために、そのための準備依頼を、浅香小百合と白鷺哲男と裕次郎君に携帯メールを送信した。久米田は想った。

―この準備依頼を完全実行するかどうかで、俺の作戦の成否が決まる。しかし、俺は組織人だ。ただの歯車の一つ以下の存在だ。だが、やる時はやる！仁義と人情が最高の哲学だ！―

対策会議では、「突入する」という積極論」と「交渉による解決論」との議論が喧々諤々で行われていた。ある意味では、不毛の議論だった。実践経験のない幹部連中には、建前の議論は構築できても具体のことになると部下任せだった。キャリアが「人質の人命は……。」と発言すると議論は頓挫した。大量の人質が闇組織の手の中にあった。交渉するにしても決定的に不利だった。おそらく海外逃亡を目指すことは予想できた。そのために海外逃走用の飛行機と逃亡用資金を要求してくることは自明だった。しかし、テロリストとは交渉しないという不文律があった。

現地最高指揮官であるキャリアは、会議の出席者にY署の署長が参加していることに気がついた。Y署と言えば、「伝説の警官」久米田の名前が浮かぶ。大和葛城山での花火打ち上げという奇想天外な作戦により金剛山での人質救出とボス逮捕に導いた「伝説の警官」久米田の名前は記憶に新しい。公式な記録では、久米田の活躍を記述したものは残されていない。あの事件は、大阪府警M A A Tを中核とした大阪府警と奈良県警が対応したことになっていた。

キャリアは、延々と続きそうな会議を一旦打ち切った。

【午前9:30】

市庁舎から抜け出した青島青年をリーダーとする五〇〇人の市職員の部隊は、救急病院に向けて歩いた。市庁舎は、ほぼ管理職たちが残った。副市長による対策会議を行っている場合ではなかった。職場が、ほとんど空になったのだ。窓口対応するために管理職たちは、慣れない窓口業務を担当することになった。

副市長みずからが、受付案内にたつて来庁する市民に弁解をするはめになった。多くの市民にとつては、市長のことが心配で堪らないのだ。

「お前たち！何で市長救援に行かないのだ！ボケ！役立たず！臆病者！」と多くの市民は、庁舎内に残っている管理職たちを罵倒した。

中庭から幹線道路に出た五〇〇人の部隊。整然と歩いた。何をしていたのか分からなかったが、青島というリーダーが存在していた。無事に家へ帰れるとは、誰も想ってはいなかった。何かをすることで、この事態解決に向けて努力したい。素朴な気持ちだが、人々を動かしていた。

市職員の大半が、市長救出のために職場離脱したという知らせを受けた町内会長たちが動きだした。町内会長の指示が隣組の面々に届いた。テレビの報道を見ていた市民は、自分の行動が何かの貢献に寄与すると想ったのか、家々の外に飛び出した。男も女もなかった。老いも若きも関係なかった。野次馬でなない・・・明確な意識を持った人々が青島たちの後に続いた。

途中の検問で、機動隊によって前進を妨げられた。半径五km以内の住民たちは避難していた。今の地点は、それよりまだ後方だった。六km地点だろうか。ここを突破しても二重三重の封鎖線があった。前方に完全防備の機動隊員たちがいた。機動隊員たちは訝しい目で、こちらの群衆を見ていた。誰かが、市旗を持ち出していた。市の旗が、冷たい風で揺れていた。数十本の組合旗も揺れていた。日の丸の国旗も揺れていた。どう見ても意味不明の集団だった。青島青年は、機動隊と争う気持ちはなかった。だが、説明しても・・・懇願しても通過できないことも確かだった。彼らには、市民を守るといふ任務があった。

「君たちはいったい何だ！これ以上の立ち入りは危険なため封鎖をしている。ただちに解散して後方に戻りなさい！」と封鎖責任者がハンドマイクでがなりたてた。

五〇〇人すべてを救急病院近辺まで移動することは困難だった。ここを突破しないと前には進めない。青島青年は、各部署の責任者に指示を出した。

「ここを突破します。五〇〇人全員は無理だとしても数十名ぐらいは病院近辺までは到達したいと想っています。一挙に流れ込みます。これは強制しません。法律を遵守する地方公務員がすることではありませんが、非常時ですので無茶をします。公務執行妨害ということで逮捕されるでしょう。怪我人も出るかも知れませんが、それでもやります？皆さん！」と青島は言った。

「なんだか面白そう！」と若い女性職員が言った。

「やるぞ！青島！」と中年職員。

「機動隊との対決！一度やってみたかった！」と一九七〇年前後に青春時代を送った定年前職員は大声で答えた。

青島指揮官は、隊列の組み直しを指示した。最前列の部隊は、ミサキ嬢を先頭にした女性職員部隊。綺麗どころを揃えた妖艶部隊だ。これが第一陣、封鎖体制をとる検問に向けて「突入（？）」する。第二陣は、比較的高齢な職員。老練な話術で息子ほどの若い機動隊員を煙に巻くだろうという楽観的な戦術だった。おそらく機動隊員は、これら軟弱部隊には実力行使しないであろうという予想である。ましてや、多くの市民が整然と青島たちの市職員を後方支援するような陣形で見守っていた。ある若い母親は、乳飲み子を抱いて屹立していた。ある高齢者夫婦は、孫の手をひいて見守っていた。衆人環視の状態だった。

第一陣と第二陣が機動隊と衝突（？）して、警備の隙間が出現した瞬間に後続の中核部隊の若者・中堅職員部隊が突破する作戦である。そして、最後の目的場所まで行くのは、青島指揮官と労組青年部の連中だ。

いつのまにか・・・カリスマ的な雰囲気を漂わす青島指揮官は言った。

「突破した職員は、病院近辺にある運送会社の倉庫に集合してください。あの倉庫です。運送会社社長の了解を取っています。器材やトラックは自由に使っていていいとの許可ももらっています。この社長というのは、皆さんもご承知のように市長の後援会長です。多くの皆さまには、ある意味！捨石になっていただきます。ただ傍観するだけの野次馬はいりません。市長を救出するには、通常のやり方では解決できません。」

「分かった！どうしても青島をそこに送り届ける必要があるぞ！みんな！」と叫んでいるのは、青島が所属する課の課長代理だった。

【午前9：45】

その時だった。「ズドーン！ズドーン！」と連続した音が冷たい大気を振動させて聞こえてきた。ダム工事現場で良く聴く爆発音だった。どうやらダイナマイトのようだ。

青島にすれば、この事態となるまでに目的場所に到達したかった。青島の予想で言えば、久米田たちが動くと考えていた。久米田たちと合流し、X市の職員としての気概を示しておきたかった。

これでは、五〇〇人の部隊に動揺が起ると想った。だが、誰ひとり逃げ出す市職員はいなかった。老いも若きも、男も女も・・・それぞれの顔には自信が漲っていた。誰もが、青島指揮官に全幅の信頼を置いていた。誰もが想った

ことであろう……。青島青年の背後から後光が射すようなオーラ (aura) のようなものが感じられた。青島指揮官の人体から発散されるエネルギーは、仲間である市職員に勇気と行動力の魂を与えた……。かのようだった。

青島自身も意識していなかった潜在的な能力が今、開花していた。

青島は想った。普通の市職員が、「伝説のX市職員」になると想った。

―死傷者だけは出さない。怪我人を出さない作戦を……。―と青島は決意した。

救急病院の屋上を占拠していた闇組織の戦闘部隊が、威嚇行動として持ち込んだダイナマイトを投げ落としたものだった。これによって駐車場に停めてあった幾台かの自動車は破壊された。その中に、市長の公用車も含まれていた。燃料タンクのガソリンに引火したのか爆発とともに大きな火柱があがった。公用車は、燃え上がり無残な光景は包囲する警察関係者にも一定の動揺を与えた。灰色の空から降り落ちる雪が激しくなってくる中で、赤々と燃える幾台かの自動車。これは、すでに戦場であることを物語っていた。

市長は、薄暗い地下室の中で不吉な予感を感じた。何かが爆発したようだった。鈍い振動が地下室にも伝わってきた。

―そろそろ決断の時だ。無駄飯を食ってきたわけではない。人質になっている市民や病院職員を救うのは俺だ！―と市長は自分自身を鼓舞激励した。

市長はおもむろに立ち上がった。そして、周囲を見回した。今まで経験したことがない恐怖で委縮した人々の顔が確認できた。頭を両膝の間に埋めながら泣いている市民もいた。秘書課長は、先ほどから何も語らなかつた。言葉を発する気力も萎えたようだった。

市長は、出口近くで人質を監視している闇組織の一人に近づいた。

「座つてろ！」と屈強な男は市長に向って脅しつけた。男の散弾銃の銃口は市長に向けられた。物怖じしない市長は言った。

「君たちのグループの責任者と話をしたい！私は、このX市の市長だ！取次をお願いしたい！」

「なんだと！ひっこんでろ！ボスはお忙しいのだ！」と叫びながら散弾銃を市長の脇腹に押し付けた。こんな脅しに屈する市長ではなかつた。某私大の応援団に所属していたプライドからも動揺する訳にはいかない。それに俺は市長だ！という矜持が、恐怖を感じさせなかつた。威風堂々とした市長の態度に闇組織の監視人は、少しばかり驚いた。

―こいつには骨がある！大した度胸だ！―と想った。

「大したタマじゃないか！貴様！ついてこい！」と監視人は言った。

市長は、秘書課長に同行を促した。

「秘書課長！ついてこい！我ら二人で歴史をつくるのだ！公僕の戦士になるのだ！」

蹲ったままの秘書課長は、市長の声を聴いて勇気を奮い起した。起ちあがる時に、足が絡まったけども倒れなかった。周りの人質の中には、ボコボコにされた四人の警官もいた。四人の警官は無理に傷ついた体を起こして、市長と秘書課長に向って背筋を伸ばし最上級の敬礼をした。他の人質たちも市長と秘書課長に向って合掌した。誰もパニック状態には至っていない。

市長は想った。この事態を聴いて、おそらく市職員が多くが何らかの行動をおこすだろう。高石の搜索救助隊を派遣した時から、市職員の意識は質的变化を遂げている。危機管理意識だけでなく、具体の危機解決能力を持ち始めているはずだ。

予想される東南海地震に備えて防災体制を構築する必要があった。生駒断層による地震の確率は、極めて低いが神戸淡路の地震も確率は低かった。ということは、いつ起こってもおかしくないのだ。今回のテロにしても誰が予想しただろうか。

―俺は、公僕の戦士となる。高石係長のことを公僕の戦士だ！と言って二〇〇人の搜索隊を楨尾山に派遣した。今度は俺の番だ。たとえこの命が消えようと・・・歴史に名が残るだろう！密かに俺の後継者として考えている青島青年が動くだろう。あいつには、自分では気づいてはいないが指導者としてのカリスマ性がある。無茶するなよ！青島！―

【午前10:00】

市長は、散弾銃で小突かれながら救急病院の五階にある院長室に連れていかれた。部屋に入ると、大きなデスクの向こう側にボスであるタケウチカイドウが高級な革張りの椅子に腰を沈めていた。目の前のデスク上には、スコップ付のライフル銃が無造作に置かれていた。

市長は想った。

―この院長室のデスクと椅子は、俺の市長室のものより立派だ！財政立て直しのポイントはここにあるぞ！贅沢は禁物だ！―

この時点では、まだ余裕があった。市長は歪んだネクタイを直した。視線をまっすぐタケウチカイドウに向けた。タケウチカイドウは、市長の様子を見て鼻で笑った。

「そこに座れ！」と高飛車にタケウチカイドウは言い放った。市長は、眼前の粗末なパイプ椅子を無視した。

―こんな椅子に座るぐらいなら立っているほうが、まだ威厳が保つことができ

るぞ！——と市長は思った。

市長とタケウチカイドウとの交渉が始まった。

「俺は、この市長である。人質としては充分な価値がある。今ここには、あまりにも多い人質がいる。入院患者も多数だ。人質は俺だけにして、他の無関係な人々は解放していただきたい！」と市長は、タケウチカイドウを真っ直ぐに見つめて言った。少しばかり膝が震えたが、必死に堪えた。

「・・・」

タケウチカイドウは思った。

「ここにも変な奴がいる。別に名乗る必要はないはずだ。おとなしくしていれば、一般の人質として、そのうちに解放されたものの・・・通常なら自分の命が一番で、他者まで気が回らない。公務員というのは、自分勝手なボンクラばかりだと想っていたが認識を改める必要がありそうだ。——

「そうか！・・・。」とタケウチカイドウは一言だけ発した。

「俺の命はどうでもいい！解放してくれ！」と市長は強い声で言った。この発言がタケウチカイドウの逆鱗に触れたのか、デスク上のライフルに手を伸ばすと、おもむろにトリガーに指をかけた。

「バーン！！」という銃声が院長室に響き渡った。市長は一瞬！目を瞑った。撃たれたと想った。しかしどこにも痛みは感じなかった。

「ギャツ！」

後方から何とも名状しがたい呻き声が聞こえた。振り返って見ると、秘書課長の右足から血が噴き出していた。体を支え切れない秘書課長は、捻じれるように倒れた。

「何をすんだ！」と市長は叫んだ。市長の怒りは瞬時に沸騰した。市長の体は自然とタケウチカイドウに向って突進した。数歩ばかり前進したところで、後頭部に激痛を感じた。散弾銃の銃床で殴打されたようだ。体が崩れていくのが分かった。倒れた。床の敷物に顔を埋めながら想った。

「なんと贅沢な敷物を使ってやがるのだ！あのポケ院長め！」と想った。意識が消滅していく・・・。

「俺は死ぬのか・・・。」と市長は思った。

銃声は、救急病院内でも鳴り響いた。地下室に閉じ込められた人質たちにも聴こえた。一発の銃声は、人々を緊張の渦中に突き落した。すすり泣く声があつちこつちと聴こえてきた。誰もが市長が撃たれたと認識した。この銃声は、救急病院を包囲する警察関係者にも届いた。久米田にも聴こえた。

「何かあったのか？無差別な殺戮が始まったのか？」と久米田は思った。最高

指揮官のキャリアにもこの銃声は聴こえた。

―病院内で不測の事態が惹起したのか？―とキャリアは思った。

青島青年の鼓膜にも病院の方角から、かすかに大気を振動させて音が伝わった。銃声と分かった。

白鷺と裕次郎君は、久米田の指示に基づいて動いていた。指示の内容は、「トラックを防弾仕様に改造せよ！」とのことだった。白鷺一族の中に運送会社の親戚がいた。白鷺は、この親戚の社長に事情を説明した。廃車予定の大型トラックを一〇台あまり提供してくれることになった。

社長は、肥った体には似つかわしくないか細い声で言った。

「今日は裕次郎君と一緒になんです。裕次郎君も立派になって！分かりましたよ。坊ちゃんの頼みなら、何でもしますよ！ただし、うちところの社名を消さないでね。いい宣伝になるぞ！シラサギ運送（株）」と。

この社長はすでに隠居してもいくらいの高齢だが、死ぬまで現役だ！と常々言っていた。なんだか面白いことが始まるようなので、ウキウキしていた。

白鷺は、すぐに同族の工作機械を製造している別の親戚の社長にも連絡をした。「すぐに、資材と腕の良い旋盤技術者をできるだけ多く派遣していただきたい」と。

「坊ちゃんのご依頼であれば、全社員総出で対応します。ところで、このことは今起こっている病院での人質事件と関連しているのですか？」とこの親戚の社長は訊いた。

「そのとおりです。おそらく突入する装甲車みたいなものを製作することになります。」と白鷺は言った。

「それは面白い！時間がないので全社員をそちらの運送会社に派遣します。坊ちゃん！」と社長はウキウキした声で言った。どうも白鷺一族のDNAは世の中の出来事に対して興味本位でスキャンダラスなことには目がないようだ。

浅香小百合嬢は、久米田の指示で動いた。小百合嬢が運転する車は、猛スピードで駆けた。携帯電話で説明できることではない。目的地は、久米田の伯父貴の自宅だった。この久米田の伯父貴である人物も大和葛城山での花火作戦の際には、重要な役割を果たしていた。

―私は、これらの人々の勇気と知恵で救出された。―と小百合嬢は感謝の気持ちを想い起した。門前に車を停めて、庭を小走りで抜けた。高台にある家の庭に植えられた樹木に少しばかりの雪が積もりかけていた。すでに久米田の伯父貴は、玄関前で寒さに震えながら待っていた。久米田の伯父貴は、小百合嬢をにこやかな笑顔で迎えた。

挨拶もそこそこに小百合嬢は、久米田の伯父貴に指示の内容を説明した。

「分かった！すぐに手配をする。心配することはない。あの市長のことだから自ら活路を見出すよ。」と久米田の伯父貴は言った。

小百合嬢にとって市長は高石の命の恩人となる。スナックの常連ではあるが、北新地時代からの付き合いだ。できる限りのことをして救出する義務と責任があると想った。

―それにしてもこんな時に雪が降ってくるなんて・・・―と小百合嬢は灰色の空を見ながら不安を感じた。

【午前10:15】

市長は後頭部の激痛で意識が覚醒した。うつすらとした光景が、徐々に鮮明なものとなってきた。気がつけばパイプ椅子にがんじがらめに縛り付けられていた。胸元を見れば、ダイナマイトが何十本も括りつけられていた。何やら細かい電線が目に入った。少しでも動けば爆発するのではないかという恐怖が胸を締め付けた。

「気がついたか！市長さんよ！お前の要望は聴いてやろう。人質はお前だけがいい！」と言う声が背後から聴こえてきた。タケウチカイドウの声だった。

「秘書課長を撃つたな！許さん！」

「心配するな、かすり傷だ。お前を試したのだ。あの野郎は、地下室におる。

手当を受けている。」

「試した？」

「そうだ！」

「何故だ？」

「心意気をテストした。恐怖で命乞いをするかどうか確認したかったのだ。」

「何を言っている！怖いのに決まっているだろ！」

「お前はテストに合格した。お前以外の人質は速やかに解放する。すでに子分どもに指示した。」

大阪府警の最高指揮官であるキャリアが籠る指揮車の電話にタケウチカイドウより通電が入った。

「俺だ！責任者を出せ！」といきなりタケウチカイドウは言った。このような不躰なしゃべり方をする人間は、警察関係者にはいない。それに、この電話番号は外部の人間には知らされていない。不審を感じた通信担当者は上司の顔を見た。そして、言った。

「責任者？」

「馬鹿か！お前！」とタケウチカイドウは相手を罵った。

「・・・」

どうやら闇組織のボスだと理解した通信担当者は、不満な顔つきをしながらキャリアと電話を代わった。

「どうやら、犯人側のボスのようです。」

キャリアは緊張を隠さずに言った。

「もしもし・・・」

「俺だ！今から二時間ほど休戦だ。市長以外の人質を解放する。妙な真似をすれば市長の命は保証できないと想え！」と高飛車に言うなり電話は一方的に遮断された。

キャリアにすれば、すっかりと闇組織のペースで自分たちが翻弄されていることにイライラしてきた。

「焦りは禁物だ！交渉人担当は何をしているのだ！対策会議をしても現場に疎い連中の議論は空理空論で事態解決の対策は出てこない。こんなバカなことがあるか！おまけに後方では、訳のわからない連中が封鎖線を突破しようとしているという報告もある。なんだ！これは！――」

青島の作戦どおりに動いた五〇〇人の突入部隊。まず女性職員で構成される妖艶部隊が突入（？）した。若い女性職員は、イケメンの機動隊員を発見すると我さきに取り巻いた。サインをねだるものもおれば、携帯メールのアドレスをしつこく訊くものもいた。定年前の職員部隊は、親子ほどの年の差を利用して息子や娘に接するように取り巻いた。

「市長救出こそ公務なのだ！殿様の命あつての我々だ！」と言って若い機動隊員を困らせた。明らかに公務執行を妨げる行為だった。だが、実力行使することとはできなかった。彼我の体力差は歴然だった。これら「最強」の軟弱部隊への対応は困難だった。機動隊の封鎖線の一角に隙ができたことを確認した青島指揮官は、「精鋭」部隊に突入を指示した。白地に市章を期した市旗を先頭に、赤い組合旗が続く・・・そして日の丸も。青島の指示を受けた何百の市職員は雪崩のように奇声を発して突進した。機動隊員による体当たり（市職員が勝手にぶつかりに行った。「おしくらまんじゅう、押されて泣くな」という掛け声とともに、勢いをつけて機動隊員を押し込んだり、引っ張ったりした。）で何人かの市職員は転倒し、軽微な負傷をした。転倒した市職員は、大した怪我でもないのに転げ回り「人殺し！人殺し！」と泣き叫んで機動隊員を翻弄した。詭弁を弄することにたけた市職員は、日頃のクレーム対応で疲れきっていたこともあって、この鬱憤を機動隊員の責任者にぶつけた。口ぐちに捕獲された市職員は、叫んだ！

「俺達は、この市の職員だ！お前らこそ！公務執行妨害だ！税金泥棒！！」と食ってかかった。

「税金泥棒とはなんだ！この税金泥棒め！俺達は命がけだ！」と機動隊の責任者は叫ぶ！

「何を言う！俺達の市長は俺達が救う！俺達も命がけだ！」

両者は一步も譲らなかつた。モンスタークレーマーに変化（へんげ）した役所の人間ほど始末に負えないものはない。口角泡を飛ばす状況はあっちこちで起こつた。

第一次、第二次、第三次の封鎖線を突き抜けた生き残りは結構多かつた。あゝるものは藪の中に身を隠し、またあるものは民家の軒先で洗濯物に紛れ、息を殺して隠れた。青島指揮官は、ザックから「災害用トランシーバー」を引っ張りだすと各班の生き残り人数の報告を待った。各班からの報告があつた。総勢五〇人ほどが突破したようだ。青島指揮官は、目的の運送会社までの到達ルートを示した。

「農業用水路を利用してください。銃撃の可能性があります。できるだけ身を低くしてください。幸いにして水は流れていません。皆様の幸運を祈ります！！」

【午前10:30】

湖論暮刑事は、灰色の空を見ていた。横殴りの雪が吹き付けていた。大阪平野にしては、珍しい雪だ。確か五年ほど前の二月にも大雪が降つた記憶が想起こされた。

「どうもこの頃の天候が異常だな・・・昨夏の猛暑といい、そしてこの雪・・・。難しいことは分からないがラニーニャ現象と言うらしい。地球が壊れつつあるのだから・・・。」

湖論暮刑事は、今の事態を冷静に振り返つた。たとえ自分自身が、救急車に同乗したとしてもこの状況になつたであろう。四人の警官は、今人質となつてゐる。安否が心配だ。

タケウチカイドウの作戦を見破れなかつたことが悔やまれた。自分自身は、捜査という点では、プロとしての自負があつた。多少の武道の心得はあるが、いわゆる文系だ。肉体的に勝負するタイプではない。久米田のような超人的な体力はない。

「俺は捜査官だ！知恵と勘を働かして実像に迫って行くのが・・・俺のやり方だ！」

この事態では、俺の出番はない。しかし、この事態を根本的に打開する方法は、今の警察力では困難だ。相手の出方次第だが、相当に難儀な要求を突きつ

けられるだろう。海外逃亡しか闇組織が生き延びる道はないだろう。

そんなことを考えながら対策会議場として借り上げたビルデスクに腰を掛けながら想った。窓からは、救急病院が見えた。闇組織からの狙撃を避けるためブラインドを降ろしていた。胸元に入れてある携帯電話が鳴った。久米田からだった。

「何か手はあるか？湖論暮！」と久米田は言った。その口調は、すでに久米田なりの打開策を考えてあるという感触だった。

「俺にはないぞ！久米田！何かをおっぱじめるなら俺にも参加させてくれ・・・」

「作戦はあるが、無茶な作戦だ！警察がすることじゃない！」

「また辞表を出すのか！」

「そうなるだろうね。市長の自己犠牲・・・英雄的行為で、市長以外の人質の解放が始まっている。先ほど青島から携帯電話をもらったが、X市の命知らずの市職員が五〇名ほど運送会社の建物に集結したとのことだ。」

「あの封鎖線を破ってきたのか・・・」

「そうだ！大した若者だ！市長を救うのは、俺たちだ！と言って五〇〇人ほどの職員が休暇届を出したとのことだ。その中心にいるのが青島だ。」

「役場が空っぽだな・・・」

「市長も我々が攻めやすいようにと、人質として一人残ることを選択した。これは、タケウチカイドウもわかった上でのことだと想う。」

「タケウチカイドウの性格は、常人とは違うところがある。あえて不利だと想っても感情で動くところがある。」

「そこだね。市長はその辺のところを計算したかも・・・。市長は死ぬ気だ！」

「死なせては意味がない。」

「そうだ！高石救出の恩人だからな・・・。」

「いずれにしても、動く時は俺にも声をかけろよ！」

「ああっ・・・そのつもりだ！」

【午前10:40】

救急病院の正面玄関が開け放たれて、ストレッチャーに乗せられた患者達が医師などの医療スタッフに守られてでてきた。横殴りの雪が情け容赦なく吹き付けた。誰もが寒さに震えながら、少しでも早く、少しでも病院から遠く離れたいという気持ちでいっぱいだった。

二時間の休戦協定とはいうものの闇組織からの一方的な申し入れであり、警察が何か手を打った成果ではなかった。

現場の最高指揮官であるキャリアは、複雑な想いだった。患者や医療関係者

が解放されることは、事態改善という点では大きな成果だ。しかし、これは俺の努力の成果ではない。人質として市長が残っている。市長は死ぬ気だ。

人質解放の最後は、秘書課長だった。車椅子に乗せられて出てきた。寒さに震えながら顔をクシャクシャにして泣いていた。右足の痛みよりも、市長を一人残してきたという心の痛みの方が秘書課長を責めていた。秘書課長としての職責が果たされていないということで、慚愧の涙を流していた。

解放された患者たちは、用意された救急車に乗せられ近隣の病院へと搬送された。

秘書課長は最高指揮官のキャリアのもとに連れていかれた。状況把握のためだ。キャリアは、秘書課長に様々な質問をした。秘書課長の持つ情報ではなかなか判断できなかった。

次に、解放された四人の警官たちにも聴取した。さすが、警官だった。事態を客観的に把握していた。闇組織の武装の程度や所持している銃の特徴、人数などが聞き取れた。

キャリアは、四人の警官たちの労をねぎらった。病院で手当をするように指示した。しかし、これら四人の警官たちは、病院で手当をすることを拒否した。

キャリアは、これら四人の警官たちの態度を意外だと想った。違和感を覚えた。

—この俺に逆らうのか?—

キャリアは、腹立たしく言った。

「何故だ!」

「このままで、病院へ行くことはできません。と四人の警官たちの最年長の警官が言った。

「命令だ!」

「命令とあらば、従いますが……。」

キャリアは、これらの警官たちの眼が異常に光輝いているのを感じた。鋭い視線をまともに受け止めることができなかった。鬼気迫るものがあった。

「わかった……。待機しておいてくれ!」とキャリアは言った。

—俺はキャリアだ。しかし、気迫に負けた。こいつらは、死と隣り合わせの正義を貫いてきた。負けだな……。—

四人の警官たちは解放される時に、捜査車両の陰で寒さに震えながら携帯電話を使って誰かと連絡とっている様子の久米田を見た。あの「伝説の警官」久米田の姿を見た四人の警官たちは、確信した。

―あいつがきつと動く。とてつもない方法で久米田が動く。病院などで治療している暇はない！俺たちにもできることがあるはずだ。―

キャリアは、Y署の署長を密かに呼んだ。捜査指揮車の中で二人きりになった。キャリアは署長に質問をした。

「君とこの久米田巡査は、今なにをしている？」

いきなり久米田のことを訊かれた署長は狼狽した。

「今、包囲する任務についていますが・・・」

と署長は月並みな答えをした。

「実は困っている。手の打ち所がないのだ。このまま行けば、海外逃亡を手助けすることになる。テロリストとは交渉しないのが原則だ。交渉担当は、とうに匙を投げている。金剛山でのことがあるから、引き延ばし目当ての交渉など無意味だという見解だ。いっそのこと人質を見捨てて突入することになるかも知れない。しかし、日本の警察はロシアの警察ではない。あの劇場立てこもりで、数多くの人質が死んだ。もつとも救出された人間も多いのだが・・・。」

「ところで、何故久米田のことをお聞きになるのですか？」

「私がなにもしないということ、彼がすでに動いている気配が感じられる。あの得体の知れない市職員の五〇名ほどが、病院近くの運送会社の建物に入ったという情報がある。あの封鎖線を破つてだ。」

「彼が動く時は、辞表を提出します。そのときは止めますか。彼には私心が無い。階級も巡査で実力も知恵もあるのに出世しようとはしない。交番勤務一筋の地域課所属です。彼を異動させようとするならば、地域の住民がむしろ旗を振りかざして署に馳せ参じるほど地域に根をはっています。Y署になくてはならない名物警官です。そして、伝説の警官です。あの金剛山での人質救出劇は、彼と彼の仲間がやったものです。彼を慕う警官は、数多い。今回も、久米田は動きます。これは止められない。おそらく彼に続く警官たちの辞表願いの書類が山積みとなるでしょう。この気持ちが変わりませんか。ノンキャリアの正義の心がわかりますか？実は、私もわからない。いずれ私もY署を卒業してキャリアの階段を昇っていく身です。あなたと同じですよ・・・。」とY署の署長は言った。少しばかり長広舌だったと想った。

「・・・」

「我々のできることは、彼の行動の邪魔をしないことです。失敗すれば、我々が責任をとればいいのです。彼が動きやすいようにすることです。なにもしないことになりませうけどね。」

「辞表はどうするのだ？」

「成功しても失敗しても辞表など最初から受け取っていないということです。彼と彼らは、辞表を出すことでケジメをつけているのです。何かあれば、個人の暴走だと言うことで、責任を全部かぶるつもりです。そのことによって既存の警察組織を守るためですよ。成功したとしても名誉を求めない。この点は、最近やっと理解できるようになってきましたが・・・。」とY署の署長は感慨を込めて言った。

「ノンキャリアの正義か・・・。」とキャリアは呟いた。

二時間という一方的な休戦は終わった。今、救急病院にいるのは人質の市長と闇組織のボス、タケウチカイドウたち数十名ほどだ。

この二時間で周囲の風景は変わった。一面が白い雪景色だ。田畑も道路も数センチの積雪だ。大阪平野一面が白い大地に変貌した。うっすらと影のような生駒山、二上山、大和葛城山、金剛山が見えた。黒い雪雲が金剛山の頂きを取り巻いていた。南方面の岩湧山、和泉葛城山も雪を被っていた。白黒の世界が広がっているようだった。

久米田は思った。

—水墨画のような景色だ。—と。

【午前12:40】

灰色の空から宙を舞うように大粒の雪が大阪平野に降り注いでいた。白い世界が静寂を生み出していた。救急病院を包囲する捜査車両や特殊車両の車上に雪が堆積されていく。包囲する警察官の頭や肩にも雪が積もっていた。除々に寒さと疲労感が警官達の心と体に蓄積されていく。病院の正面玄関にある桜の木は、あたかも白い蕾をつけたようだった。

久米田は、腕組みをしながら考え込んでいた。

—いつまでもこのような膠着状態を続ける訳にはいかない。市長の疲労も極限だろう。—

久米田の胸ポケットにある携帯電話が振動した。浅香小百合からのメールだった。メールの内容は簡潔だった。「準備OK!」とのことだ。同時に、青島青年からのメールも届いた。「指示を願う!」とのことだ。久米田は、防寒服に包まれた懐の中で携帯電話を隠しながらメールを送信した。任務中に携帯電話をいじくっているのを目撃されると職務専念義務違反だと推察されて懲罰を受けしてしまうのを恐れた。返信メールの内容は、「無謀なことはするな! 出番はあるはずだ! 安心しろ!」だった。

久米田は白鷺たちに依頼した内容を考えた。白鷺には、防弾仕様の装甲車もどきの特殊車両の製作を依頼した。出来ることなら使いたくない代物だった。

警察関係にも特殊車両はあった。小規模な個人的な立てこもりなどでは有効かもしれないが、このような大規模な犯罪者集団と対峙しようと想えば想定外の車両が必要だった。出来れば、自衛隊から戦車を調達出来ればと想った。

—これは戦争だ！—と久米田は寒さに震えながら想った。

青島たち市職員五〇名ほどが、市長の後援会会長が経営する運送会社に籠っていた。運送会社の社長たち数人ほどが避難命令に逆らって事務所に滞在していた。ちょうどこの位置は、救急病院からすれば死角になっていた。救急病院には、張り巡らされた農業用水路を利用すれば楽に到達できた。

青島指揮官は、班体制にするために人数把握を行った。青島を入れて四七名だった。この四七名の中には、ミサキ嬢も含まれていた。五人体制で九班のグループに編成し直した。ミサキ嬢は、副指揮官として青島を補佐することになった。

久米田からの具体的指示は、まだなかった。

—きつと出番は、あるはずだ・・・—と青島指揮官は、体にまとわりつくような不安をふり払った。傍らには、凜とした様子で事務所のパソコンを起動させて参加者名簿を作成しているミサキ嬢がいた。

運送会社に残留する社員たちがカップラーメンを作ってくれた。ここにいる限りは、暖もとれて寒さに震えることはなかった。包囲する警官たちと比べると破格の待遇と言えた。

—俺を入れて四七名か・・・。これは忠臣蔵だなあ・・・。—と青島指揮官はカップラーメンのスープを啜りながら想った。

市長は、相も変わらずパイプ椅子にがんじがらめに縛り付けられていた。身動きがとれない状態だ。体全体に自爆テロ犯のようにダイナマイトが括りつけられていた。

—秘書課長には、申しわけなかった。巻き込むようなことになってしまったなあ。しかし、多くの無辜な人々が解放されたことは喜ばしいことだ。命は欲しいが、見苦しい振る舞いだけはしたくない。俺は、市長だ！—と何度も市長は心境を述べた。市長は、窓際に座らされていた。ブラインドが開け放たれていた。外部の様子がよく分かった。一面真っ白な世界が眼前にあった。田畑の畝に積る雪は、もう五cmほどになるであろうか。田畑に積る雪は、独特の模様を大地に形成していた。警察関係の車両も一般車両と識別できないほど雪が降り積もっていた。かろうじて車両の横腹に印字された「大阪府警」の字が読み取れた。動くものはなかった。静かな光景だった。空を見上げると大粒の雪が舞い落ちるように降っていた。

―外は寒いだらうな……。ご苦労様……。―と市長は思った。

いずれ高級官僚として前途が約束されているキャリアは、指揮車のなかで一人だった。誰にも邪魔されなくなかったので他の関係者を外に放り出した。キャリアは孤独だった。現場の指揮を他の者に任せ自分は追認するだけでいいはずだった。しかし、自分には他者にもないものがあると想った。自負だ。俺には理想があった。正義の実現だ。俺なりの正義感があった。

―何もしないと言うことは、失敗しないと言うことだ。―そのことによって俺は無傷の経歴で高級官僚として出世階段を昇っていく。

―ノンキャリアの正義か！―

このキャリアは決断した。突入することによって人質を救出し、犯罪者集団を逮捕することを。今の状態では、普通の知恵では打開できない。キャリアは躊躇うことなく携帯電話を尻ポケットから取り出すとY署の署長から訊きだしていた携帯電話の番号を一字一字力強くプッシュした。

久米田の携帯電話が振動した。画面をみると登録されていない番号からの着信だった。久米田は訝しい想いを抱きながら電話に出た。

「Y署所属の久米田巡查か？」

「そうです。どちら様ですか？」

「ここの現場を任されている大阪府警の最高責任者だ！」

「いま取り込んでいるんですがね……。」

「……」

「電話切りますよ！任務中なので。」

「待て！相談がある！」

「相談？」

「この事態を打開したい！指揮車に来てくれ！」

「離脱するのは、現場責任者の許可が要ります。指揮系統を乱さないで下さい。」

勝手な行動は戦線離脱です。」

「俺は、最高指揮官だ！」

「どなたか知りませんが、職務中なので切ります！」

久米田の対応は、けんもほろろだった。キャリアの高慢なプライドは瓦解した。キャリアは、無線連絡で最前線の久米田の上司にあたる警官に連絡を取った。

「今すぐに久米田巡查を指揮車に連行しろ！」とキャリアはいらついた口調で命令した。しばらくすると最前線の責任者から無線連絡が入った。

「久米田巡査は、拒否しています。命令系統を無視した指令には従えないとのことです。本官も同意見です。末端の巡査が呼ばれる筋合いはないとかたくなに拒否しています。無理に連れていくと同僚の警官が負傷する可能性があります。もつとも久米田巡査を確保できる屈強な警官はおりませんが……。」とのことだ。この無縁は、すべての警察関係者が聴いていた。このことによって久米田が動くかも知れないという噂が一瞬の間に包囲している警官たちに広がった。この噂は、寒さに震えながら包囲している警官たちを鼓舞激励した。

—あの伝説の警官……久米田が、動く！—

キャリアは不用意にも無縁を使用したことを後悔した。ノンキャリアとキャリアの間にある溝を感じた。久米田にすれば、キャリアもノンキャリアもないことは自明だった。久米田自身は、自分のことをノンキャリアだという自覚はない。一生涯、駐在警官であることが久米田の誇りだった。

キャリアは、ただのノンキャリアでない久米田巡査のことを考えた。伝説の警官との風聞がある久米田巡査のことを考えた。相手の主張はもつともだ。

—最高指揮官の俺が、末端の兵隊に連絡を取るといふのは筋違いだ。—とキャリアは想った。キャリアはここでも間違いを犯した。末端の警官を兵隊呼びわりのしたことだ。この誤りについては、すぐに気がついた。キャリアとしての悲しい習性だった。高慢ちきなプライドを捨てる必要があった。キャリアは最近読んだ書物のことを想起した。

角川文庫の「捜査指揮」という書物だ。著者は元警察庁刑事局長・警視庁副総監・元兵庫県警察本部長などを歴任してきた岡田薫だ。一気に読んだ。為になることが多く書かれていた。

—この今の現場は、俺にとっては正念場だ。俺の今後の経歴などは問題外だ。大事なことは、人質の救出と犯人逮捕だ。俺自身の魂の問題だ。—

キャリアは、指揮車から出た。身を震わすほどの寒風がキャリアの細い体を包み込んだ。あまりの寒さで身が縮まった。包囲する多くの警官たちは、寒さに震えながら車両の陰に身を潜ませていた。肌を刺すような寒さだ。

—俺はヌクヌクと暖かい車両の中で指揮をしていたのか……。—とキャリアは自嘲するような薄笑いをした。

包囲する警官たちの誰しもが、雪を被っていた。寒さで顔をなくしている若い警官もいた。しかし、それぞれの眼光は鋭く熱かった。不平を言うものは、誰ひとりいなかった。

キャリアは、体を屈めながら包囲網の最前線に向って歩いた。車両の陰に蹲っている若い警官たちが立ちあがって敬礼をしようとした。キャリアは、大きい声で怒鳴るように言った。

「動くな！撃たれるぞ！」

最高指揮官を目にとめたY署の署長は、仁王立ちになってキャリアの行く手をふさいだ。

「どこに行くのですか？狙撃されますよ！」とY署の署長は心配そうに言った。

高石は身なりを整えた。妻が用意した防寒服のフードをすっぽりと頭からかぶった。それに大きめの白いマスクをした。傍らに介護する妻の存在がなければ、どうみても不審者だ。エレベーターで出会った看護師が不思議そうな表情をしていた。妻の案内で病院の裏口に出た。大阪平野にしては珍しいほどの大粒の雪が降っていた。衣服に付いた雪を観察すれば結晶なるものがはつきりと識別できた。裏口の駐車スペースに裕次郎君が運転するRV車が待機していた。助手席に座っていた白鷺が、ドアを開けて車から降りると高石を手招きした。嬉しそうな顔をしていた。裕次郎君も笑みを浮かべて何か言いたそうであった。「高石！出動だ！」と白鷺は、珍しく張りつめた声で言った。

松葉杖をしっかりと掴んで歩いた。数歩ほど歩いて、振り返って妻を見た。心配そうな視線を返してきた。

「すまない・・・」と高石は、妻の視線を受けて想った。

白鷺のサポートで、後部座席に乗った。松葉杖を隣の座席に置いた。まじまじと松葉杖を凝視した。様々なシーンが高石の脳裏によみがえってきた。

「命の恩人だ！市長を無事に救出しなければ・・・俺は今、出来ることをする。」

病院から脱走した高石は、白鷺たちと共に行動した。青島からは、逐一メールが届いていた。

「どうやら、運送会社の社屋に到達したようだ。人質は、市長のみか・・・これからだ！青島！」と高石は、この間に急成長した部下を頼もしく想った。

高石と同じ探偵志望だが、青島には今まで潜在化されていた能力が開花していた。

「あの強力なりーダーシップは畏怖すら感じる。せこいペット搜索探偵よりはるかに偉大だ。」

白鷺に与えられた任務は、防弾仕様の特殊車両を製作することだ。このために関連する白鷺一族の会社を回った。病院を脱走して数時間が経過していた。これ以外にも久米田から指示されていることもあるようだ。小百合嬢も久米田の指示で動いているとのことだ。こちらの準備は整ったと連絡が入っていた。

高石は、久米田の壮大な作戦をイメージした。

「これは、戦争だな・・・。敵は数十名の武装した闇組織。爆発物まで用意し

ているとのことだ。死傷者が出なければ良いが……。久米田のことだから、その辺は配慮しているはずだ。——と高石は、心の奥深くから湧き出してくる悲壮感を打ち消した。

湖論暮刑事は、捜査車両から流れる最高指揮官の無線内容を聴いた。
—なんだ！これは……。——と湖論暮刑事は想った。

体にまとわり着いた雪を払って、遮蔽物の隙間から覗き見た。遠目に、最高指揮官と想われるキャリアが指揮車から飛び出し、包囲陣の先端に歩き出しているのが見えた。キャリアの前進を遮るような様子でY署の署長が立ちはだかっていた。

—どちらも優秀なキャリアじゃないか……。——

湖論暮刑事は、防寒服の下に着用している防弾ベストが重く感じられた。何とも言えない寒さが、身を引きちぎる。何百という警官たちが、あたかも雪に埋もれているようだった。吐く息が白い。包囲する警官たちは、いざという時のために手をこすりながら、指先が凍えないように保護していた。そして、あの解放された四人の警官たちも寒さをこらえて包囲の任務についていた。彼らは、病院での治療を拒否したという。湖論暮刑事は想った。

—この展開で行けば、突入部隊の編成が行われるはずだ。彼らは勿論のこと志願するに違いない。この俺だって志願する覚悟だ。——

多くの警官たちが、最高指揮官のキャリアとY署署長のやり取りを注目していた。

「通してくれたまえ！」

「どこに行くのですか？指揮官に何かあったらどうするのですか？」

「……」

「指揮官は、後方で指示を出すのが通例ですよ！」

「……」

「さあ……。指揮車に戻ってください。」

Y署の署長は、最高指揮官のキャリアの顔をみた。キャリアの顔は憤怒に燃える鬼のような形相をしていた。

—俺を止めるな！——と言っているようだった。名状しがたい気迫が伝わってきた。体全体が震えてくるような感情だった。

—この寒さで震えているのではないぞ！——と署長は想った。

署長にも最高指揮官の気迫が伝染したのだろうか、キャリアの前進を阻止することを諦めた。

「分かりました。お伴します。久米田は、あそこで配置についています。案内いたします。」

久米田は、背後に人の気配を感じた。それも常人の発する気配でないものを……。

視線を前方の救急病院から後方に転じた。Y署の上司である署長だった。傍らに見慣れない男が立っていた。

「久米田巡査！事態打開のために特別編成チームを作る。志願によるチームだ。このチームには、俺も参加する。死傷者も予想されるだろう。全責任は、俺が取る。君には、実質的なリーダーになってもらいたい。」と最高指揮官のキャリアは叫んだ。

「それは、命令ですか。」と久米田は、Y署署長を仰ぎ見た。

「そのとおりだ！」と署長は、少しどきまぎしながら最高指揮官に雷同した。

「分かりました。ただし、私がリーダーということになれば私の作戦を採用していただきたいということが一点と、ご存じかも知れませんが、X市の市職員が封鎖線を破ってあそこの運送会社の社屋で待機しております。彼らの協力も必要です。認めますか？」

「君が、指揮者だ！異論はない！」とキャリアは言いきった。

このことは、各部隊の責任者に伝達された。名目上は、最高指揮官のキャリアが突入部隊の指揮を執る。しかし、実際は久米田が構築した作戦なので、久米田の指示に従うことになる。多くの警官たちが志願した。大阪府警のMAATのメンバーも当然のことながら志願した。大阪府警という組織の中で、通常ありえない……断じてありえないことが始まったのだ。突入部隊の選別が行われた。殉職という事態も考えられる。将来有望な若い警官たちはメンバーから外された。最終選考で残ったのは、もうすぐ定年だと想われる中高年の警官たちだった。体力的には問題がありそうだと想われるが、これらの警官たちは久米田と同様に日常の鍛練を怠っていない屈強な「古参兵」だった。

「久米田だけが、伝説の警官じゃないぞ！俺たちに今まで出番が、なかっただけだ！」とお互い肩を叩きながら選出されたことを素直に喜んでいて。雪の中を小踊りしながら喜んでいる者もいた。

意気揚揚と志願するもメンバーになれなかった若い警官たちは悔しかった。涙を流しながら号泣する者もいた。

久米田がキャリアに、作戦の概要を説明しようとした時に、一人の青年警官が、近寄ってきた。最高指揮官のキャリアと久米田巡査に鄭重な敬礼をしながら言った。

「お願いがあります。私は、若いというだけでメンバーから外されましたが、

見たところ爆発物の処理に慣れた者がいないようです。人質に括りつけられた爆発物は、どのような物なのか不明ですが、これを解除し無事に救出するには技術が要ります。私を是非とも突入部隊にお加えください。期待に応える仕事をいたします。」

久米田は、自信で漲った表情をしている若者を見た。そして、最高指揮官のキヤリアの顔を見た。

—加えるぞ！よろしいか！—というメッセージが籠められた眼だった。

「よし！認める！」とキヤリアは嬉しそうに言った。

キヤリアは、急いで作成された志願者リストを見た。平均年齢五〇代のメンバーだった。それも各署の地域課警官たちだった。名簿の左の列に番号が印字されていた。一番には、当然のことながら自分の氏名と所属が印字されていた。人質になっていた四人の警官の名前もあった。ページをめくって最後の番号を見た。四六番目には、湖論暮刑事、四七番目には、Y署所属の久米田巡査の名前があった。

—何と！四七名の志願者だ！これは忠臣蔵の打ち込みだな……。—とキヤリアは思った。事態解決に向けて、少しばかり余裕が出てきたのかキヤリアは込み上げてくる笑いを殺した。突入部隊のメンバーは、「伝説の警官 久米田」を慕う命知らずのメンバーだった。

—この俺が志願者を募集しても、おそらく一人も出てこないだろう。たとえ命令だとしても、すでに要塞化しているあの病院に向って突入することは、死を意味する。—

キヤリアはしみじみと想った。

—市民の命と安全を護っているのは、これら一線の警官たちなのだ。これが、ノンキヤリアの正義なのか。否！正義にキヤリアもノンキヤリアもない。俺は、大阪府警の正義を実現するぞ！—

キヤリアは、しばらく自分自身の世界に埋没していた。気がつくと久米田巡査・・・否、実戦指揮官が背後に立っていた。

「今から、作戦の概要を各班リーダーに説明します。すでに班編成も終わっていますので、説明は各班のリーダーが対象です。それから申し遅れましたが、あなたはただ今より私の班に編入されます。念のため作戦の概要を聴いておいてください。以上です。」と久米田は事務的に言った。すでに久米田の態度は、指揮官そのものであった。異論をはねつけるという雰囲気だった。

キヤリアは、キヤリアでなくなった。キヤリア自身がいみじくも言った「一兵卒」だ。久米田配下の一人になったのだ。キヤリアは後悔していなかった。

プライドも傷つかなかった。実戦経験が豊富な「伝説の警官」と呼ばれる久米田の配下に入るのだ。

これから数十名が武装して立てこもる救急病院に突入するのだ。不思議と恐怖は感じなかった。

キャリアは、その他の班リーダーとともに作戦の説明を受けた。急遽、設営されたテントの中で会議だった。横殴りの雪が吹き付けていた。熱気があった。説明を受けた班リーダーたちは唸り声を上げた。質問をする者はいなかった。誰も久米田の作戦計画に全幅の信頼を置いていた。

「奇想天外な作戦だ！」とキャリアは思った。質問をする雰囲気ではなかった。自分は、一兵卒だという自覚がそうさせた。すでに全指揮権は、久米田に移っていた。

「作戦実行時間は、日没後。それまで、各自！今の任務場所で待機のこと。」と久米田は手短に言った。作戦説明会議が終了すると、久米田は携帯電話を誰彼に気兼ねすることなく胸ポケットから取り出して青島に作戦の概要を記したメールを送信した。

「もうそろそろ作戦機材が集まるはずだ。――」

久米田は、空を見上げた。灰色の空をバックに白い雪が落ちてきた。眼に雪が飛び込んできた。冷たいとは感じなかった。

「いよいよだな・・・。」と湖論暮刑事が言いながら、久米田の横に立った。真っ白な雪原となった田畑の向こうに薄っすらと救急病院が見えた。久米田は、双眼鏡を取り出した。五階院長室の窓際で椅子に縛り付けられている市長が確認できた。

まさに、これからだと思うと闘志が湧いてきた。

院長室の広い窓からは、生駒山・二上山・大和葛城山・金剛山の山なみがよく見えた。借景とまではいかないが、設計されるときに計算されていたのだろう。見事な眺望だった。前方の風景を遮るビルやマンションはなかった。快晴の日ならば、樹木の一本一本が識別できる。その山なみが白い雪で包まれている。

タケウチカイドウこと武内権道は、贅をつくした院長用椅子から腰を上げた。椅子から離れて窓際に座らされている市長の背後に立った。多くの人間が移動したのだから踏み跡がせつかくの雪景色を台無しにしていた。

「そろそろだな・・・。突入を決意したか・・・。」と武内権道は思った。武内権道には動揺する様子はなかった。

背後に闇組織のボスの気配を感じとった市長は、諭すような口調で言った。

「君は、死に場所を探しているのか……ここが君の死に場所なのか？」
「……」

「迷惑な話だな……」

「そうかもしれない……」と武内權道は自虐を込めた小さな声で言った。

「それに大胆だな。そんなところに立っていれば狙撃されるだろうに。」

「いや大丈夫だ。大阪府警にそんな度胸はないよ。俺が狙撃されたら、子分どもが市長を血祭りにあげるよ。」

「何の要求もしていないのか！」

「……」

不気味な沈黙だった。

市長にすれば、すでに死を覚悟していた。心は平静だった。悟りを得た修行僧のような心境だった。

「俺の命と引き換えに多くの人質が助かったのだ。これ以上の満足はない。究極の自己犠牲こそが俺にとっては最高の美学だ！」

武内權道は、山々を眺めながら少年時代を懐古した。

「あの時代は、よく歩いたものだ。人を避けて、道なき道を歩いた。自分の庭のように駆けた。今でこそダイヤモンドトレールというルートも整備されて誰もが楽しめる。山はいい……山は人を裏切らない。裏切ってきたのは、俺の方かもしれないが……」

武内權道は、出入り口でボスを警護している子分の一人に指示した。

「人質の市長さんに食事を与えよ。それにトイレ休憩だ！ここで洩らされたらかなわん！」

「有難い！武士の情けをご存じだな……。根っからの悪人ではないな！貴様！」
と市長は確信的に言った。

市長は、長い人生の中で獲得した人間観からそのように判断した。

武内權道が窓際に立った時に、大阪府警MAAT隊員の狙撃銃がボスの眉間に照準を定めた。傍にいた久米田が手厳しく言った。

「気持ち分かるが、撃つなよ。今の天候状態では無理だ。風向きがことあるところでは異なっている。雪の舞い上がり方が不規則だ。それに、俺の作戦は、一人の死者も出さないつもりだ。たとえ、賊であつてもだ。」

大阪府警MAATの優秀な狙撃手は納得した。確かにそのとおりだった。ボス一人倒しても事態解決にはならない。むしろ人質は子分どもに血祭りにされるだろう。この大阪府警MAATの隊員は、「金剛山バンガロー人質事件」の際には現場にいた。「伝説の警官」と呼ばれる久米田の生きざまに感銘を受けた一

人だった。

他の突入志願者には、現場待機を指示しているが久米田班に編入されたメンバーには参集を指示していた。先ほどのスナイパー（狙撃手）は、久米田班の一人だった。久米田班の構成は志願者リストによると次のとおりだった。

N0. 1 最高指揮官のキャリア・貴鍵矢秀男（きやりや ひでお）

大阪府警MAATの

N0. 44 爆弾処理の隊員：伊達直人（だて なおと）

N0. 45 優秀な狙撃手：呉瑠護重三（ごるご じゅうぞう）

N0. 46 堺署刑事：湖論暮啓司（ころんぼ けいじ）

そして、

N0. 47 Y署地域課所属（実質の総指揮官）：久米田 巖次郎だった。

久米田は他の四人に言った。

「細かいことは、先ほどの説明会議では言っていなかったが、この五人がダイレクトに突入する。あの五階に向けてだ。最初に人質を確保する。詳細は、こうだ……。」

「ウヘッ！」

まず久米田の説明を聴いたキャリア：貴鍵矢秀男が叫んだ。そんな話は聴いていないよ！という顔をしていた。

「面白そうだな……。」と湖論暮刑事が興奮を隠さずに言った。

久米田は言った。

「死者は出さない。だが、我が身を護るためなら躊躇することなく撃つ！ただし急所を外せ！適切な発砲というあいまいな指示ではない！撃たれる前に撃て！」

大阪府警MAATの狙撃手：呉瑠護重三は、自分がなぜ久米田班に編入されたのか分かった。自信はあった。急所を外して敵の戦闘能力を奪う。あくまで死者を出さない。

「あんたと爆弾処理係の伊達くんは、すばやく市長を確保。俺と湖論暮は狙撃手呉瑠護くんと動く。五階を確保し、他の階と遮断する。」

「あんた」呼びわりされたキャリア：貴鍵矢秀男は、内心ムツとした。しかし、声を出して抗議できなかった。

キャリア：貴鍵矢秀男は思った。

—このメンバーで唯一戦力にならないのが俺だ……。文章を書くとか答弁するとかは得意だけど……。足手まといにならないように命がけて突進するしかないか！それにしても久米田班とは……。久米田は、一番の活躍場を俺に提供してくれているのか。配慮してくれているのかもしれないなあ。とにかく俺は最高指揮官だ！この作戦が成功すれば、俺は間違いなく「伝説のキャリア」

だ！

湖論暮刑事は思った。

―銃の扱いには、多少の心得はある。しかし、久米田のような百発百中の腕じゃない。急所を外すとすると……。まだ洋弓なら自信あるけどな……。一瞬、不安な顔をした。久米田は、湖論暮刑事の表情の変化を見逃さなかった。

「心配するな！湖論暮！貴様が得意とする武器も用意しているぞ！」

「ところで、久米田！貴様の武器は？」

「一応、制式拳銃は所持するが一度も使用したことがない。今回もヌンチャクとBB弾だよ。」

―BB弾？なんだそれ……。―と最高指揮官のキャリア・貴鍵矢秀男は思った。やはり口に出すべきだと考えてキャリアはおずおずと言った。

「そんなおもちやで敵を倒すことが出来るのか？」

「久米田の場合、これが最高の武器なのです。」と湖論暮は言った。

「……」

久米田に睨まれたキャリアは身を縮めた。背中に冷たいものが走った。そして、押し黙った。納得は出来ないが、とにかく「伝説の警官」と呼ばれる男だ。

―全指揮権を、久米田に委譲したのだった。俺は、一兵卒だ。久米田班の一員だ。これだけでも名誉なのだ。―とキャリア・貴鍵矢秀男は何度も何度も自分に言い聞かした。

【午後05:10】

日没時刻が迫っていた。後、半時間もすれば陽が落ちる。白鷺や浅香たちが準備した作戦機材がそろそろ到着する時刻だ。久米田は、青島に携帯メールを送信した。

「そろそろだ。君たち民間人を戦闘行動に参加させるわけにはいかない。そこで、もつとも重要な任務を行ってもらおう。それは、市長の精神的サポートだ。この突入で相当な衝撃を市長が受ける。死ぬ覚悟の人間でもいざとなれば死にたくないものだ。最後まで果敢としてもらうために、絶対に精神的サポートは必要だ。君たちにも危険が及ぶことが考えられるが是非とも実行していただきたい。必要なものは、白鷺が運ぶ。決行時間は、追って連絡する。」

青島は、久米田の携帯メールを読んだ。

―そろそろだ！―

青島は、薄暗い運送会社の車庫でビールケースを台にして四六人の市職員に向って作戦内容を説明した。一応、念のため生命の危険があることも告知した。しかし、誰ひとり不安な顔をした市職員はいなかった。青島は、一人一人の顔

を見つめた。

「市長は殿様だ！」と言った同じ課の課長代理がいた。X市職員労働組合青年部と白字で染められた組合旗を持つ青年部長がいた。某私大の応援団旗を肩に羽織っている職員もいた。多士済々のメンバーだった。

「一段高いところから失礼いたします。青島です。……ここまで到達できなかった多くの仲間の分まで、我々は奮闘努力する必要があります。彼ら彼女の自己犠牲的な行動によって、我々四七人は、あの封鎖線を突破できました。我々は民間人ということもあって、直接的な戦闘行動には参加できません。また、その技量もないところです。……我々の任務は、市長を鼓舞激励することです。決して一人ではない。X市の職員が見守っているぞ！援護しているぞ！と強力なメッセージを送り届けたい！」と青島指揮官は珍しく絶叫した。

青島の背後には、後光かそれともオーラなのか。……何とも言えない*光の輪があった。光輪は、青島をあたかも「救世主だ！」と思ひ込むような印象を見る者に与えた。

「いつのまに……。あの青島くんが、このようなカリスマ性を体現するようになったのかしら……。——とミサキ嬢は不思議な気持ちになった。

青島の一語一句が胸に滲みるのを感じた市職員は、演説が終わるや否や、

「エイ！エイ！オー！エイ！エイ！オー」と誰もが拳を突き出して力強く唱和した。すでに、この四七人の心意気は全開モードだった。青島は少しばかり反省をした。

「自分自身の不安を払拭するために、大きな声を張り上げてしまった。もう少し理性的な……。そして格調高い話し方をすべきだったなあ……。忠臣蔵の討ち込みもこんな感じだったのかなあ……。——と。

（*倉庫内が薄暗いので照明が必要と判断し、ミサキ嬢が懐中電灯でライトアップしたのが原因：演出の意図なし）

【午後07:00】

太陽は、完全に沈んだ。雪は日中より激しく降っていた。包囲する大阪府警の警官たちの寒さに抗う体力も限界にきていた。足元から冷気が伝わってきた。遮蔽物の陰で体を丸めて体温が逃げないようにすることが唯一の防寒対策だった。はるか後方では、ドラム缶を急ごしらえの薪ストーブにして暖を取るように用意はされていたが、交代時間はごくわずかということもあって芯から冷えた体を暖めることは出来なかった。

だが、包囲する警官たちの士気は衰えることはなかった。これから始まる作

戦は、各部隊の責任者より周知されていた。

浅香小百合嬢と白鷺、裕次郎君、高石たちが第一次の封鎖線を通過して、こちらに向つているといふ連絡が届いた。官民共同の作戦が始まろうとしていた。久米田は、最終封鎖線まで彼ら彼女たちを出向いた。一〇数台の特殊車両が護送船団のようにゆっくりと走行していた。「シラサギ重機」と書かれたクレーン車もあった。

久米田の前で先頭の一台が静かに停車した。車両は、厚い鉄板で幾重にも蓋われていた。まるで、戦車かと思間違ふほどの重厚な防備だった。車上には、大砲を想わせるものが据えられていた。その他にも色々細工されているようだった。ただ、この特殊車両の横腹に「シラサギ運送(株)」と書かれてあるのは、周囲の警官たちに違和感を与えた。

助手席側のドアが鈍い音をたてて開いた。出てきたのは、浅香小百合嬢だった。ピンク色のダウンを着用し、白色のスノーブーツを履いていた。親子ほどの年齢差があるだろうか、若い警官が走った。降車をサポートするためだ。颯爽とした浅香小百合嬢の登場は、緊張した現場を和ました。

小百合嬢は、慣れない雪上を慎重に歩きながら久米田の前に出た。舞い落ちる雪は、小百合嬢の長い黒髪に付着した。

「用意してきたわ……。久米田くんの指示どおりできたかどうかは分からないけれど、与えられた時間の割には、最高の物が出来たと想うわ……。」

「ありがとう！」と久米田は、浅香小百合に向つて謝意を表す敬礼した。つられてキャリア・貴鍵矢秀男も敬礼した。最高指揮官のキャリアが敬礼したので、周囲の警官たちもすばやく敬礼した。小百合嬢には、周囲の人間を敬服させる雰囲気を持っていた。

運転席側のドアがギシーギシと何とも言えない音をたてて、白鷺と裕次郎君が降車した。白鷺と裕次郎君は、白いヘルメットを着用していた。「白鷺建設」と黄色で印字されていた。いかにも建設労働者の風体だった。

久米田は、寒さで震える白鷺の顔を見ながら確かめるように言った。

「白鷺！例のものは出来たか？」

「指示どおり出来たさ！」

「白鷺一族のお陰だな。ところで、高石は？」

「俺達の車両に乗っているよ。とにかく足が不自由なので、降りてこないけど……。あの砲もどきの台座に座っているよ。俺は、砲手だと言って……。それと青島には、別のグループが物を運びこんだ。」

「そうか！高石は、病院を抜け出てきたか！」

久米田は、この得体の知れない特殊車両のコンボイを見て、驚きのあまり絶

句している最高指揮官のキャリア・貴鍵矢秀男にまたもや事務的に言った。

「三〇分後に作戦を開始します。志願されたメンバーにこの車両の扱い方の説明を行います。「あなた」から集合の指示を出して下さい。」と。

「また、「あなた」かよ……。」と最高指揮官のキャリア・貴鍵矢秀男は心の中でぶつくさと言った。

意気軒昂な四六人の突入志願者は、逸る心を抑えながら裕次郎君の説明を聞いた。この特殊車両には、あの大和葛城山での花火師が精魂込めて製作した花火玉が満載されていた。「こんなこともあるだろう」ということで、本業の花火製作は息子に任せてもっぱら特殊な花火玉の改良と発射装置の研究に残る余生を注ぎ込んだとのことだ。

そして、放水銃も装備されていた。これは、久米田の哲学が籠められていた。

「古今東西、城攻めは火と水だ。」と久米田は真顔で、最高指揮官のキャリア・貴鍵矢秀男に言った。

「ところで、久米田巡查。俺達は、何に乗るのだ？」と貴鍵矢秀男は訊いた。

「あれです。」

「何だ！あれは？」

クレーン車の後方のダンプに、得体の知れない形状のものが積まれていた。

見ようによつては、小さな船に見えた。

「鉄球なら理解できるけど……まさか、これに乗って……。」

「そのとおりです。この船に、我が班は乗り込みます。そして釣り上げて、そのまま五階に上陸です。よろしく！」

「よろしく……と言われても……。」と貴鍵矢秀男は戸惑いを隠さず言った。

「それにこのクレーン車は五階まで届かないぞ。」と、周囲の人間には聴こえないほどの細かい声で言った。

作戦決行時間は、午後七時四五分。

雪は降っていたが、風は止まった。この瞬間を久米田は、待っていた。久米田というか大阪府警の依頼によって、救急病院周辺の送電はストップされた。大阪府警の投光器も消えた。漆黒の闇が周囲を支配した。

久米田は、青島に指示を送った。

青島は久米田の指示に基づいて動いた。農業用水路に飛び込んだ。頭を出さないようにと、久米田から指示されていた。水は流れていないが、雪の積もった用水路を這いずりまわるのは、辛かった。寒さが体を包み込む。救急病院へ繋がる用水路は縦横にあった。目的地は、市長が監禁されている五階院長室前の用水路だった。彼我の距離は、六〇mほどであろうか。久米田からはあまり近

づくな！という指示だった。

闇に眼がなれてくると、雪明かりで人の動きが分かった。救急病院の照明が、しばらくの間消えていたが、自動的に自家発電装置が稼働した。闇のなかで、救急病院のみが浮かびあがっていた。

久米田から再度の指示がきた。用意が出来れば実行せよ！とのことだ。それを合図に久米田たちは行動することだ。

X市職員四七士は、それぞれの任務をすみやかに実行すべく配置についた。青島の指示待ちだった。青島指揮官はホイッスルを胸ポケットから取り出した。各人の配置状況を確認した。準備は完璧だった。青島は、力強く吹いた。X市職員四七士は、白鷺たちが用意した道具でX市の市長を鼓舞激励する作戦を開始した。

陣太鼓が鳴り響いた。打ち込みの合図だ。四〇数名が叩く陣太鼓は、四方八方に鳴り響いた。ミサキ嬢も無我夢中で叩いた。農業用水路に旗が立った。青島は、白鷺たちが用意した投光器のスイッチをONにした。旗に証明が当たり、遠くからも確認できた。X市の市旗もあれば、赤旗もあった。某私大の応援団の旗も力いっぱい振られていた。

当然のことながら銃撃された。田圃の畦道に銃弾がプスプスと音をたてて食い込む。誰も頭を出すものはいなかった。用水路手前で投擲されたダイナマイトが爆発し、泥混じりの雪が用水路に降り注いできた。顔が泥だらけになった黒木メイサがいた。よく見ればミサキ嬢だった。青島は想った。

—美人は暗闇でも美しい。泥だらけでも・・・—

久米田は、特殊車両の先頭に乗車する白鷺に無線連絡をした。

「白鷺！出番だ！例のものを撃て！」

「了解！」

白鷺は、各車両の砲手に「攻撃開始」という合図の警笛を鳴らした。一〇の砲門が、すでに救急病院に狙いをつけていた。

「撃て！」

大筒から発射された砲弾もどきの花火玉は、病院周囲へまんべんなく放物線を描きゆつくりと飛んで行った。病院の屋上を飛び越える花火玉もあった。さすが老練な大阪府警の「古参兵」志願者たちだった。短時間の説明でも習得が早かった。

花火玉は、着弾と同時に炸裂した。強力な特殊煙幕弾だった。黒い煙がもくもくと拡がり、救急病院を包み込んだ。視界はまったくなくなった。

同時に救急病院に立て籠もる闇組織の銃があらゆる方向に火が噴いた。ダム

工事場から盗んできたダイナマイトが何十本も屋上から投げ落とされた。闇組織の構成員が乱射する銃弾が、久米田の頭上をかすめた。白鷺が運転する特殊車両の鉄板にも命中した。何とも言えない金属音が鉄板をはさんで聞こえてきた。銃弾を跳ね返す音を生まれてはじめて聴いた白鷺は、生きた心地がしなかった。白鷺は、後ろの台座に座っている高石の顔を見た。嬉しそうな眼をしていた。遣り甲斐を実感している顔だった。足元の松葉杖が高石に勇気を与えているのだろうか。

久米田は、各車両に指示を出した。作戦どおり予めの所定要所に移動せよ！それぞれの戦車もどきの特殊車両は、動きが遅いがそれぞれのポイントに移動した。用意周到にも各車両には、GPSの機器が具備されていた。

一〇分後、各車両は配置についた。第一段階の作戦目的は終わったようだ。風が戻ったようだ。雪が横殴りになった。厚い煙幕も風が運んで行った。各車両の配置が済んだこともあり久米田は、送電の再開を指示した。病院周辺にいつもの明るさが戻った。大阪府警の投光器すべてが煌煌と救急病院を照らした。

救急病院周辺にそれなりの明るさが戻ると、闇組織側の銃撃も狙いは正確となり激しさを増した。だが、厚い鉄板で幾重にも重ねられた廃車寸前のトラックはびくともしなかった。ただ、銃弾を跳ね返す金属音が、後方に待機している小百合嬢にも聴こえてきた。ときたま、ダイナマイトが爆発すると衝撃が体を伝わってきた。老練な「古参兵」たちはむしろ次の攻撃指示をまだかまだかと待っていた。

市長は、五階の窓から眼下の田圃を見た。農業用水路の中で、市職員が這いずり回っているのが視認できた。そして、何本かの旗が暗い空に向かって突き出された。我がX市の市旗が激しく左右に揺れ動いているのが見えた。

「ライトアップされて綺麗じゃ！組合旗も翻っているぞ！おおおっ！我が応援団の旗が……。」

市長の眼が見る見るうちに濡れてきた。涙腺が緩いのか、大粒の涙が頬を伝ってきた。胸がはち切れそうな気持になった。心臓の鼓動が、激しくなった。

「こんなことまでして、俺を激励しに来たのか。お前ら、下手したら死ぬぞ！馬鹿野郎ども！」

「市長さんよ！お前は良い部下を持って幸せだね……。」と背後に近寄ってきた武内權道が静かに言った。

「そうじゃろ！そうじゃろ！」と市長は鼻水を垂らしながら言った。

「俺たちも、ここが正念場だ。だが、いずれ落城するだろう。」と武内權道は、

何か想わせじみた言い方をして沈黙した。

「やはり・・・こやつ、ここで死ぬ気だな・・・。」と市長は想った。

久米田は作戦の第二段階を指示した。救急病院を取り巻く一〇台の自家製特殊車両。それぞれが分担の階に向けて照準を合わせた。一階から四階までが標的となった。

久米田は、班員に乗船を指示した。

キャリア・貴鍵矢秀男は、久米田にいわれるままに後部座席に座った。後部座席のみにエアバックがあった。傍らに爆弾処理担当の伊達直人がいた。少しばかり緊張した顔つきだが、この作戦に参加できた名誉で嬉しいようだ。そんな表情をしていた。

キャリア・貴鍵矢秀男は想った。

「俺はどんな表情をしているのだろうか？怖がっているのだろうか？」

前部座席に久米田巡査、呉瑠護重三、湖論暮刑事が着席した。呉瑠護は、いつでも銃を撃てる態勢を取っていた。湖論暮刑事は、映画で観たランボーが使用していたのと同じような洋弓を持っていた。矢の先端に花火師が製作した特殊かんしゃく玉がセットされたものだった。火薬と唐辛子などで製作されているとのことだ。試作品段階とのことだった。

久米田は、各特殊車両に攻撃を指示した。各特殊車両の大砲が特殊花火玉を次々に撃ち込んでいく。窓ガラスを破り、室内で特殊花火玉が炸裂した。色とりどりの火花が窓の外に飛び散った。一階から四階に撃ち込まれた花火玉には殺傷能力はないが、敵の視力と聴力を奪うには充分だった。おまけに手に持っていたダイナマイトに引火爆発することを恐れた闇組織の構成員たちは、二発目の撃ち込みの前に恐れをなして窓の外に放り投げた。引火した数本のダイナマイトが爆発した。病院の植え込みの樹木が吹っ飛んだ。

久米田は更に指示を出した。屋上を占拠する闇組織のスナイパーの排除だった。特殊車両の屋根の鉄板扉が開いた。細いパイプ管が何百と束ねてあるものが見えた。

「撃て！」と久米田は叫んだ！何百！何千！という打ち上げ花火が、シュールルウル！という発射音を立てながら、ロケット砲のように飛んで行った。大気を切り刻む音がした。

トドメの大型花火弾が何発も屋上に向けて撃ち込まれた。

久米田は言った。

「各自！シートベルトをしろ！」

久米田たちが乗った鉄かごのような船が釣り上げられる。これまた厚い鉄板で

幾重にも蓋われたものだった。

「良く言えば、上陸用舟艇。どうみても鉄製の棺桶だ！」とキャリア・貴鍵矢秀男は思った。

久米田は、クレーン車に前進を指示した。船を釣り上げたまま移動するのだが、どうしても不安定だった。シラサギ重機のベテラン運転手も慎重に操作していた。

白鷺の特殊車両と別の特殊車両が、クレーン車を挟み込んだ。クレーン車の安定確保のためだった。これからのことを考えれば、これでも不安定だった。しかし、久米田にすれば想定内だった。

クレーン車は、久米田たちが乗る船を徐々に釣りあげた。闇組織側の銃撃が集中した。

銃弾を弾き飛ばす金属音がした。頭上でダイナマイトが爆発した。鉄板が震えた。すごい衝撃と音だった。耳栓をしてはいるが、船全体が衝撃で震えていた。――生きた心地がしない……。このまま釣り上げられて窓に横づけして突入するのか……。しかし高さが足りないようだが……。――と最高指揮官のキャリア・貴鍵矢秀男は思った。

湖論暮刑事は、乗船する直前に携帯メールを娘に送信していた。

「今からお父さんは、病院に突入します。信頼できる仲間が計画した作戦なので、心配はしていません。とにかく無性に会いたいです。」

湖論暮刑事は、胸ポケットに入れてある財布に手を当てた。幼い頃の娘の写真が入っていた。船が徐々に釣りあげられていくのが分かった。しかし、五階の院長室には届かない。

久米田が無縁を握りしめて叫んだ！

「予定どおり実行だ！振れ！」

湖論暮刑事は、クレーン車のアームが左右に振られるのを感じた。と同時に船が大きく揺れた。それは、時計の振り子のような動きだった。船は、前方に向けて上昇したと想うと一瞬止まったような感じになるが、すぐに後方に向けて落ちるように引き戻された。徐々に揺れが大きくなっていく。後部座席に座っているキャリア・貴鍵矢秀男が悲鳴をあげてゲロしていた。大昔、子どもと一緒に遊園地に行ったことを想いだした。こんな遊具に乗った記憶が蘇った。海賊船のような船が、振り子のように前後する遊具だ。湖論暮刑事も、さすがこの時は気分が悪くなったものだ。娘がキャツキャツと笑いながら喜んでいた。

窓際の市長は驚いた。鉄製の船のような物体が自分に迫ってきては後退していく。どうやらこの五階の窓をぶち破って突入する気のようにだ。この振り子運動によって船らしき物体は高度を稼いでいた。クレーン車のアームが少し動いたようだ。突入船は、少しばかり向きを変えた。

「どうやら俺の横にある窓を狙ってるな。それなら衝突した時の衝撃は少ないはずだ。それにしても大胆な計画だ。――と市長は思った。眼下の用水路では、市職員たちが必死に旗を振っていた。用水路には届いてはいないがダイナマイトが爆発していた。田圃の土と雪が爆風とともに飛び散っていた。田圃には、大きな穴がいくつもあつた。

闇組織の構成員たちが、必死な形相で銃を乱射していた。ダイナマイトを投げつけているものもいた。突入船が自分たちの方に向けて直撃すると分かった構成員たちは、後退した。

――戦争だな……。それも花火大会のような戦闘シーンだ。美しい！――

久米田がクレーン車に無線で指示を出した。

「やれ！今だ！」

クレーン車のアームが前後に動いた。もう一降りで船は突っ込む。

「衝撃！覚悟！」と久米田が叫ぶ。

船が前方に向けて上昇していく。時間にすれば0・1秒未満の世界だが、乗船している者にとっては時間がゆっくりと流れる。ストップモーションの世界だった。ありとあらゆる記憶と想念が頭の中を駆け巡る。キャリア・貴鐘矢秀男は歯を喰いしばった。久米田、呉瑠護、湖論暮たちは、突入態勢を取った。シートベルトを外した。衝突の際の慣性を利用して飛び込んでいくつもりだ。

突入船は、舳先をやや上にした格好で五階の窓に向って突き刺さった。窓ガラスと壁の一部が砕け散った。上陸作戦は成功したようだ！久米田たちが船の前扉とともに五階院長室に転がり落ちた。久米田は前方にいた二、三人の賊をなぎ倒した。呉瑠護は、態勢を整えるや否や踊り場から駆けあがって院長室に飛び込んでくる賊に向けて発砲した。両肩を撃ち抜かれた三人ほどの賊が床でのたうち回っていた。湖論暮刑事は、階下の踊り場に向けて特製かんしゃく玉がセットされた矢を打ち込んだ。火花が飛び散った。何とも言えない臭いがあった。催涙効果もあつた。

久米田は武内権道がないことを確認した。呉瑠護と湖論暮刑事に出入り口を確保するように指示した。階下の踊り場からの銃撃が激しくなつた。

久米田は、背後を見た。防弾盾を持ったキャリア・貴鐘矢秀男が市長と伊達直人を保護していた。流れ弾が防弾盾に命中したのだろうか、凹んでいた。

――やるじゃないか！あんた！さすがだ！――と久米田は思った。

「爆弾解除！しました！」という伊達直人の若い声が聞こえた。

「撤退開始！伊達！貴銃矢！市長を後部座席へ！」と久米田が叫ぶ。

はじめて本名を呼ばれたキャリア・貴銃矢秀男は、内心喜んだ。

「どうやら俺は、「伝説の警官」久米田に認められた！」

すばやく市長を後部座席に押し込んだキャリアは、市長のシートベルト装着を手伝った。

「これで、俺も「伝説のキャリア」だ！」と貴銃矢は思った。

「呉瑠護！湖論暮！撤退だ！」と久米田は言った。久米田は、腰にぶら下げた袋から手りゅう弾もどきの花火玉を数個取り出した。「金剛山バンガロー人質事件」の際に使用したものと同種だ。さらに強烈な閃光を放つ武器に改良されていた。

久米田は、踊り場に向けて投擲した。二度三度の爆発音がした。

「これでしばらく時間を稼げるぞ！」

久米田は最後に乗り込むと同時に、クレーン車に指示した。

「引きずり出せ！」

船は、徐々に後退して行った。久米田は言った。

「落ちるぞ！各自！衝撃に備えよ！シートベルト確認！」

船は、落下した。引きずり出す際にロープをたるみなく引つ張ったこともあって綺麗にスイングした。この辺は流石「シラサギ重機」のベテラン職員の操作技術だった。

スイングする船は、先ほどの突入した時に屋根の鉄板が剥ぎ取られていた。久米田は、スイングする船から五階の窓を見上げた。窓は大きく抉られていた。

武内権道が、スコップ付きライフルで狙いをつけているのを見た。照準は、久米田に向けられていた。久米田は覚悟をした。銃口の先にあるのは自分だと想った。銃口の穴が大きく見えた。呉瑠護もすばやく狙いをつけた。揺れ動く船からの射撃は不安定なものだった。撃たれる前に撃て！という久米田の指示を忘れてはいなかった。自信はあった。呉瑠護は躊躇うことなく引き金を引いた。

同時だった。武内権道の銃口からも火が噴いた。呉瑠護が撃った銃弾は、武内権道の右肩を撃ち抜いた。顔を歪めて崩れ倒れる武内権道を見た。

久米田は、血しぶきを浴びた。横の座席に座っていた湖論暮刑事が、いつの間にかシートベルトを外して、久米田を護るために立ち上がったのだ。湖論暮刑事の頸筋から血が噴き出していた。湖論暮刑事は、久米田の懐に倒れこんだ。久米田はしっかりと湖論暮刑事を抱きしめた。

「死ぬな！湖論暮！」と久米田は我を忘れて絶叫した。久米田は、スイングする船の中で湖論暮刑事の頸筋に手を当てて止血をした。流れる血は止まらなかつた。ぐったりとした湖論暮刑事が何か言った。

「娘に会いたい・・・」

か細い声だった。最後の言葉は聴き取れなかつた。湖論暮刑事の顔から急速に色が消えていく。

「お前が死んだら、この作戦は失敗だ！死ぬな！」と久米田は取り乱した。

この久米田の叫びは、無線のスイッチがオンになっていたため全警察官たちが聴くことになった。浅香小百合嬢も聴いた。白鷺も聴いた。高石も聴いた。裕次郎君も聴いた。

待機していたX市消防署の救急隊員もこの無線を聴いた。救急車は、鉄板などで防備されていなかったが、X市の救急隊員は救急車に乗り込んで発進した。援護のために全ての特殊車両から、あるとあらゆる特殊花火玉が救急病院に撃ち込まれた。とうとう炎上する階も出てきた。攻撃は、放水銃に切り替わった。大量の水が病院内に放水された。強力な水圧をまともに受けて逃げ惑う賊たちの悲鳴が聴こえた。

船は、地上に着地した。勇敢な救急隊員は、船に乗り込み久米田から湖論暮刑事を引きはがした。泣き叫ぶ久米田がいた。久米田の体は、湖論暮刑事の血で赤く染まっていた。止血処置をされた湖論暮刑事は、救急隊員によって救急車に運びこまれた。久米田は、救急車に乗り込もうとした。市長が久米田を背後から抱きついて止めた。

「まだ、仕事は終わってない。気持ちには分かるが・・・」

「そうだ！俺が行く！」と貴鍵矢は引きつった顔で言った。

「貴鍵矢！頼む！」と久米田は涙ぐみながら言った。

いつのまにか久米田から本名を呼ばれた貴鍵矢秀雄は、「戦友」という言葉を想起した。

今は、戦友の命を救うことが全ての優先課題だと想った。

サイレンを鳴らしながら救急車は、猛烈なスピードを出して雪上を駆け抜けていった。沿道では、何百人という警官たちが立ち並んでいた。救急車に向けて最上級の敬礼をした。救急車が走り去って視界から消えても敬礼し続けた。誰もが涙を流していた。

市長救出の報せを聴いて一時は小躍りしながら喜んだ市職員だったが、一人の勇敢な刑事が負傷したことを聴いて驚いた。容体は危ないとのことだ。救急車が目の前を通過すると知った四〇〇人近いX市職員が道を開けて沿道に並んだ。誰もが雪を被っていた。だが、寒さを感じるものはいなかった。体には熱

いものが流れていた。
市職員には、敬礼するという習慣はない。皆が皆、両手を合わせて祈った！願った！

久米田は、実戦指揮官としての立場を再認識した。とり乱したことを反省した。久米田は、各班のリーダーに指示を出した。

「攻撃を中断する。各班の車両は今の位置から一〇〇m後退せよ。それと負傷者の報告を！」

市長は、船から特殊車両に乗せられて安全なポイントまで護送された。そこから、パトカーに乗せられてX市職員が待機していた第一次封鎖線まで運ばれた。すでに久米田から撤退の指示を受けていた青島たち四七人を含めたX市職員五〇〇人が待っていた。

市長は、一人一人と握手しながら謝意を述べた。込み上げてくる涙が止まらなかつた。最後に握手した青島を抱き寄せた。

「秘書課長の容体は？」

「大丈夫です。歩行にも問題ないとのことです。後遺症もないとのことです。」と青島は報告した。

「そうか！そうか！」

久米田の無線に各班の報告が入った。「負傷者はなし！」とのことだった。相も変わらず横殴りの雪が降っていた。久米田は、湖論暮刑事の容体が心配だった。作戦に無理があつたと後悔した。その時に、久米田の携帯電話が振動した。無登録の番号だった。

「もし！もし！」

「久米田巡查！俺だ！」と貴鍵矢は言った。

「湖論暮の容体は？」

「大丈夫だ！急所は外れた！命に別状はないとのことだ！安心しろ！家族には俺から連絡する！」

「それはありがたい！」

久米田に元気が戻ってきた。雪と涙でグシヨグシヨの顔を拭った。久米田は、血まみれの無線機を握りしめて湖論暮刑事の容体を伝達した。久米田の元気な声が、全ての警官たちに届いた。沈んだ空気が支配していた包囲陣の警官たちに歓声が沸き起こった。特殊車両の警笛が次々と鳴り響いた。高石は、大砲を真上に向けた。白鷺に花火玉を詰めさせた。そして、空高く打ち上げた。それは、それは見事な花火だった。作戦が成功した時に発射する特別仕様の花火玉

だったけども、今この時しかない判断した。

X市の夜空に咲いた花火・・・この壮大にして艶美な花火を見た青島は思った。

―湖論暮刑事・・・助かったな・・・良かった。殉職者を出さないことで作戦成功だから・・・―

救急病院の五階の窓から白旗が振られた。シートを白旗代わりになっていた。満身創痍の闇組織の構成員たちが両手を挙げて、整然と正面玄関から出てきた。武内權道も子分に両脇を支えられて最後に出てきた。悄然としてうつむく武内權道がいた。闇組織のボスとしての威厳はなかった。その姿は、悪戯をして教師に叱り付けられている少年のようだった。闇組織の構成員たちの中の死亡者はいなかった。一度程度の火傷を負った者が多かつたぐらいだった。

久米田は、当初人質になった四人の警官を呼び出した。そして、武内權道に手錠をかけるように指示した。一番年長の警官が、武内權道に歩み寄り手錠をかけた。武内權道を含む数十人の構成員がそれぞれ護送用の車に詰め込まれた。

降りしきる雪の中で、久米田は暗い空を見上げた。長い一日だと想った。腕時計を見ると、午後九時を少しばかり過ぎていた。ただでさえ歩きにくい雪上を、高石が近づいてきた。器用に松葉杖を操っていた。白鷺が心配そうに高石の歩きぶりを注視していた。久米田は、高石と白鷺を抱き寄せ肩を組んだ。男三人が、静かに泣いていた。浅香小百合嬢が、静かに近寄って雪が被らないように傘を差し出した。

救急病院の正面玄関前で、四五人の突入志願の警官たちが、お互いの健闘を称えあっていた。定年前の「古参兵」が多い志願者だった。明日になれば、それぞれの地域の交番勤務にあたるのだ。この四五人の周りを志願するも若いというだけで突入部隊に選出されなかった多くの警官たちが取り巻いていた。この苛烈な先輩たちの闘いは、前途有望な若い警官たちの記憶に未永く留められることだろう。

「同期の桜」が流れた。
氣を利かした裕次郎君が、近くの特車両に乗り込みCDをデッキに入れたようだ。

ここに新たな「伝説の警官」四七士が誕生した。正義が勝利した！

翌日。太陽が空高く上がる頃になると道路上の雪は消えた。除雪された雪が路肩に積み上げられていた。日陰には白い雪が残っていた。人が足を踏み入れ

ない田圃には、まだ雪が残っていた。家々の前には、子どもたちが作った色々な形の雪だるまがあった。これほどの雪だるまが出現することは、久しぶりの事件だった。

Y署管轄のとある交番前で不動の姿勢をとって沿道を注視している駐在警官がいた。久米田巡査は、道を探ねる高齢者には懇切丁寧に道順を説明した。下校する小学生の子どもたちには笑みを欠かさずに挨拶をした。元気な子どもたちの声が返ってきた。この交番勤務の久米田が新聞紙上を賑わした「X市救急病院人質立て籠もり事件」を解決した駐在警官とは誰も知らなかった。大きな記事が掲載されたが、久米田たちの名前はなかった。大阪府警幹部の貴鍵矢秀雄と人質になったX市長のコメントが掲載されているだけであった。見上げると青空が広がっていた。一本の飛行機雲が見えた。

湖論暮刑事は、深い眠りに落ち込んでいた。手の温もりが脳を覚醒させた。湖論暮刑事は眼をあけた。ベッド脇に娘がいた。妻がいた。湖論暮刑事の右手を握りしめている娘がいた。

「お父さん！」と娘が言った。湖論暮刑事は、自分が生きていると想った。実戦指揮官である久米田を失うことを恐れた自分は、あの時自然と体が動いた。後悔はしていなかった。妻が笑みを浮かべていた。久し振りに見る妻の笑顔だった。これは、夢や幻ではない・・・現実だと想った。

—娘の顔がはつきりと見えた。俺は生きているぞ！—
湖論暮刑事は再び深い眠りに落ち込んでいった。

市長は大阪府警の事情聴取を受けた後、眼を腫らした状態で役所に出勤した。公用車が爆破されたために自転車出勤だった。執務室に入ると、意外なことに秘書課長が車椅子で出勤していた。公務を停滞させるわけにはいかないと行って家族の反対を押し切ったの出勤だった。

—やっとう覚が形成されるようになったか・・・公僕の戦士！—と市長は想った。

市長は風呂敷包みから大量の書類をだした。昨夜、徹夜して書き上げたものだった。

秘書課長は不自由な身構えで市長のデスクを覗き込んだ。タイトルは、文書戒告となっていた。

市長は言った。

「大量の職員が、職場離脱をしたことは公務員にとっては問題だ。職務専念義務違反の疑いがある。今回は、文書戒告とする。」

徹夜して書き上げた手書きの文書だった。

「どれほどの手間がかかったのだろうか。——と秘書課長は思った。

「それと、今回の事態で何の指導力も発揮しなかった副市長は役立たずだ。これをクビにする。身辺整理をしておけ!——と言ってこい!」と冷たく言い切った。

「つまらん天下り官僚では危機管理はできない。今回はいい勉強になったぞ!——と市長は思った。

「それと、部課長連中には慣れない窓口業務に当たって、市の行政停滞を最小限に止めたことは称賛に値する。しかし、部下を掌握できなかった管理能力に問題がある。差し引きゼロで、今回は処分の対象とはしない。今回、民間企業の白鷺関連会社に対しては私より感謝状を送る。」

市長は、秘書課長に言った。

「一人一人に手渡しで処分を言い渡すので、順番に市長室に呼んでくれたまえ!」

青島が所属する課の課長代理が市長に呼ばれて自分のデスクに戻ってきた。大事そうに一枚の書類を押し載っていた。「市長は殿様だ!」と言った課長代理である。

市長に呼ばれたと聴いた課長代理は、直々市長から「御褒めの言葉」を頂けると想いウキウキしながら市長室に行った。しかし、対面すると厳しい顔で処分すると言われた。課長代理は驚愕した。切腹を覚悟した。市長の顔をよく観察すると、眼は好々爺のように笑っていたとのことだ。

「これは我が一族の家室になるぞ!殿様直々の手書きの文書戒告だ!額縁に入れて神棚に飾るぞ!次は青島とミサキ嬢だ!行って来い!」

青島は、少しばかり緊張した。ミサキ嬢に追い立てられるように市長室に繋がる階段を一步一步上った。この時の青島は、すでに平凡な市職員の顔に戻っていた。人々を惹きつけて、絶対の指導者としての風格を感じさせる、あのカリスマ的な雰囲気はなかった。後光もオーラも感じられなかった。青島の超能力は、危急存亡の時に体现されるのかもしれない。ミサキ嬢は背筋を伸ばし、口元をきりと引き締めていた。二人は市長室のドアの前にたった。秘書課長が車椅子を巧みに操りながら青島たちを市長室に案内した。市長は椅子から立ち上がった。青島とミサキ嬢の顔を見ると満面の笑みを浮かべて出迎えた。

「君たちには、大変世話になった。俺は、嬉しかったぞ!勇氣凜凜だった。しかし、ケジメをつける必要がある。これを受けとってくれ!」と言いなから文書戒告の書類を差し出した。

市長が自ら手書きした文書だった。無味乾燥な印刷物では、誠意が伝わらな

いということ、夜なべして五〇〇枚の文書を作成したのだ。昨夜はすごく疲れているのにもかかわらず、おそらく一睡もせず書き上げたのだろうと青島は考えた。

「入院中の高石さんと相談する必要があるが、青島くん！ミサキさん！君たちは来月から秘書課職員としても仕事をしてもらう。兼務辞令は、後ほど渡す。担当は危機管理だ！」と市長は厳然と言った。市長はすでに心づもりをしていた。青島を後継者にするを……。つまり、将来の市長候補だ！そのために手元において将来！X市の市民を守護する人材に育て上げるつもりだった。迫る危機、「東・南海地震」に対処する必要があった。

五月になった。二ヶ月余りの入院生活を送った湖論暮刑事が退院した。今日は高石と湖論暮刑事二人の快気祝いの呑み会だった。高石は、湖論暮刑事より一ヶ月早く現場復帰していた。

すでに小百合嬢のスナックの扉には、「本日貸切」という紙が貼付されていた。入口のドアを開けると高石、青島、白鷺、裕次郎君、湖論暮刑事がいた。ミサキ嬢は小百合嬢と並んでカウンターの向う側にいた。

「久米田くん！お疲れ様！」と小百合嬢が言った。久米田がスツールに座ると、小百合嬢はすぐにビールの入ったジョッキを差し出した。

「そろったところで乾杯！と行こうか！」と白鷺が無邪気に言った。

「待ってくれ！」と久米田が言った。

「なんでだ！」と高石が訝った。

「後ひとりくる・・・」と久米田が言った時に、携帯電話が振動した。久米田は、胸のポケットから携帯電話を取り出した。貴鍵矢秀雄からの着信だった。いつの間にか「無登録」から「登録」に昇格していた。

「どこにいるんだ？」と久米田が命令口調で言った。

「今、駅の改札口を出たところ・・・」と恐縮した声で貴鍵矢秀雄が答えた。

「目の前に、ビールがある。あんたが来ないと呑めない！」

「すまん！すまん！すぐに行く！」と貴鍵矢秀雄。もう久米田から「あんた」と呼ばれても何も感じなくなっていた。何故なら、戦友だからだ。

久米田は、周りの仲間に言った。

「戦友が遅れてくる。もう少し待ってやってくれ！」

「分かったぞ！」と白鷺。

貴鍵矢秀雄は、汗を拭きながら入ってきた。駅から走ってきたようだ。

湖論暮刑事の横のスツールが空けられていた。座るなり貴鍵矢秀雄は、湖論暮刑事に言った。

「ご苦労様でした。職場復帰おめでとうございます。」

「長い間、ご迷惑をおかけいたしました。申し訳ないです。」と湖論暮刑事は鄭重に返答した。

「いや！そんなことないです！」と貴鍵矢秀雄は言った。

「何を他人行儀な事を言っているんだ！乾杯するぞ！」と白鷺が叫んだ。

「オオオッー！！」と全員の唱和があった。

「あれあれ！あれをリクエストします！」と白鷺が小百合嬢にお願いした。

「同期の桜」が流れた・・・。

男どもは、スツールから立ち上がり肩を組んだ。白鷺はマイクを握りしめて絶叫しながら歌い始めた。傍迷惑この上ないので、裕次郎君は、伯父貴からマイクを取り上げた。哀調ある声で裕次郎君は歌い直した。青島、高石、久米田、湖論暮、貴鍵矢たちが裕次郎君に合して歌った。

皆が歌っている時に、久米田は湖論暮の顔を見つめながら訊いた。

「娘さんは元気か？」

「ああつ！元気だ。退院後は三人で一つの家に住んでいる！」と湖論暮刑事は瞳を輝かせながら言った。涙を流していた。

「そうか！よかったな！」と久米田。久米田の眼にも涙が溜まってきたのか、ウルウルとしていた。

湖論暮刑事は歌いながら、想った。

―友の憂いに我は泣き、我が喜びに友は舞う・・・―

数年が経過した。とある刑務所の門前にX市役所の公用車が停まった。秘書課長は、すばやく降車し後部座席のドアを開けた。

「面会の手続きをしてくれ！」と市長が言った。

市長は刑務官に案内されて面会室に入った。ガラス越しに武内権道がすでに座っていた。

「市長が何故、面会なんですか・・・」と武内権道が遠慮するように言った。

「いいんだよ。これは、俺の気持ちだ。」

「・・・」

「ところで、あの時君は死ぬ気だった。俺には分かっていた。久米田に銃口を向けたが撃つ気はなかった。君は、撃たれること望んだ。だが、右肩を撃ち抜かれた衝撃で引き金に手をかけてしまった。俺は、見ていたよ。君の指は、引き金に触れていなかった。老眼だから良く見えるのさ。あれは、事故だ。だから、真実を証言した。それに嘆願書も書いた。」

「・・・」

「俺は罪を憎むが、人まで憎まないよ……。」と市長は優しく言った。

「それにだ！君はあの時……俺に謎を掛けた……ヒントを与えた。俺は、秘書課長と一年間の時間をかけて考えた。君は、金剛山中に莫大な資金を隠した。一ヶ所は、君の自供どおり発見された。問題は、君が言った。葛城山のことは知らなかった。君は言った。謎を解くなら和泉葛城山、南葛城山、中葛城山、大和葛城山などの位置関係を考えよ！と。分かってしまえば簡単だった。秘書課長がためしに地図上に線をひいた。交わる場所が問題のところだった。俺と秘書課長は、深夜にスコップと懐中電灯を持って山に入った。発見したよ！空き缶の中に、古びた一枚の写真が入っていた。明らかに君の少年時代の写真だった。純真な眼をした「山を駆ける少年」だ。いい笑顔しているな！傍らに父親ではないかと最初に想ったが、この人こそ君の山友達だった奈良県警の警官だね。」

「……」
市長は、二人を遮蔽するガラスに額を押し付けて小さな声で言った。

「あの財宝は、X市のためにつかわしてもらった。素直に警察に報告すれば国庫に入るだけだからね。金自体に正義も悪もない。金は金だからね。君たちが破壊した救急病院の再建費用に使ってもらった。再建の為の寄付を募る形で、あの資金を匿名の寄付ということで処理をした。もともと耐震構造に問題があった病院だからね。」

「……」
「今日は、君に感謝の気持ちを伝えにきた。それと、この写真を君に渡しに来た。係官を通じて差し入れということになるかな……。無期懲役という罰だが、模範囚とのことじゃないか。恩赦があるさ！出所する時は、後期高齢者だな。心配するな！君のために金剛山西麓にすでにログハウスと大きな敷地を購入してある。余生は、子どもと畑仕事をすればいいさ……。もっともこの費用は、俺の退職金を当てにしたポケットマネーだけだね。何だか一方的に喋ってしまったなあ……。許せ！」

市長は、武内權道の顔を見た。あの写真に写し込まれた「山を駆ける少年」の笑顔があった。市長はにこやかな眼をしながら椅子を立った。武内權道も立った。

武内權道は、市長に向けてふかぶかと頭を下げた。

完 結

【横尾山蔵岩殺人事件】一〇九

<http://kagerou021.exblog.jp/>

【新葛城山伝説「仮題」】（続「横尾山蔵岩殺人事件 余話」）一〇〇、一〇一、一〇二、一〇三

<http://kagerou022.exblog.jp/>